

波志江今宮遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1995

建設省
群馬県教育委員会
（群馬県埋蔵文化財調査事業団）

資料	圖書、報紙、文化傳	01-330
	最查事業關係	27
No. 96- 4778	平成 9 年 3 月 25 日	(6)

波志江今宮遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1995

建設省
群馬県教育委員会
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団



III·IV区全景



7号墳石室



右上 7号墳幅子形埴輪 左上 7号墳柄形埴輪 下 7号墳石室出土玉類

序

埼玉県深谷市と本県の前橋市を結ぶ一般国道17号線のバイパスである上武道路は、前橋市今井町の国道50号線までの区間が開通・併用されており、通過市町村の産業経済の発展に大きく貢献しています。

上武道路の通過する地域は、本県でも有数の埋蔵文化財が分布しています。このため、道路建設工事に先立って埋蔵文化財の記録を後世に残すための発掘調査が昭和48年度より群馬県教育委員会及び当事業団により行なわれています。

本書は、昭和55年5月より同56年2月、同60年7月より8月の2度にわたって発掘調査をしました伊勢崎市波志江町所在の波志江今宮遺跡の報告書です。

本遺跡は、5世紀から7世紀にかけての古墳時代の遺構が中心ですが、特に主軸長さ26mの帆立貝式古墳を含む、8基の古墳の調査は、この時代の古墳の研究を進める上で出土した形象埴輪と共に貴重な資料になるものと思います。

発掘調査から報告書作成に至るまで、建設省関東地方建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、伊勢崎市教育委員会、地元関係者等から種々、ご指導ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様衷心より感謝の意を表し、併せて、本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願ひ序とします。

平成7年2月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例 言

1. 本報告書は、一般国道17号(上武道路)改築工事に伴い事前に発掘調査された、事業名称「JK22・28今宮遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、群馬県伊勢崎市波志江町今宮に所在する。
3. 事業主体 建設省関東建設局
4. 調査主体 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 調査期間 第1次調査 1980年4月1日～1981年3月31日
第2次調査 1985年6月1日～1985年9月30日
6. 調査組織
第1次調査
常務理事 小林起久治 事務局長 沢井良之助 調査研究部長 井上唯雄
事務担当 飯塚喜代子、近藤平志、国定 均、山本朋子、柳岡良宏、野島のお江、吉田恵子、並木綾子
調査担当課長 調査研究第2課長 秋池 武
調査担当 調査研究員 石塚久則、調査研究員 飯田陽一
第2次調査
常務理事 白石保三郎 事務局長 梅沢重昭 調査研究部長 上原啓己 管理部長 大沢秋良
事務担当 定方隆史、国定 均、笠原秀樹、山本朋子、吉田有光、柳岡良宏、野島のお江、吉田恵子、並木綾子
調査担当課長 調査研究第2課長 桜場一寿
調査担当 調査研究員 徳江秀夫、調査研究員 友廣哲也、調査研究員 小林裕二
7. 整理主体 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
8. 整理期間 1993年4月1日～1994年3月31日
9. 整理組織
常務理事 中村英一 事務局長 近藤 功 調査研究部長 神保佑史 管理部長 佐藤 勉
事務担当 斎藤俊一、国定 均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、船津 茂、高橋定義、松下 登、吉田恵子、角田みづほ、松井美智子、塩浦ひろみ、今井とも子
整理担当課長 調査研究第2課長 能登 健
整理担当 主任調査研究員 神谷佳明、主任調査研究員 新倉明彦
整理補助 嘱託 鈴木幹子、青木静江、補助員 高橋順子、嶋崎しづ子、阿部幸恵、角田孝子、小久保ヒロミ、高田栄子、田村栄子、高橋フジ子、原島弘子、木暮芳枝
機械実測 伊藤淳子、尾田正子、筑井弘子、戸神晴美、佐子昭子、千代谷和子
保存処理 主任技師 関 邦一、嘱託 北爪健二、補助員 小材造一、樋口一之
金属製品実測・観察 調査研究員 杉山秀宏、銅土器観察 主任調査研究員 山口逸弘
石器観察 主任調査研究員 岩崎泰一、その他観察 神谷
10. 写真撮影は、遺構については発掘調査担当者、遺物については主任技師 佐藤元彦が行った。
11. 本報告書の編集には、神谷があたり、執筆につて第1章～第4章は神谷が担当し、第5章・第6章につ

いては各項にそれぞれ明記した。

12. 出土遺物と出土人骨の分析・同定にあたっては、下記の方々に依頼した。
石材同定 群馬県地質協会 飯島静雄
人骨鑑定 群馬県立大間々高等学校教諭 宮崎重雄
埴輪胎土分析 株式会社 第四紀地質研究所
13. 出土遺物、撮影写真、遺構図、遺物図、その他記録等は、一括して(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団で保管・管理している。
14. 発掘調査、整理にあたっては、諸機関、諸氏より貴重なご教示、ご指導をいただいた。
15. 発掘調査にあたっては、地元伊勢崎市をはじめ前橋市から多くの方が作業に従事していただいた。ここにあらためて感謝の意を表します。

凡 例

1. 挿図中に使用した方位は、座標北を表している。
2. 遺構図の縮尺については、挿図中にそれぞれスケールを明示したので参照されたい。
3. 遺物図の縮尺は、下記のとおりであるが、異なるときはそれぞれ縮尺を明記してある。
土器 1:3、形象埴輪小片 1:3、円筒埴輪 1:5、円筒埴輪破片 1:3、石器 1:3
4. 遺物写真は、おおむね遺物図と同様の縮尺で掲載している。
5. 本報告書で掲載した地形図は下記のとおりである。
国土地理院 1:200,000 「宇都宮」
6. 遺構図の面積は、デジタルプランメーターで3回計測した平均値を採用した。
7. 観察表の量目・計測値の番号は、下記のとおりである。
① 口径、② 底径 ③ 器高
8. 遺物観察表の色調は、農林水産省農林水産技術会議監修、財団法人 日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」に拠った。

目 次

第1章 調査の経過	
1. 調査に至る経緯	2
2. 調査の経過	3
第2章 調査の方法	
1. 調査区の設定	4
2. 基本土層	5
第3章 周辺の遺跡	
1. 周辺の遺跡	6
第4章 検出された遺構・遺物	
1. 古 墳	8
2. 住 居 跡	97
3. 土 坑	99
4. 溝	101
5. 炭 窯 跡	104
6. 水 田 跡	105
7. 遺構外出土遺物	107
第5章 成果と問題点	
1. 波志江今宮遺跡の形象埴輪	116
2. 波志江今宮遺跡4号墳の円筒埴輪	124
3. 波志江地域の群集墳について	138
第6章 分析・鑑定	
1. 波志江今宮遺跡4号墳出土の人歯・骨	140
2. 出土埴輪の胎土分析	141

挿 図 目 次

	頁		頁		
第 1 図	遺跡位置図	1	第 59 図	5 号墳出土遺物(5)	60
第 2 図	遺跡位置	2	第 60 図	5 号墳出土遺物(6)	61
第 3 図	調査範囲図	3	第 61 図	5 号墳出土遺物(7)	62
第 4 図	調査区の設定図	4	第 62 図	6 号墳平面図・セクション図	63
第 5 図	基本土層図	5	第 63 図	6 号墳出土遺物	64
第 6 図	波志江今宮遺跡と周辺遺跡	7	第 64 図	7 号墳平面図・セクション図	66
第 7 図	1 号墳平面図・周壁エレベーション図	9	第 65 図	7 号墳遺物出土状態図	67
第 8 図	1 号墳遺物出土状態図	10	第 66 図	7 号墳遺物出土詳細図	68
第 9 図	1 号墳主体部平面図・セクション図	11	第 67 図	7 号墳石室(1)	69
第 10 図	1 号墳出土遺物(1)	11	第 68 図	7 号墳石室(2)	70
第 11 図	1 号墳出土遺物(2)	12	第 69 図	7 号墳石室セクション図	71
第 12 図	1 号墳出土遺物(3)	13	第 70 図	7 号墳出土遺物(1)	72
第 13 図	1 号墳出土遺物(4)	14	第 71 図	7 号墳出土遺物(2)	73
第 14 図	1 号墳出土遺物(5)	15	第 72 図	7 号墳出土遺物(3)	74
第 15 図	2 号墳平面図	16	第 73 図	7 号墳出土遺物(4)	75
第 16 図	2 号墳出土遺物(1)	16	第 74 図	7 号墳出土遺物(5)	76
第 17 図	2 号墳出土遺物(2)	17	第 75 図	7 号墳出土遺物(6)	77
第 18 図	3 号墳平面図・セクション図	18	第 76 図	7 号墳出土遺物(7)	78
第 19 図	3 号墳石室平面図・セクション図	19	第 77 図	7 号墳出土遺物(8)	80
第 20 図	3 号墳出土遺物(1)	20	第 78 図	7 号墳出土遺物(9)	81
第 21 図	3 号墳出土遺物(2)	21	第 79 図	7 号墳出土遺物(10)	82
第 22 図	3 号墳出土遺物(3)	22	第 80 図	7 号墳出土遺物(11)	83
第 23 図	4 号墳平面図	24	第 81 図	7 号墳出土遺物(12)	84
第 24 図	4 号墳墳丘セクション図・主体部平面図掘り方	25	第 82 図	7 号墳出土遺物(13)	85
第 25 図	4 号墳遺物出土状態図	26	第 83 図	7 号墳出土遺物(14)	86
第 26 図	4 号墳出土遺物(1)	27	第 84 図	7 号墳出土遺物(15)	87
第 27 図	4 号墳出土遺物(2)	28	第 85 図	7 号墳出土遺物(16)	88
第 28 図	4 号墳出土遺物(3)	29	第 86 図	7 号墳出土遺物(17)	89
第 29 図	4 号墳出土遺物(4)	30	第 87 図	8 号墳平面図・セクション図	90
第 30 図	4 号墳出土遺物(5)	31	第 88 図	8 号墳石室	92
第 31 図	4 号墳出土遺物(6)	32	第 89 図	8 号墳石室断面図	93
第 32 図	4 号墳出土遺物(7)	33	第 90 図	8 号墳石室掘り方	94
第 33 図	4 号墳出土遺物(8)	34	第 91 図	8 号墳出土遺物(1)	95
第 34 図	4 号墳出土遺物(9)	35	第 92 図	8 号墳出土遺物(2)	96
第 35 図	4 号墳出土遺物(10)	36	第 93 図	1 号住居跡	97
第 36 図	4 号墳出土遺物(11)	37	第 94 図	1 号住居跡出土遺物	98
第 37 図	4 号墳出土遺物(12)	38	第 95 図	4・5 号土坑	99
第 38 図	4 号墳出土遺物(13)	39	第 96 図	5 号土坑出土遺物	99
第 39 図	4 号墳出土遺物(14)	40	第 97 図	14・15 号土坑	100
第 40 図	4 号墳出土遺物(15)	41	第 98 図	1 号溝	101
第 41 図	4 号墳出土遺物(16)	42	第 99 図	2・3 号溝	102
第 42 図	4 号墳出土遺物(17)	43	第 100 図	4・5 号溝	103
第 43 図	4 号墳出土遺物(18)	44	第 101 図	炭灰	104
第 44 図	4 号墳出土遺物(19)	45	第 102 図	V 区全体図と水田跡	105
第 45 図	4 号墳出土遺物(20)	46	第 103 図	V 区セクション図	106
第 46 図	4 号墳出土遺物(21)	47	第 104 図	遺構外出土遺物縄文土器(1)	107
第 47 図	4 号墳出土遺物(22)	48	第 105 図	遺構外出土遺物縄文土器(2)	108
第 48 図	4 号墳出土遺物(23)	49	第 106 図	遺構外出土遺物石器(1)	109
第 49 図	4 号墳出土遺物(24)	50	第 107 図	遺構外出土遺物石器(2)	110
第 50 図	4 号墳門筒埴輪ヘタ指き(1)	51	第 108 図	遺構外出土遺物石器(3)	111
第 51 図	4 号墳門筒埴輪ヘタ指き(2)	52	第 109 図	遺構外出土遺物石器(4)	112
第 52 図	5 号墳平面図・セクション図	53	第 110 図	遺構外出土遺物石器(5)	113
第 53 図	5 号墳遺物出土状態図	54	第 111 図	遺構外出土遺物石器(6)	114
第 54 図	5 号墳主体部平面図掘り方・セクション図	55	第 112 図	遺構外出土遺物土器他	115
第 55 図	5 号墳出土遺物(1)	56	第 113 図	波志江今宮遺跡出土の形象埴輪(1)	117
第 56 図	5 号墳出土遺物(2)	57	第 114 図	波志江今宮遺跡出土の形象埴輪(2)	122
第 57 図	5 号墳出土遺物(3)	58	第 115 図	出土形象埴輪の事例	125
第 58 図	5 号墳出土遺物(4)	59	第 116 図	門筒埴輪と製作技法(1)	131

第117回	円筒埴輪と製作技法(2).....	132
第118回	円筒埴輪と製作技法(3).....	133
第119回	ヘラ記号.....	134
第120回	円筒埴輪出土位置.....	140
第121回	赤城山南麓の4～5世紀の墳墓.....	142
第122回	4世紀と5世紀の墳墓の比較.....	143
第123回	5世紀の埴輪と墳丘規模の比較.....	144

第124回	埴輪胎土の三角ダイヤグラム.....	148
第125回	埴輪胎土の菱形ダイヤグラム.....	148
第126回	埴輪胎土の三角ダイヤグラム.....	149
第127回	埴輪胎土の菱形ダイヤグラム.....	149
第129回～第132回	埴輪胎土分析グラフ(1)～(4).....	152～155
第133回	胎土分析試料埴輪実測図.....	156

表 目 次

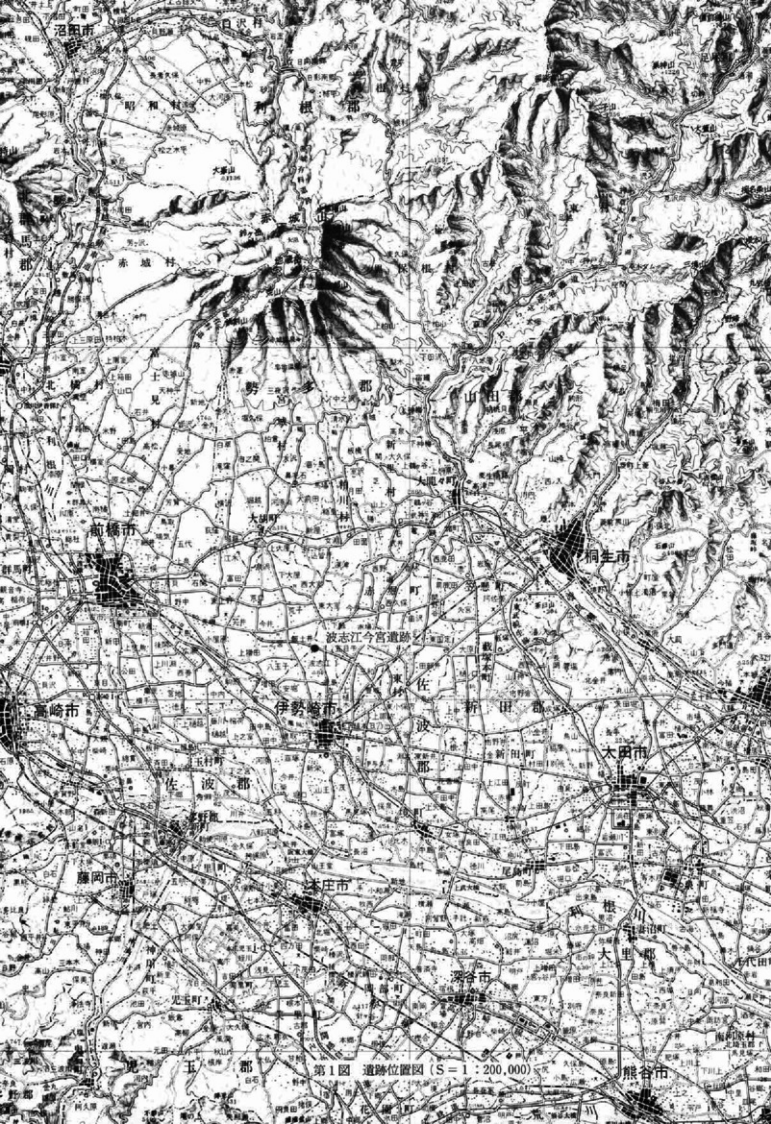
第1表	円筒埴輪計測表.....	129
-----	--------------	-----

第2表	胎土性状表.....	150
-----	------------	-----

図 版 目 次

P L 1	1946年当時の遺跡地(米軍航空撮影)
P L 2	1～IV区調査区全景(横直)、1～IV区調査区全景(斜め)
P L 3	III区調査区全景(横直)、V区全景
P L 4	発掘調査前風景
P L 5	1号墳全景、主体部、周堀(東)土層断面、埴輪出土状態
P L 6	2号墳全景、3号墳全景
P L 7	3号墳主体部、主体部土層断面、主体部掘り方、周堀(西)周堀土層断面、円筒埴輪出土状態(試掘坑)
P L 8	4号墳全景、主体部土層断面、造出部土層断面、周堀
P L 9	4号墳遺物出土状態
P L 10	5号墳全景、主体部、主体部土層断面、周堀(南)土層断面
P L 11	6号墳全景
P L 12	7号墳全景、石室
P L 13	7号墳石室奥室部、石室奥込め状態 石室内大刀出土状態、石室内馬具出土状態 帽子形埴輪出土状態、太刀形埴輪出土状態 墳丘(北)埴輪列、土師器杯出土状態
P L 14	8号墳全景、石室
P L 15	8号墳発掘調査前、石室、石室掘り方、石室裏込土層断面 石室遺物出土状態、周堀(西)土層断面
P L 16	1号住居跡全般、カマド、遺物出土状態、ピット
P L 17	1号土坑、2号土坑、3号土坑、土層断面

	4号土坑、土層断面、5号土坑、土層断面
P L 18	6号土坑、7号土坑、8・9号土坑、10号土坑 11号土坑、土層断面、12号土坑、13号土坑土層断面
P L 19	14・15号土坑、14号土坑、土層断面、15号土坑、土層断面
P L 20	1号溝
P L 21	V区溝、2号溝、土層断面、4号溝、5号溝
P L 22	沢宮跡、燃焼室、掘道、掘り方
P L 23	水田跡全景、水田跡下試掘、畚跡土層断面(1)、畚跡土層断面(2)
P L 24・P L 25	1号墳出土遺物
P L 26	1号墳出土遺物、2号墳出土遺物、3号墳出土遺物
P L 27	3号墳出土遺物、4号墳出土遺物
P L 28～P L 40	4号墳出土遺物
P L 41	4号墳出土遺物、5号墳出土遺物
P L 42・P L 43	5号墳出土遺物
P L 44	6号墳出土遺物、7号墳出土遺物
P L 45～P L 54	7号墳出土遺物
P L 55	8号墳出土遺物
P L 56	8号墳出土遺物、1号住居跡出土遺物
P L 57	5号土坑出土遺物、遺物外出土遺物
P L 58～P L 62	遺物外出土遺物
P L 63～P L 73	埴輪胎土顕微鏡写真



第1圖 遺跡位置圖 (S = 1 : 200,000)

第1章 調査の経過

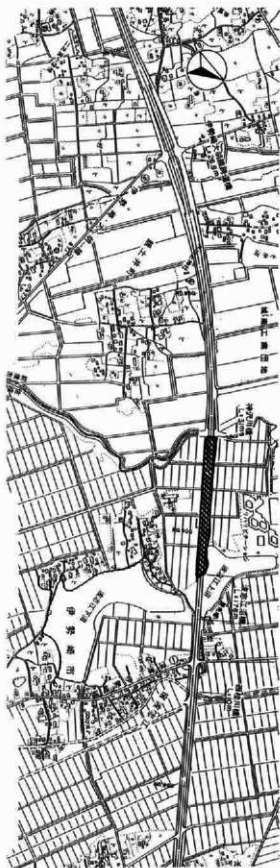
1. 調査に至る経緯

建設省は、一般国道17号の交通混雑緩和のため、東京～大宮～前橋間に大規模バイパスの建設を実施している。上武国道はその一環として計画されたもので、深谷バイパスの上武インターチェンジ(深谷市東方)を起点として利根川を渡って群馬県新田郡尾島町に入り佐波郡境町、佐波郡東村、伊勢崎市を通過して前橋市の北方に位置する田口町で現在の一般国道17号に取り付く全長41.4kmの道路である。

上武道路の都市計画は、1971(昭和46)年3月に尾島町～伊勢崎市内、1983(昭和58)年3月に前橋市の一般国道50号までの決定が行われた。

これに伴い県教育委員会は、1970(昭和45)年度に開発諸事業との調整を図る資料として道路計画路線を中心に幅2kmの地域で埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果、地域内では472カ所の遺跡が確認された。

発掘調査は、1974(昭和49)年1月より実施された。当初は、県教育委員会文化財保護課において1班体制で実施されたが、1978(昭和53)年に(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が設立されると発掘調査は、事業団に移行された。その後、道路工事の進捗状況に併せて1984(昭和59)年度から3班、1985(昭和60)年度から4班編成へと発掘調査の体制を対応させた。そして1988(昭和63)年度までに上武道路内に所在する38カ所の遺跡の発掘調査を実施した。



第2図 遺跡位図

2. 調査の経過

発掘調査は、2次にわたって実施された。第1次（I～IV区）の発掘調査は1980年5月から1981年2月までの10か月間実施した。第2次（V区）の発掘調査は1985年7月から8月までの2か月間実施し、波志江今宮遺跡の上武道路にかかる15,200㎡の範囲を終了した。

第1次の発掘調査では、まず調査区内の遺構の存在する範囲と遺構の性格を確認するために試掘調査を行った。その結果、I区では住居、土坑、炭窯、II区では溝、III区とIV区では古墳を確認した。

調査は、II区、III・IV区、I区の順で着手したが、古墳が検出されたIII・IV区が最後まで残った。

第2次の発掘調査では、溝、水田等を検出・調査した。

調査抄録

第1次調査

1980年

5月12日 発掘調査の準備

27日 試掘調査開始

6月

7月2日 調査区の設定

8月8日 試掘調査終了

18日 遺構確認作業

9月2日 1号墳調査開始

19日 2号墳、3号墳調査開始

22日 II区調査終了

10月2日 4号墳、8号墳調査開始

3日 5号墳調査開始

6日 7号墳調査開始

29日 6号墳調査開始

11月10日 I区調査区設定

20日 発掘調査区航空写真撮影

27日 III区・IV区ローム層下試掘調査

12月10日 I区表土掘削

1981年

1月19日 I区住居跡・炭窯跡調査開始

2月12日 全調査区の発掘調査を終了

第2次調査

1985年

6月17日 V区表土掘削

7月3日 遺構検出

12日 溝・水田跡の調査開始

30日 遺構写真撮影

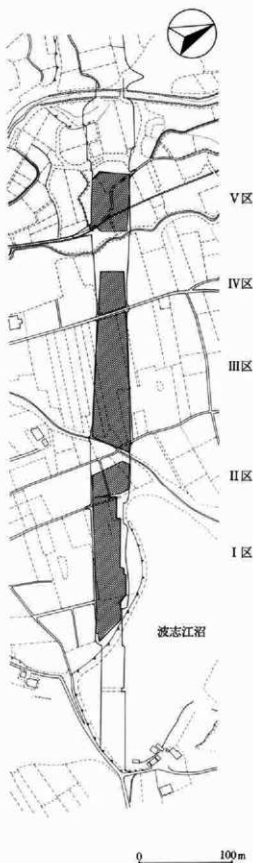
31日 遺構測量開始

8月6日 遺構測量終了

7日 水田跡層下試掘調査

9日 ローム層下試掘調査

13日 波志江今宮遺跡発掘調査終了



第3図 調査範囲図

第2章 調査の方法

1. 調査区の設定

波志江今宮遺跡の調査区の設定については、1次調査と2次調査では設定の方法を異にする。

1次調査での調査区の設定にあたっては、波志江今宮遺跡での上武道路の区間である波志江沼から神沢川までの路線が直線であるので路線センター杭を基準にして10×10mを1単位とするグリッドを設定した。各グリッドの呼称は、センター杭列をDラインとし、No.890(国家座標 X=39905.144、Y=-57191.511)のセンター杭をグリッドD-0とし、センター杭に直交して南に10mごとにC-0、B-0、A-0、北に10mごとにE-0、F-0、G-0を設定した。そしてセンター杭No.890から10mごとにアルファベットのための数字を増やして呼称する。

なお、幾つかのグリッドの国家座標値は次のとおりである。

D-20(センター杭No.900)

X=39980.352、Y=-57363.859、

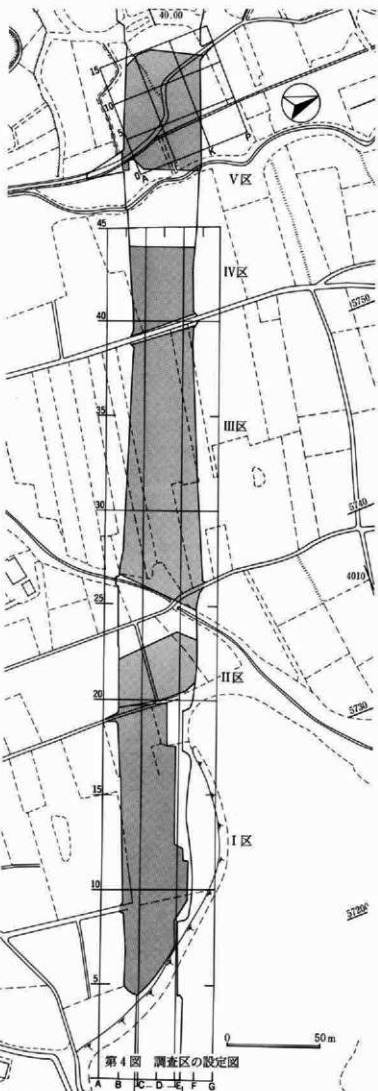
D-30(センター杭No.910)

X=40055.557、Y=-57549.181

2次調査では、1984年度より上武道路を担当する発掘調査班が1班体制から3班体制へ増強され、諸事情による調査班の遺跡間での移動がありえるため調査区の設定方法も各遺跡ごとの個別設定から各遺跡共通にする必要性が生じた。そのため、波志江今宮遺跡の2次調査でも1次調査の調査区設定方法とは異なった調査区の設定方法になった。

調査区の設定は、国家座標を基準に4×4mを1単位とするグリッドで設定した。各グリッドの呼称は、東西方向に東から1、2、3、4、5……25、南北に南からa、b、c、d、e……yを付した。

各グリッドの呼称は、南東隅を基点にA a-01、A d-10等と呼称する。なお、A a-00の国家座標値は、X=40064、Y=-57608である。



第4図 調査区の設定図

2. 基本土層

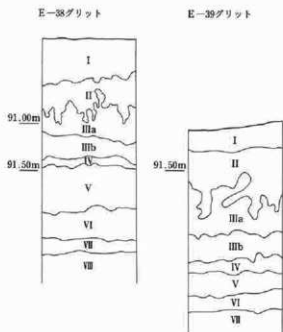
波志江今宮遺跡は、赤城山南麓の洪積台地上に位置する。ほぼ遺跡地全体に関東ローム層の安定した体積が見られるが、東の波志江沼にかけてと西側には沖積地が存在する。

基本土層は、IV区の東端E-38グリッドとその西側の斜面のE-39グリッドの2地点で設定した。

E-38グリッドでは、地表面よりI層が表土(上部は現在の耕作土)。II層は黄褐色(10YR5/6)軟質ローム、いわゆるソフトローム土で下面に不連続面をもつ。III層は黄褐色(10YR5/6)硬質ロームで内部は2層に細分でき、上位のIIIa層はSP(白糸台パミス)を含み、IIIb層はBrP(板鼻褐色パミス)を含む。IV層は黄褐色ロームで色調はIII層に比べてややよい黄褐色(10YR3/4)を呈し、やや粘性が見られる。V層は暗褐色(10YR3/4)ロームで暗色帯、多少の粘性が見られる。VI層は黄褐色ロームで色調はにぶい黄褐色(10YR5/6)呈し、粘性が強く硬質である。VII層は八崎パミス混土層で色調はにぶい黄褐色(10YR5/6)を呈し、HP(八崎パミス)がブロック状に多く見られる。VIII層は粘土層で色調はオリーブ褐色(2.5Y4/4)を呈す。

E-39グリッドは、概ねE-38グリッドと同様であるが、VII層は確認できなくIV層からVIII層上面にかけて ϕ 10~20cmの礫を含む。またVIII層ではE-38グリッドで見られなかった黒色粒を多く含んでいる。

なお、波志江今宮遺跡の北約2kmに位置する下触牛伏遺跡では、波志江今宮遺跡のIII層からIV層とV層に相当する層位で旧石器時代の文化層が確認されている。



第5図 基本土層図



第3章 周辺の遺跡

本遺跡は、赤城山南麓の裾野端部の神沢川左岸と現在は波志江沼として溜地になっている沖積地の間の微高地に立地している。遺跡地の周辺では、旧石器時代から奈良・平安時代にかけての多くの遺跡が確認されており、圃場整備や道路建設をはじめとする多くの開発に伴って発掘調査も実施され遺跡の性格も明らかにされている。

旧石器時代 調査例はあまり多くはないが、本遺跡の北側に位置する下触牛伏遺跡(8)や上武道路関連の飯土井二本松遺跡(2)、飯土井中央遺跡(3)、波志江六反田・天神山(5)、二之宮千足遺跡、二之宮谷地遺跡などで確認されている。

縄文時代 遺構を伴う遺跡は、少ないが遺物は多くの遺跡から出土している。そうした中でも下触牛伏遺跡や二本松遺跡(11)、荒砥二之堰遺跡(12)から住居跡が検出されており、荒砥二之堰遺跡では敷石住居跡も検出されている。時期的には、中期が主体的でそれに若干の前期、後期が伴う。そのほかの遺跡では、陥し穴や埋窠、土坑が検出されている程度である。

弥生時代 周辺では、荒砥前原遺跡(14)や荒砥島原遺跡で中期後半の遺構を検出している。鶴ヶ谷遺跡や上ノ坊遺跡では、後期の遺構を検出している。また、飯土井二本松遺跡や荒砥二之堰遺跡では後期終末の土器の出土が見られる。しかし、弥生時代の遺構は、概して他の時代に比べると少ない。

古墳時代 前期から中期の遺跡は、弥生時代の遺跡の分布と同様に数少ないが、弥生時代に比べて多少の増加傾向が見られる。特に江龍川や神沢川流域には中期の方形区画をもった遺構群や前期から中期にかけての大規模な集落が存在し、これ以降集落遺跡の増加が顕著である。

後期では、遺跡地周辺でも多くの遺跡、遺構が検出されている。遺跡の北側に位置する下触牛伏遺跡では、堅穴住居跡や古墳群、北に隣接する宮貝戸古

墳群(9)では古墳群、南側に位置する宮貝戸遺跡では堅穴住居跡、神沢川の対岸に位置する荒砥二之堰遺跡でも古墳群が検出され、調査されている。また、東側の沖積地の対岸には片田山古墳群(7)の存在が知られている。

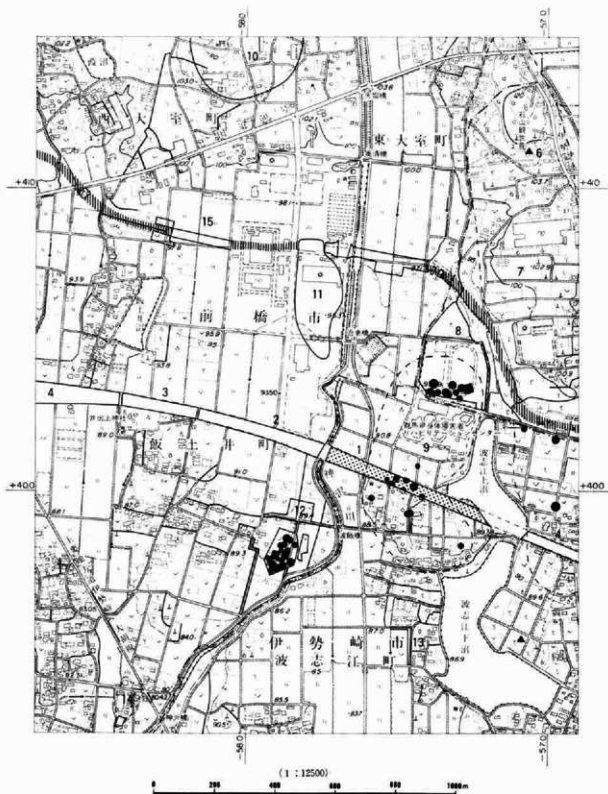
奈良・平安時代 この時代になると更に多くの遺跡、遺構が検出され、調査されている。周辺の発掘調査では、ほとんどの遺跡で奈良・平安時代の堅穴住居跡が検出され集落の一部が確認され、広範囲に集落が展開されていたようである。しかし、集落の規模は、飯土井二本松遺跡の23軒、飯土井上組遺跡(4)の2軒、波志江六反田遺跡の2軒などその分布を見ると大規模なものではなかったと思われる。

また、波志江沼の東側に位置する波志江六反田遺跡や波志江中峰岸遺跡の沖積地では、浅間山噴出軽石(As-B)で覆われた水田跡が検出されており耕作土の状況からそれ以前より水田耕作が盛んに行われていたことが窺え、集落跡が大規模に展開されていく生産基盤であったようである。

- | | |
|------------|------------|
| 1 波志江今宮遺跡 | 9 宮貝戸古墳群 |
| 2 飯土井二本松遺跡 | 10 天神山古墳群 |
| 3 飯土井中央遺跡 | 11 二本松遺跡 |
| 4 飯土井上組遺跡 | 12 荒砥二之堰遺跡 |
| 5 波志江六反田遺跡 | 13 宮貝戸遺跡 |
| 6 石山遺跡 | 14 荒砥前原遺跡 |
| 7 片田山古墳群 | 15 女掘跡 |
| 8 下触牛伏遺跡 | |

参考文献

- 「下触牛伏遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
「飯土井二本松遺跡・下江田前遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
「飯土井中央遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
「書上本山遺跡・波志江六反田遺跡・波志江天神遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
「二之宮千足遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
「二之宮谷地遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
「荒砥二之堰遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
「荒砥前原遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
「宮貝戸古墳群・蟹沼東古墳群」伊勢崎市教育委員会 1980
「蟹沼東古墳群・宮貝戸下遺跡」伊勢崎市教育委員会 1978
「女掘」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985



第6図 波志江今宮遺跡と周辺遺跡

第4章 検出された遺構・遺物

1. 古 墳

1号墳

位置 1号墳は、IV区東端のB～D-37～39グリッドに位置する。他の遺構との重複関係は、南側で2号墳と接し、溝と重複するが2号墳は残存状態が悪いため、また溝とは周堀内部で重複しており平面及び断面でも新旧関係は不明であった。調査は、周堀東端の外縁の一部が僅かに現道下に延びるがほぼ全域におよぶ。

墳丘と外部施設 規模は、周堀の外縁で南北17.0m、東西18.3mで確認面外縁で面積225.0㎡を測る。墳丘は、南北8.6m、東西10.5mで面積85.2㎡を測る。墳丘の形状は、北側と南側がやや直線的な面があるがほぼ円形を呈する。

封土は、ほとんど削平や後世の耕作により残存しておらず、表土掘削下ではローム層に達した。

周堀は、幅2.2～3.8mと南側比べて北側が広くなっている。深度は、平均0.8mを測るが、周堀底面の標高は南側より北側が約15～20cmほど低い。周堀の断面形は、上面から逆台形を呈し、底面付近で箱形の掘り方を呈する。

埴輪の出土状態は、墳丘がほとんど削平されているため墳丘部からの出土は全くなく、周堀への転倒、流れ込んだものだけである。その分布は、周堀の北側に多く見られるが、北側では円筒埴輪だけであるのに対して南側は少量ではあるが、形象埴輪が出土している。

主体部 位置は、墳丘のほぼ中央で長方形の掘り方が検出されただけである。開口部は、墳丘自体が削平は受けているものの等高線の回り方より東側に位置したと想定される。

主体部掘り方の長軸方向の方位は、東へ94°の方向へ傾く。規模は、長軸が3.72m、短軸が2.54m、確認面からの掘り方深度が0.61mである。

掘り方の底面には、5～20cmの厚さで灰白色粘土が埋め込まれている。

出土遺物 出土した遺物は、接合前の時点で埴輪片1,050点(完形1点)、土師器41点、須恵器1点、石器・石製品4点である。

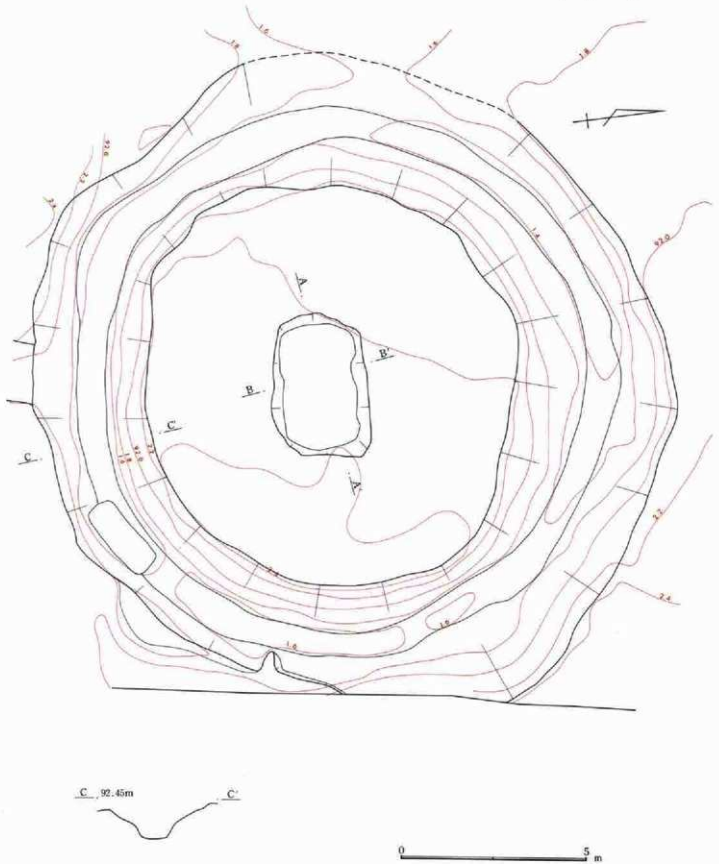
埴輪片のうち形象埴輪は、図示した馬形埴輪のほか形態の不明なものが2点あったほかはすべて円筒埴輪片である。

円筒埴輪は若干の朝顔形円筒埴輪を除く大部分が円筒埴輪である。円筒埴輪は、輪積み成形で外面に凸帯を2条もつ3段で構成され、第2段に円形の透孔をもち、外面は縦方向のハケ目整形で内面は縦方向ハケ目後縦方向のナデ整形が施されている。また、一部の外面の第3段に「×」のヘラ描きが見られるものがある。

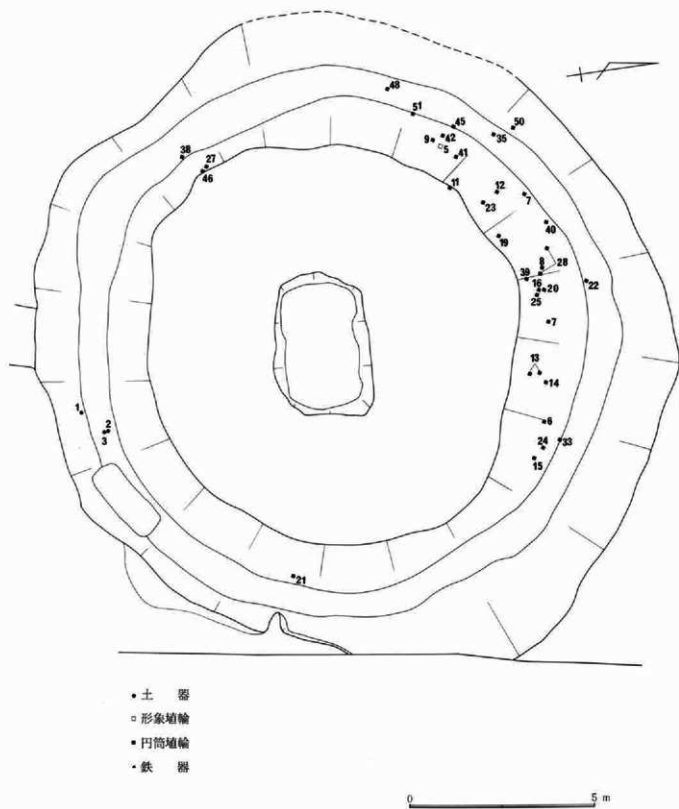
土器類は、土師器の杯を中心に壺類が若干あるだけで須恵器の出土はなかった。

石器・石製品には管玉、玉が3点出土したほかに後世の混入品である砥石が出土している。

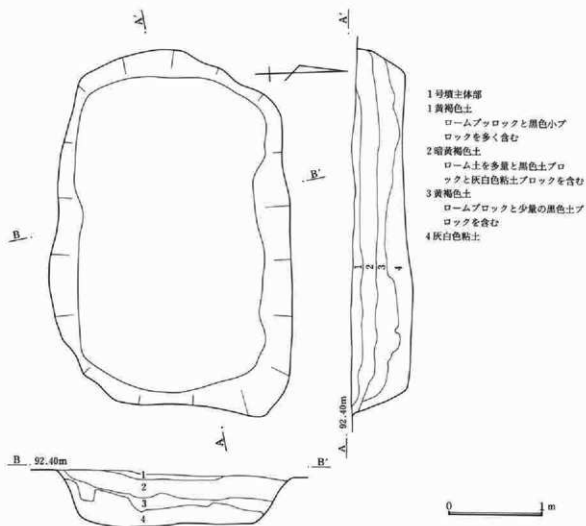
1 古 墳



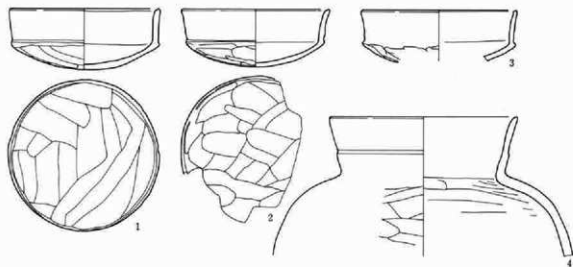
第7図 1号墳平面図・周堀エレベーション図



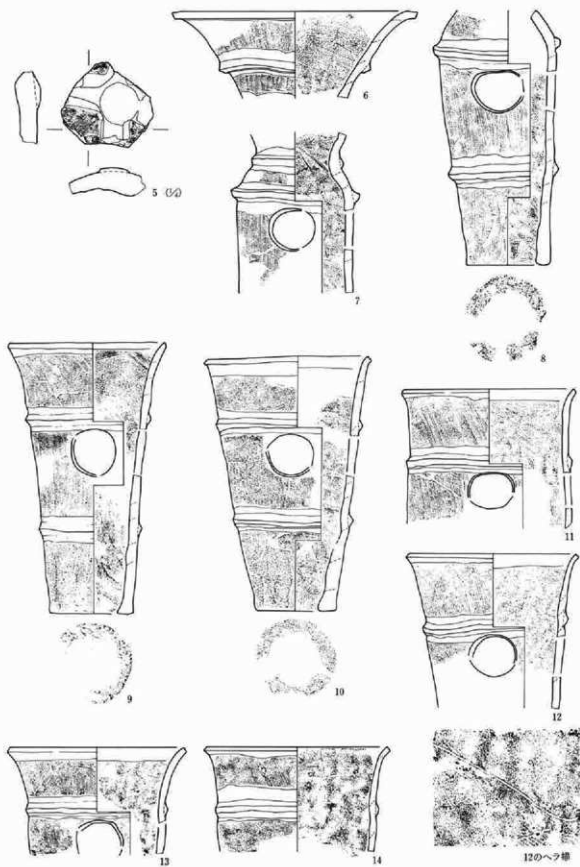
第8図 1号墳遺物出土状態図



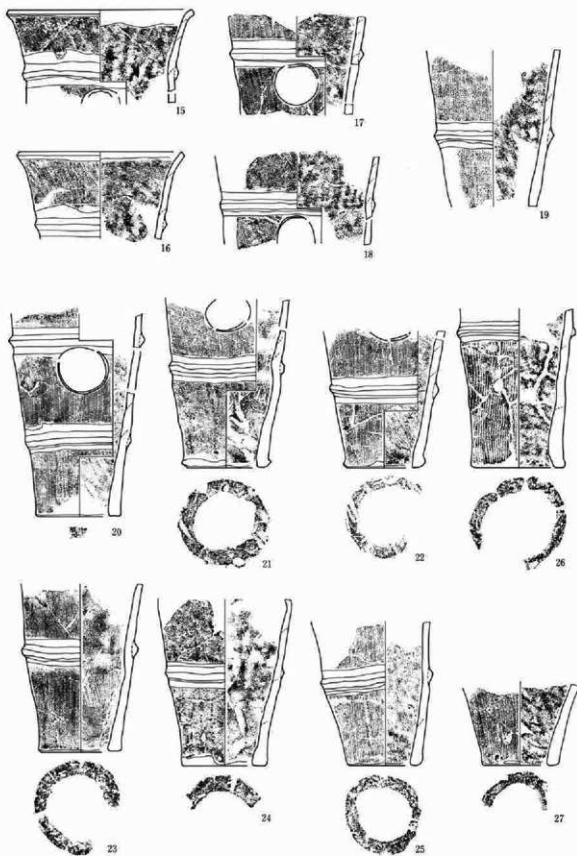
第9図 1号墳主体部平面図・セクション図



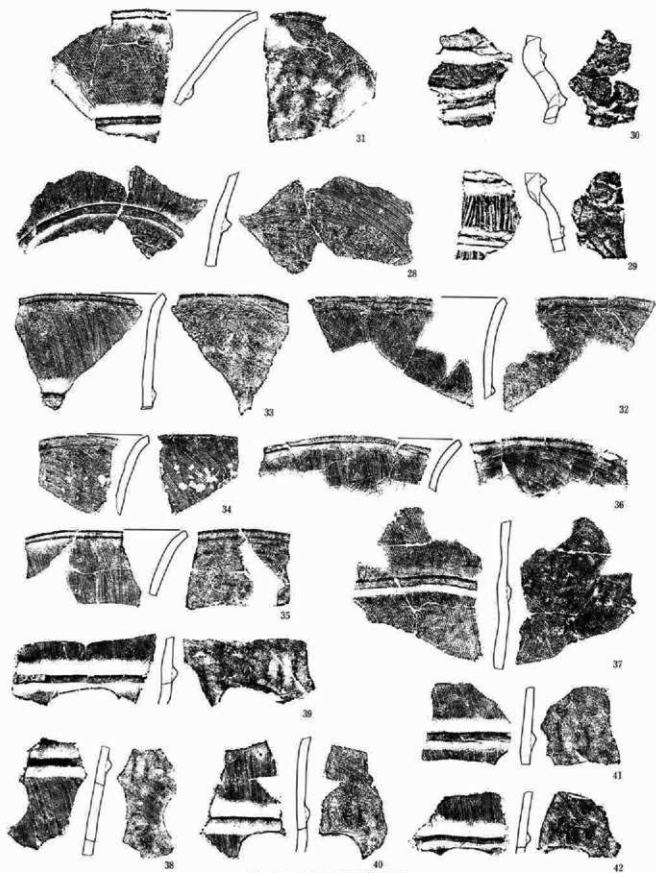
第10図 1号墳出土遺物(1)



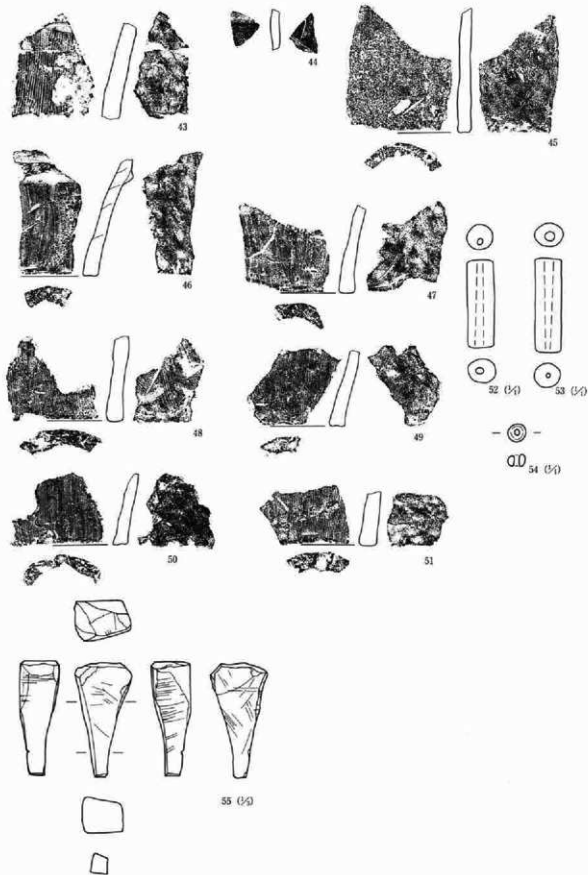
第11図 1号墳出土遺物(2)



第12图 1号墳出土遺物(3)



第13図 1号墳出土遺物(4)



第14图 1号墳出土遺物(5)



第15図 2号墳平面図



第16図 2号墳出土遺物(1)

2 号 墳

位置 2号墳は、IV区東南角のB-37、38、39グリッドに位置する。他の遺構との重複関係は、北側で1号墳と東側で3号と墳接し、墳丘内部で溝と重複する。これらの遺構との新旧関係は、溝より古いとは想定されるが、他の古墳との新旧関係は明確でない。調査は、北側部分の周堀と墳丘の一部が行われただけである。

墳丘と外部施設 規模は、古墳の一部が調査されただけであるため不明確であるが、墳丘の等高線の様相から5号墳や7号墳と同等の規模ではないかと推定される。

墳丘の形状については、調査区南側の等高線の様

相から円墳ではないかと推定される。

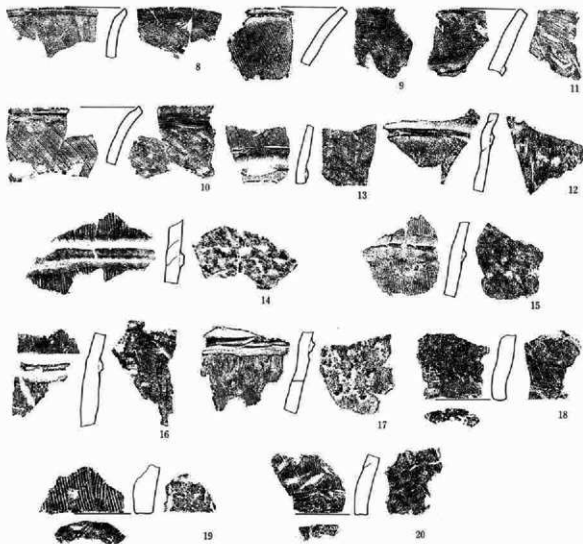
封土は、ほとんど削平や後接世の耕作により残存しておらず、表土掘削下ではローム層に達した。

周堀は、東側で僅かに落ち込む様相が見られたが周堀かどうかは明確ではない。

埴輪の出土状態は、小片が散発的に出土しただけである。

主体部等は、調査区外に存在すると想定される。

出土遺物 出土した遺物は、ほとんどを図示したが、形象埴輪は人物埴輪の腕の部分と形状が不明の破片が各1点出土している。円筒埴輪は、3の朝顔型埴輪の他はすべて円筒埴輪片である。



第17図 2号墳出土遺物(2)

3号墳

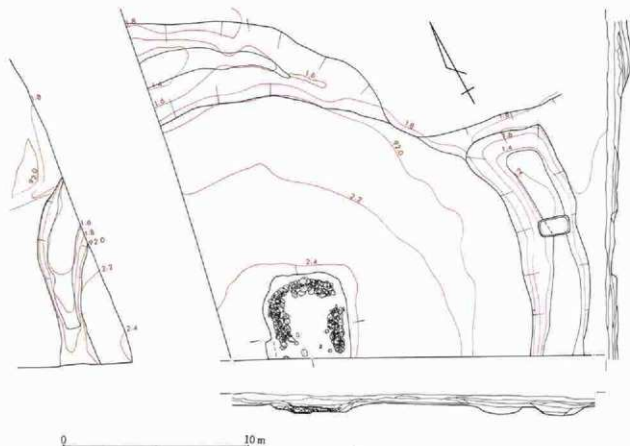
位置 3号墳は、III区とIV区にかけてのB～C-34～37グリッドに位置する。他の遺構との重複関係は、北東角で4号墳と重複し、IV区で2号墳と接する。これらの古墳との新旧関係は、明確ではないが、周堀の残存状態から4号墳よりは3号墳のほうが前出のようである。調査は、古墳の南半分が調査区外に位置するため約半分の調査であった。

墳丘と外部施設 規模は、周堀外縁で東西27.8m、南北は調査区内で17.6mで全体では推定35mと思われ、調査区内での面積452.5㎡を割ることから全体

は900㎡ほどであると想定される。墳丘は、東西22.8m、南北は調査区内で13.7mで全体では推定17mと思われ、調査区内での面積277.2㎡を割ることから全体では550㎡ほどであると想定される。

墳丘の形状は、南北が多少長く北側の半分がやや大きい楕円形状の円形を呈す。

封土は、ほとんど削平や後世の耕作により残存していないが、ごく部分的に基本土層の暗褐色砂質土の上部にローム土やFPの混入したローム土の盛土の存在が確認される程度である。



3号墳

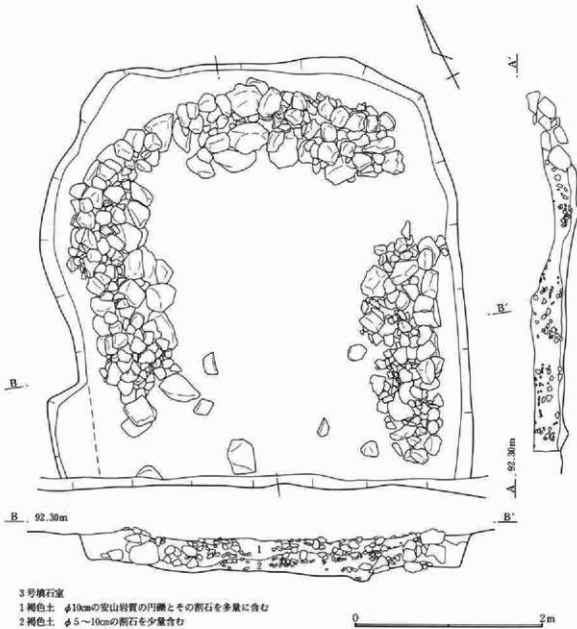
- 1 暗褐色砂質土 表土
- 2 黒灰色土 FPを多量に含む
- 3 暗黄褐色土
- 4 暗黄褐色土 直径5cmのロームブロックを少量含む
- 5 暗灰色砂質土
- 6 黒色砂質土
- 7 黒色土 黒色粘土とロームブロックで比較的つき固めてある
- 8 暗灰褐色土 黒色粘質土とロームブロックを含む
- 9 黒褐色粘質土、暗灰褐色土ブロックを含む

- 10 暗褐色砂質土層
- 11 黄褐色土 ローム土の盛土
- 12 暗褐色土 FPを多量とロームブロックを含む
- 13 灰黒褐色砂質土
- 14 暗灰色砂質土
- 15 灰黒色砂質土 As-Bを多量に含む
- 16 灰黒色砂質土 15に類似、15よりAs-Bを多く含む
- 17 暗褐色土 ローム粒を多く含む
- 18 褐色土 ローム粒を多く含む

第18図 3号墳平面図・セクション図

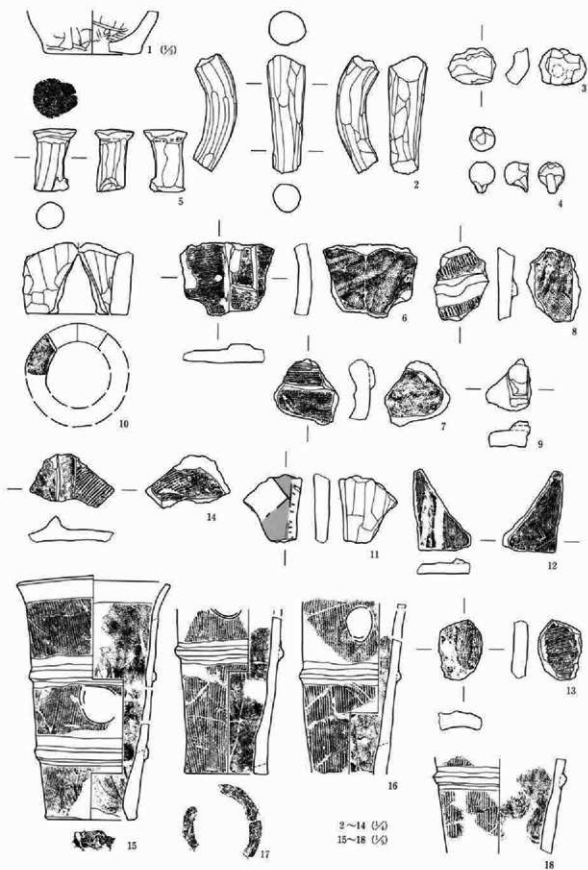
周堀は、4号墳や農道により切断され不明確の点が多いが、規模は4号墳周堀の南側では幅3.0~3.8m、深度0.6~0.65m、4号墳周堀西側では4.3~5.5m、深度0.5m前後、農道南側では1.3~2.5m、深度0.5m前後である。断面の形状は、逆台形状を呈すが、4号墳周堀西側では落ち込む傾斜が緩やかであるのに対し他の部分はやや急な傾斜である。主体部 位置は、墳丘のほぼ中央部であると想定され、開口部側の南半分は調査区外に残存する。また、残存状態は非常に悪く石室を構成する礫はすべて取

り除かれており、底部に敷かれていた $\phi 5\sim 10\text{cm}$ 大の打ち割られた礫と掘り方が残損する程度である。規模は、主軸方向の残存部分で4.48m、幅4.12m、残存深度は0.32mである。掘り方の主軸方位は、東に27°ほど傾く。

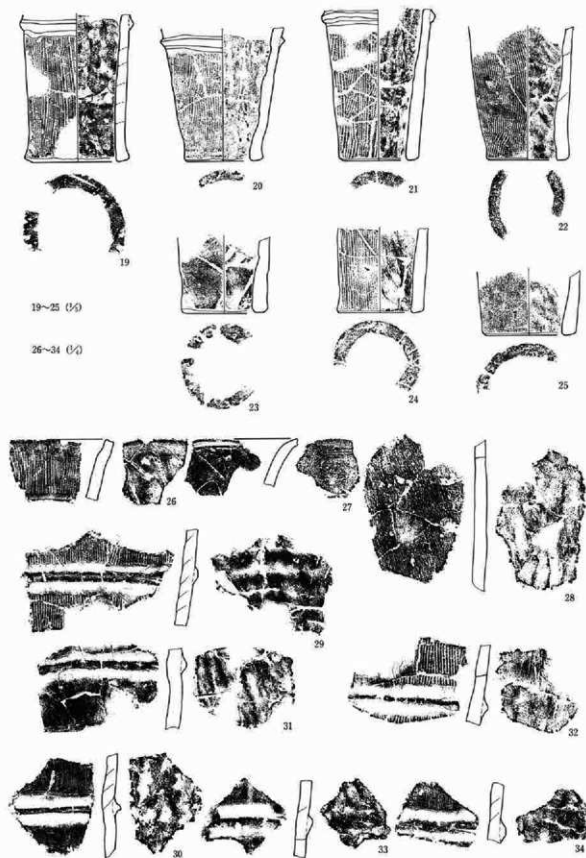


第19図 3号墳石室平面図・セクション図

第4章 検出された遺構・遺物

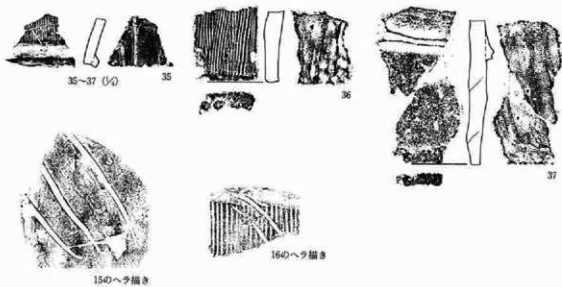


第20図 3号墳出土遺物(1)



第21图 3号墳出土遺物(2)

第4章 検出された遺構・遺物



第22図 3号墳出土遺物(3)

4 号 墳

位置 Ⅲ区西端のC～D-34～37グリッドに位置する。他の遺構との重複関係は、南側で3号墳と重複するが、3号墳で記述したとおり新旧関係はあまり明確ではない。周堀の状況から4号墳のほうが後出であると考えられる。調査は、周堀の北端部が調査区外にのびるが大部分は調査区内に存在している。墳丘と外部施設 形態は、南部に台形状の張出部分をもつ帆立貝型を呈す。円墳部分の形態は、北側や張出部付近に直線的なめんが見られる。規模は、周堀の外縁で一部調査区外にのびるが残存部分の主軸方向が30.4m、全長は推定で35.5m、円墳部分の主軸方向に直交する幅は28.8mで外縁部分の面積は175.9㎡を測る。墳丘は残存部分で28.3m、全長は推定で28.8m、そのうち円墳部分は残存部分で21.5m、全長は推定で22.0m、幅は18.0m、張出部分の全長は6.7m、最大幅7.1m、最小幅4.2mで墳丘部分の面積70.5㎡を測る。

墳丘の主軸方位は、東へ8°傾いている。

封土は、他の古墳と同様に後世の削平や耕作によりほとんど残損しておらず、墳丘盛土として確認できたのはF P層上に僅か5～10cmほど残存している暗褐色土だけであるが、それも全面ではなくごく限られた範囲でほとんどはF P層下の基本土層まで耕作等が及んでいる。

周堀は、円墳部分が4.7～7.5mで平均6.2m、深度0.8～1.3mであるが、幅は東側は西側に比べてやや狭く、深度は北側から張出部分に向けて深くなり、最深部は東側の張出付近である。また、周堀の傾斜は、外縁側は急な傾斜であるのに対して墳丘側は比較的緩やかな傾斜である。張出部分は南側で幅2.4m、深度は0.45～0.48mで幅、深度ともあまり変化はない。

埴輪の出土は、第25図に示したように墳丘部分からの出土は95, 217の円筒埴輪片が僅かに出土している程度で大部分は墳丘から転落したのか周堀内部から出土している。周堀内部の出土も張出基部の西側や主体部開口部分の前部にあたる部分より多量に出

土している。そして次に張出基部東側、主体部開口部分の前部にあたる部分の両側より出土しており、円墳部分の周堀からの出土は散漫である。また、張出部分南側の周堀からの出土は全く見られない。形象埴輪の出土は、張出基部西側周堀より8・18の人物埴輪、27・28・35の馬形埴輪など多数出土している。

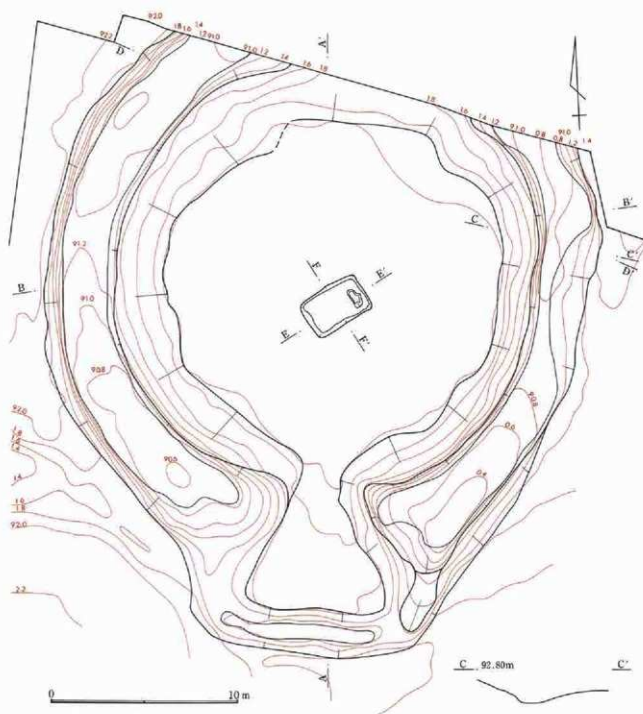
主体部 位置は、円墳部分のほぼ中央に位置する。主体部は、石室などは残存しておらず、掘りだけが検出された。掘り方の形状は長方形を呈し、規模は長軸で3.40m、短軸で2.20m、残存深度は1.20mを測る。主軸方向は、東へ60°、墳丘の主軸から東へ52°傾いている。

掘り方内部では、長さ1.22m、幅0.54mの不整形の落ち込みが検出された他は数個の割罫が出土しているだけである。

出土遺物は、須恵器、土師器、形象埴輪、円筒埴輪などが出土している。須恵器は、長頸壺、広口壺などが見られる。土師器は、甕の小片が25点ほど出土しているが図示できる個体は見られない。埴輪は、形象と円筒を併せて13, 323点ほど出土している。

そのうち形象埴輪は、接合・復元で図示できたのは49点で人物、馬、家、盾、獸形などがある。

円筒埴輪は、4号墳より出土した遺物のもっとも多くを占める個体であるが、多くは3段構成によるものであるが、一部第32・33図-59～62に見られるような4段構成によるものが見られる。円筒埴輪の凸帯は、断面が三角形、角形、M₁形など若干の差がみられるが、透孔は大部分が円形を呈し、一部に楕円形、円形の上部がやや直線的なものも見られる。



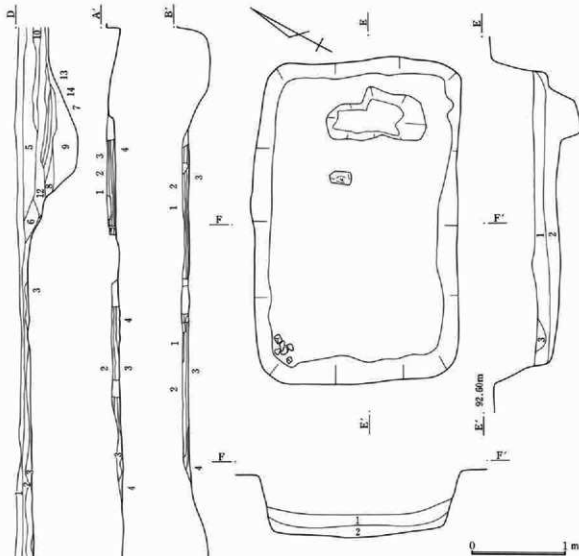
4号古墳

- 1 褐色土
- 2 FFP 主体 黒色土粒を若干含む
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック、ローム粒を含む
- 4 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む
- 5 暗灰褐色砂質土
- 6 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む
- 7 暗褐色土 ロームブロックを含む

- 8 暗褐色土 ロームブロックを少量含む
- 9 褐色土 ロームブロックを少量含む
- 10 黒色砂質土 As-Bを多量に含む
- 11 As-B 主体
- 12 As-B に若干の褐色土を含む
- 13 As-B に少量の褐色土を含む
- 14 黒色粘質土

第23図 4号墳平面図

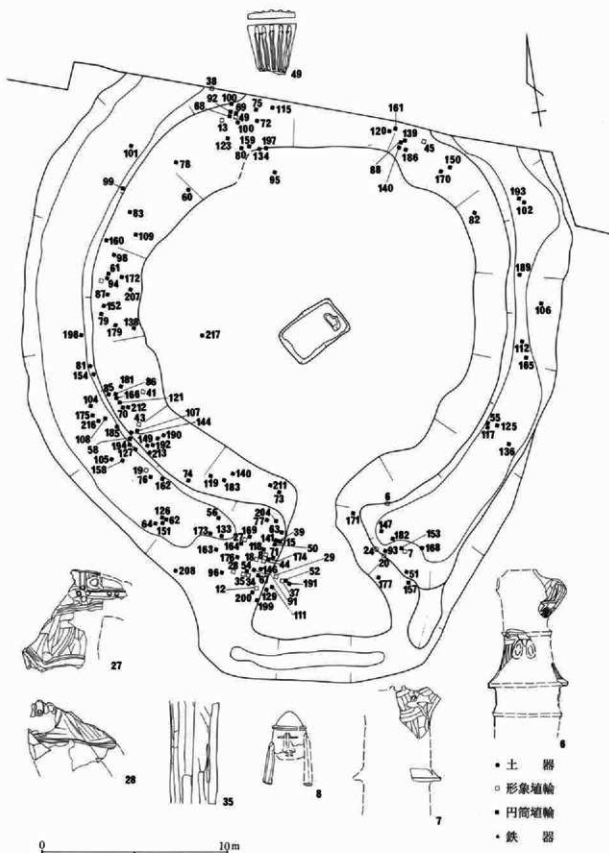
1 古 墳



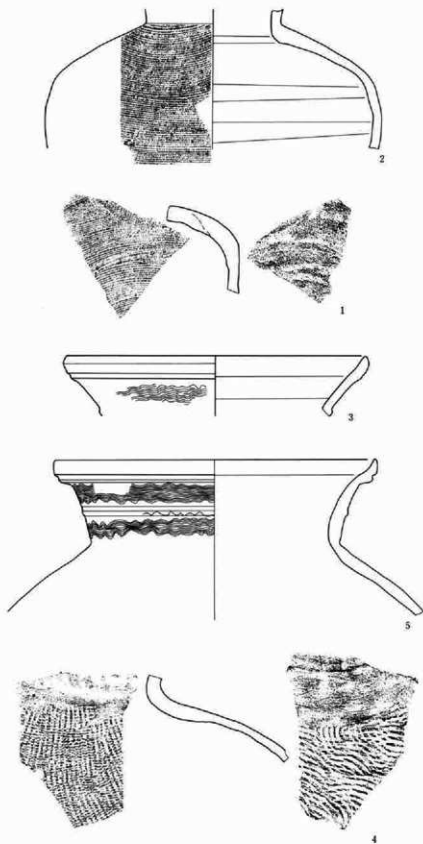
4号古墳主体部

- 1 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む
- 2 黄褐色土 ロームブロックを多く含む
- 3 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む

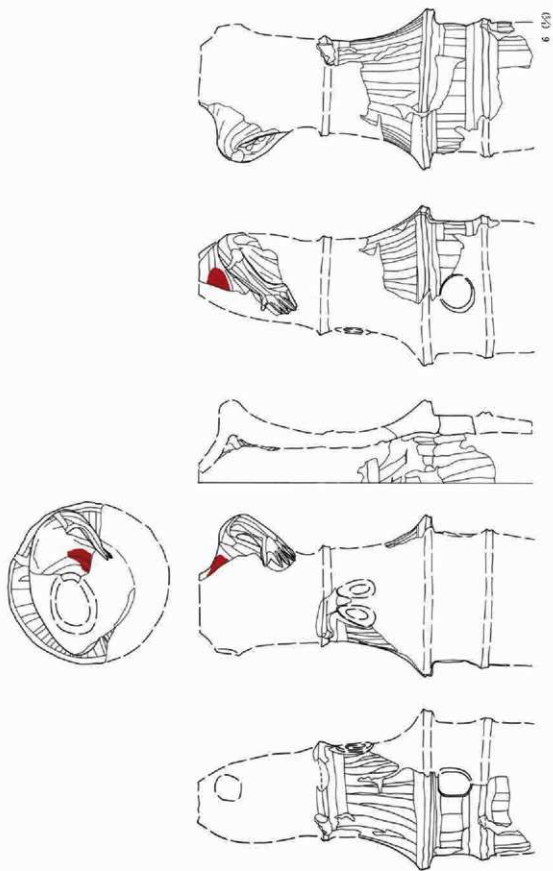
第24図 4号墳墳丘セクション図・主体部平面図掘り方



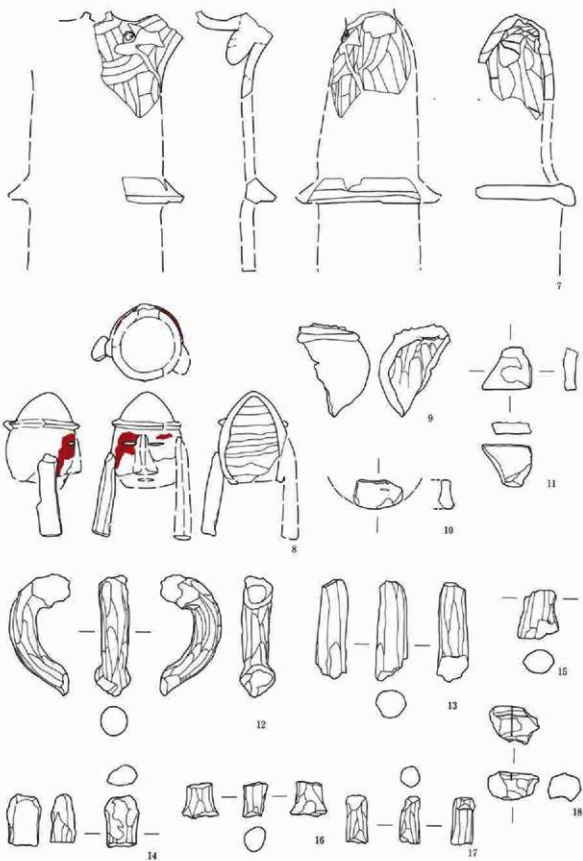
第25図 4号墳遺物出土状態図



第26図 4号墳出土遺物(1)

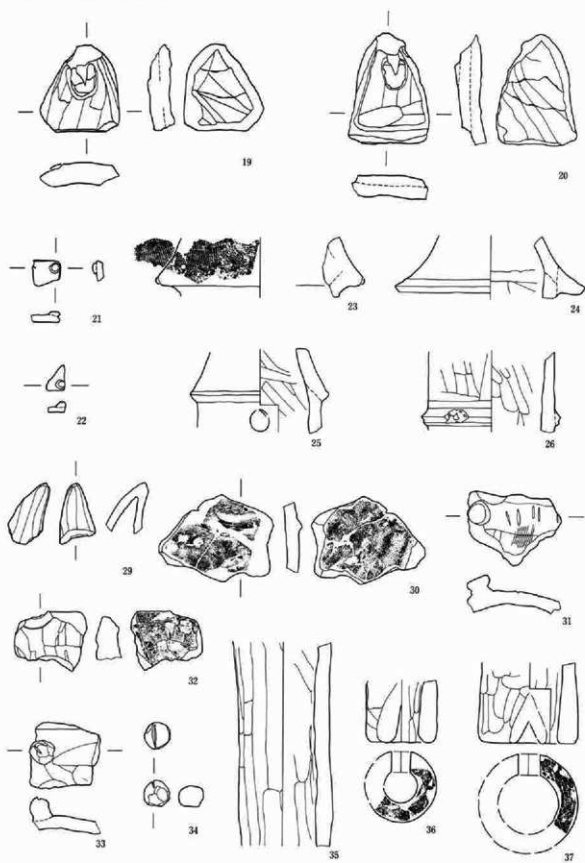


第27図 4号墳出土遺物(2)

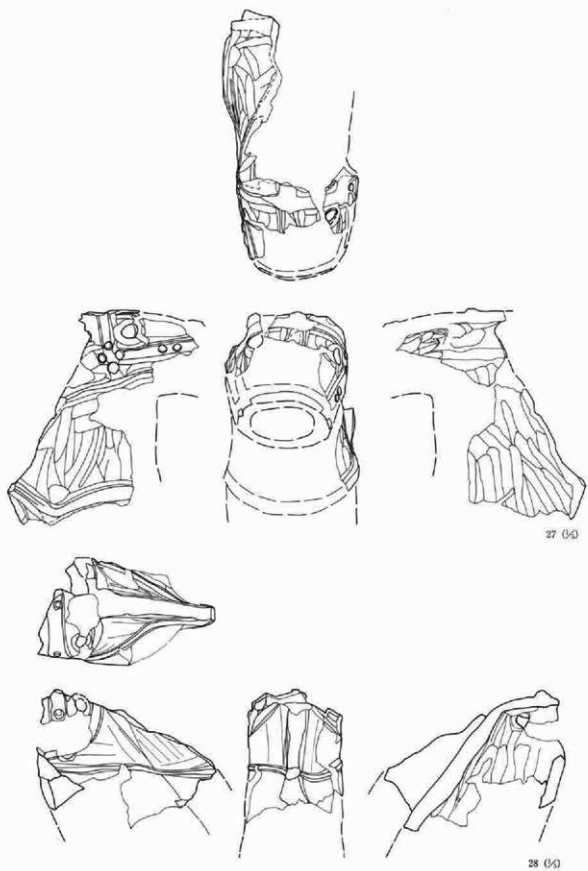


第28図 4号墳出土遺物(3)

第4章 検出された遺構・遺物

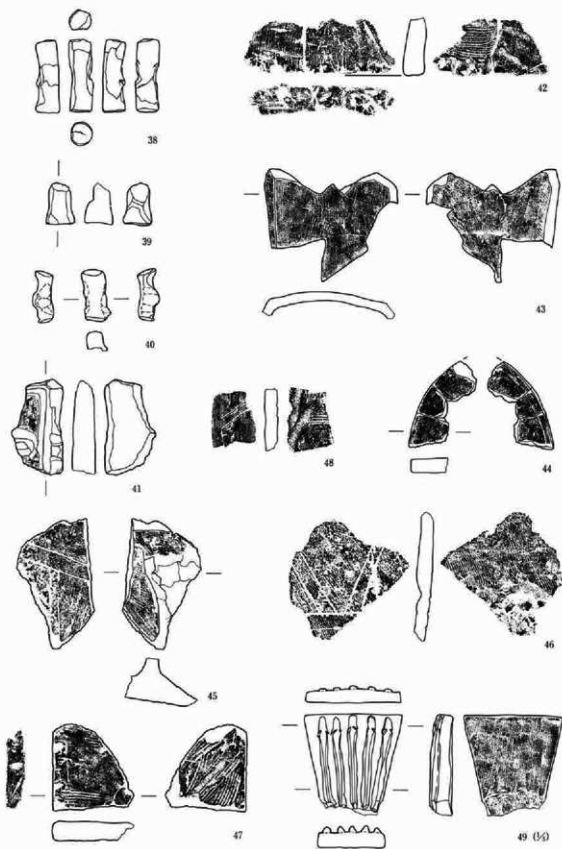


第29図 4号墳出土遺物(4)

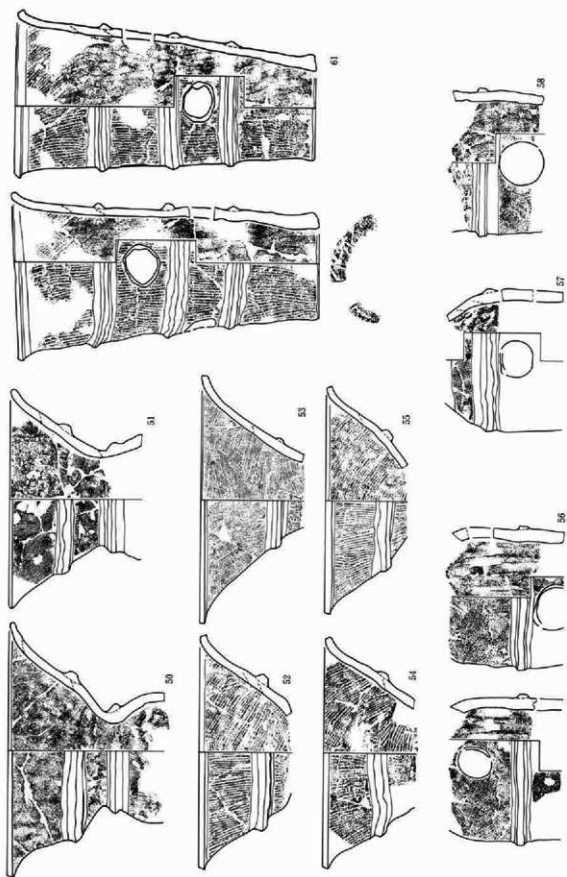


第30图 4号墳出土遺物(5)

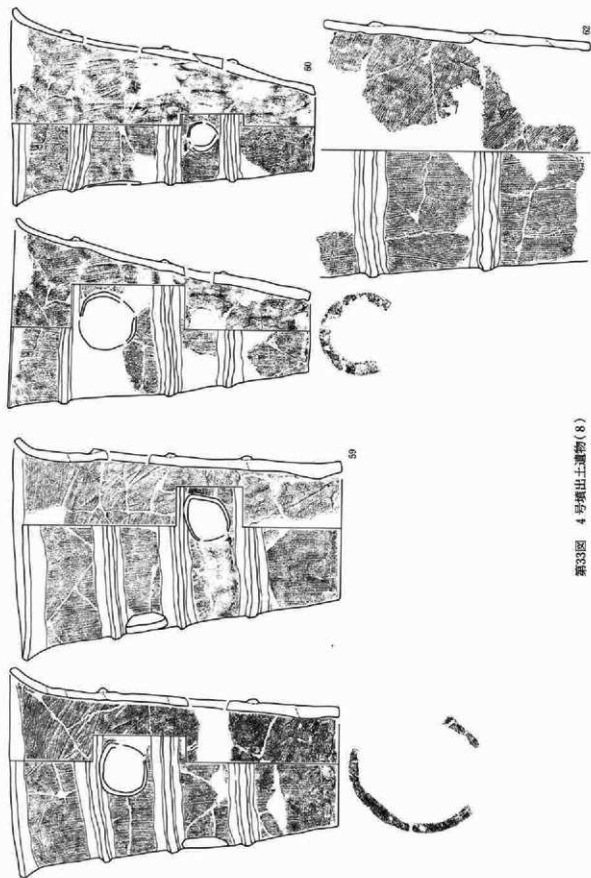
第4章 検出された遺構・遺物



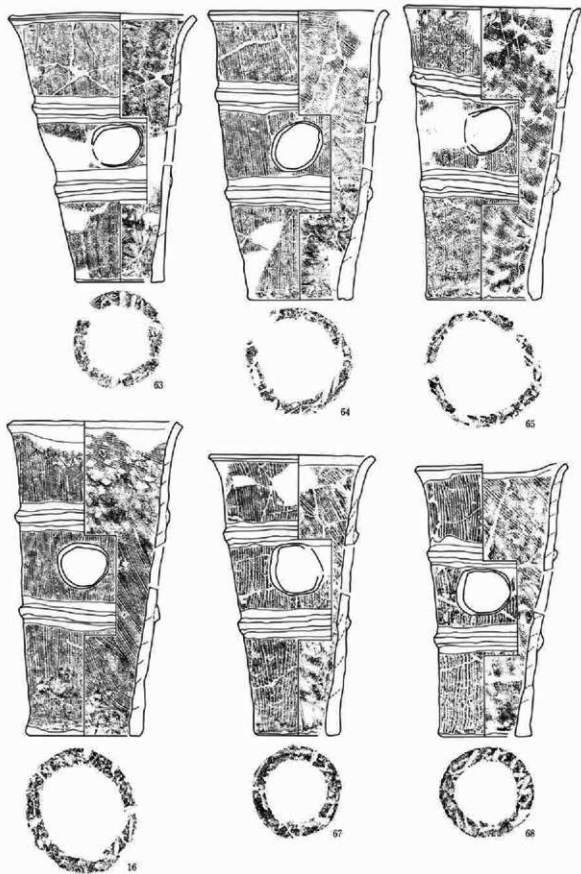
第31図 4号墳出土遺物(6)



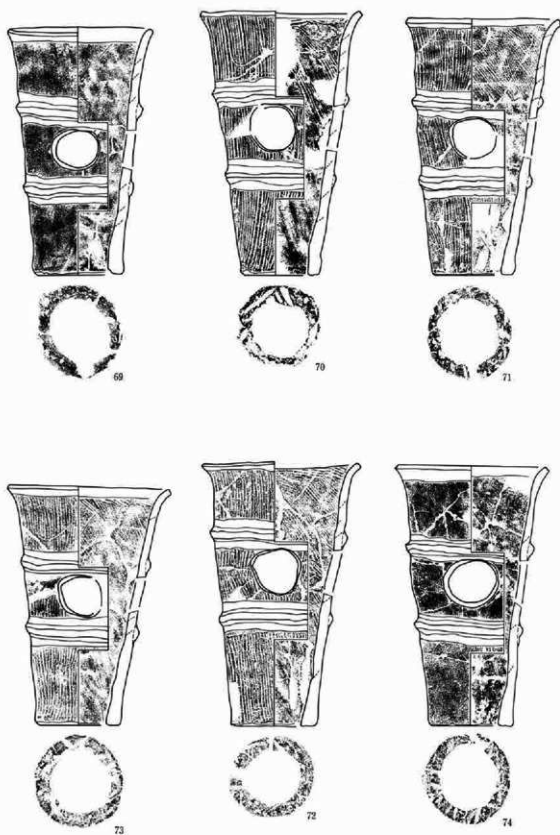
第32圖 4号墳出土遺物(7)



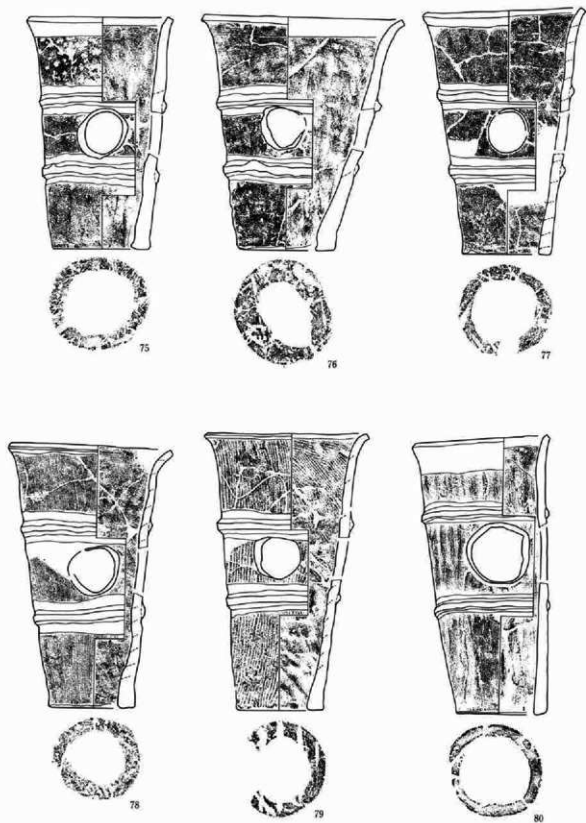
第33図 4号墳出土遺物(8)



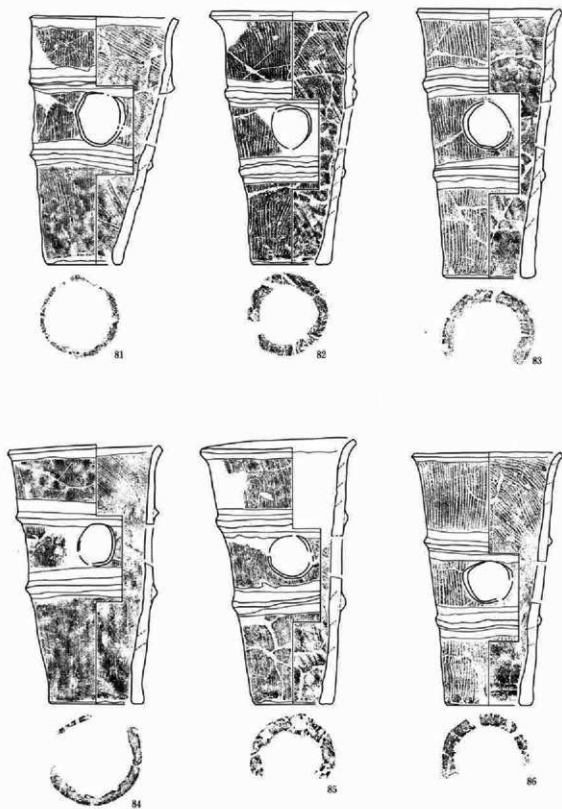
第34圖 4号墳出土遺物(9)



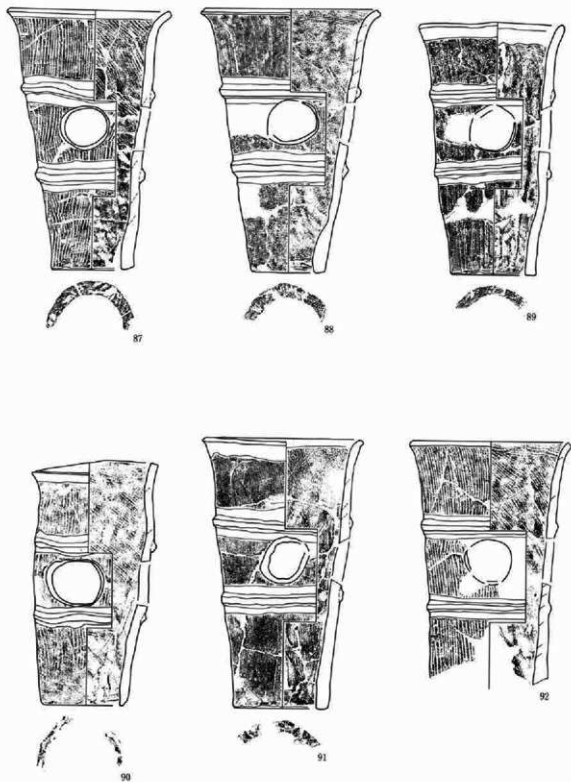
第35図 4号墳出土遺物(10)



第36図 4号墳出土遺物(11)

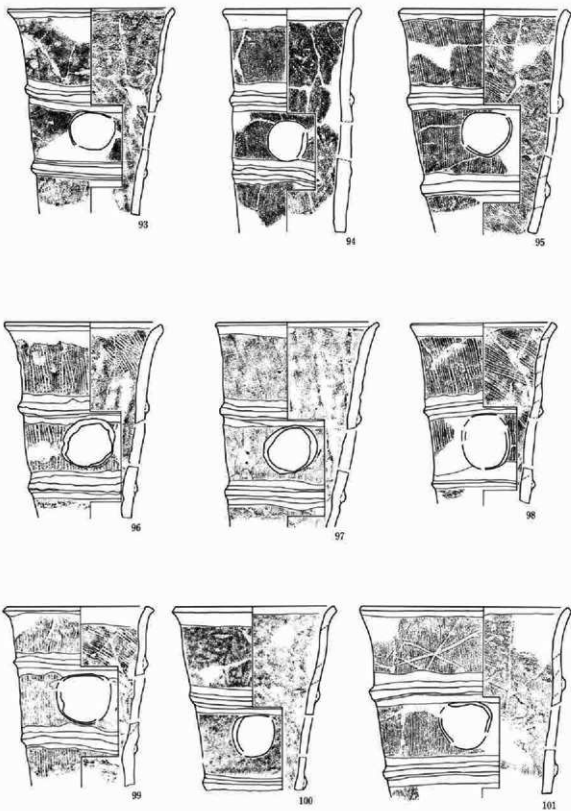


第37図 4号墳出土遺物(12)

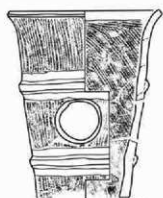


第38图 4号墳出土遺物(13)

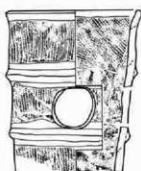
第4章 検出された遺構・遺物



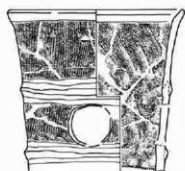
第39図 4号墳出土遺物(14)



102



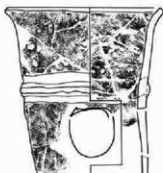
103



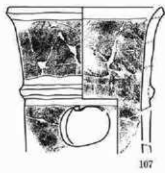
104



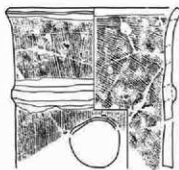
105



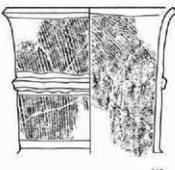
106



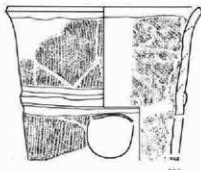
107



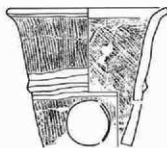
108



109



110



111



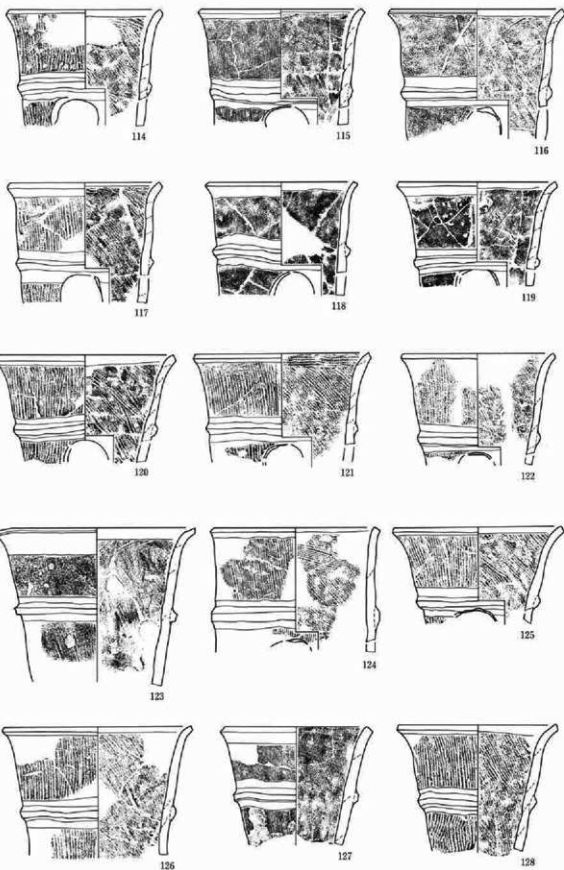
112



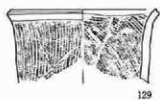
113

第40図 4号墳出土遺物(15)

第4章 検出された遺構・遺物



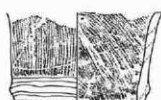
第41図 4号墳出土遺物(16)



129



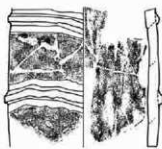
130



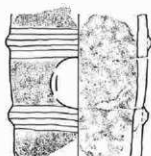
131



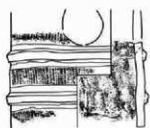
132



133



134



135



136



137



138



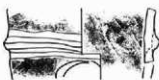
139



140



141

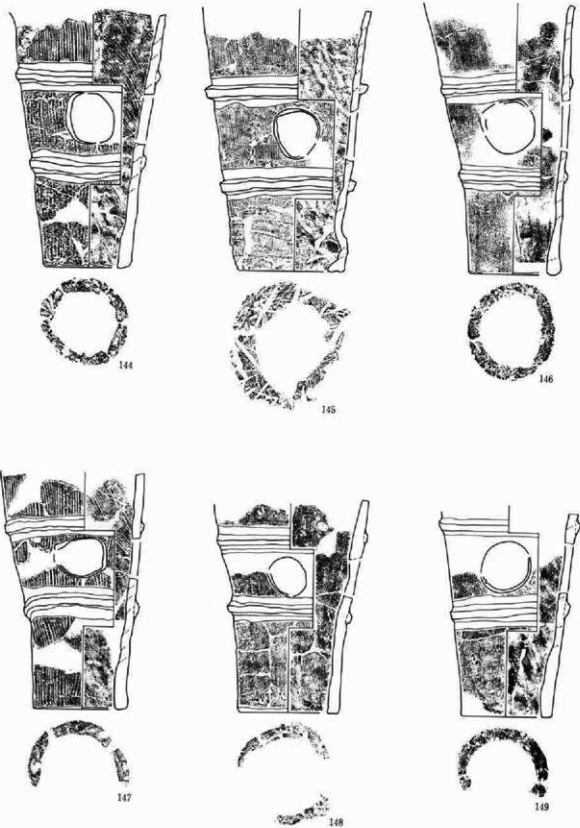


142

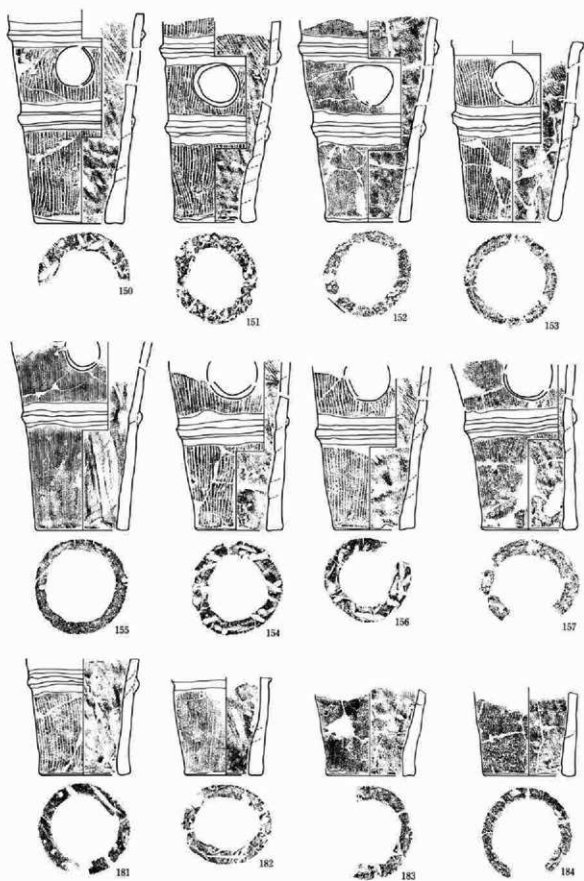


143

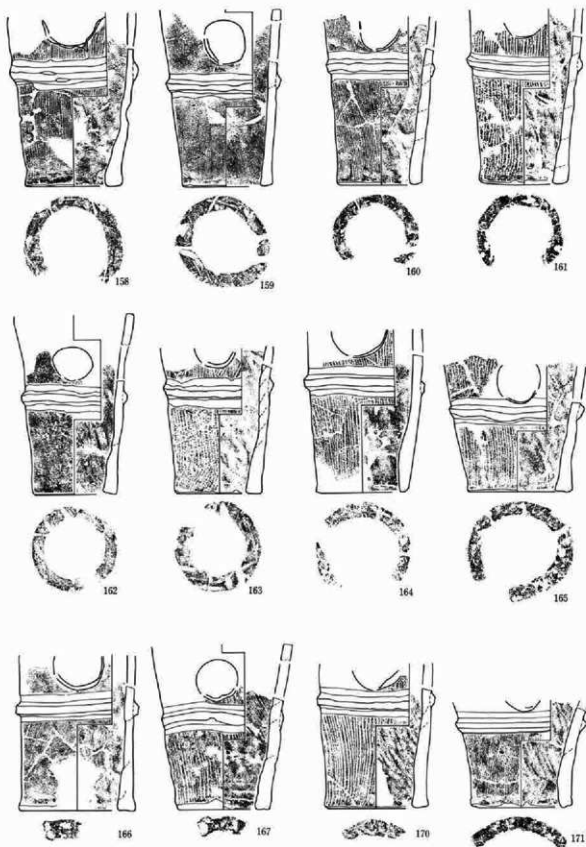
第42図 4号墳出土遺物(17)



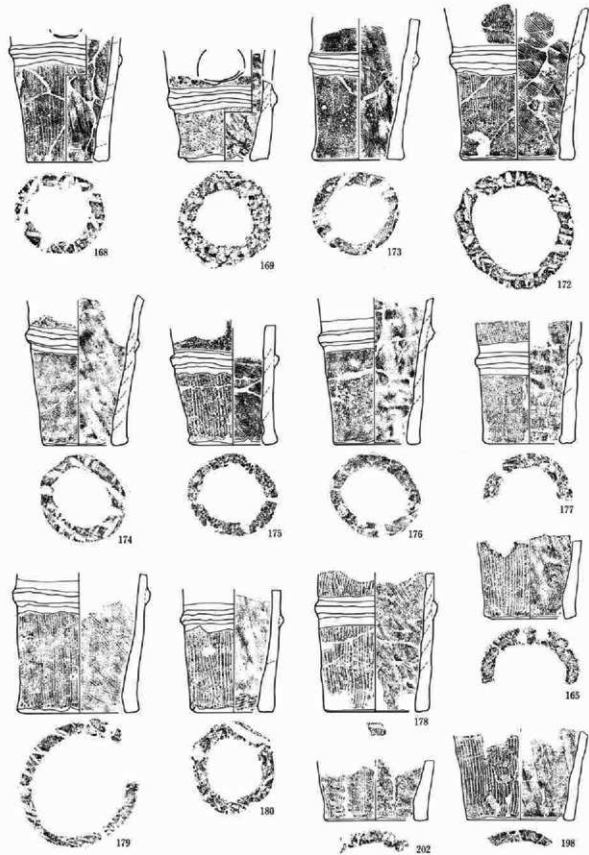
第43図 4号墳出土遺物(18)



第44图 4号墳出土遺物(19)

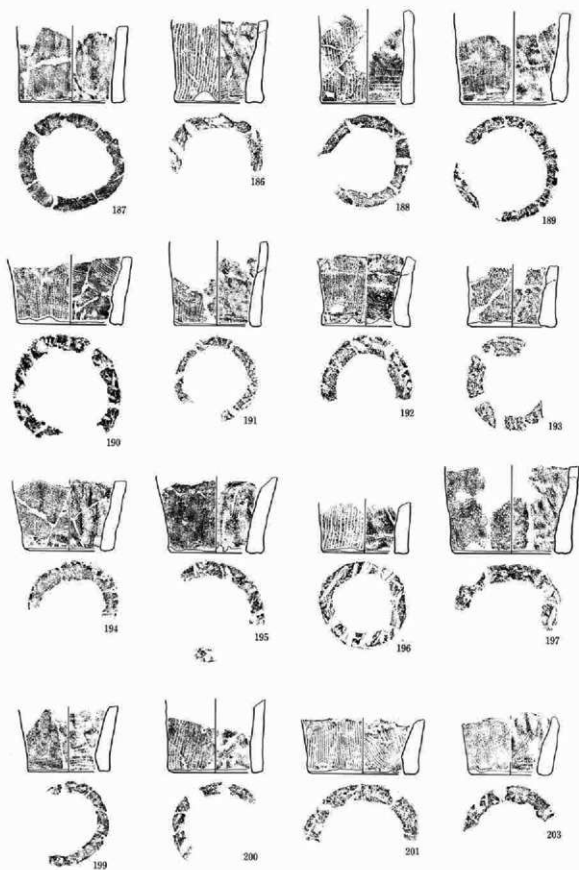


第45図 4号墳出土遺物(20)

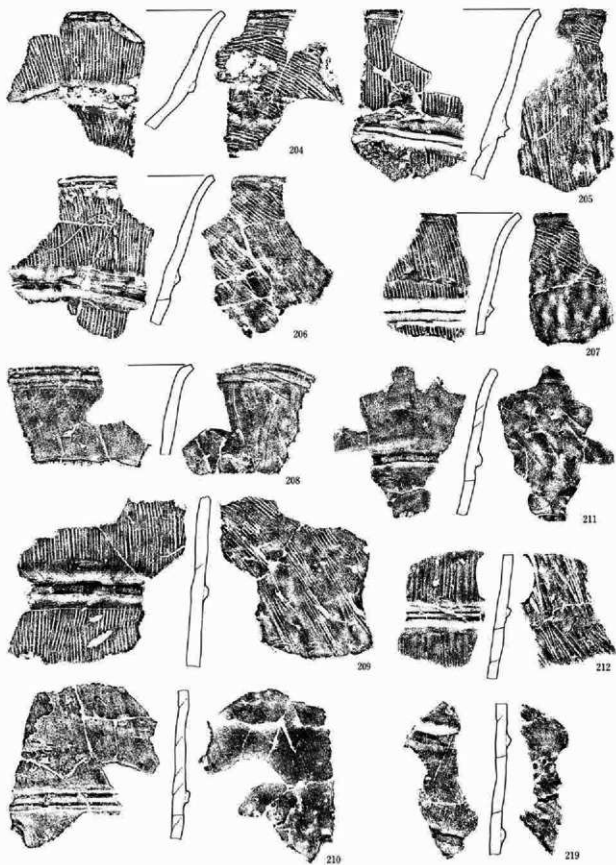


第46图 4号墳出土遺物(21)

第4章 検出された遺構・遺物

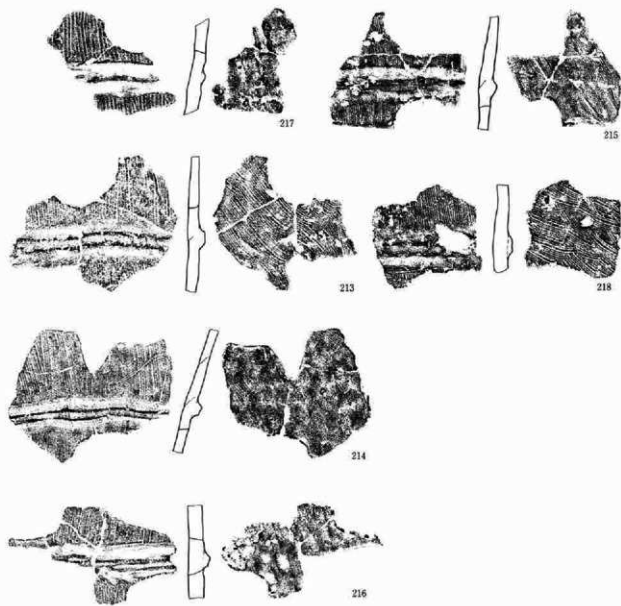


第47図 4号墳出土遺物(22)



第48图 4号墳出土遺物(23)

第4章 検出された遺構・遺物



第49図 4号墳出土遺物(24)



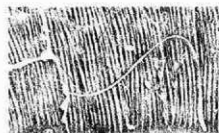
59



63



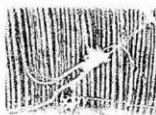
65



68



69



70



71



72



73



75



78



79



81



82



83



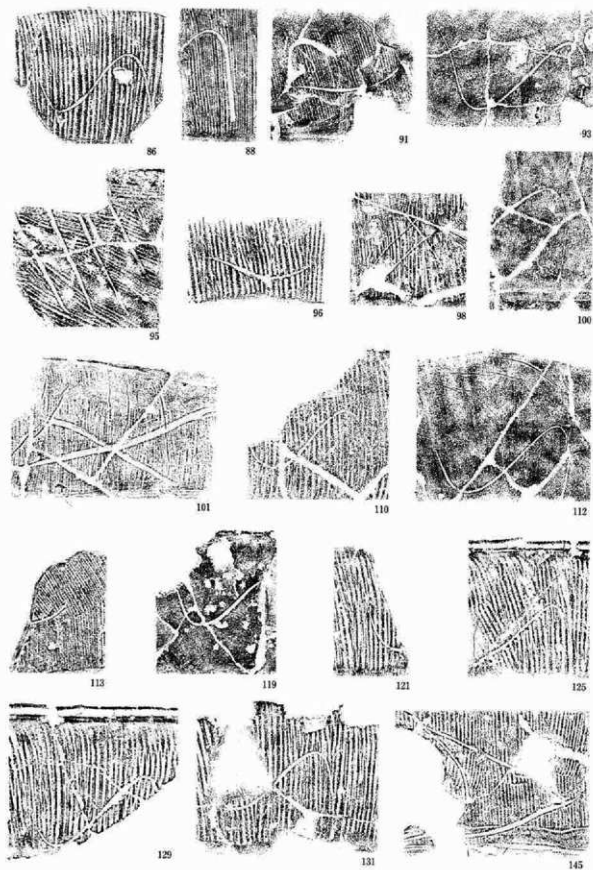
84



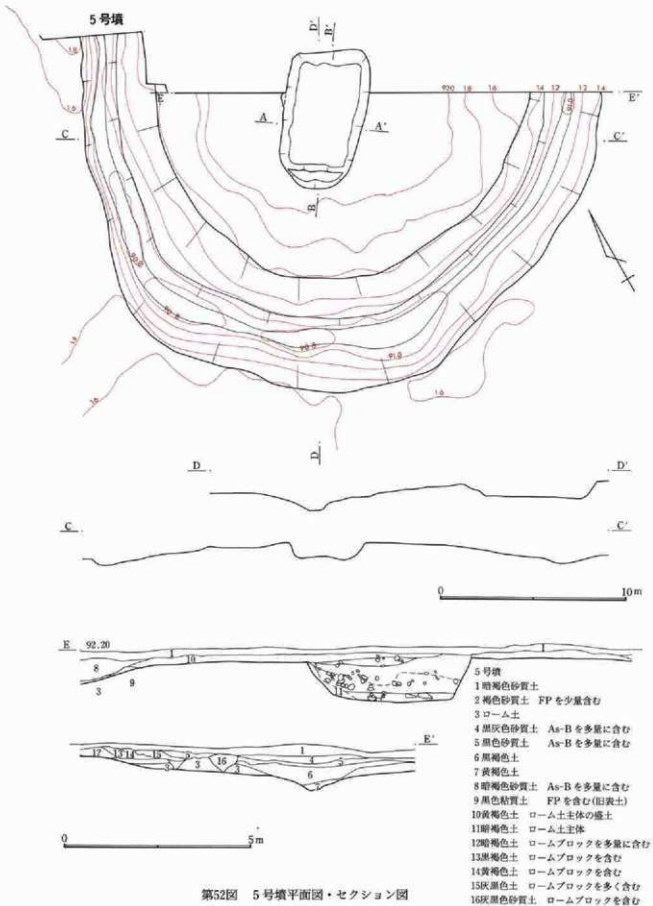
85

第50図 4号墳円筒埴輪ヘラ描き(1)

第4章 検出された遺構・遺物



第51図 4号墳円筒植輪ヘラ描き(2)



第52図 5号墳平面図・セクション図

第4章 検出された遺構・遺物

位置 Ⅲ区中央よりやや西側の調査区北縁のD～E-31～34グリッドに位置する。他の遺構との重複関係は、調査区内では4号墳と接するような位置関係にはあるが見られない。調査は、古墳の北半分が調査区外に位置するため南半分について行った。

墳丘と外部施設 規模は、周堀の外縁で東西27.6m、南北は調査区内で19.0mで調査区内での面積は87.6㎡を測る。墳丘は、東西19.8m、南北は調査区内で13.2mで調査区内面積は37.4㎡を測る。

調査区 墳丘の形状は、若干の歪みは見られるがほぼ円形を呈する。

封土は、ほとんど削平や後世の耕作により残存していない。

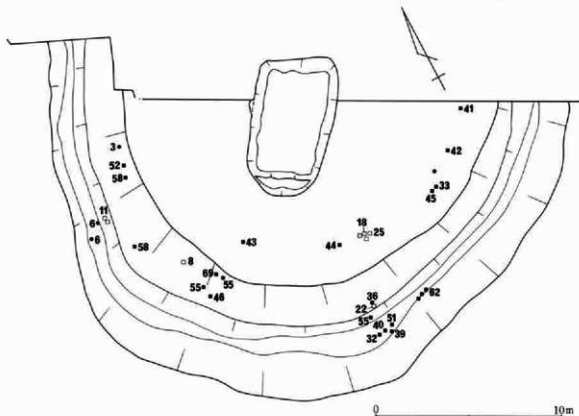
周堀は、幅3.8～6.5mであるが、東側や西側に比べて南側の幅が広い。深度は、0.6～0.9mで西南部分が多少深くなっている。周堀の傾斜は、内外ともほぼ同様な傾斜である。

埴輪の出土状態は、大部分が周堀への転落、流れ込みによるものであるが、一部第59図-41～45のような底部付近しか残存していない円筒埴輪はその出土位置からしても墳丘に設置された原位置での出土であると想定される。

主体部 位置は墳丘のほぼ中央付近であると想定され、長方形の掘り方が検出されただけである。開口部については、北半分が調査区外にのびるため不明である。主体部掘り方の長軸方向は、東へ41°ほど傾く。規模は、長軸で7.28m、短軸で4.36m、確認面からの掘り方深度は0.82～0.92mである。

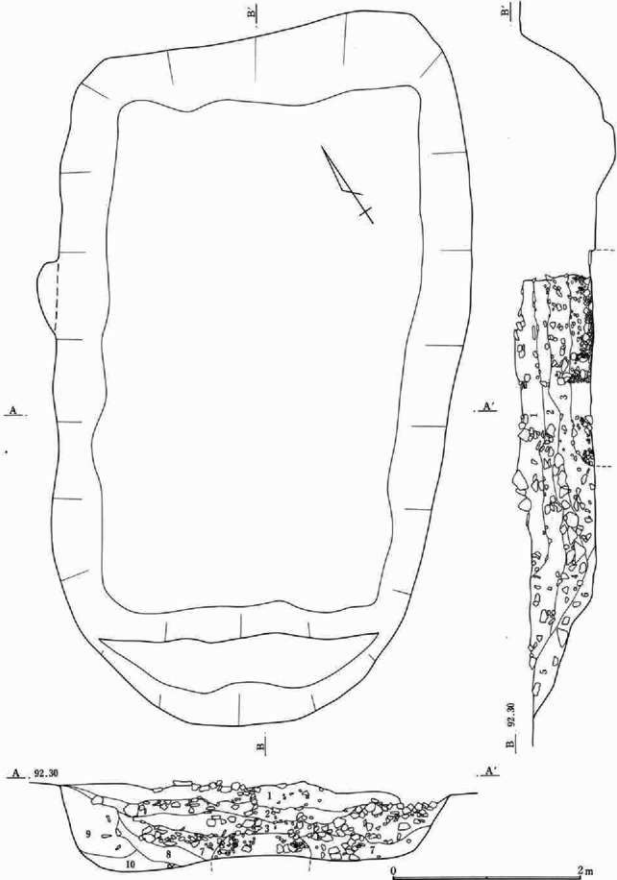
5号墳石室

- 1 褐色土 φ20cmの割れた円礫を含む
- 2 褐色土 φ10～15cmの扁平な円礫を含む
- 3 褐色土 ロームブロックを主体にφ10cmの割れた円礫を若干含む
- 4 褐色土 φ15～20cm割れた円礫が大部分を占める
- 5 褐色土 ローム土を主体にφ10cmの割れた円礫を少量含む
- 6 褐色土 2に類似
- 7 褐色土 3に類似
- 8 暗褐色土
- 9 暗褐色土 ロームブロックを多くとφ10～15cmの円礫を含む
- 10 暗褐色土 ロームブロックを多量とφ10cmの割れた円礫を含む



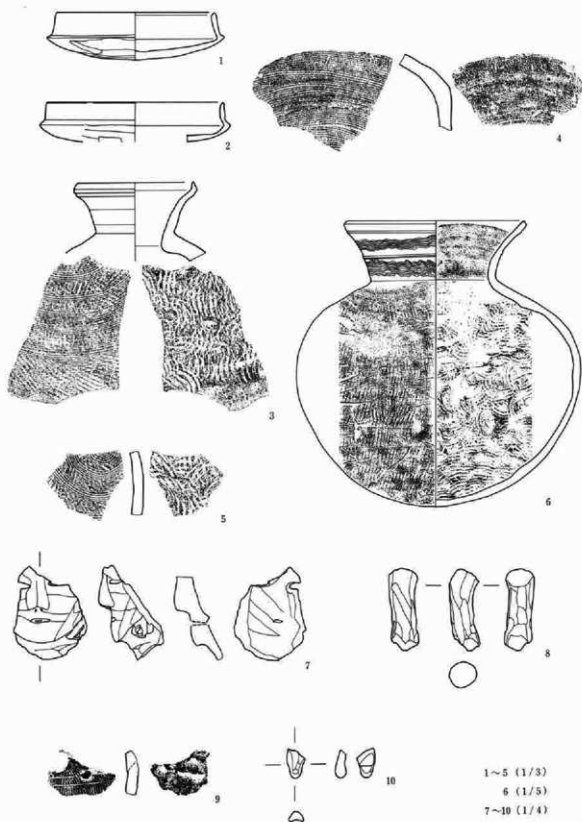
第53図 5号墳遺物出土状態図

1 古 墳



第54図 5号墳主体部平面図掘り方・セクション図

第4章 検出された遺構・遺物



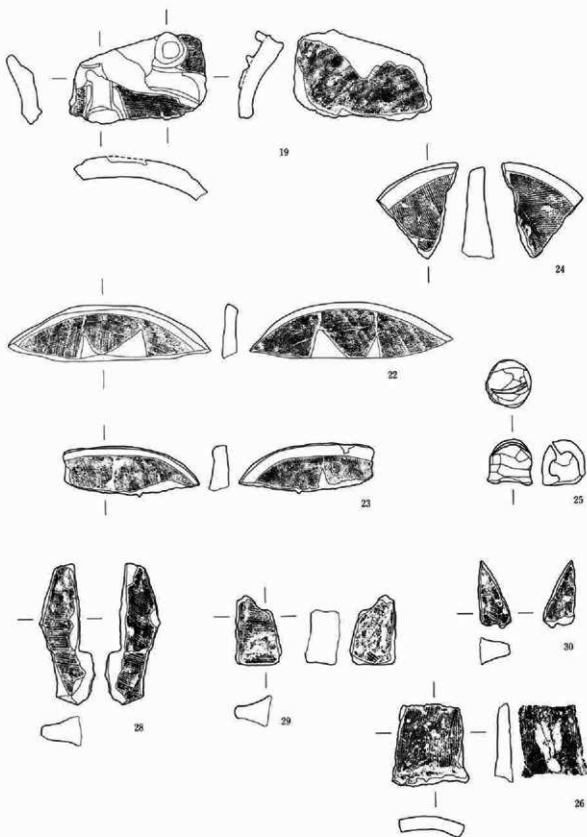
1~5 (1/3)
 6 (1/5)
 7~10 (1/4)

第55図 5号墳出土遺物(1)

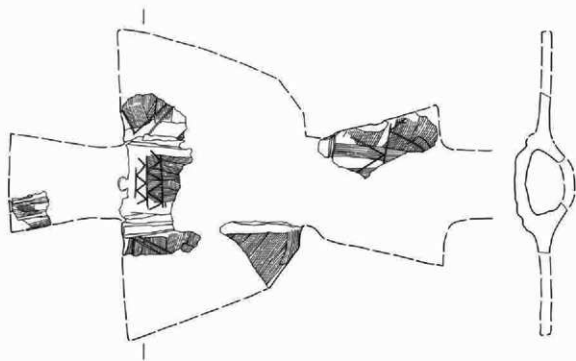
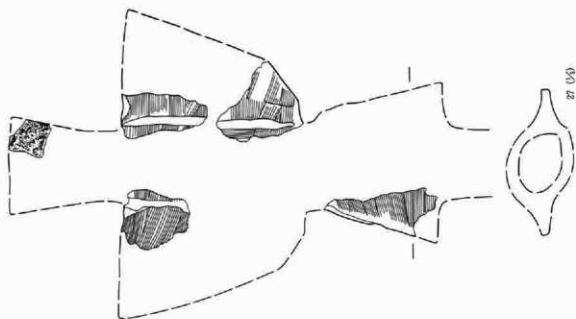


第56图 5号墳出土遺物(2)

第4章 検出された遺構・遺物

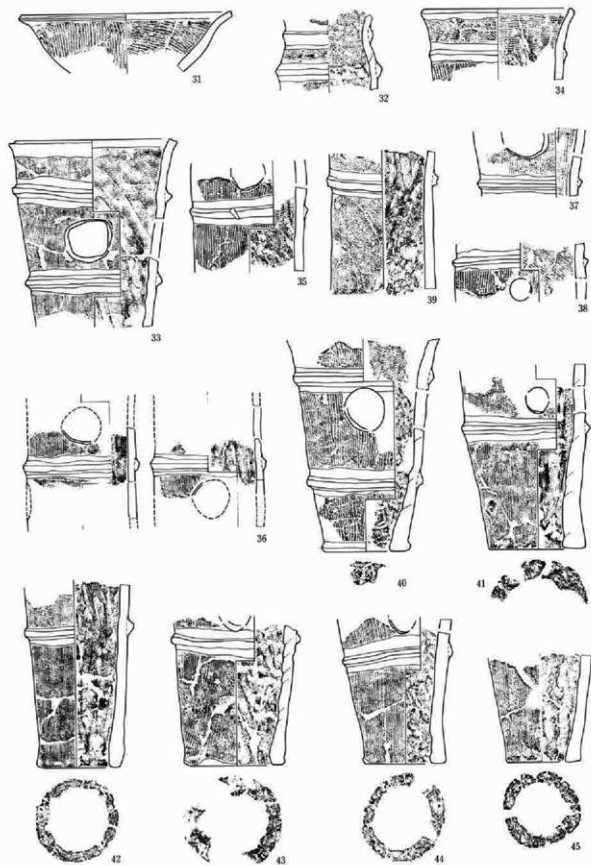


第57図 5号墳出土遺物(3)

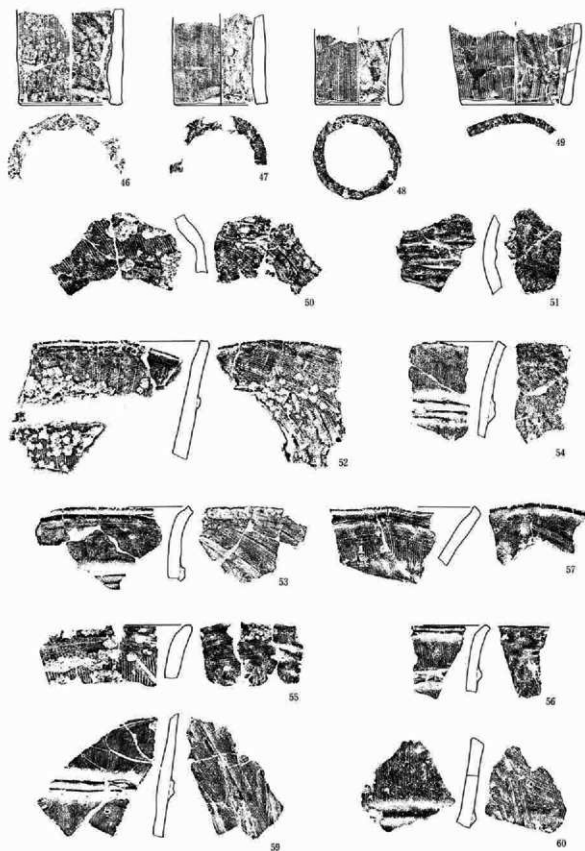


第58図 5号墳出土遺物(4)

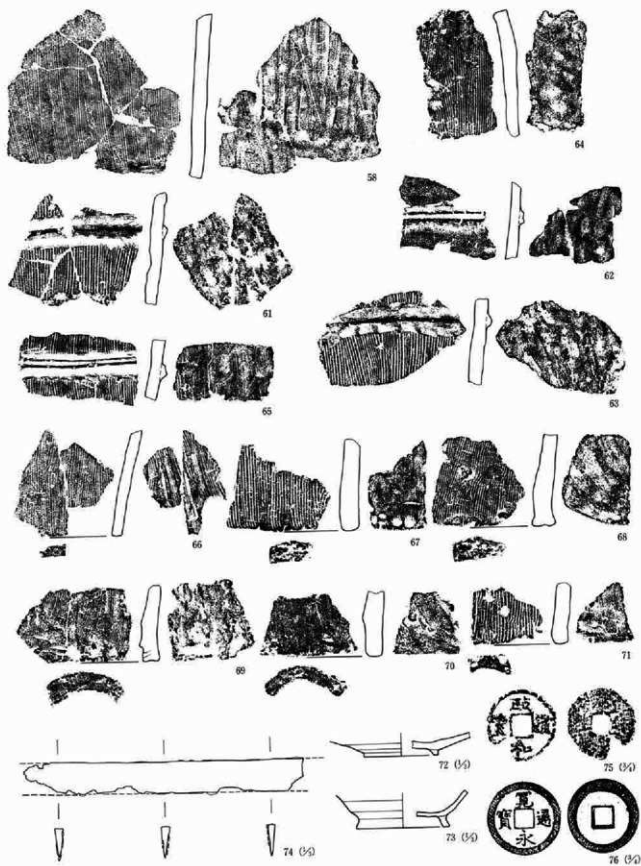
第4章 検出された遺構・遺物



第59図 5号墳出土遺物(5)

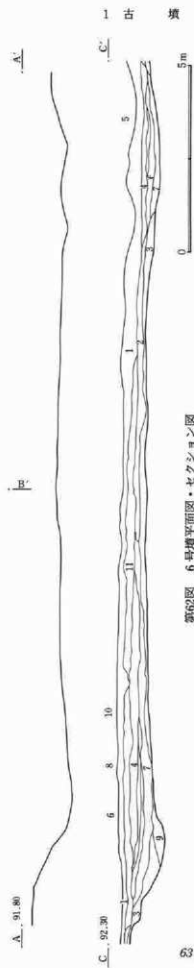
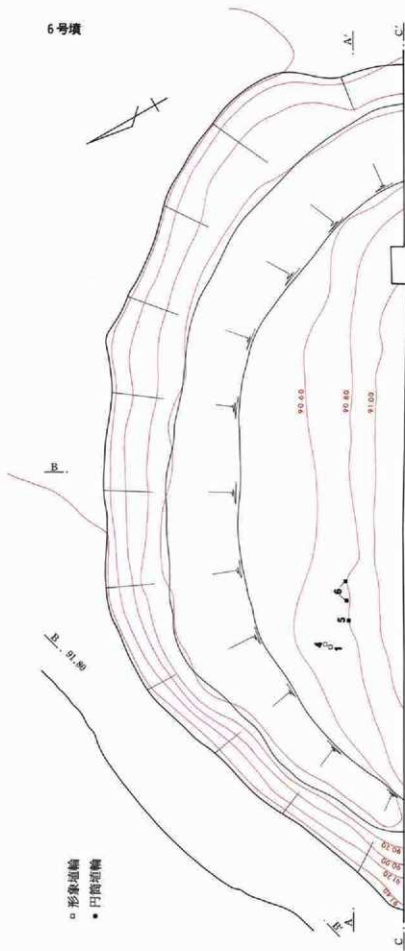


第60図 5号墳出土遺物(6)



第61図 5号墳出土遺物(7)

6号墳



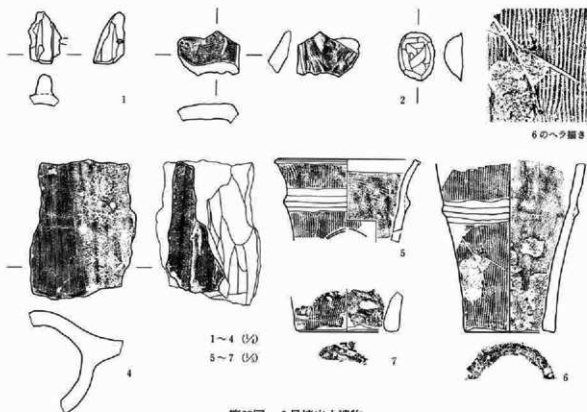
第62図 6号墳平面図・セクション図

第4章 検出された遺構・遺物

6号墳

- 1暗褐色砂質土
- 2黒色粘質土 FPを多量に含む
- 3暗褐色土
- 4灰褐色砂質土 As-Bを多量に含む
- 5暗灰色 As-Bの火山灰を含む
- 6黒色粘質土 As-Bを多量に含む

- 7暗褐色粘質土
- 8暗灰色土 As-Bを多量に含む
- 9暗褐色粘質土
- 10黄褐色砂質土 ロームブロックを多く含む
- 11暗褐色砂質土



第63図 6号墳出土遺物

位置 Ⅲ区中央よりやや西側の調査区南縁のD～C-31～33グリッドに位置する。他の遺構との重複関係は、調査区内では見られない。調査は、古墳の南側5分の3以上が調査区外に存在するため北側の5分の2ほどだけについて行った。

墳丘と外部施設 規模は、調査区内で周堀の外縁が東西が22.5m、南北が8.0mを測るが、東西については周堀外縁の最大幅は24m前後であると推定される。墳丘は、東西が16.2m、南北が4.35mを測り、東西の墳丘の最大幅は18m前後と推定される。

墳丘の形状は、調査区外に半分以上が存在し、調査区の南側の現状はほとんど平坦なため明確にする

ことはできない。

封土は、ほとんど削平や後世の耕作により残存していない。

周堀は、東側から西側にかけて段々狭くなり、幅は東側で4.3m、北側で3.5m、西側で2.2m、深度は1.4m前後である。

埴輪の出土状態は、墳丘縁辺や周堀内部より若干出土している程度である。

7 号 墳

位置 III区中央の調査区北側のB～E-28～31グリッドに位置する。他の遺構との重複関係は、調査区内では見られない。調査は、北側周堀と墳丘の一部が調査区外にのびるため古墳全域には及んでいない。

墳丘と外部施設 規模は、周堀の外縁で主軸方向が調査区内で29.3m、推定32.5m、主軸と直交する方向で3.12m、調査区内の面積75.2㎡を測る。墳丘の規模は、主軸方向で25.5m、主軸と直交する方向で24.2m、面積461.6㎡を測る。

墳丘の形状は、一部が調査区外にのびるがほぼ円形を呈すると想定される。

封土は、ほとんど削平や後世の耕作により残存していない。

周堀は、幅2.8～5.1mを測り平均4.2mである。深度は、0.4～0.8mを測り平均では概ね0.6m前後であるが、北側から南側にかけてやや深くなる。

周堀の傾斜は、内外ともほぼ同様なわりあい緩い傾斜である。

埴輪の出土は、第65・66図に示したように墳丘周辺部より出土している。その出土は、石室前方、西側、北側に集中しており、他の部分は散発的またはごく僅かな出土にとどまっている。

周堀からの出土は、ごく僅かで他の古墳のような周堀への転落、流れ込みはあまり見られない。

墳丘からの埴輪の出土を円筒、形象別に概観すると円筒埴輪は第66図の出土状態詳細図に示したように底部付近が墳丘へ設置された状態で出土しており、設置時の原位置を保っていると考えられる。それに対して形象埴輪は、第66図に示したように円筒埴輪の周囲に転倒したように出土していることから墳丘頂部に設置されたものが転落し、円筒埴輪列でとどまったと想定される。

主体部 墳丘の中央よりやや東南よりに位置する。主体部は、右側に袖をもつ片袖型の横穴式石室である。石室は、玄室の側壁、奥壁と羨道の側壁の下部の一部が残存しているが、上部や天井部の礎は周辺

部にもその痕跡も見られない。

主体部の主軸方向は、北から19°ほど東へ向いた方向である。

羨道の規模は、全長1.90m、幅0.86mである。左側は玄室から連続する1.2m大の礎をもちいてその先に40cm大の角礎を1段3個ほどを並べている。右側は、玄室入り口より40cm大の礎を1段6個ほど並べている。羨道奥には、全長92cm、幅20cm、厚さ20cmほどの柵石が据えられている。

閉塞には、10～30cm大の河原石を積み重ねている。

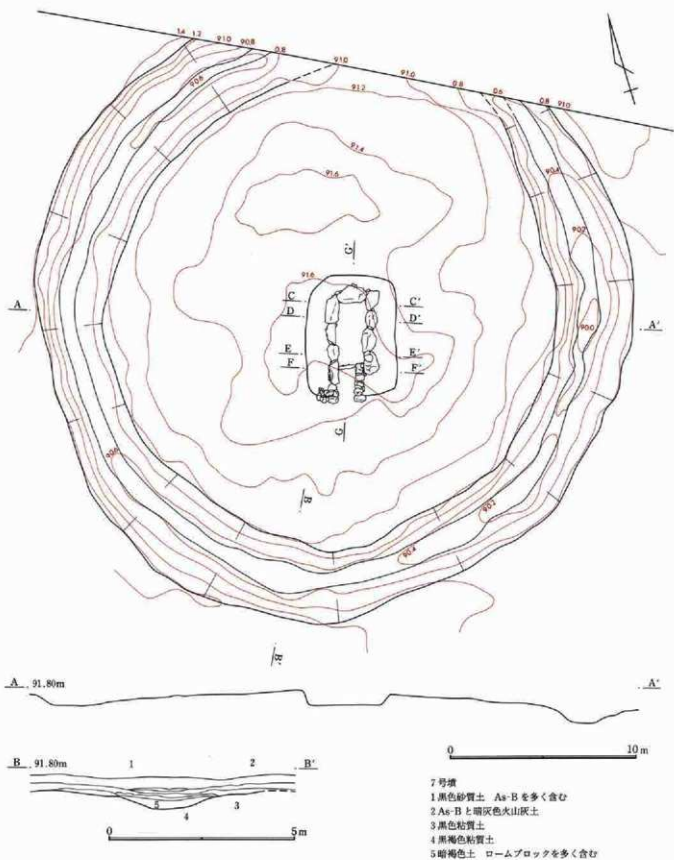
玄室は、床面での形状はほぼ長方形を呈し、規模は全長3.28m、前幅1.42m、中央幅1.42m、後幅1.48mで右袖の幅は0.50mである。

石室を構築する礎は、側壁・奥壁とも1段しか残存していない。奥壁の礎の規模は、幅140cm、高さ130cm、厚さ90cmであり石室に使用されている礎の中では最大である。側壁は、左右とも4個の礎を用いているが、左側の方が15cmほど長い。側壁の礎は、最小が幅80cm、高さ50cm、厚さ60cm、最大が幅140cm、高さ130cm、厚さ60cmである。

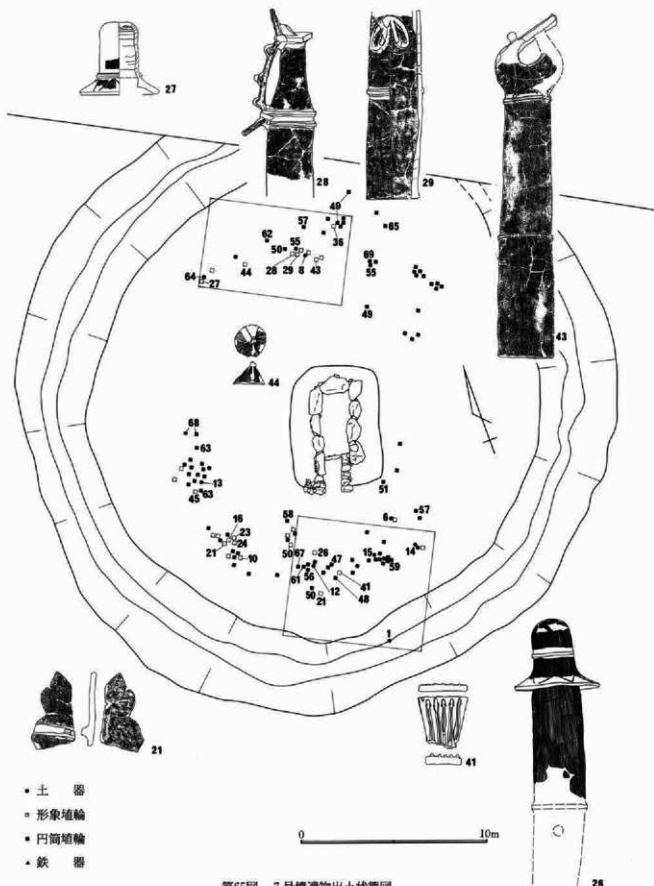
玄室の側壁・奥壁礎の裏込めは、側壁には15～30cm大の礎を多量に用いているが、奥壁にはほとんど用いられていない。

掘り方は、北西の角を欠くがほぼ長方形を呈す。規模は、長軸方向で6.30m、短軸方向で4.80m、深度0.6m前後を測る。

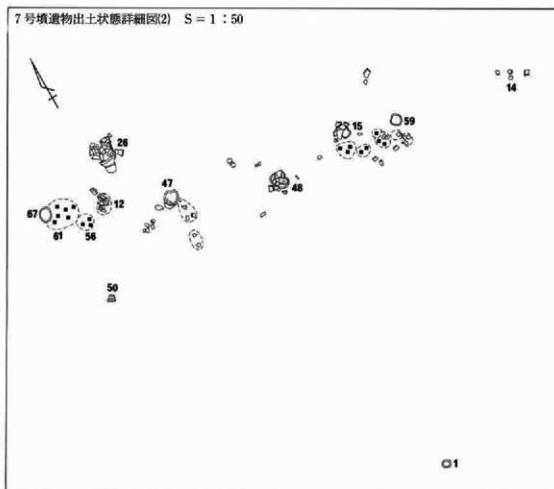
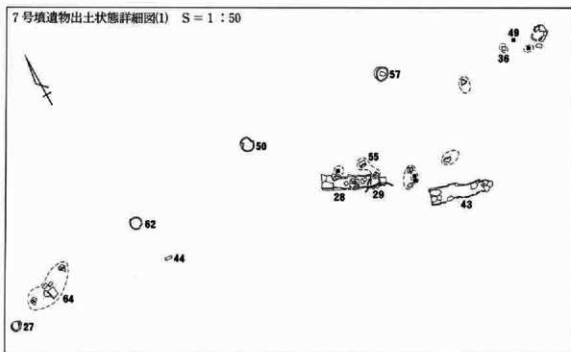
石室内部からは、第80図～第86図に示してある大刀、鍔、馬具、飾り金具、金環、勾玉、管玉、玉など多量の副葬品が出土している。



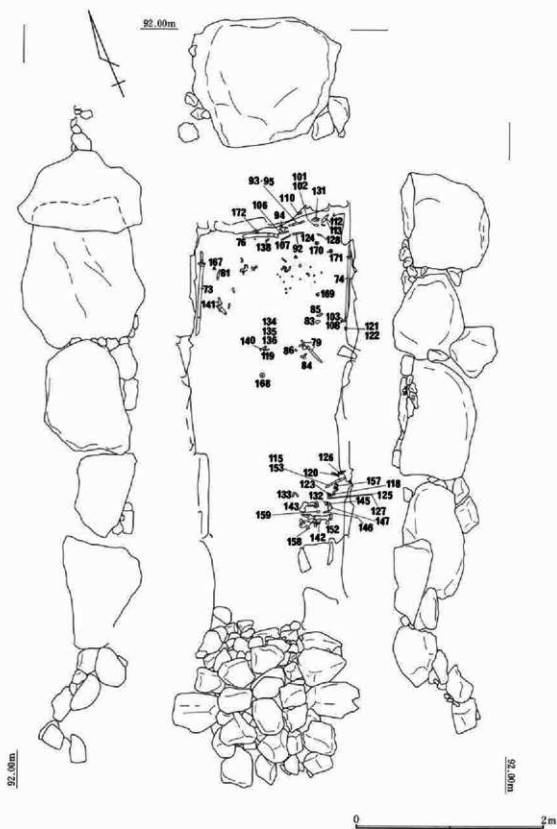
第64図 7号墳平面図・セクション図



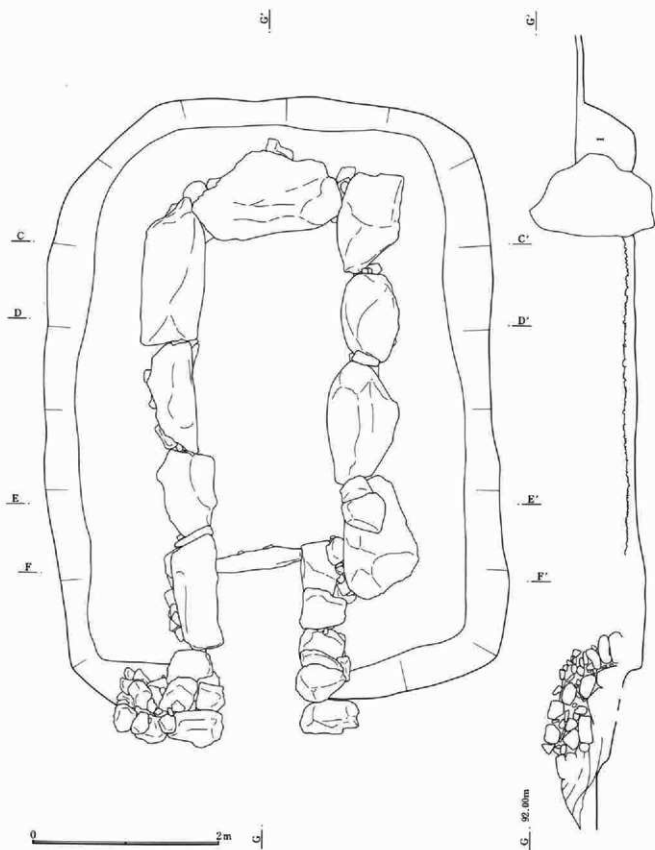
第65図 7号墳遺物出土状態図



第66図 7号墳遺物出土詳細図



第67圖 7号墳石室(1)



第68図 7号墳石室(2)

C 92.00m

C'



D 92.00m

D'



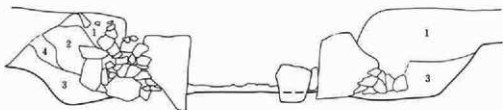
E 92.00m

E'



F 92.00m

F'



0 2m

7号墳石室

1 石室嵩込め修復の崩壊部分

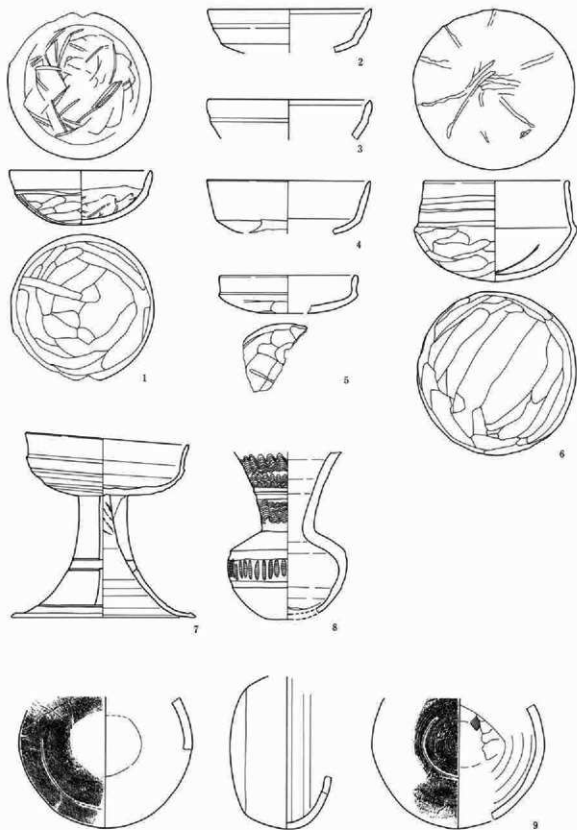
2 暗褐色土

3 暗褐色土と黒褐色土、ローム土の混合土で硬くしめてある

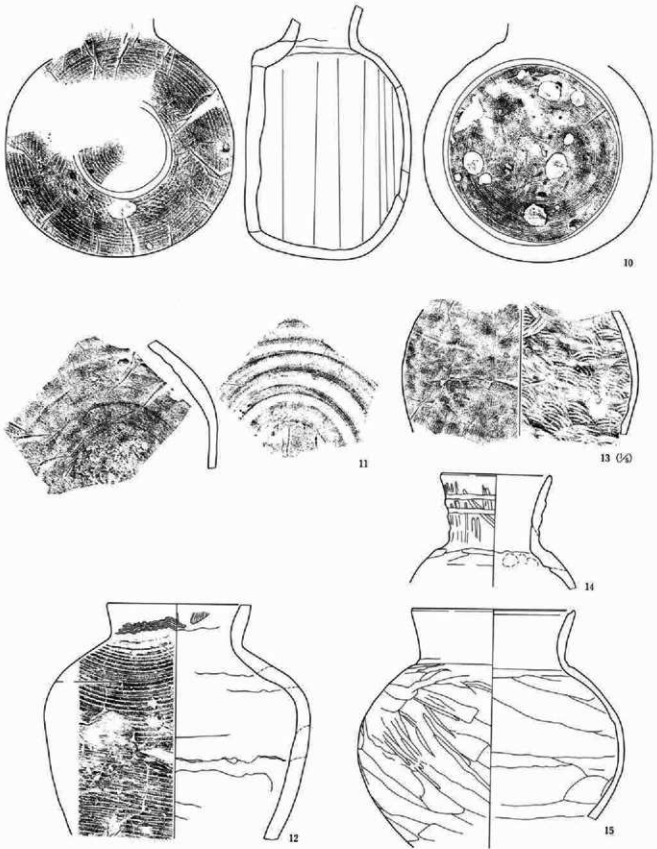
4 黄色土 ロームブロック主体

第69図 7号墳石室セクション図

第4章 検出された遺構・遺物

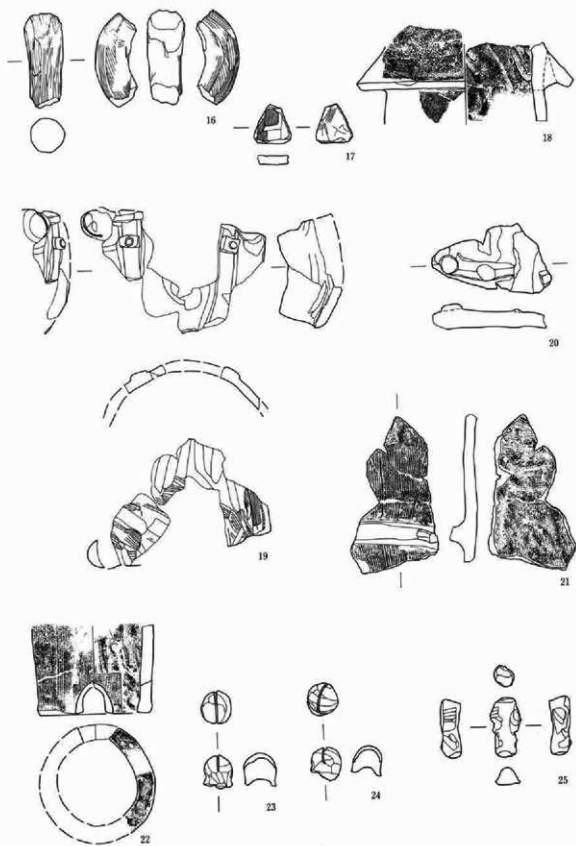


第70図 7号墳出土遺物(1)

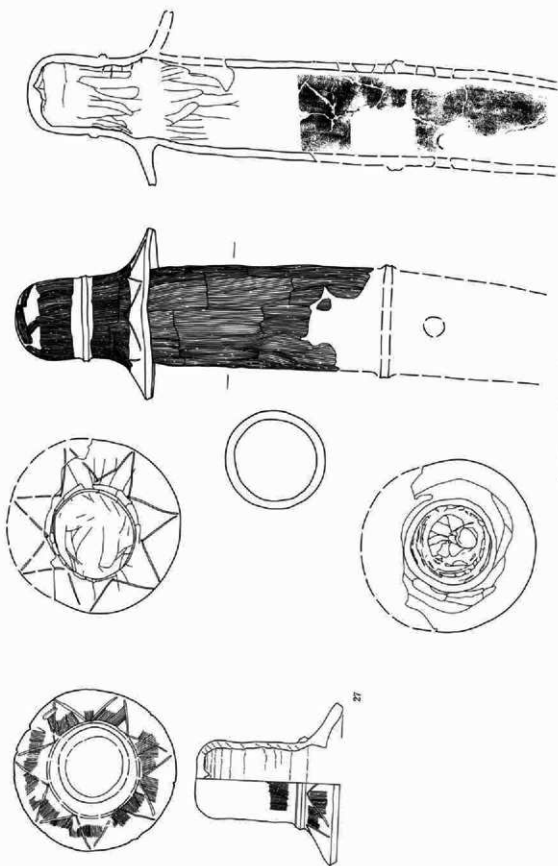


第71圖 7号墳出土遺物(2)

第4章 検出された遺構・遺物



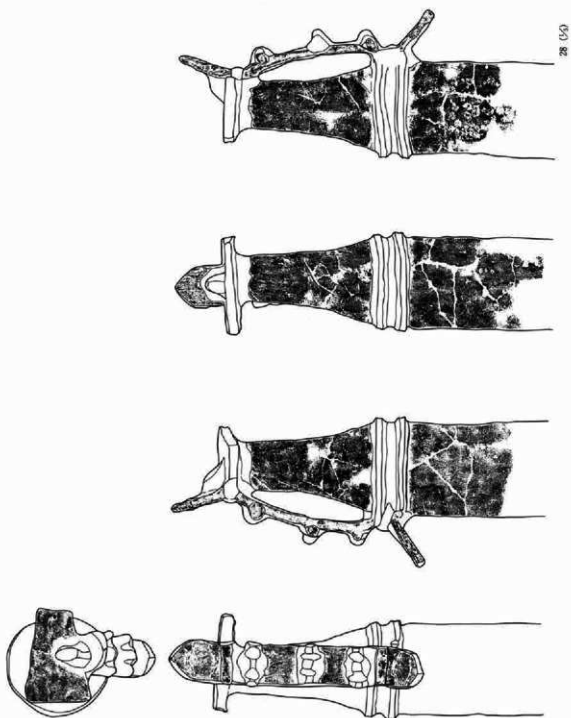
第72図 7号墳出土遺物(3)



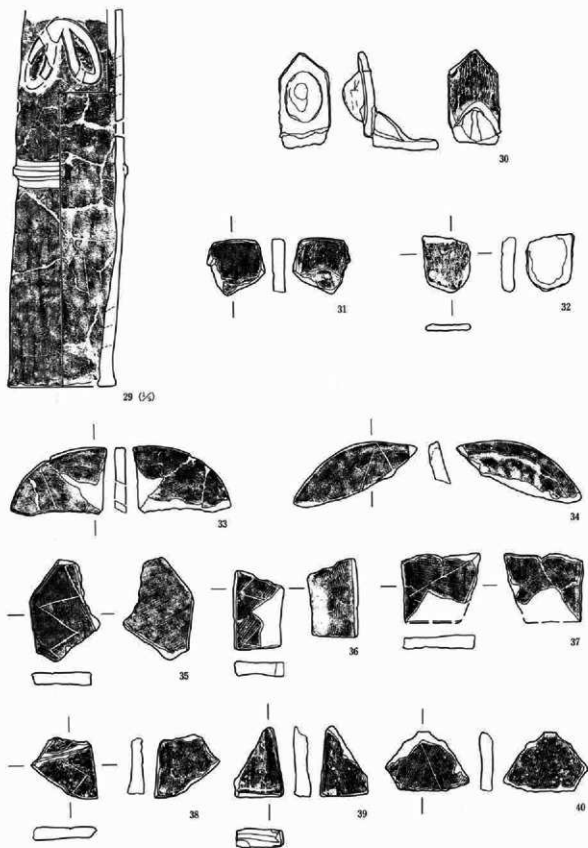
26 09

第73图 7号墳出土遺物(4)

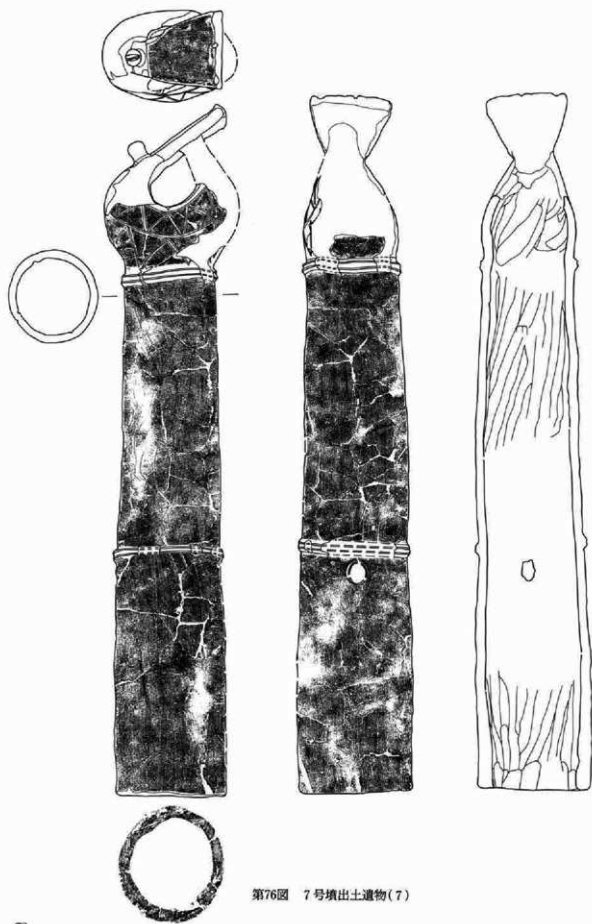
27



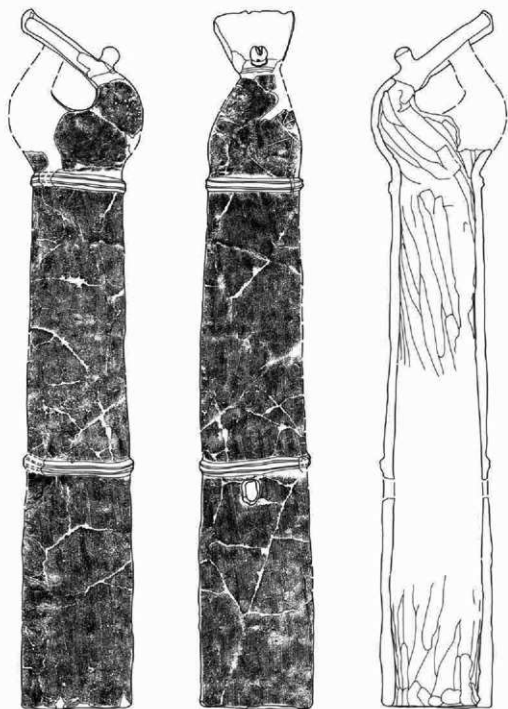
第74図 7号墳出土遺物(5)



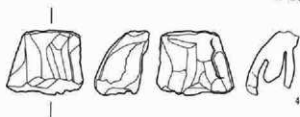
第75图 7号墳出土遺物(6)



第76図 7号墳出土遺物(7)

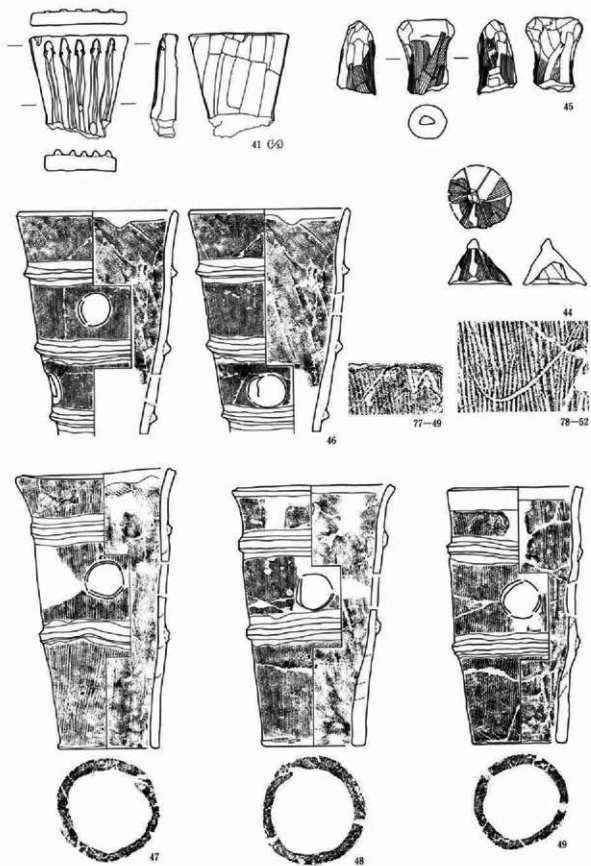


42 0/0

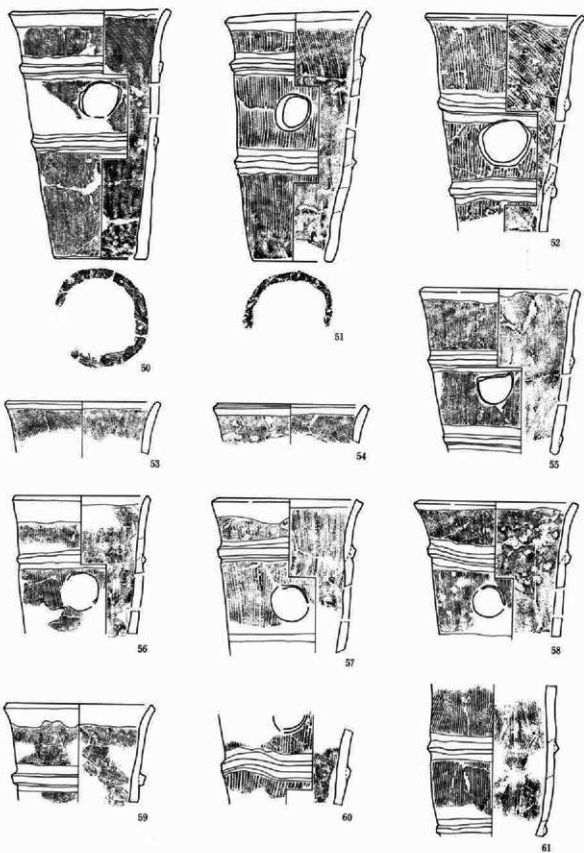


43 0/0

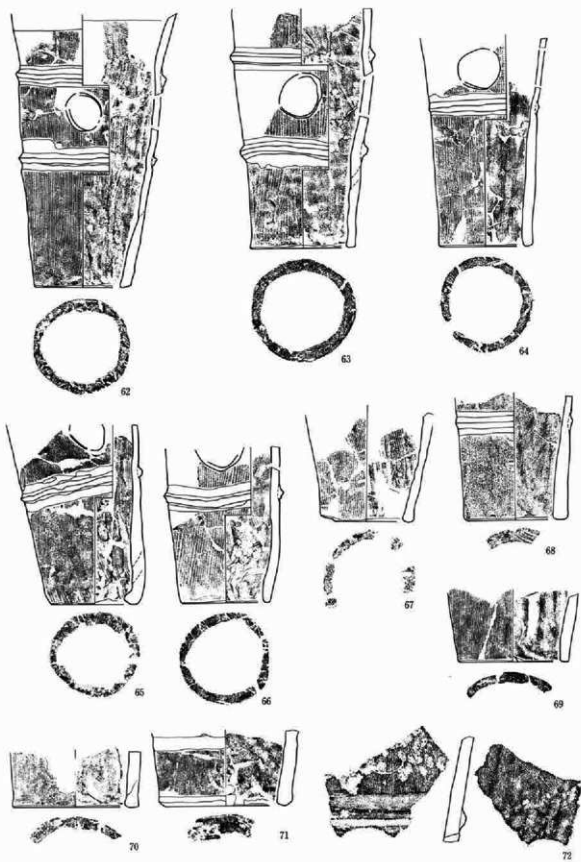
第4章 検出された遺構・遺物



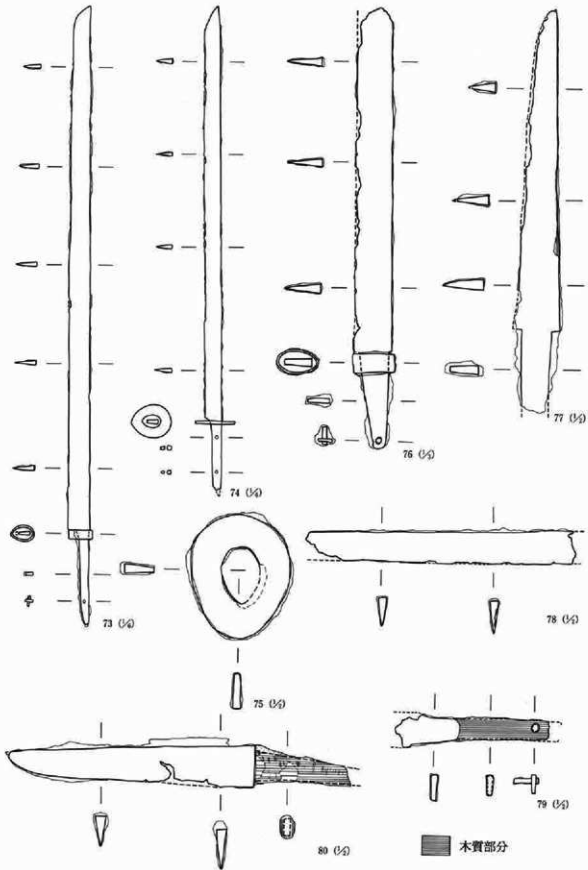
第77図 7号墳出土遺物(8)



第78图 7号墳出土遺物(9)

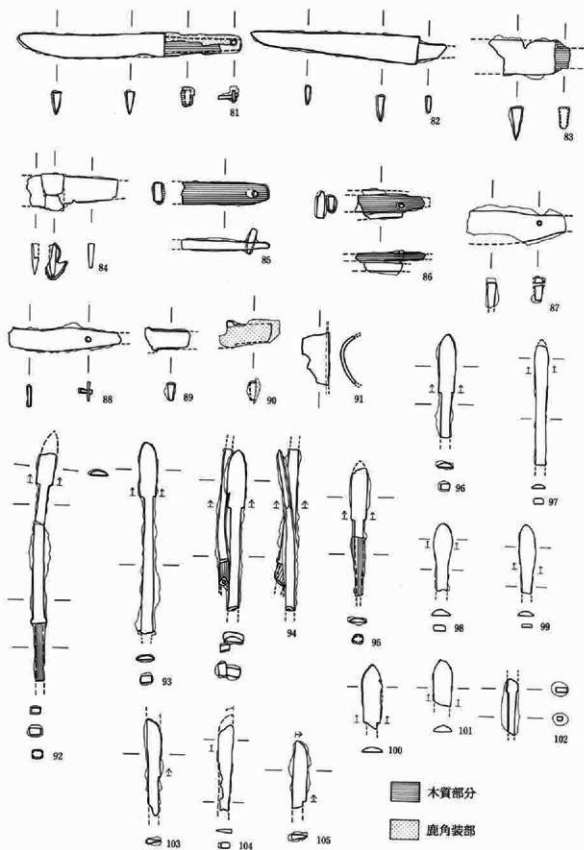


第79図 7号墳出土遺物(10)

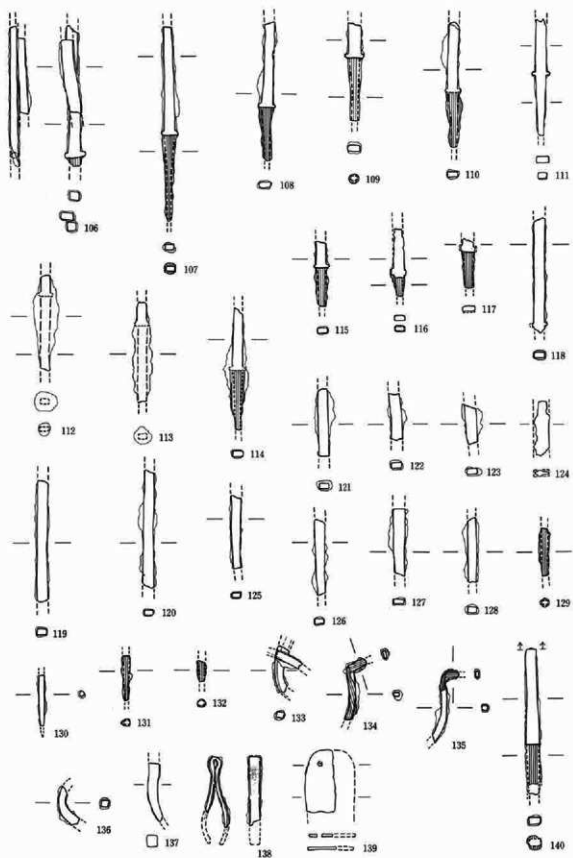


第80图 7号墳出土遺物(11)

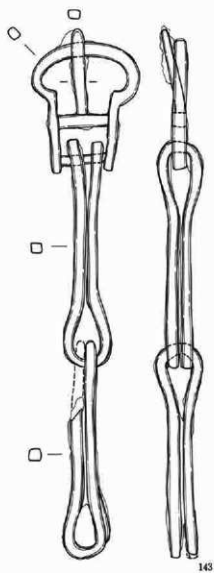
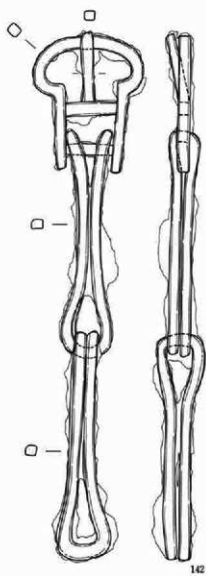
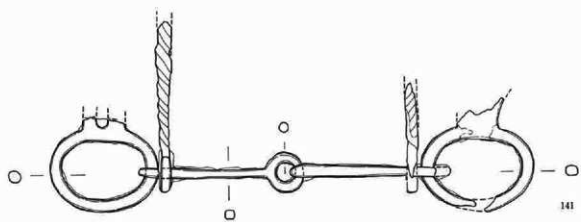
第4章 検出された遺構・遺物



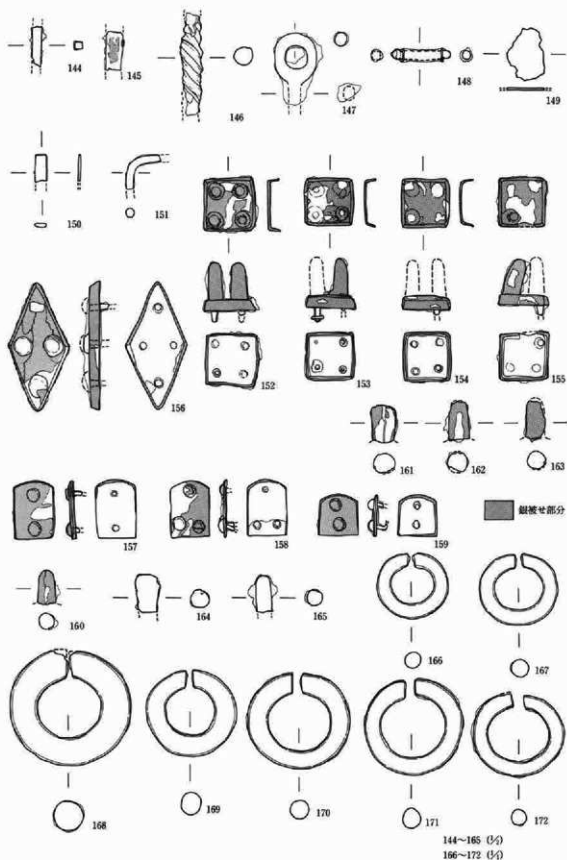
第81図 7号墳出土遺物(12)



第82图 7号墳出土遺物(13)

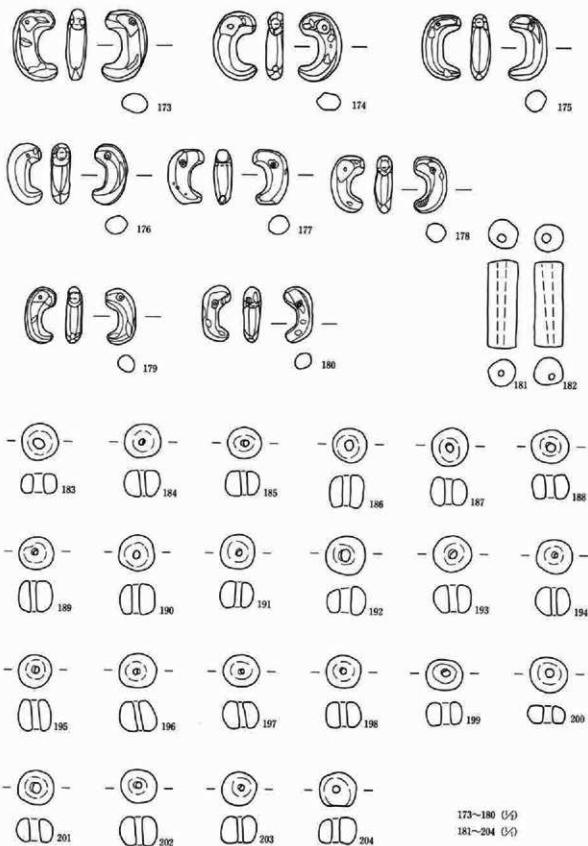


第83図 7号墳出土遺物(14)

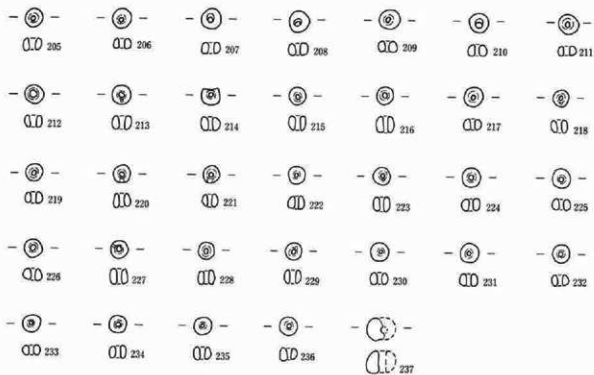


第84图 7号墳出土遺物(15)

第4章 検出された遺構・遺物

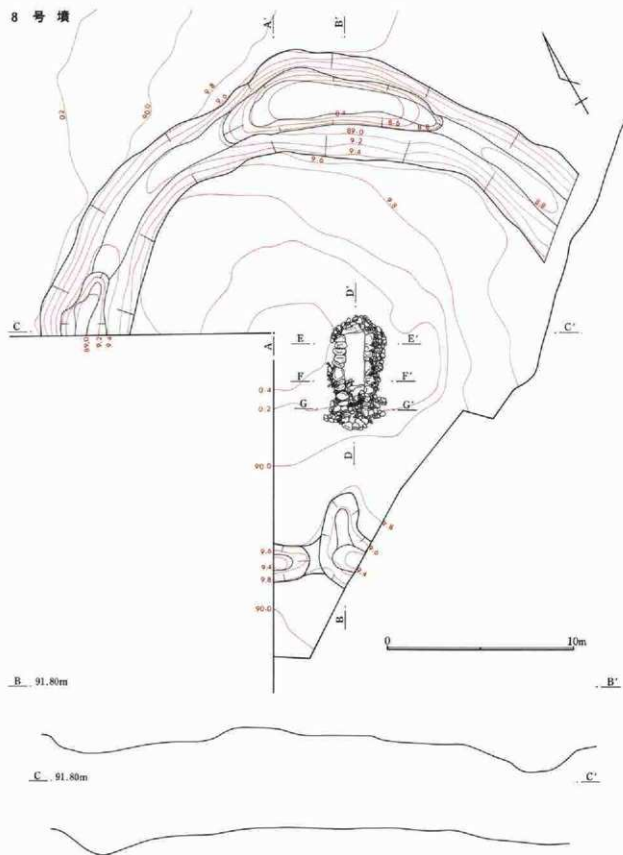


第85図 7号墳出土遺物(16)



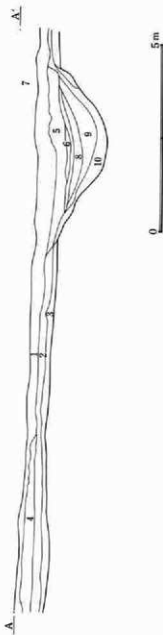
第86图 7号墳出土遺物(17)

8号墳



第87図 8号墳平面図・セクション図

1 古 墳



- 8号古墳
 1 暗灰色砂質土
 2 黒色粘質土 FPを含む
 3 褐色土層
 4 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む(盛土)
 5 暗灰褐色砂質土
 6 As-B 火山灰
 7 As-B
 8 黒色粘質土
 9 黒褐色粘質土
 10 暗褐色土 ロームブロックを含む

位置 III区東南端に位置する。他の遺構との重複関係は、調査区内では見られない。調査は、古墳の東南部分と西南部分が調査区外にのびるため全体の半分程度について行った。

墳丘と外部施設 規模は、周堀の外縁で南北28.1m、東西は調査区内で27.0m、推定33mほどを測る。墳丘は、南北21.7m、東西は調査区内で22.2m、推定24mほどを測る。

墳丘の形状は、北側部分がやや直線的なめんが見られ、若干東西に長い楕円形を呈する。

封土は、ほとんど削平や後世の耕作により残存しないが、墳丘の一部にロームブロックを多量に含む暗褐色土の盛土の存在が確認された。

周堀は、北側に比べて南側が幅が狭く深度も浅い、また、南側では主体部にむけて幅2.0mで長さ2.5mほど入り込む箇所が見られる。周堀の幅は、南側で2.00m、北側は3.20～5.50mで北側の平均は4.25mである。深度は、南側では40cm、北側は60～130cmで主体部北側の周堀部分が最深部である。周堀の傾斜は、内外ともほぼ同様であるが、その角度はそれぞれの箇所により多少の変化がある。

埴輪の出土は、主体部前庭部分と周堀北北東部分に多少の集中箇所が見られるが、8号墳出土の埴輪は、小片のため図化可能なものは見られない。主体部 墳丘の中央よりやや南側に位置する。主体部は、羨道から玄室にかけて直線的な無袖型の横穴式石室である。石室は、玄室の側壁・奥壁、羨道の側壁の下部が残存している。

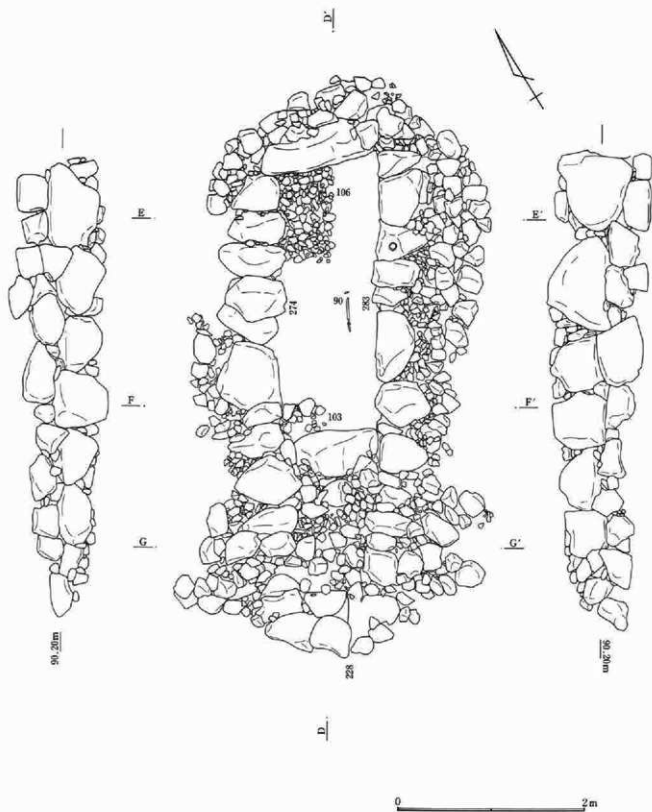
主体部の主軸方向は、北から32°ほど東へ向いた方向である。

羨道の規模は、全長2.28m、幅0.82m、である。羨道側壁は、30～70cm大の礫を使用し、基部に50～70cm大のものをその上位に30cm大を重ねて構築されている。羨道奥には、全長90cm、幅48cm、厚さ36cmほどの欄石が据えられている。

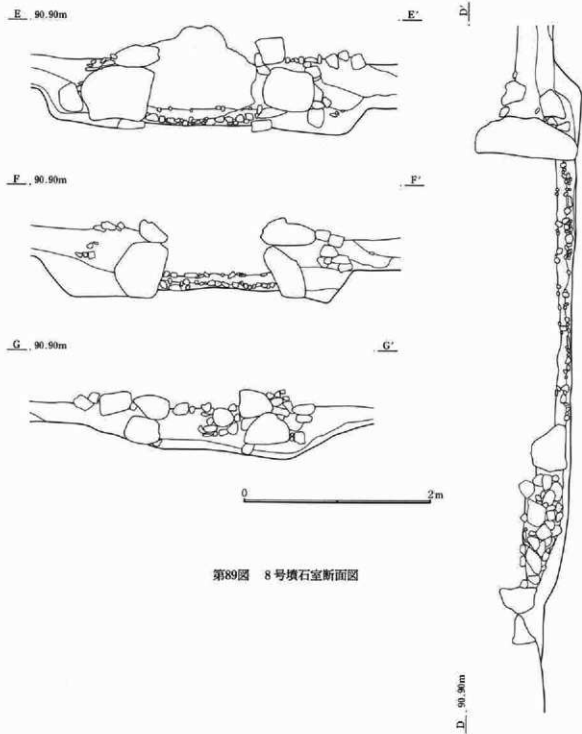
閉塞には、10～30cm大の河原石を積み重ねている。

玄室は、床面での形状が奥壁礫がやや斜めに据えられているが、ほぼ長方形を呈し、規模は全長が左側で2.74m、右側で2.93m、幅は前幅が1.03m、中央幅が0.90m、奥幅が1.06mを測る。玄室内部は、10～15cm大の円礫が敷き詰められていたようである。玄室・羨道の裏込めは、15～30cm大の礫を多量に使用している。

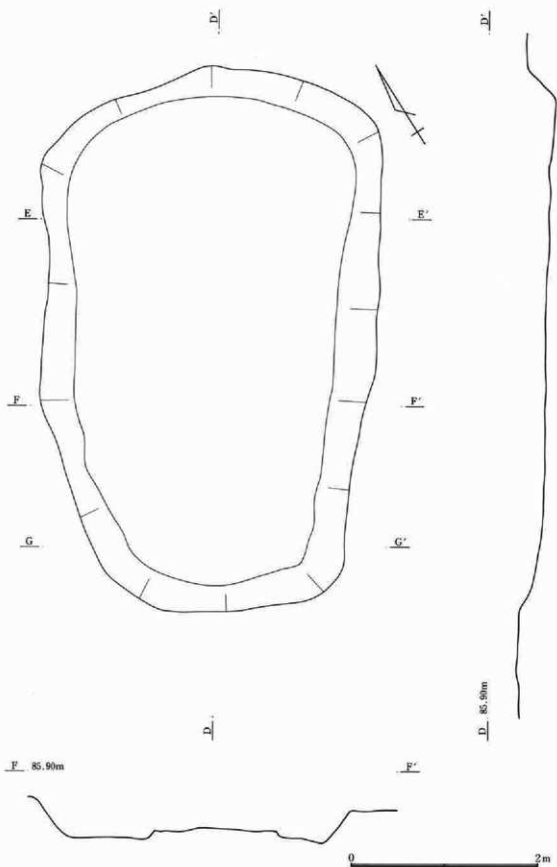
掘り方は、羨道側がやや狭いがほぼ長方形を呈し、規模は全長5.78m、幅は羨道側で2.78m、玄室側で3.62m、深度0.40mを測る。



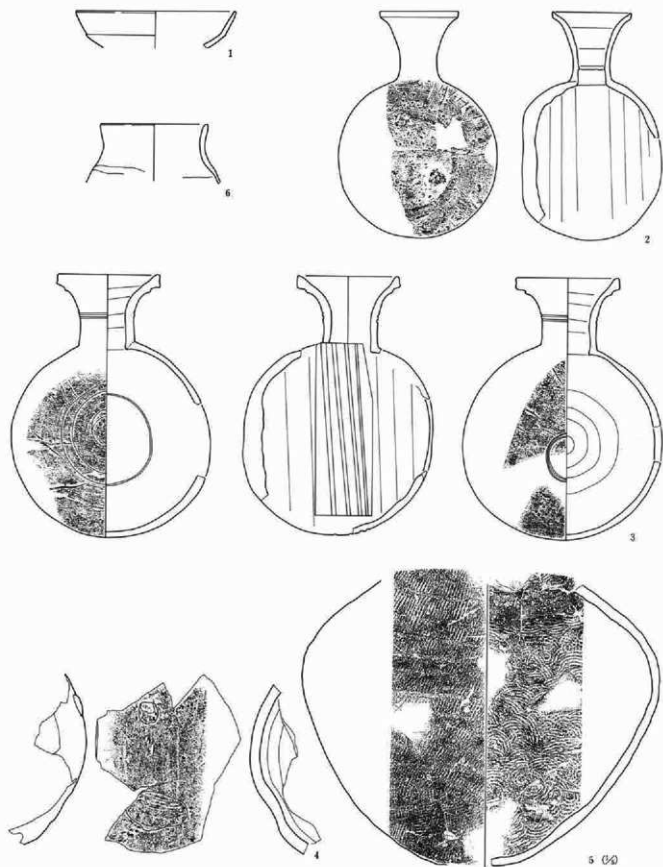
第88図 8号墳石室



第89图 8号墳石室断面图

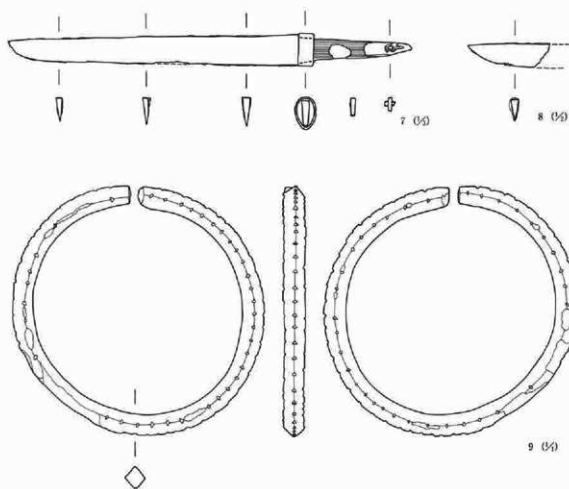


第90図 8号墳石室掘り方



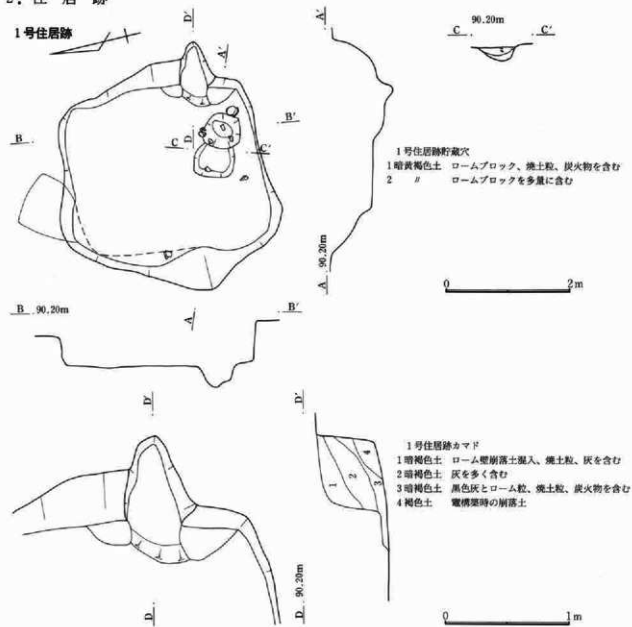
第91图 8号墳出土遺物(1)

第4章 検出された遺構・遺物



第92図 8号墳出土遺物(2)

2. 住居跡



第93図 1号住居跡

本住居跡は、I区C-D-6~7グリッドに位置する。他の遺構との重複関係は見られない。

形態は、壁の崩落のためか不整形を呈するように見られるが、本来は西辺が膨らむが方形に近い形態であったと想定される。主軸方位は、北から西へ87°を指す。規模は、東西が3.53m、南北も3.52mで床面積7.4m²を測る。壁は、確認面から50~70cmを測り、

壁の傾斜は63°~88°で西壁がやや傾斜をもつ。

内部の施設は、柱穴、溝溝は検出されなかったが、南東角から貯蔵穴が検出された。貯蔵穴は円形の土坑状の掘り方をもつものが2個重なるように検出された。貯蔵穴1は径60×55cm、深度29cmで周囲より土師器杯(1~3)、甕(6)が出土している。貯蔵穴2は径65×52cm、深度19cmである。床面は、ほぼ平

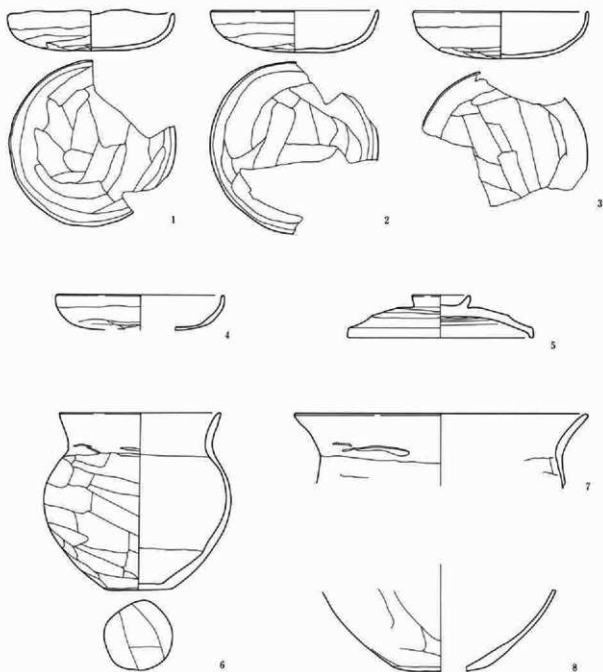
第4章 検出された遺構・遺物

垣で中央部分には硬化面が見られる。

竈は、東壁の南よりに構築されている。規模は全長1.03m、幅1.22mで焚口幅が0.40mある。袖は両袖ともローム土を掘り残してある。天井部は崩落しているがローム土と多少の粘土を混合した土で構築されている。煙道は壁の外に延びて構築されている。出土遺物は、土師器杯、甕、須恵器杯蓋等が出土し

ているが、その大部分は貯蔵穴およびその周囲から出土している。1～3の土師器杯は貯蔵穴1の北際に3枚重なって出土している。掲載遺物のほとんどは床面に接する位置であるが5の須恵器杯蓋は床面より30cm上位からの出土である。

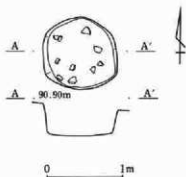
1号住居跡の年代は、出土遺物から8世紀中葉に比定される。



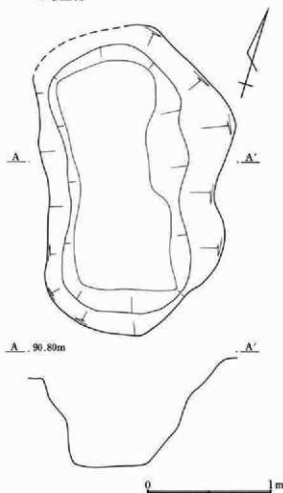
第94図 1号住居跡出土遺物

3. 土 坑

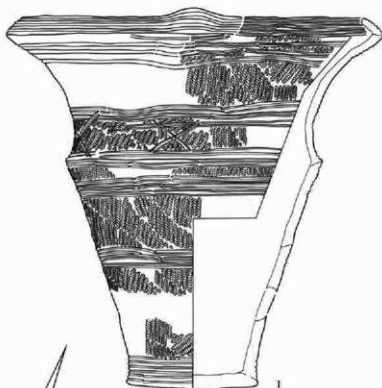
5号土坑



4号土坑



第95図 4・5号土坑

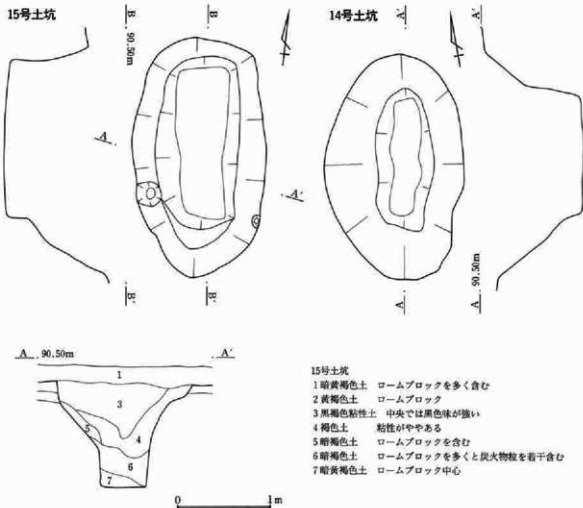


第96図 5号土坑出土遺物

4号土坑 III区D-29グリッドに位置する。形状は、一部壁面の崩落により変形しているようであるが、掘削時には隅丸長方形を呈していたと推定される。規模は、長軸2.46m、短軸1.56m、深度0.87mを測る。本土坑から遺物等の出土は、見られないが、形態や堆積土から縄文時代の陥穴であると想定される。

5号土坑 I区に位置する。形状は、やや角張っているがほぼ円形を呈する。規模は、長軸0.98m、短軸0.96m、深度0.43mを測る。本土坑からは、縄文時代前期諸磯c式期の深鉢が出土している。

14号・15号土坑 I区に並列して位置する。形状はともに楕円形を呈する。規模は、14号が長軸2.40m、短軸1.52m、深度1.04m、15号が長軸1.54m、短軸1.44m、深度1.18mを測る。両土坑から遺物等の出土は、見られないが、形態や堆積土から縄文時代の陥穴であると想定される。



第97図 14・15号土坑

4. 溝

1 号溝

I区西北部分からII区にかけて位置する。

本溝は、南北方向は、1条の走行であるが、C-19グリッドでほぼ直角に東西方向に走行を変えてからは2条になる。

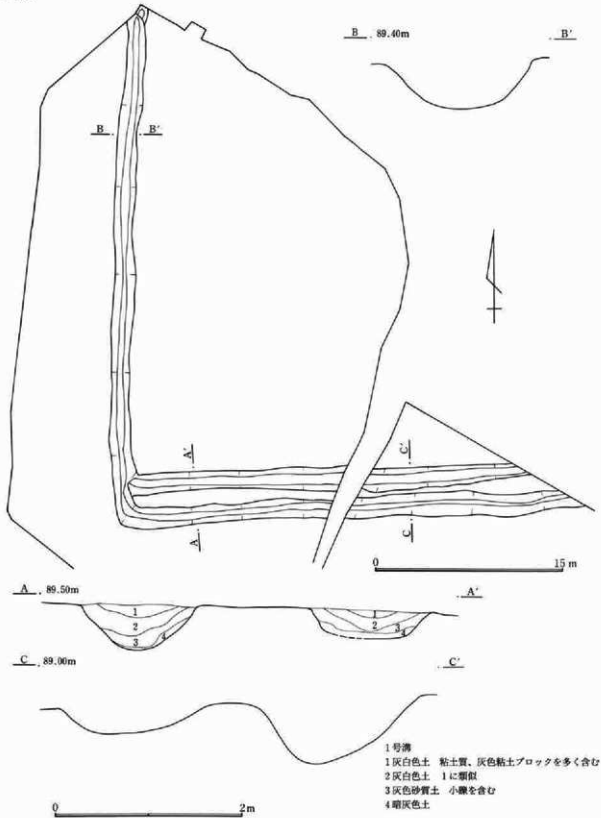
規模は、溝の北側、東側ともに調査区外にのびることから全貌は不明であるが、調査区内では南北方向に41m、東西方向は南側が35m、北側が31m、幅は南北方向が概ね1.20m、東西方向が南側で1.30~1.80m、北側が1.40~1.90m、深度は0.30~0.

70mを測る。溝の断面形状は、多少の崩落等による変形が見られるが、ほぼ逆台形状を呈する。

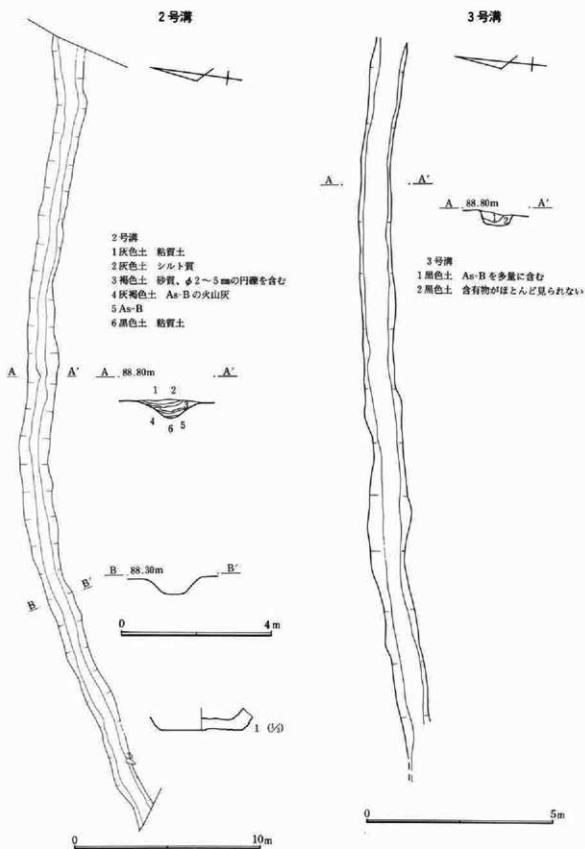
溝内部からの出土物は、土師器杯や甕の小片がごく僅か出土しているだけである。これらの遺物は、図化可能なものはなく、また溝の構築、使用、廃棄を比定するようなものも見られない。

1号溝は、その形状からある一定の範囲を区画するために設けられた区画溝の様相を呈する。しかし、溝で囲まれた内部の北東部分は、緩い傾斜をもち低くなり沖積地へ移行していくことや区画内部には全く遺構が確認されていないことから区画溝として位置付けは難しい。

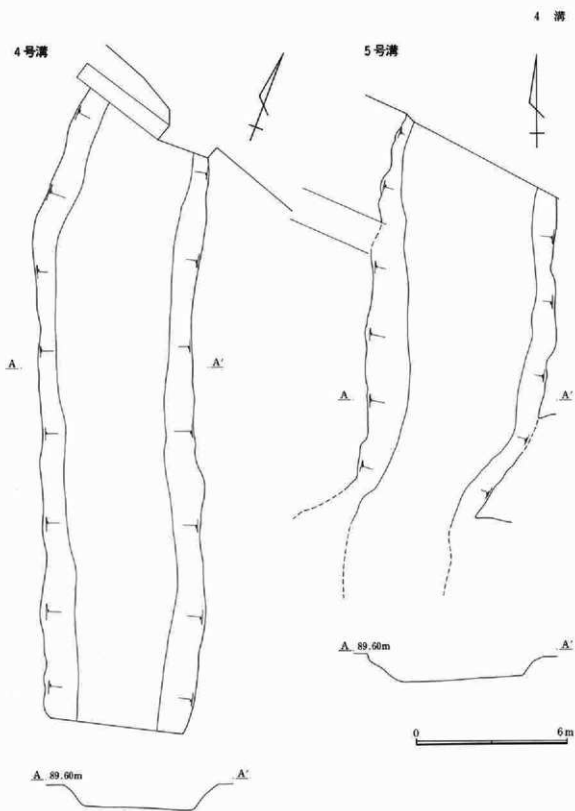
1号溝



第98図 1号溝



第99図 2・3号溝



第100图 4·5号溝

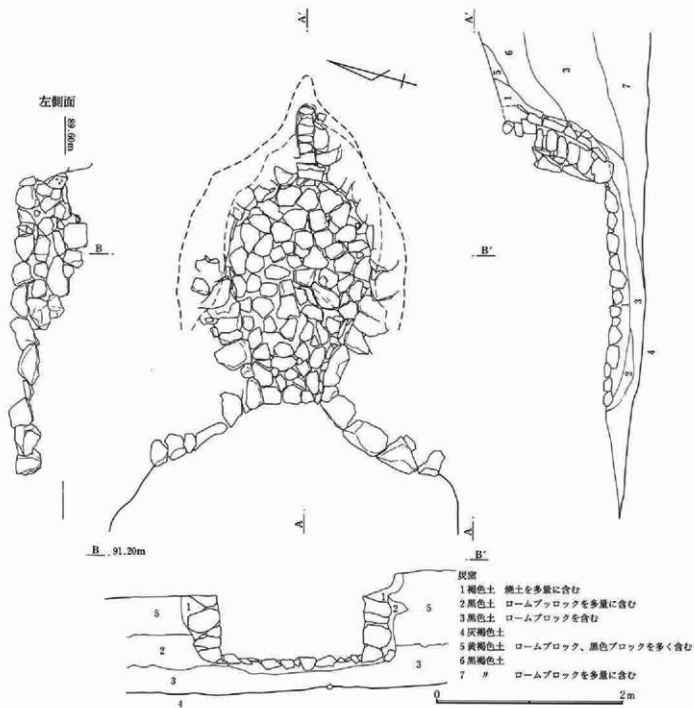
5. 炭 窯 跡

炭窯跡は、1区E-13グリッドに位置する。

形態は、焚口が狭く、燃焼部が楕円状に広がり、
細い煙道につながる。焚口前部には、作業場が設け

られている。燃焼部の床面はほぼ平坦で、奥壁や側
壁は急な立ち上がりをしている。煙道は、奥壁より
80cmほど立ち上がった所に設けられている。

規模は、燃焼部が全長2.45m、最大幅1.60m、焚
口幅0.82m、煙道幅0.22mを測る。



第101図 炭窯跡平面図・セクション図

6. 水田跡

水田跡は、V区の東南部分より検出されている。水田跡、直接浅間B軽石(As-B)で覆われている。As-Bの堆積は、平均7~8cmであるが、厚いところでは20cmほどの堆積が確認されている。

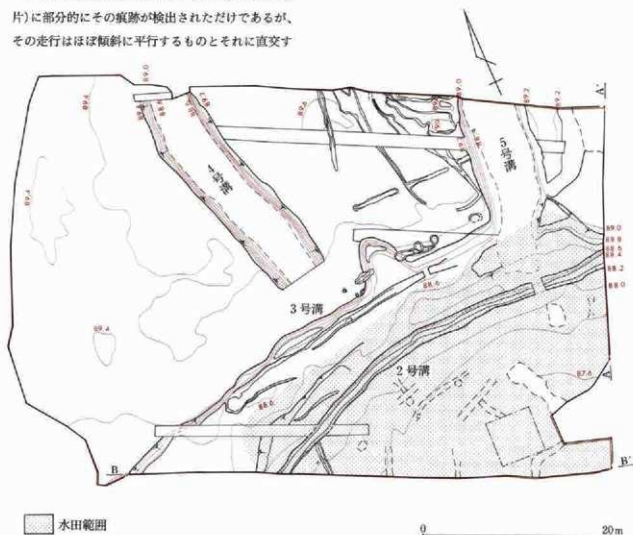
水田跡の残存状態は、非常に悪くアゼについては土層断面にて確認される程度で平面においては僅かにその痕跡が確認される程度で水田の小区画や水口については全く不明である。

水田域は、東南にかけて緩い傾斜をもつ地形である。水田域の標高は、最高値89.4m、最低値87.7m、比高差1.7mで傾斜率は5.6%である。

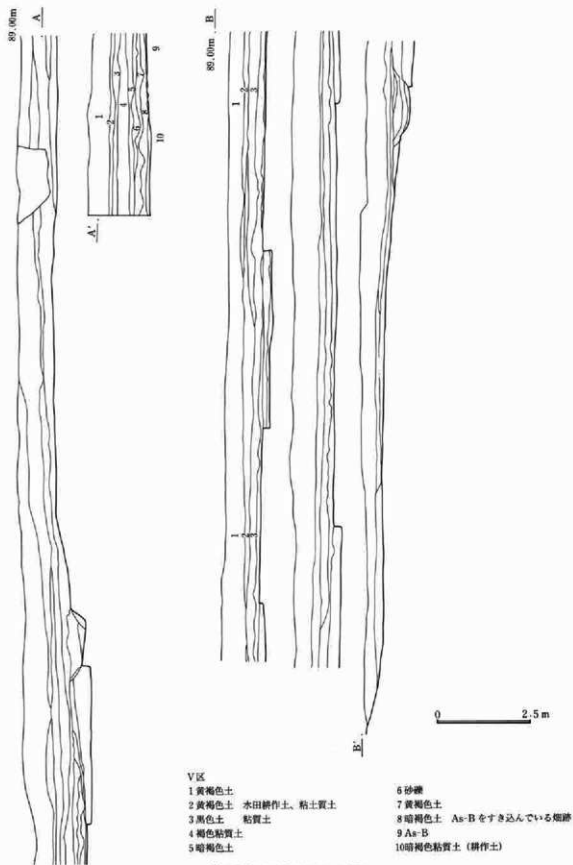
アゼは、第102図に示したよう(水田域のなかの破片)に部分的にその痕跡が検出されただけであるが、その走行はほぼ傾斜に平行するものとそれに直交す

るものがあるようである。区画については、一区画を表すアゼの残存が見られないため不明であるが、僅かに残存がするアゼから一区画の規模は幅が概ね3~6mであると想定される。

水田域への取配水についてもほとんど不明であるが、水田域の北側に位置する2号溝は溝底部にAs-Bの堆積が確認されることやその位置関係から水田域への取水のための溝であると想定される。



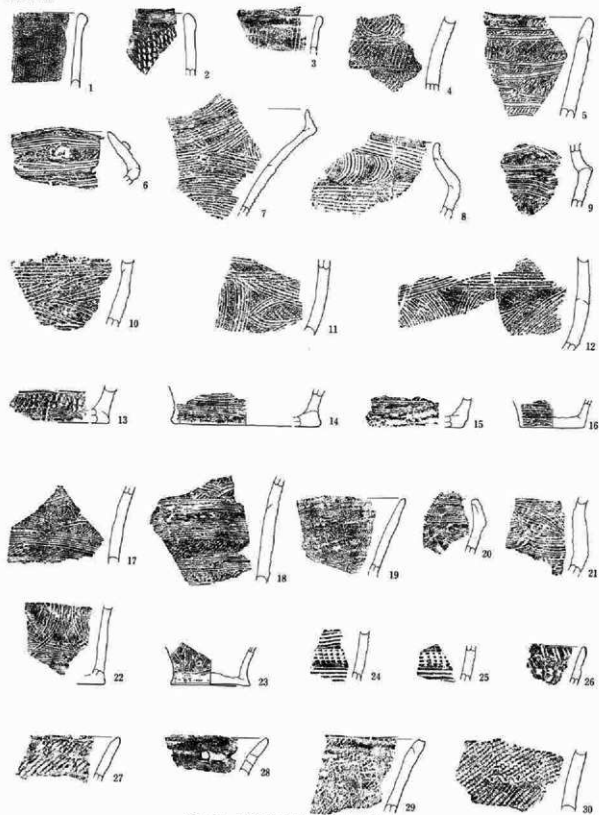
第102図 V区全体図と水田跡



第103図 V区セクション図

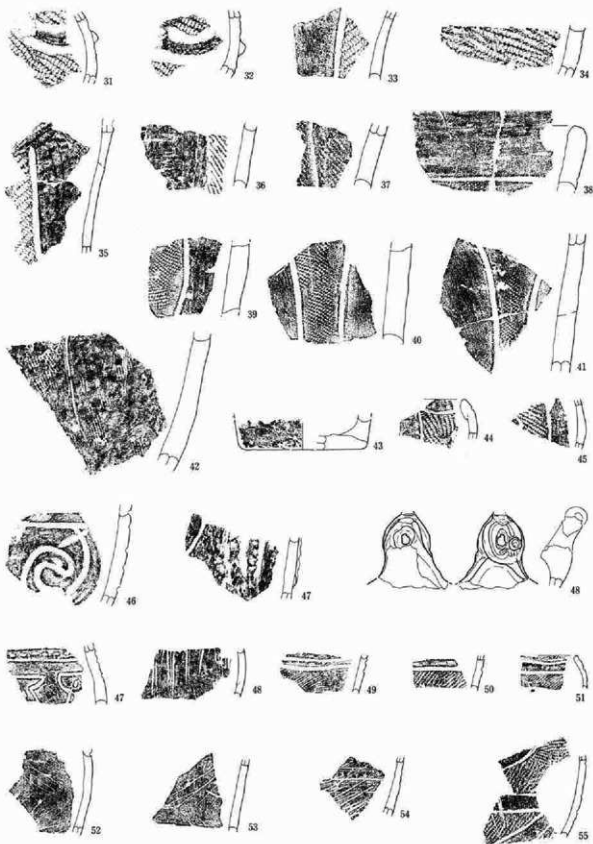
7. 遺構外出土遺物

繩文土器



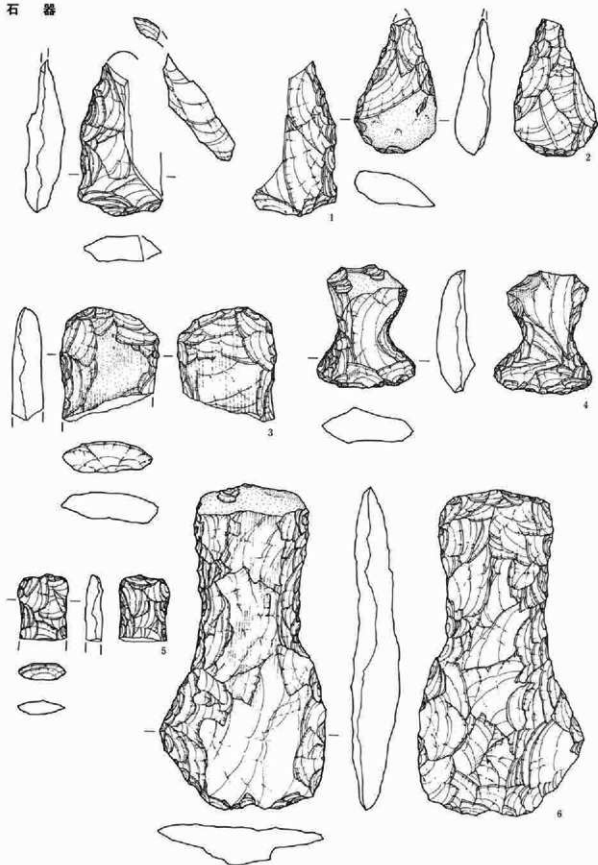
第104圖 遺構外出土遺物繩文土器(1)

第4章 検出された遺構・遺物



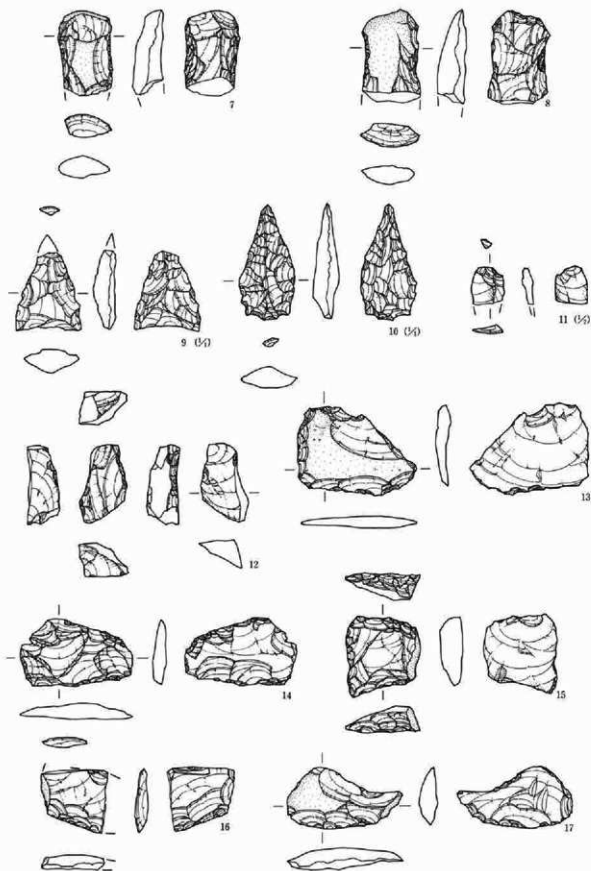
第105図 遺構外出土遺物縄文土器(2)

石 器

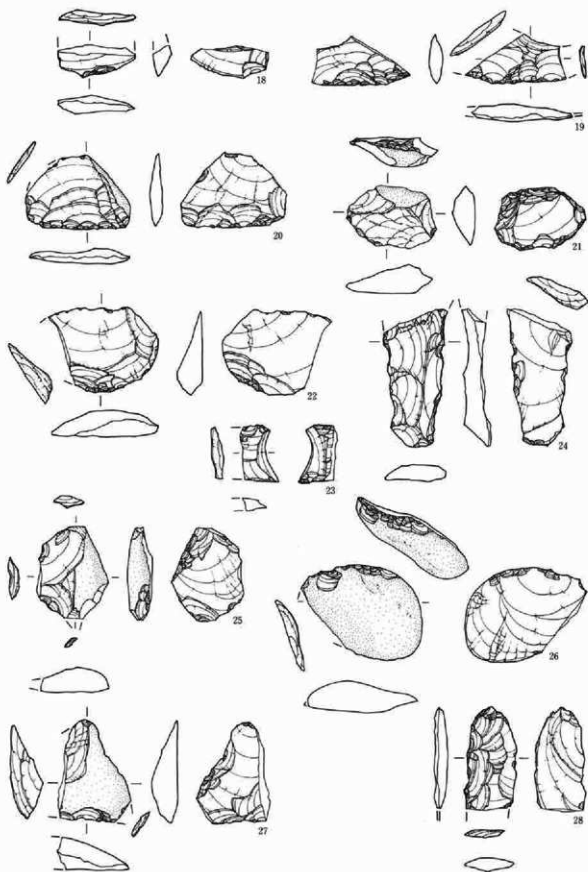


第106圖 遺構外出土遺物石器(1)

第4章 検出された遺構・遺物

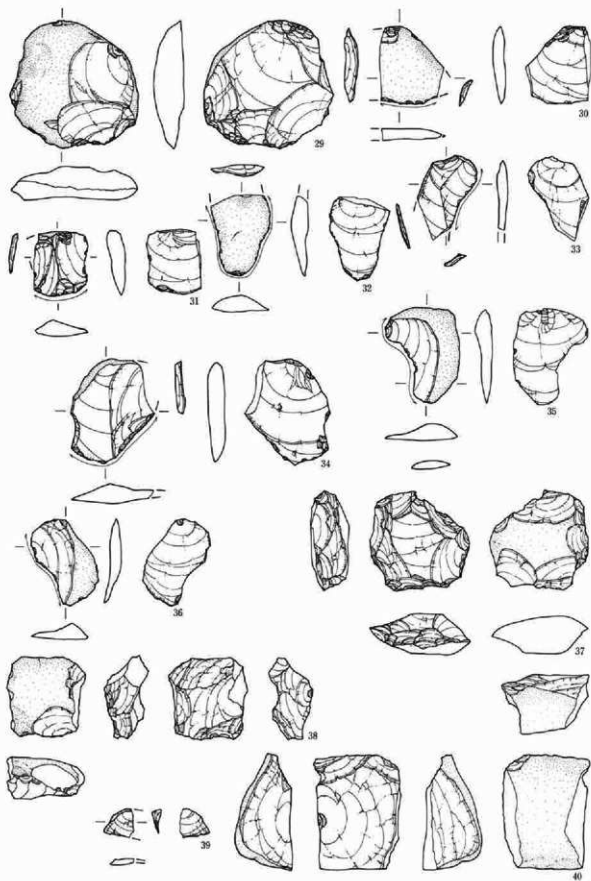


第107図 遺構外出土遺物石器(2)



第108圖 遺構外出土遺物石器(3)

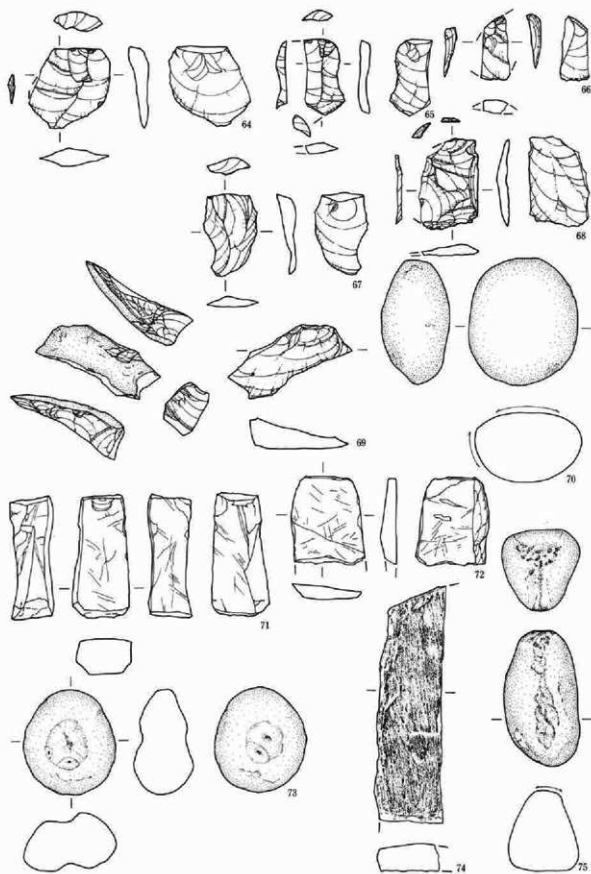
第4章 検出された遺構・遺物



第109図 遺構外出土遺物石器(4)

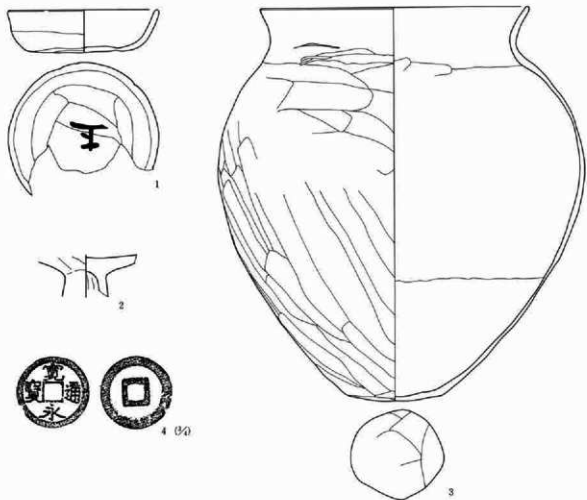


第110圖 遺構外出土遺物石器(5)



第111図 遺構外出土遺物石器(6)

土器 他



第112図 遺構外出土遺物土器他

第5章 成果と問題点

1. 波志江今宮遺跡の形象埴輪

南 雲 芳 昭

本稿では、波志江今宮遺跡の古墳出土の形象埴輪を概観しまとめを行い、その位置付けと問題点を明確にしていきたい。

1. 概 要

1号墳 出土形象埴輪は、馬形埴輪の破片のみである。十文字に粘土紐で繋ぎが表現され、交点には円形の剝離痕がある。円形剝離痕の外縁は割れた状態であるが中央部は接合面を残し、剝離痕を縁どるように僅かに赤彩が残存している。円形剝離痕の下には繋ぎを横切る棒状の剝離痕が認められる。同じく円形剝離痕の向かって右上で繋ぎに接するように穿孔された痕跡が僅かに残存している。円形剝離痕は馬鈴が雲珠、辻金具と判断され、この破片は面繋ぎ胸繋ぎ、尻繋ぎの部分と思われる。切り込みは目の可能性が高いが胸繋ぎ、尻繋ぎ周辺に穿孔される例もあるので即断は許されない。しかし棒状剝離痕は引手あるいは手綱とする方が妥当であり、面繋ぎ部分の資料と見た方が全体の説明がつくであろう。左右の判断であるが引手か手綱の剝離痕の走行方向から右側の破片と判断できる。

2号墳 出土形象埴輪は、1の人物の腕破片と2の器種不明の小破片が出土している。腕は肩に接するつけ根の部分である。中実の粘土棒であり、これを肩に差し込んで接合している。器種不明の資料は端部が弧を描き破片自体も左右に反りを持つ。縦方向に粘土紐の貼り付けがみられる。向かって左上に僅かにヘラ描きが残る。

3号墳 器財、人物、馬の破片が出土している。器財では11が明確に盾の特徴を表している。この資料は盾の左右に張り出す部分である。鋸歯文と端部に添う縦の沈線がみられる。鋸歯文で作られる三角形

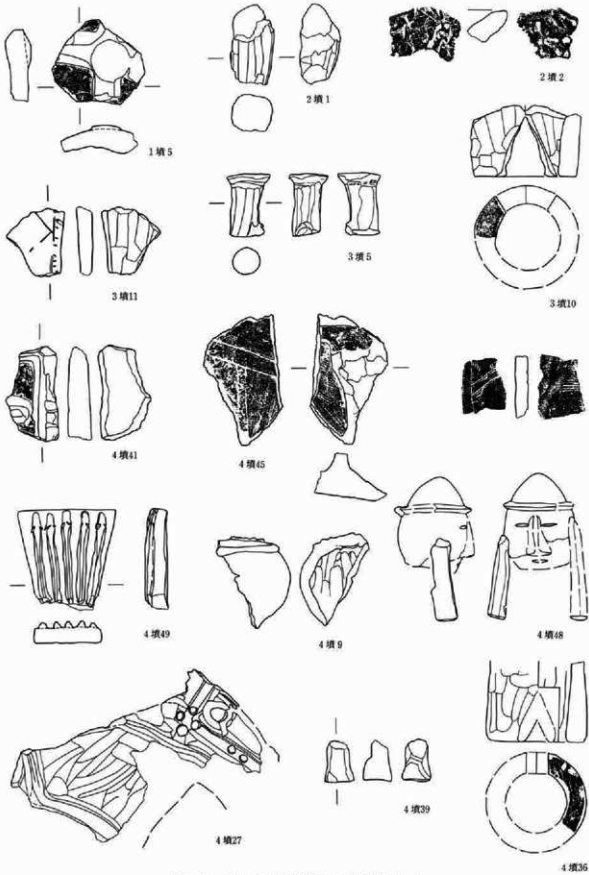
の端部側を赤彩しており、端部と縦方向の沈線間には鋭利な工具による刺突があり革紐を表現している。12は片面に縦方向の粘土紐貼付があり、もう片面には斜め方向の沈線とそれをトレースする赤彩がみられる。沈線のある面の上部は僅かに横ナデが認められる。

粘土紐貼付は、明らかに粘土が歪まないための裏面における支柱である。沈線は盾の鋸歯文の一部とも考えられるが、裏面あるいは内面に支柱がなされる例は上野地域では管見に触れない。支柱の施される器財としては鞆の鎌身表現の板部や脛などがあげられるが、鞆の特徴は示しておらず、脛などが可能性として挙げられよう。

人物では、2が中実の腕である。割れ口の中心付近の状況から粘土棒を丸めて押さえ込んで棒状にしている可能性が考えられる。14は盾の緒状の張り出しとも考えられるが、向かって左側が天で右側が地となって盾持ち人の頸の可能性もある。3は人物の肩付近と考えられる他、馬形埴輪の耳の可能性が考えられる。色調が5の馬形埴輪のたてがみ前端と類似している。5はたてがみの前端の円柱表現である。下位に僅かに割れ口がみえ、後方にたてがみが続くとと思われる。他の馬形埴輪片を挙げると、10は脚部下端で蹄表現の三角形の切り込みが認められる。粘土紐の接合の痕跡がみえる。接合せずに円化できなかった脚部破片の中にはいわゆる粘土板円筒化成形といわれる切り込んだようなシャープな面の剝離痕を呈する資料がある。

9は辻金具の一部で面繋ぎの上に方形の粘土貼付がなされ、さらに磨滅しているが新留表現の粘土粒が貼り付けられている。6と7は繋ぎの一部であり、繫上にもハケメ様の痕跡が残る。6は繋ぎの位置にきざ

1 波志江今宮遺跡の形象埴輪



第113図 波志江今宮遺跡出土の形象埴輪(1)

みを入れてから粘土を貼り付けている。この資料は穿孔があることから目が面繫と思われるが、9の辻金具がつく面繫より幅が広いことを考えると胸繫とその下に位置する透孔の可能性もある。

4号墳 家、器財、人物、動物が出土している。家の資料では、42が基部と考えられる。41は壁体のコーナーにあたる。コーナーに家の粘土紐貼付によって角を強調させ柱を表し、横方向の粘土紐貼付は横木を表現していると思われる。43はコーナーを持ち壁体の一部かと思われるが詳細には明らかにし難い。図化できなかった小破片の中に類似する資料が一例みられ、41とは別個体の家の可能性が考えられる。38は堅魚木で裏面中央に剝離痕が認められる。両側面には接合時のものと思われる指の圧痕がある。40も両側面に指の圧痕あるいは強い指ナデがあるが、裏面には2箇所接合の窪みがあり中央が張り出したような形状を呈している。両小口に赤彩がみられる。この大きさも違う38と40の裏面観察からは明らかに接合状況が異なることがわかる。40が堅魚木とすれば複数の家の存在が推定されるが、盾持ち人の冴磨の可能性も考えられる。39は小口とその縁に赤彩が施されている。38や40と違って指の圧痕がなく、馬形塗輪のたてがみ前端の円柱表現の可能性が考えられる。47は向かって左側が地で右側が天となり、底面には棒状圧痕がみられるので、盾の緒状の張り出しとするよりは家の基部の可能性が高いといえよう。45は盾左側上部破片である。裏面や割れ口には円筒部に緒状の張り出しを接合した痕跡があり、円筒部の上部は閉塞していない。盾面には二重沈線での文様がみられる。左右に伸びる二重沈線が区画線になる可能性があり、大きく刺織文が施されるのかも知れない。46も同様に盾破片であろう。48も盾の可能性が考えられる。44は盾上辺の可能性と、馬の鞍あるいはたてがみの一部の可能性が考えられる。45の盾の胎土とは異なっている。

49は割の鎌身が表現される板の部分で、裏面には歪み防止のための粘土貼付はみられない。

人物は6がもっとも形状が窺える資料である。半

身像で下げ緒をし、左手は脇腹につけている。腕は差し込み式で、指はヘラで5本を切り分けている。右後の腰には帯に貼付けた粘土が一部残り、帯の下方へ剝離痕が続く。屈曲する全体の形状から、刀子などではなく鎌と特定される。よって、男子の半身像と判断できる。7も半身像であり、左手を挙げている。左手の肩の部分に剝離痕と接合のためのナデがみられ、下げ美豆良をしていたものと思われる。腕は差し込み式である。9は女子の後頭部から島田髻までの破片である。頂部を島田髻の粘土板で閉塞している。髻中央部には左右にわたって剝離痕がみえるが、髪を結わえた紐の表現であろう。11も島田髻の一部である。10は頸の部分である。8は着帽した下げ美豆良の男子である。巻き上げて頭頂部で絞り込んで閉塞している。赤彩は顔面に残るが帽子部分は明確ではない。帽子の後頭部側では鉤端部に割れ口がみえ、双脚輪状等の突起が付属する可能性がある。12は右手で手のひらに偏平な剝離痕があり、手のひらは胴部につくと思われる。14も手のひらで、15と16は左手の可能性があり、16の手のひらの残存部に剝離痕がみられるが、胴部につく可能性もあり、何かを保持したかどうか特定できない。18は腕であり、粘土棒に粘土板を中位まで被せて縦横に沈線が施している。その形状から肩甲を表現していると思われる。

19、20は腰の皮袋あるいは鞆類と思われる。三角形を呈し、上位にV字形に紐表現がなされるなど二者の形状は同じである。23、24、25は半身像の裾の部分であり、26は基台の可能性が考えられる。

馬の破片も多い。27は頸部～顔の一部であり、前輪と轡籠の一部が残る。胸繫下位の横ナデの痕跡から、何か裝飾が下がるものと推定される。面繫は頬革、項革、額革、咽喉革が残り、鼻梁革が伸びる可能性がある。額革末端のナデ痕跡から鼻梁革の存在が考えられる。面繫交点には鉤留表現がみえ、頬革にも同様の表現がある。頬骨表現の粘土板が右側面に残るが幅は狭くない。頸部は巻き上げと思われ、頭頂部は粘土を左右にアーチ状にかけ渡している。他

部分は残存部が少なく成形は不明だが顔内面には口の方へ強いナデが入る。目は穿孔後縁を盛り上がらせている。赤彩は明確ではない。28は頸部中心で頭頂部から目までは左右にアーチ状に粘土をかけ渡している。たてがみは粘土板を左右から補強し接合している。目は穿孔後指で縁を盛り上がらせている。左側喉元には頬骨表現の粘土板の接合痕がある。たてがみ末端では前輪に接していた剝離痕がある。面繫は頸革、項革、頬革、咽喉革があり、ボタン状粘土貼付がある。手綱、面繫、たてがみに赤彩が残存する。33は尻繫の一部で34は尻繫や胸繫につく馬鈴である。35、36、37は脚部であり、三角形に切り込みを入れて蹄表現をしている。35では外面に粘土紐の単位を表す凹凸がみえ、内面には粘土紐の接合痕がある。内面および割れ口の観察ではいわゆる粘土板の端部を合わせ接合した痕跡が認められる。37でも同様の痕跡があり、接合しない破片でみると端部の角および側面はきわめてシャープである。21、22は辻金具の部分である。他に凶化できなかつたものとして尻部の透孔と尻繫破片、障泥下端の破片、胎土色調から27と同一個体の可能性がある項革と手綱の剝離痕のみえる頸部左側の破片がある。

以上の所見をまとめれば、堅魚木をあげるものを含む家が1個体あるいはそれ以上、盾、鞆が最低1個体はみられる。人物では半身像が5個体確認できる。この中には鎌をさす男子半身像1個体、左手を上げる下げ美豆良の男子半身像1個体がある。他に甲で武装する男子1個体、女子1個体が確認でき、弁柄の盾持ち人の存在の可能性も考えられる。着帽の男子頭部はどの胴部につくか否か判断できない。また、皮袋か鞆を下げる人物も人員に加わるが、同一個体を特定できない。馬は2個体確認でき胸繫には飾りを下げると思われる。

5号埴 器財では12を代表とする盾、27を代表とする鞆がみられる。

11は平行沈線による区画線の上に鋸歯文と思われる斜め方向の沈線が残り、内区には「×」形になると推定される斜め方向の沈線がある。28、29は鞆の

下方背板右側である。三角形を呈し縦横の沈線が施され底辺を肥厚させている。29も同様の右側部分である。肥厚させた粘土は剝離している。30は下方背板左側の部分である。26は天地道で轡を表現する板の下方であり本体内側に差し込まれている部分である。上端割れ口の近くにボタン状粘土の剝離痕が見られる。27は鞆の全体像が窺える資料で、矢筒上端には沈線で2段に区画した中に各々鋸歯文を施し、上位背板には横位および斜位の沈線での文様が見られる。下位背板から本体にかけても2段に大きく鋸歯文が認められる。矢筒上端には球状の突起が複数付着するようである。下位背板下端残存部には横ナデがわずかに残る。

7は人物の顔で額の一部分から首の一部まで残る。目の切り込みが残り、鼻穴は刺突による。左側に耳環が見られ、耳あるいは美豆良かと思われる磨滅部分が一部残存する。赤彩は認められない。8は人物の腕で下端に剝離痕が見えることから同部分では手のひらの一部と思われ、左手の可能性もある。9には横位の平行沈線が見える。ボタン状粘土が一箇所見られ、左端にその剝離痕がある。衝角付貫などの甲冑の鋸留表現と思われ、武装人物の存在が考えられる。11は人物服飾の一部あるいは馬の雄の生殖器が考えられる。

馬は20が面繫と目の一部で、頬革、頸革、咽喉革が見られ、項革の剝離痕が認められる。辻金具は方形板を鋸留したものである。頸部との剝離痕から、頬骨表現の粘土板を貼り付けていることが判る。目の縁は影らみはじめている。内面の粘土紐は頭頂部では左右にアーチ状に渡している。21は左側頸部で手綱が残る。赤彩は見られない。17は粘土紐を二つ折りにし、ねじりを加えている。手綱の折り返し箇所が考えられるが人物の装飾の可能性も捨て切れない。19は尻繫左側部分で、雲珠と思われる痕跡から杏葉の一部が残存し、尻尾に伸びる左側尻繫が見える。中央に中空になる剝離痕がある。これは25のような中空の鈴の類が装着されるのであろう。24はたてがみ鞍橋、22、23も鞍橋であろう。他に接合し

ないたてがみ、鞍橋、尻繫、手綱の破片が見られる。

以上をまとめてみよう。器財は鞆が3個体かそれ以上、盾1個体以上である。人物は複数の存在が考えられ、武装男子を含む。馬は胎土色調から1個体分の破片と考えられる。少なくとも尻繫に飾りを装着した馬装を有している。

6号墳 2は家で壁体コーナー部か屋根の破瓦板付近であろう。3は中実の半球形の資料で、裏面に剝離痕がある。大刀の勾金に付属する玉飾りである。

4は盾で区画線と外区に鋸歯文、内区に平行沈線が施される。

人物は1の鼻を中心とした破片のみであり、目と思われる切り込みがわずかに残る。鼻孔の刺突孔は見られない。5号墳例の鼻と比べより高く作られている。よって6号墳の組成は家、大刀、盾、人物となり、次章で述べるように盾と人物は盾持ち人となる可能性がある。

7号墳 家の可能性が考えられるのは25の堅魚木と思われる資料である。中央両側に指で押えた痕跡が見られる。盾持ち人の弁帽の可能性もあるが本古墳出土の盾とは色調が赤味を帯びない点で異なっている。図化し得なかった資料の中に器内の厚い底部片があるが、家の基底部であろうか。

器財では帽子の出土が目を引く。26は基台部上位まで残存する資料である。形態は広く山高帽状を呈し、中位に突帯を巡らせている。幅広の罫には外端に7稜を有する鋸歯文を一周させている。基台部には沈線や赤彩線による紐表現はない。成形法は、基台部を巻き上げていき、基台残存部中位と罫の位置で乾燥させている可能性がある。その後巻き上げて頂部でそのまま閉塞している。27も帽子であり、形状は26と同様であるが突帯が罫元に見られる。やはり8稜の文様を有する。巻き上げ成形で、頂部でそのまま閉塞している。26は頂部が緩やかに取東するのに対し27では急激に取東するため頂部が平坦となっている。

28は玉鏃大刀である。勾金には三輪玉が3箇所認められ、上下端に各1箇所剝離痕が見られる。勾金

の把に接する部分と罫元に接する部分には紐様の表現が見られ、わずかに赤彩が残る。罫には二条の突帯が巡る。把および鞘部分は全くの円筒状となっている。鞘部分には粘土や沈線、赤彩による紐表現は一切見られない。勾金を正面に見た場合、把頭の幅は向かって右に取東しているため、右側が刀部となる。勾金位置との関係から左腰ではなく右腰に佩く左きき用の大刀といえる。成形では、把頭まで巻き上げて頂部を板状の粘土で閉塞させている。29は大刀の下方と考えられ、粘土紐貼付で結びを表現している。残存部中位に一条の突帯が巡り、その上位に透孔があく。成形は基部を作り、巻き上げている。28と接合せず、28は鞘部に紐が垂下しないが、出土状態から見ると同一個体と考えられる。大刀は他に30のように勾金上端に半球形の飾りが付着する例が認められる。31は勾金を把頭、32は勾金下端の可能性が考えられる。42は鞘である。基台中心からやや下寄りに突帯と透孔、鞘本体との接点に一条の突帯が見られる。基台には赤彩や剝離痕などは認められない。鞘の片面に2本の沈線を引き、その間と下の2段にわたって鋸歯文を施し、赤彩で充填している。赤彩は上位沈線より上にも見られる。上端は末広がりに開き、くびれた部分には紐表現がなされ鉾が付着する。基台は巻き上げによっているが、成形として特徴されるのは鞘本体も長楕円形に巻いた後、その上を閉塞しないまま上端の末広がりの粘土板を差し込んで接合させていることである。鞘の外側のラインのみを形作り、内面のラインは鞘の本来の丸味を帯びた形ではなく粘土端部のラインとなっている。この粘土端部には赤彩の痕跡が見られ、剝離痕も認められない。42は鞘の末広がりの粘土板が差し込まれる部分である。これは内側もきちんと閉塞していることが看取される。33、34は盾の上端部とその付近で大きく鋸歯文が施され赤彩がなされる。33の残存部下端からは裏面の円筒部上端が閉塞することが窺える。40は前二者と同一個体と思われる。35、36、37、38、39も盾の一部の可能性もあるが、35、38は鞆背板の可能性も考えられる。図化し得なかつ

た小破片中にも盾と思われる資料が多数認められた。41は髷で左右両端に縦方向に赤彩が入る。下方の差し込まれる部分は欠損しており、裏面に粘土の支柱は見られない。16は人物の腕で18は半身像の裾部である。面が荒れており、残存部では付属物の痕跡は不明である。

17は女子島田髷の一部の可能性が考えられる。また、44は中空の断面三角形を呈し、下端は接合面で剥離している。頂部にボタン状突起を付け、放射状に沈線を描いている。人物の帽子や笠の可能性も考えられるが確定できない。

馬については、19が尻繫の部分である。2本の尻繫が尻尾の方へ伸び、方形板が鋸留される。残存部上端には雲珠の痕跡があり、左側では紐によって馬鈴が下げられている。右側も馬鈴の痕跡がわずかに残る。紐は赤彩され、尻繫側面と一部尻繫上にも赤彩が見られる。20は面繫部分と考えられ、剥離痕も含めると縦方向2条、横方向1条の粘土紐が見られる。横の粘土紐中央には円形剥離痕があり、左側の縦方向の粘土との交点には円形粘土が付着する。あるいは家の一部の可能性もある。21は後輪下端が認められ赤彩される。障泥上端もわずかに見え、残存部末端には尻に下がる馬鈴接合時のナデが認められる。22は脚部末端で基部が認められる。三角形の切り込みで蹄表現をしている。縦方向の亀裂や接合痕などは看取できなかった。23、24は中実の馬鈴である。また、45は中空で粘土板から成形されており、不確かだが馬の尻尾になる可能性も考えられる。他に項革の剥離痕のある耳破片、繫の付着する複数破片、たてがみあるいは鞍破片、19と同様の方形板、胴部と思われる複数破片が認められた。

以上をまとめれば次のようになる。家が存在する可能性があり、帽子2個体、大刀2個体、柄2個体、靴、盾が1個体以上認められ、人物、馬が存在する。馬は尻繫に飾りを下げている。

2. 配 置

1号墳は円墳で馬形埴輪片が墳丘西側の周縁で出

土している。一方主体部は他の横穴式石室とは異なり東西方向に主軸を持っている。主体部と配置の関係は明らかにできないが、一周する円筒列に参加して馬が配置されていたか、あるいは円筒列の内側に位置していたと推測される。

2号墳では、配置を探る手掛かりは得られていない。

3号墳は円墳と推定され、主体部は南方向に開口すると思われる横穴式石室である。3号墳も配置を探る具体的なデータは得られないが、他例を参考にすれば石室開口部から配置された形象埴輪の末端にあたる資料の可能性はある。

4号墳は帆立貝式古墳である。主体部は長方形の掘り方を持ち、主軸は南西から北東方向である。古墳の主軸はほぼ南北方向にある。

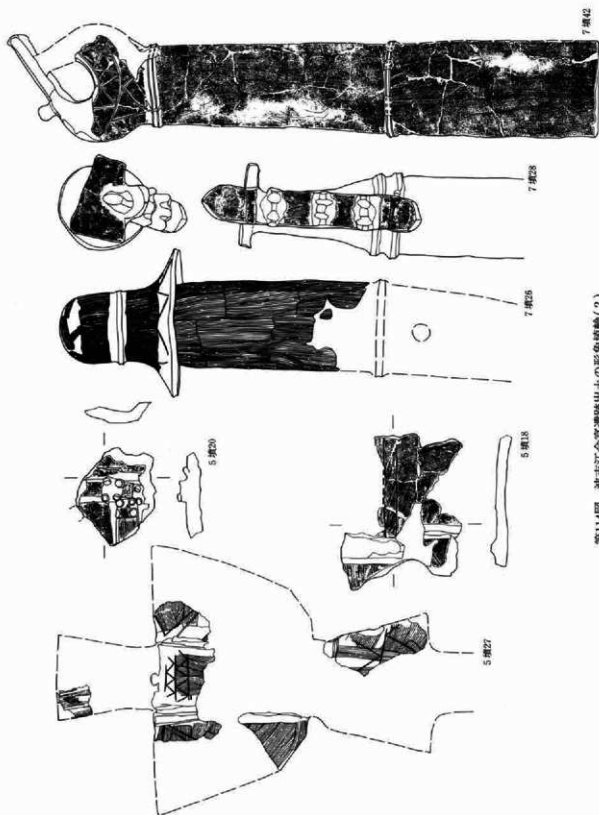
本来的な位置ではない可能性もあるが、造り出し上で馬脚や馬か人物の破片が出土しており、さらに人物、動物の出土は造り出し東西の周縁に集中している。造り出しが人物、動物の配置の中心であったことが窺える。人物では墳丘北側周縁と南西側周縁に出土がみられ、配置されていたか興味深いところである。南西側周縁では主体部近辺で配置がなされていたのであろうか。

一方、家は南西側周縁から北側周縁、器財類は北側周縁から出土しており、墳頂に配置されていたものが四散、転落したと考えられる。

5号墳は南北に近い主軸をもつ主体部を有する古墳である。人物は主体部前面の南西側周縁から南側周縁にかけて出土している。馬は南側周縁から東側周縁にかけて出土が見られる。器財類は西側・南側周縁にも見られるが、家とともに主体部からの出土が多い。これは主体部の破壊に伴って崩落したか、投げ込まれたものであろう。

人物、動物は主体部前面から東側にかけておそらく円筒列の内側を列状に配置されていたことが推定できる。家や器財類は墳頂に配されていたと考えられる。

6号墳は主体部は不明で家は東側周縁、人物と盾



第114図 渡志江今宮遺跡出土の形象埴輪(2)

は北側墳丘から近接して出土している。この人物は鼻が高く大きいという盾持ち人の特徴も具備しており、盾持ち人の可能性も考えられる。

7号墳は円墳で主体部は南方向に開口する横穴式石室である。墳丘北側と南側に一部円筒列の残る部分がある。北側では円筒列の内側に大刀と鞘が基台部ごと横位で出土している。円筒列の円筒埴輪が樹立の位置を保っていることを考えると、これらは墳頂から転落してきたものといえる。帽子や盾も同様であろう。

墳丘南側も同様の現象が見られ、帽子や靱は同じく墳頂からの転落と考えられる。

人物、馬の破片の出土状態から、これらは石室開口部から西側へ配置がなされていたと考えられることができる。

3. 編年の位置付けと課題

(1) 位置付け

本来は円筒埴輪も含めた埴輪の総体的な検討をすべきであろうが、本項は形象埴輪の項であり形象埴輪からみた位置付けを試みたい。

1号墳、2号墳は資料的制約が大きいのので3号墳から行いたい。3号墳資料中では馬形埴輪のたてがみ前端の円柱表現と思われる資料に注目したい。管見では、小泉大塚越3号墳⁽¹⁾において円柱表現のある資料とともに単なる板状たてがみに移行する途上の形態が出現している。よって、3号墳は小泉大塚越3号墳より後出することはないと判断できる。

4号墳でも馬形埴輪のたてがみ前端円柱表現の可能性のある資料があり、同様のことが言えよう。また、馬形埴輪の脚部はこれまでいわれてきている粘土板円筒化成形⁽²⁾の特徴を示している。同技法は6世紀半ばまで行われていたのであるが、後述する切開再接合成形⁽³⁾との問題があり、保留しておきたい。

盾形埴輪の文様は、区画線が「Π」あるいは「II」形になると思われ、外区は平行沈線で大きく鋸歯文が描かれると推定される。こうした文様構成は神保下條2号墳例のように6世紀後半に盛行する。

5号墳では馬形埴輪の尻髯が後輪の爪先から直接尻尾の方へ回る形態が見られる。上野地域では現在までのところ、この形態の最古例は小泉大塚越3号墳例である。また、靱の矢筈上部に鋸歯文を施す例は少なく、管見ではわずかに神保下條2号墳の靱に見られるのみである。

7号墳では類例の少ない帽子の出土が目される。帽子は吉井町蛇塚古墳⁽⁵⁾や藤岡市皇子塚古墳⁽⁶⁾、芝宮76・79号墳⁽⁷⁾、ニッ山1号墳⁽⁸⁾など6世紀後半代の古墳に認められるものである。

大刀は右腰に佩用する左利き用のものである。類例は塚廻り4号墳⁽⁹⁾、神保下條2号墳、平井地区1号古墳などがあげられる。本古墳例は単なる円筒状を呈し、塚廻り4号墳例より後出するといえよう。靱の片面に鋸歯文を施す例は神保下條2号墳に認められる。

これらをまとめてみよう。3号墳と4号墳には馬形埴輪におけるたてがみ前端の円柱表現や脚部の様相において同じ様相が見られた。4号墳では盾の文様構成に3号墳より後出的要素が見られる。5号墳でも馬装や靱の文様構成において3号墳、4号墳より後出的要素が強い。7号墳では組成の面で他の古墳より後出的である。馬の脚部に縦方向の接合痕、剝離痕が認められないことも一応付記しておきたい。

以上のことから、3号墳→4号墳→5号墳→7号墳という順序が得られた。3号墳の下限を示す小泉大塚越3号墳からMT85型式の須臾器が出土していることを考えると、3号墳には6世紀前半の年代が与えられる。4号墳では盾の後出的要素を加味し6世紀前半～中頃と考えたい。5号墳では上限が小泉大塚越3号墳であり、器財の様相が一部神保下條2号墳に類することから6世紀中葉～後半の年代を与えておきたい。7号墳は塚廻り4号墳まで遡らず、他の古墳より後出的なことから6世紀後半とすることができる。そして6号墳は盾や大刀の様相が5号墳、7号墳に近似することから6世紀後半としておきたい。さらに形象埴輪の要素ではないが、1号墳

の主体部はその主軸方向から横穴式石室ではない可能性や、横穴式石室とすれば比較的早い時期が考えられ、6世紀初頭あるいは前半の年代が与えられる。これは1号墳出土土器器がMT15型式の須恵器と共伴関係にあることと矛盾はない。4号墳の土器は6世紀前半か中葉と認められ、5号墳出土土器はTK10かMT85型式とすることができ、7号墳出土土器はMT85型式と共伴資料と見られる。土器からみた古墳築造順序および年代観とも大きな齟齬はない。

(2) 課題

7号墳出土の鞍は、鞍本体の内側を閉塞していない可能性が指摘された。この例は、上野地域では管見に触れない。伊勢崎地域でも恵下古墳例、高山2号墳例もきちんと閉塞していることが判る。

管見に触れたものでは、下野になるが矢板市境林古墳例がある。鞍と思われる資料の内側が一部吹き抜けになっていることが看取できる。

また、馬形埴輪の脚部形成においていわゆる粘土板円筒化形成の痕跡が認められた。3号墳では、基部や粘土紐の痕跡がみえ、接合しない小破片では角がシャープで平坦な縦方向の接合痕がある。内面には粘土紐の接合痕が認められ、外面では粘土紐の凹凸がある。接合しない小破片でみると縦方向の剝離面の角は明確で鋭利な工具で切ったようにも観察できる。

これらの縦方向の接合痕あるいは剝離痕は、粘土板円筒化形成の特徴とされてきた。しかし近年類似した特徴を持つ切開接合成形が唱えられ、粘土板円筒化形成との関係が問題となっている。確かに粘土紐の単位を示す凹凸と縦方向の亀裂や接合痕を具備する例は東毛養護例がある。波志江今宮遺跡3号墳や4号墳例は切開再接合成形とも受け取れるが、資料は小破片が多く即断は避けたい。かつて粘土板円筒化成形が検証された上野における再整理が迫られている。

胎土においては、7号墳にのみ結晶片岩が含有されることが大きな特徴である。海綿骨針の有無についてはなお検討が必要である。現在までのところ結

晶片岩は鮎川、銅川流域に分布し、埴輪においては藤岡地域を生産地とする資料に特徴的に認められるといわれている。埴輪を有する7基の古墳のなかで、7号墳の埴輪のみに結晶片岩が含有されているということは6世紀後半段階でそれまでの埴輪の需要と供給、埴輪の移動において大きな変化が起こった可能性が考えられる。すでに前橋市大室古墳群内の中二子古墳に藤岡地域で生産された埴輪が供給されている事実がある。結晶片岩や海綿骨針の有無という胎土の検討とともに製作技法的な面で藤岡産の埴輪との相異があるかどうか、今後当該地域の資料に留意が必要であろう。

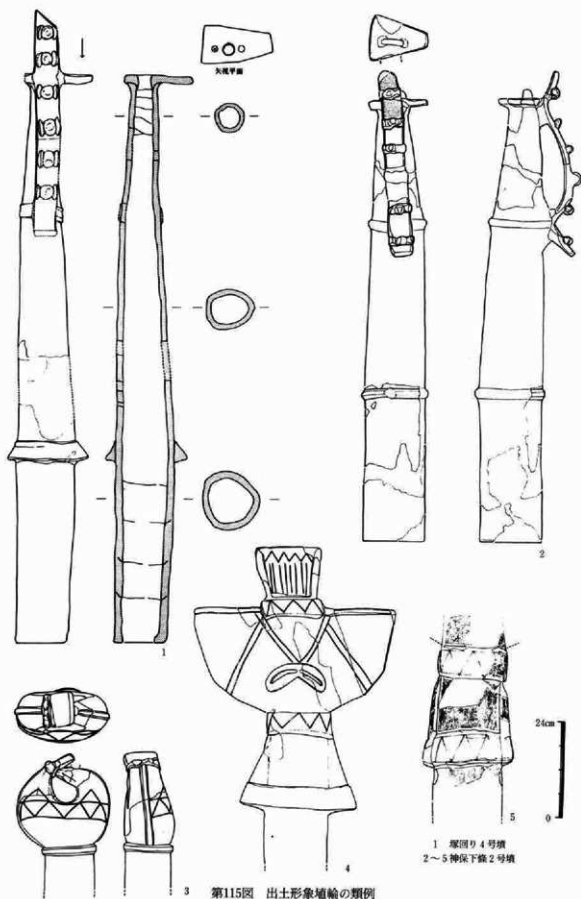
4. 結語

この形象埴輪の項では、基本的に出土古墳に伴うものとして扱ったが、隣接する古墳からの混入品があるとすれば微妙に年代は動くことになるだろう。たとえば3号墳の円筒埴輪は古相を示す資料もあるが新相を具備する資料も見られる。馬のたてがみ前脚端円柱表現が他古墳からの混入であったり、4号墳の盾が混入品であったりすれば築造順序は変動する可能性が充分あり得ることである。

7号墳資料の中にはB種横ハケをもつ円筒埴輪片が混入していた。近隣に5世紀代の古墳の存在が考えられ、5世紀代から継続して営まれている可能性があろう。検出された古墳は6世紀前半から後半の一帯であり、その組成は上野における当該期の組成をよく表している。器財は、盾・大刀・韋・鞍そして帽子という組成であり、配置数においても少しも衰えを見せていない。動物では馬形埴輪が配置数で優位であり、人物も複数種類が認められる。

また、伊勢崎地域において6世紀後半段階での結晶片岩含有資料の出現は当時の社会状況を解き明かすポイントとなる可能性を有しており、本遺跡の古墳はその意味でも重要な位置を占めるといえる。

さらに、前述のように円筒埴輪も含めた埴輪全体の検討が必要である。その時点で問題の所在がさらに指摘されると思われる。形象埴輪からの検討はこ



第5章 成果と問題点

ここで筆を置きたい。

(1995年1月脱稿)

参考・引用文献

- (財)群馬県埋蔵文化財事業団『神保下塚遺跡』1992
(財)群馬県埋蔵文化財事業団『原廻り古墳群』1980

註

- (1) 玉村町教育委員会『小泉大塚塚遺跡』1993
- (2) 稲村 繁「群馬県における馬形埴輪の姿選一上芝古墳を中心として」『MUSEUM』№425 1986
- (3) 鴻巣市教育委員会・鴻巣市遺跡調査会『鴻巣市遺跡群田(遺構・遺物編)、(本文・写真図説編)』1987・1994
- (4) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『神保下塚遺跡』1992
- (5) 吉井町教育委員会『蛇塚古墳』1987
- (6) 藤岡市教育委員会『皇子塚古墳』1989
- (7) 富岡市教育委員会『芝宮古墳群』1992
- (8) a. 新田町誌編さん委員会『新田町誌』第2巻資料編(上) 1987
b. 清水潤三「群馬県新田町二ツ山古墳」『日本考古学年報』1 1948
- (9) 群馬県教育委員会『原廻り古墳群』1980
- (10) 藤岡市教育委員会『市内遺跡』1 1993
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団第12回巡回展『緑野周辺の古墳時代』で展示中に実見した。
- (11) 4号墳の盾の文様構成は6世紀後半代に盛行すると考えられる。馬形埴輪のたてがみ前縁の円柱表現が確実とすれば馬形埴輪と盾形埴輪がややそぐわない感がある。
- (12) 原始古代部会「上小墳福崎山古墳の基礎調査」『高崎市史研究』第2号 1992
- (13) a. 群馬県史編さん室『群馬県史』資料編3 1981
b. 小野山郎・本村豪章「上毛野・伊勢崎市恵下古墳出土のガラス玉と馬具」『MUSEUM』№357 1980
- (14) 伊勢崎市教育委員会『高山遺跡・天ヶ堤遺跡・天野沼遺跡・大書上遺跡』1978
- (15) 栃木県教育委員会『栃木県矢板市境林古墳群発掘調査報告書』1973
- (16) 南宮方町江東毛貴顕学校出土の馬形埴輪について、『研究紀要』9 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- (17) 前橋市教育委員会による一連の調査において確認されたものである。
前橋市教育委員会『後二子古墳』1992
前橋市教育委員会『前二子古墳』1993
胎土に硝晶片岩と海綿骨針が確認された中二子古墳の埴輪は現地説明会の展示中に実見した。

2. 波志江今宮遺跡4号墳の円筒埴輪について

黒田 晃

1. 研究の方向

円筒埴輪は古墳築造の際に一時期に大量生産され、一箇所に大量埋納されているため、個々の埴輪に認められる形式差を追求する事により、製作集団の姿を復元できるという大きな特色がある。

また、その製作技法の特殊性から技術の系譜、年代差による技法の消長を古墳単位で追う事も可能である。

しかし、各地域の最大級の首長墓は、未発掘の場合が多く、調査が行われていたとしても、全面発掘を行ったものは数少ない。従って、今宮4号墳のような小規模ながらも全面発掘が行われた古墳は、円筒埴輪の研究を進める上で、重要な手がかりを与えてくれるに違いない。

今回の考察は、最終的な目標を工人集団の復元に置き、そこから派生するいくつかの問題点を考えていきたい。そのために具体的には次のような手順で研究を進めた。

まず円筒埴輪のうち、おおよそながら全体像を把握できるものを抽出した上で、器面に残る調整痕等を観察し、製作行程の復元を試みる。

次に製作技法が共通するものを抽出、分類し、技法の類型化を図る。その際には、器面に残る形態差が、技法の差によるものなのか、個人の技術の差によるものなのかを判断しなければならない。

類型化された技法をそれぞれ工人集団単位によるものとして捉え、それぞれの工人集団の人数構成や、幾つの工人集団によって埴輪の生産が行われていたのかを推定する。

それぞれの工人集団によって生産された埴輪が、古墳のどの位置から出土しているのかを調べ、工人集団と埴輪の設置の関係を捉える。

2. 今宮4号墳と工人集団

2-1 今宮4号墳円筒埴輪の製作行程

出土した円筒埴輪の内外面を観察した結果、今宮4号墳出土の円筒埴輪は、次のような行程で製作されている事が判明した。

- ① 幅6～9cmの粘土帯を円形にめぐらして基部を作る。粘土帯の接合は、端部をやや薄くし、重ね合わせて行っている。接合部は、粘土帯の重なりがはっきり残っているもの、完全に消失しているものの2種が確認された。
- ② 基底部の上に、径2cm前後の粘土紐を巻き上げていく。粘土紐の接合は、指による強いナデによって行っている。内面に残されている粘土紐接合時のナデが、上方から下方に向かって一気に施されている例が多数見られる事、一般に底部に近いほど器厚が厚くなる事などから、マキアゲは数回に分けて行うのではなく、口縁部まで一気に行ったものと推定される。

口縁部はヨコナデを施している。具体的には獣皮あるいは布を用い、外面に親指、口唇部に人差し指、内面に中指を当て、回転させながら施しているが、この際に、3本の指に余力を加えないで施した場合は口唇部に丸みを持ち、人差し指に特に力をいれた場合は口唇部中央がくぼんだ形に、全体的に力をいれた場合は口縁部と体部の境に弱い稜を持ち、内面がややえぐれた形になっている。

- ③ マキアゲ、ナデによる調整の後に、ハケによる内外面の調整を行っている。

ハケによる外面の調整はタテハケによるものと、ナメハケによるものの2種類が確認できた。2次調整ヨコハケは見られない。ハケの密度は2cmあたり6～9本が最も多く、最高で26本のもの確認されている。

また、外面調整にハケを用いず、全面ナデ調整

を行っているものもある。

内面の調整は口縁部周辺にヨコハケを施し、穿孔部分までナナメハケを施しているもの、口縁部直下のみになナメハケを施しているもの、全面にタテハケ、ナナメハケを施しているもの、全面ナデ調整を行っているものの4種類が確認できた。

- ④ ハケによる調整の後は、突帯を2条あるいは3条めぐらしている。突帯は、径2cm前後の粘土紐を円筒周囲にめぐらせた後、人差し指、親指、中指の三本を用いてナデを施し円筒外面に圧着させている。ナデを施す際に、三本の指に均等に力を加えていれば断面は台形に、人差し指に特に力を加えていれば断面はM字形に、人差し指にほとんど力を加えずに、親指と中指に力を加えると断面は三角形になる。
- ⑤ 最後に刃物を用いて2箇所に穿孔を施している。穿孔は円形を基本とし、一部に楕円形、または半円気味のものも見られるが、これらは皆焼成の際の焼け歪みであると考えられる。

2-2 製作技法の分類

観察を行った埴輪のうち、完形、もしくは全体像が把握できるものは、21点であった。ほとんどの埴輪は2条突帯であるが、一部に3条突帯のものが含まれている。

口径は17.0cmから28.5cmまでであるが、平均的には21cmから22cmのものが多い。口径が27cm以上の大形品は、突帯が3条となり、他とは区別して考えなければならない。底径は10.5cmから18.0cmまでであるが、11cmから12cmのものが多い。器高は30.0cmから43.5cmまでであるが、35cm前後のものが多いようである。従って、今宮遺跡4号墳の円筒埴輪のうち2条突帯のものに限っていえば、口径が21cm~22cm、底径11cm~12cm、器高は35cm前後にほぼ統一がなされ、完成品にあまりばらつきが見られない。これは、埴輪製作の上で、規制が働いていたことを示している。外観的に大きな差異が認められれば、実際古墳に並べた際に見栄えが悪くなるからであろう。このよう

な規制の下で、それぞれの工人集団は、それぞれが伝統的にもつ技法を駆使して埴輪製作にあたった。ここでは、埴輪製作の順に技法の分類を行った。

底部

底部製作の前段階で作られる基部の幅は、4.5cm~5cm、6~7cm、8cm以上の3種に大きく分類される。それぞれを底部製作A、B、C技法とする。基部の幅は、大形の3条突帯のものも、2条突帯のものもほとんど変わらない。3つの技法ではB技法のものが圧倒的に多く、8cm以上のものや、5cm以下のものは数少ない。

口縁部

口縁部をヨコナデする際に、人差し指よりも、中指と親指に力をいれ、口唇部が丸みを持つものを口縁部A技法、人差し指に力をいれ、口唇部中央がくぼむものを口縁部B技法、3本の指それぞれに力をいれ、特に口縁部内面のヨコナデ部分がくぼんでいるものを口縁部C技法と呼ぶ。3つの技法では、B技法のものが最も多く、A技法がそれに次いでいる。C技法は少ない。

外面調整及び突帯

ハケの本数は、2cmあたり何本あるかを比較した。その結果、6本から9本が最も多く、最高では27本のものが見られた。2cmあたりのハケの本数が、5本以下のものをハケA技法、6本~9本のをハケB技法、10本~16本のをハケC技法、20本以上のものをハケD技法とする。また、外面調整にハケを用いず、ナデを施すものをハケE技法とする。

突帯は、断面三角形のものを突帯A技法、断面台形のものを突帯B技法、断面M字形のものを突帯C技法とする。B技法とC技法の差は曖昧な部分が多いが、中央部が少しでもくぼんでいるものはC技法として捉えた。

内面調整

口縁部ヨコナデの直下にヨコハケを1~3段施し、穿孔部分まではナナメハケ、以下は縦方向のナデを施しているものを内面A技法、A技法に似るが、

ヨコナデ下のヨコハケを施さないものを内面A'技法と呼ぶ。

口縁部のヨコナデの直下にヨコハケを1～3段施し、その下に10cm前後ナナメハケ、以下は縦方向のナデを施すものを内面B技法、B技法に似るが、ヨコナデの下のヨコハケを施さないものをB'技法と呼ぶ。

一部にハケが見られるが、ほぼ全面にナデを施しているものを内面C技法と呼ぶ。

口縁部以下全面にハケを施しているものを内面D技法と呼ぶ。

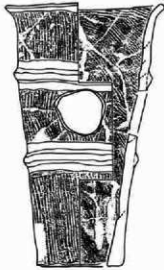
内面調整では、A技法、A'技法のものが圧倒的に多く、次いでC技法のものが多し。B技法、D技法は少ない。

波志江今宮4号墳出土埴輪分類表

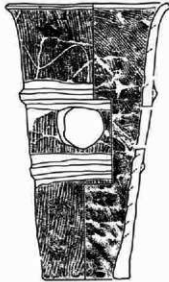
図版番号	口径	底径	器高	基部幅	突帯	口縁部	内面	ハケ	ヘラ記号	備考
59	28.5	18.0	43.5	7.0	B	B	A	C(12)	B	3条突帯、大型
60		11.5	40.0	6.0	B	B	C	A(4)		全体に歪み、パランスが悪い、ハケは極めて粗い目
61	23.0		39.0	5.5	B	C	B	A(5)		3条突帯、突帯の幅は狭い
63	24.5	12.5	35.5	9.0	B	B	A'	C(13)	A	
64				5.0	B	B	A	B(9)		
65	24.0	15.0	38.0	8.0	B	B	D	B(8)		突帯は器面の接点が高く、歪んで付いている。
66		16.0	41.0		B	B	D	B(8)		基部はなく、幅4cmの粘土紐マキアグ
67	22.0	12.0	36.5	6.0	B	B	A	B(6)		突帯の突出度は低い
68	21.0	12.0	35.0	7.0	B	B	A	B(6)		1箇所にクナ、ナナメハケを施している。
69	19.5	12.0	32.0	6.0	B	A	C	D(26)	A	内面は口縁部付近に極薄くハケが入るのみであとはナデ
70	21.0	10.0	35.0	8.0	A	A	A	B(7)	A	
71				6.0	B	A	A	B(7)	A	
72	21.5	11.5	35.0	6.0	B	B	A	B(7)	A	
73		12.0	32.0	5.0	B	A	A	B(6)	A	
74	20.0	11.0	34.0	6.5	B	B	C	E		
75	21.0	13.0	30.5	7.0	B	C	B	D(26)	D	ハケは極細
76	27.0	13.0	30.0	6.0	B	C	C	E		底部がかなり厚手である
77		12.0	33.0	8.0	B	B	C	C(11)		内面は口縁部のみヨコハケ
78	18.5	13.0	37.5	8.5	B	A	A	C(16)		表面は幅の狭いハケ、器高が高く、突帯の幅は狭い
79	22.0	10.5	35.0	6.0	B	C	C	C(10)	A	
80	22.5	12.5	37.0	6.0	B	B	A	B(7)	A	
81	22.5	11.0	34.0	6.0	B	A	A	B(7)	A	穿孔より下はマキアグが良く観察できる
82		12.0	35.0	6.0	B	B	B	B(6)	A	
83	19.5	16.0	31.0	不明	A	B	A'	B(9)	C	口縁部は直立気味
84	21.0	13.0	33.5	7.0	A	B	A	C(13)	C	
85				7.0	B	A	A	C(11)	A	内面のハケは弱い
86				6.5	B	A	A	B(6)	A	非常に丁寧な作り
87				5.5	B	B	A	B(6)		
88			35.5	7.0	B	A	A	C(13)	A	
89	19.0	11.0	33.0	7.0	B	C	C	D(26)		
90	17.0	12.0	31.5	7.0	A	B	A	B(7)		突帯は歪んで付いている。底部に板状工具の痕
91	22.0	12.0	35.0	不明	B	B	B'	C(11)	D	口縁部内面ヨコハケなし
92				6.0	B	B	A	B(6)		
93					B	A	C	E	A	
95					B	B	D	C(10)		大型、突帯は幅広くしっかりしている。
96					B	C	B	B(6)	D	他の個体と技法が異なる
97					B	C	B	D(26)		ハケは極細で、突帯は幅が狭く突出度が高い
98					A	A	A	B(9)	C	
99	19.0				A	B	A	B(7)		
99	20.0				A	B	A	B(8)		穿孔は半円気味
100	21.0				B	A	C	E	D	突帯は丸みを持つ。
101	27.0				B	B	B	C(15)	B	内面調整は他と異なる雰囲気を持つ
102					B	B	A	B(6)		
103	19.0				A	B	A'	B(6)		
104	24.0				C	C	B'	B(7)		
106					B	C	C	E		
107					B	A	C	E		突帯は比較的突出度が高い

第5章 成果と問題点

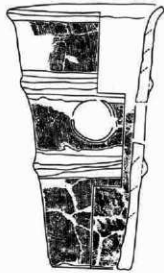
図版番号	口径	底径	器高	基部幅	突帯	口縁部	内面	ハケ	へう記号	備考
108					B	B	A	B(9)		
109					B	B	B	B(7)		
112					B	C	A'	D(27)	A	突帯は低いがしっかりした作り
113					B	B	A?	C(13)		突帯の突出度は低いが丁寧な作り
114					B	B	A	B(7)		大型?外面はタケハケ、ナナメハケの組み合わせ
115					B	A	A	C(11)		
116					B	A	C	E		
117					B	A	A?	A(5)		
121					B	A	A	B(6)	A	口唇部中央は強く窪む
122					B	B	A?	B(8)		突帯は丸みを持つ
123					C	A	C	E		口唇部中央は大きく窪む
127					C	B	A?	C(13)		
130					C	B	B	B(7)		ハケは丁寧に施されている
131					B	A	A	B(7)	A	
136					B	B	A?	B(8)		外面は強いハケ、突帯はしっかりした台形
138					B	B	B	B(8)		3条突帯
143					B	B	B	C(11)		突帯は丸みを持つ
144	21.0	11.0	34.0	7.0	B	C	A(5)	A(5)	D	巻き上げ痕が良く観察できる
145					B	C	C	C(10)	D	底部の歪みを修正するために粘土はり付け、基部は作らずマキアグ
146		11.5		6.0	B	C	C	C(11)	A	
147				6.0	B	A	A	B(6)		
150		12.0		5.5	B	A?	B(7)	B(7)		突帯は丸みを持つ
151		12.0		6.5	B	A?	B(6)	B(6)		ハケは粗いが丁寧に施している。
152				7.5	B	C	C	C(12)		
154		11.5		6.0	B	A?	B(6)	B(6)		
155		13.0		不明	B	D	C	C(10)		突帯は丸みを持つ、底部裏面は平坦
156				7.0	B	A	A	B(6)		
158				6.0	B	A	A	B(9)		
159				6.0	B	D	D	C(13)		
160				7.0	B	B?	C	C(11)		
161				7.0	B	A?	B(6)	B(6)		突帯は丸みを持つ
163		11.5			B	A	A	B(6)		
164		13.0		6.5	B	A?	B(7)	B(7)		穿孔から下のマキアグはほとんど観察できない。
165		14.0		7.0	B	B	B	B(7)		
166				7	B	C	C	E		
168		11.5		4.5	B	B	B	B(6)		突帯は台形であるが丸みを持つ
170					B	A?	B(6)	B(6)		
172		15.0		7.0	B	C	C	C(11)		
174		11.0		5.0	B	C	C	E		
175				6.0	B	C	B	B(6)		
176		12.0		5.0	B	C	C	E		
179		17.5		6.5	B	D	D	D		大型
181		12.0		6.0	B	A?	B(6)	B(6)		



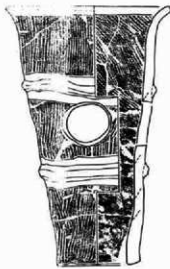
No.72
 突帯 : B
 口縁 : B
 内面 : A
 ハケ : 7
 記号 : A



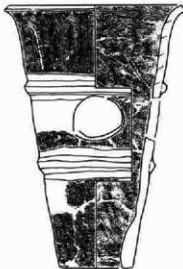
No.80
 突帯 : B
 口縁 : B
 内面 : A
 ハケ : 7
 記号 : A



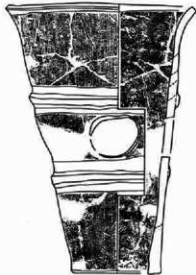
No.85
 突帯 : B
 口縁 : A
 内面 : A
 ハケ : 11
 記号 : A



No.87
 突帯 : B
 口縁 : B
 内面 : A
 ハケ : 6
 記号 : 一

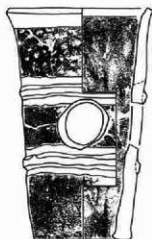


No.88
 突帯 : B
 口縁 : A
 内面 : A
 ハケ : 13
 記号 : A

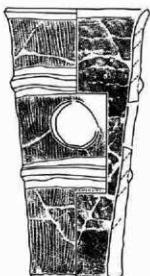


No.63
 突帯 : B
 口縁 : B
 内面 : A'
 ハケ : 13
 記号 : A

第116図 円筒埴輪と製作技法(1)



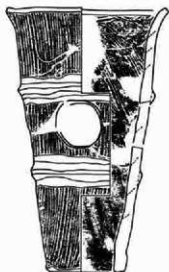
No.75
 突帯 : B
 口縁 : C
 内面 : B
 ハケ : 26
 記号 : 一



No.82
 突帯 : B
 口縁 : B
 内面 : B
 ハケ : 6
 記号 : A



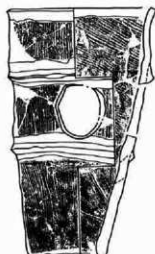
No.91
 突帯 : B
 口縁 : B
 内面 : B'
 ハケ : 11
 記号 : D



No.70
 突帯 : A
 口縁 : A
 内面 : A
 ハケ : 7
 記号 : A

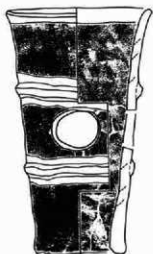


No.90
 突帯 : A
 口縁 : B
 内面 : A
 ハケ : 7
 記号 : 一

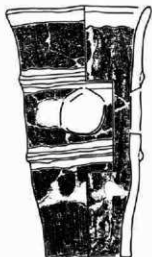


No.83
 突帯 : A
 口縁 : B
 内面 : A'
 ハケ : 9
 記号 : C

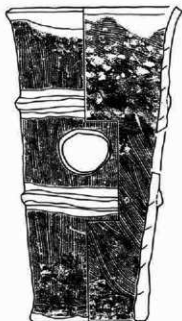
第117図 円筒埴輪と製作技法(2)



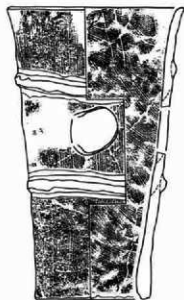
No.69
 突帯：B
 口縁：A
 内面：C
 ハケ：26
 記号：A



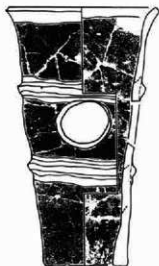
No.89
 突帯：B
 口縁：C
 内面：C
 ハケ：26
 記号：一



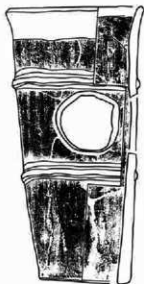
No.66
 突帯：B
 口縁：B
 内面：D
 ハケ：8
 記号：一



No.65
 突帯：B
 口縁：B
 内面：D
 ハケ：8
 記号：一



No.74
 突帯：B
 口縁：B
 内面：C
 ハケ：ナデ
 記号：一



No.78
 突帯：B
 口縁：A
 内面：A特
 ハケ：16
 記号：一

第118図 円筒埴輪と製作技法(3)

ヘラ記号

ヘラ記号は、「∨」のものをヘラ記号A、「×」のものをヘラ記号B、「X」のものをヘラ記号C、その他あるいは不明のものをヘラ記号Dと呼ぶ。ヘラ記

号Aは18例、ヘラ記号Bは2例、ヘラ記号Cは3例、その他確認できなかったものは6例あり、圧倒的にヘラ記号Aが多い。



No.68-A



No.70-A



No.72-A



No.82-A



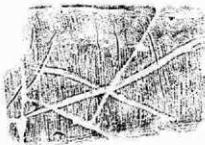
No.69-A



No.59-B



No.101-B



No.84-C



No.98-C



No.75



No.96



No.145

第119図 ヘラ記号

2-3 製作技法と工人集団

埴輪の形態的な差が工人個人の技術差によるものなのか工人集団の差によるものなのかを検討する場合、埴輪製作の各段階において他と異なる工程が含まれているかどうか、あるいは他と異なる工具が使用されているかどうかを確認しなければならない。例えば、口唇部の僅かな傾きの差や、厚味の差は、同一工人であっても多少の違いが現れるであろうが、口唇部のヨコナデの後にハケが施されていたり、刻みが施されていれば、全く異なる工程が加えられた事になり、異なる工人集団によるものの可能性が高くなる。ここでは前項であげた各工程における技法を検討し、工人集団の差に属するものを抽出していきたい。

底部製作の際の3つの技法では、ほとんどが底部B技法に属するものであり、工人集団の差を表しているとは考えにくい。器高40cm以上の大形品であっても、必ずしも大きな基部を作っているとは限らない事から、7cm前後の基部を最初に作る事は、各工人集団の共通技術であったと考えられる。

口縁部のヨコナデ技法では、観指、人差し指、中指の微妙な力の入れ具合によって形態が変化することから、3技法が工人集団の差を表しているとは考えにくい。しかし、口縁部B技法の中には、かなり意識してくぼみを加えたものもあり、個人差としては扱えないものも希にあるが、今回は除外して考える事とした。

ハケの本数は、使用する工具により変化するため、工人集団の差を表しているとは考えられない。技法的に特に良く似た個体で、同一工人が製作したと考えられる埴輪には、本数が全く同じハケが使用されている事から、個人持ちの工具があったと推定される。ハケを使用した外面調整は、本数の違いこそあれ、ほとんど同じであり、外観も大差はないが、No78は他の埴輪のハケの当て方と異なり、幅の狭いハケをヘラゲズリ状に面取りしながら、縦方向に一気に施している。ハケから他と異なる工人集団が想定できるのはこの1個体だけである。

外面調整にハケを用いず、ナデ調整を施しているハケE技法は、ひとつの工人集団を示している。

外面ナデ調整の円筒埴輪は、波志江今宮遺跡では4号墳のみで確認されており、1号墳、7号墳では出土していない。県内でもこのような例はあまり見当たらない。また全ての埴輪がハケを持たない例は皆無であり、通常のハケ調整の円筒埴輪の中に一部ナデ調整のものが含まれている場合が多いようである。県内の出土例としては、藤岡市堀ノ内遺跡群FK-1号墳、同FK-7号墳(いずれも6世紀中葉)、渋川市金井前原古墳(6世紀前半)、勢多郡粕川村白藤古墳群A-1号墳(6世紀前半)などがあげられる。近県では埼玉県本庄市公藤塚古墳、同東松山市雷電山古墳等で出土しているが、いずれも5世紀代の古墳である。

内面調整は、それぞれの技法が工人集団の差を表していると考えられる。最も個体数の多い内面A、A'技法を見ると、同じ技法の中でも技術的に優れていて均整のとれた埴輪を製作している工人と、技術がやや劣り、全体的なバランスが崩れた埴輪を製作している工人の差が顕著である。内面B(B')技法は、A、(A')技法と良く似ており、A(A')技法のバリエーションとも考えられるが、ここでは分離して考える事とする。

突帯B技法と突帯C技法の差はほとんど認められない。突帯C技法の中には意識して中心部をくぼめたと考えられる例もあったが、ここでは除外しておきたい。突帯A技法と、突帯B、C技法は添える指の本数ばかりではなく、完成した埴輪の外観も異なってくる事から、工人集団の差として良いと考えられる。

ヘラ記号は、異なる技法の埴輪に対して同一の記号が刻まれている場合が多く見られる。このことから単純に一つの記号が一つの工人集団を表すのではない事がわかる。

2-4 波志江今宮4号墳の工人集団

以上見てきたように、波志江今宮4号墳の工人集団の差は外面調整のハケの有無、内面調整の技法と、

突帯の技法に最もよく表れていると考えられる。従って、これら3つの技法を中心に考察を進めて行きたい。

波志江今宮4号墳の円筒埴輪を製作している工人集団は、まず外面調整にハケを使用する集団とハケを使用せずにナデを施す集団と大きく分けられる。ここでは仮にハケグループとナデグループと呼ぶ事にする。ナデグループは10個体が確認されているが、外面調整は全てC技法、突帯は主にB技法を用いている。表記が煩雑になるのを避けるために、外面調整—内面調整—突帯の順で記号化し、ナデ—C—Bのように表記する事とする。このナデ—C—Bグループの口縁部は全てA技法で作られている。

ハケグループで内面A技法の埴輪は、不確かなものも加えて43個体確認されている。この中で、突帯A技法のものが6個体あり、残りはB技法とC技法である（C技法はNo127の1点のみ）。

ハケ—A—Aグループの口縁部は4個体がB技法、1個体がA技法、1個体が不明である。またヘラ記号を持つ埴輪が3個体確認されており、うち2個体がヘラ記号C〔X〕1個体がヘラ記号A〔I〕である。

ハケ—A—Bグループは36個体確認され、うち1個体は3条突帯の大形品である（No59）。数の上で波志江今宮遺跡4号墳の円筒埴輪の中心となっている。口縁部A技法が8個体、B技法が10個体で残りは不明である。ヘラ記号を持つ埴輪は11個体あり10個体はヘラ記号Aで、1個体がヘラ記号C〔X〕であるが、これは3条突帯の大形品（No59）であり、他と分けて考える必要がある。従って、ハケ—A—Bグループは、確認されている限りヘラ記号A以外は刻まれていない事になる。

ハケグループで内面A技法の埴輪は4個体確認されており、ハケ—A—Aグループのものが2個体、ハケ—A—Bグループのものが2個体確認されている。確認されている限りではハケ—A—Bグループの方がハケ—A—Aグループよりも目の細かい工具を使用してハケを施しているようである。

ヘラ記号を持つ埴輪は3個体あり、2個体がヘラ記号A、1個体がヘラ記号Cである。

ハケグループで内面B技法の埴輪は不確かなものも加えて9個体が確認されている。これらの中には突帯A技法の埴輪は含まれていない。No61は3条突帯の大形品である。

ハケ—B—Bグループの埴輪は8個体、ハケ—B—Cグループの埴輪は1個体である。口縁部はB技法を用いているものが4個体、C技法を用いているものが4個体ある。ハケ—B—Bグループの中には2cm当たりのハケの数が26本と、きわめて細かい工具を使用している工人が含まれている。また、3条突帯のNo61はこのグループに属している。ヘラ記号を持つ埴輪は4個体確認されており、ヘラ記号Aが1個体、ヘラ記号Bが1個体、その他の記号として「J」が1個体（No75）「〜」が1個体（No96）である。これらのうちNo96は他の埴輪と工具の使用の仕方が若干異なるようで、全体の雰囲気も他と比較して異質である。

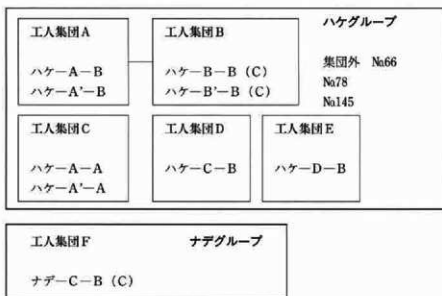
ハケグループで内面B技法の埴輪は2個体確認されている。No104はハケ—B—Cであり、口縁部はC技法である。No91はハケ—B—Bであり、口縁部はB技法である。非常に丁寧に整形され、「〜」のヘラ記号を持つ。

ハケグループで内面C技法の埴輪は9個体確認されている。突帯は全てB技法である。口縁部はA技法が1個体、B技法が2個体、C技法が2個体確認されている。ヘラ記号を持つ埴輪は5個体確認されており、ヘラ記号Aが3個体含まれている。No145のヘラ記号は「>」で、波志江今宮4号墳ではこれ以外に見られない図柄である。また、刻まれている位置も、他の埴輪が口縁部であるのに対し、穿孔の並びである事も特徴的である。この埴輪は技法的にも他と異なる部分が多い。口縁部が欠損しているので、全体像は確認できないが、まず基部となる粘土帯を作らずに、いきなり粘土紐を巻き上げているようである。そのために底部に負担がかかり、かなりの歪みが生じてしまっている。これを解消するために底

部に粘土を大量に貼り付けている。従って底部は円形を成しておらず、崩れた楕円形を呈する。また突帯は突出度が高く、断面四角形を呈して、しっかりした稜を持っている。基部の調整はかなりいい加減で稚拙な感じを受けるが、突帯の作りはしっかりしており、単純に技術が劣るとは言い切れない。なぜこのような作り方をしたのかは不明である。

ハケグループで内面D技法の埴輪は6個体確認されている。突帯は全てB技法である。口縁部は確認されている限り全てB技法である。ヘラ記号を持つ埴輪は確認されていない。このハケD-Bグループに属する埴輪はそれぞれに特徴があり、技法としてのまとまりに欠ける。No95、No179は大形品で3条突帯の可能性もある。特にNo179は底部が楕円形であり、底部の先端に強いヨコナデを施している事が特

徴的である。No65は突帯の突出度が極めて低く、しかも歪んで取り付けられている。口縁部内面に2本の平行沈線が見られるが、意識してつけられたのかどうかは不明である。内面は口縁部にヨコハケを施し、口縁部以下は底部までナメハケを施している。No155は内面全体に荒いナメハケを施しており、マキアゲや基部の粘土帯の痕跡は全く残っていない。突帯はかなり崩れて丸みを持つ。No66は基部の粘土帯を作らず、幅4cmの粘土紐を巻き上げて成形を行っている。口縁部は他と比較してかなり厚く作られている。突帯は突出度が低く、やや崩れている。内面は口縁部までヨコハケ、ナメハケを施し、穿孔部分までナデ、穿孔部分から下はナメハケを施している。



以上をまとめてみると、波志江今宮4号墳の円筒埴輪の製作にあたった6組の工人集団の姿が浮かび上がってくる。

工人集団Aは、更にハケ-A-Bグループと、ハケ-A'-Bグループに細分が可能である。また、工人集団Bはハケ-B-B(C)グループと、ハケ-B'-Bグループに細分が可能である。この工人集団Aと工人集団Bは互いに技法の共通点が多く、一つの系統のグループとしてまとめられるかも知れない。

工人集団Cはハケ-A-Aグループと、ハケ-A'-Aグループに細分が可能である。この集団は、断面三角形の突帯をつけるグループであり、最も先進的な省略技法を身につけていると考えられる。

工人集団Dはハケ-C-Bグループであり、内面調整に特徴を持つ。

工人集団Eはハケ-D-Bグループであるが、集団としてのまとまりにやや欠ける。また、ハケグループの中では、No78、No66、No145は、他と異なる技法

により製作されているので、ここでは分離して考えたい。

工人集団FはナデーC—B (C) グループであり、唯一のナデーグループである。さきに述べたように、円筒植輪の外周調整としてのナデーは、埼玉県に於いては5世紀代に姿を消しており、群馬県では6世紀後半まで一部に残存するようである。また、波志江今宮4号墳よりやや後出的な今宮7号墳からは1個体も出土がみられない事から、古い伝統的な技法を持つグループとすることができる。

それでは、それぞれの工人集団はどれくらいの規模で植輪の製作を行っていたのであろうか。最も資料に恵まれている工人集団Aの詳細が分析を行いたい。

工人集団Aの円筒植輪の中で2cm当たりのハケの本数が6本のものは17個体ある。そのうち口縁部A技法はNo73、No86、No121の3個体であり、B技法はNo67、No68、No87、No92、No102の5個体が確認されている。それぞれは整形技法も全体のプロポーシオンも類似しており、一人の工人の作業として考える事ができる。このように、ハケを施す工具は、工人一人一人が所有していた可能性が高い。同様にハケ7本で口縁部A技法はNo71、No81の2個体、ハケ7本で口縁部B技法はNo72、No80の2個体、ハケ8本はNo122、No136の2個体、ハケ9本で口縁部B技法はNo64、No108、No158の3個体、ハケ11本で口縁部A技法はNo85、No115の2個体、ハケ13本で口縁部A技法はNo88、B技法はNo113のそれぞれ1個体ずつ、内面A'技法でハケ13本はNo63、ハケ27本はNo112でそれぞれ1個体ずつである。このように、工人集団Aは更に11の細かい分類が可能であり、これが工人集団Aの工人数を表していると考えられる。すなわち、工人集団の構成人数は、少ないところで数名、多いところで十名前後であろう。

3. いくつかの問題点

3-1 ヘラ記号と工人

次に、それぞれの工人集団とヘラ記号の関係を考

えてみたい。

工人集団Aからヘラ記号Aが12個体、Bが1個体確認されている。特に、口縁部A技法のものは8個体中7個体にヘラ記号Aが見られ、記号が刻まれる比率が極めて高い。

工人集団Bからは、ヘラ記号Aが1個体、Bが1個体、「へ」が2個体「J」が1個体確認されている。

工人集団Cからはヘラ記号Aが1個体、Cが3個体確認されている。特に、ヘラ記号Cは工人集団Cに特有のものであり、他の工人集団には見られない。

工人集団Dからはヘラ記号Aが3個体、「D」が1個体、不明が1個体確認されている。

工人集団Fからはヘラ記号Aが1個体、「フ」が1個体確認されている。

各工人集団とヘラ記号の関係をまとめたのが次のページの図である。

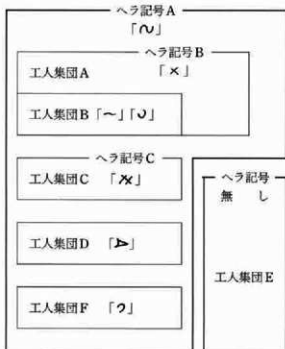
外側の枠に囲まれている工人集団は、それぞれ記載したヘラ記号を持つ。

ヘラ記号Aは全てのヘラ記号を持つ工人集団に共通して存在し、特に工人集団Aに於いて顕著にみられる。ヘラ記号Bは工人集団AとBに共通してみられるが、工人集団Bには独自の記号である「へ」と「J」が存在する。このことは、工人集団Bの独立性を示していると思われる。

工人集団Cにはヘラ記号Aと独自の記号であるヘラ記号Cが存在する。ヘラ記号Cは他の集団では全く使用されておらず、断面三角形の突帯と共に、この集団の独立性を強く主張しているようである。

工人集団DとFは独自の記号と呼べるようなまとまったヘラ記号は確認できていないが、それぞれに「D」「フ」という記号が確認されている。工人集団Dの「D」は刻印されている位置も形も他と全く異なることから考察からは除外して考えたい。

また前項で指摘したように、工人集団Aと工人集団Bは技法的に、非常に深いつながりがあると共に、ヘラ記号に於いては互いにヘラ記号Bを持つという共通点が指摘できる。このことから工人集団Aと工人集団Bは同系統の集団と考えて良いのではない



だろうか。

工人集団D、Fから集団の記号として決定的なヘラ記号が確認できないのは、残存していた資料の絶対数が足りなかったためであると考えられる。

以上をまとめてみると、ヘラ記号は大きく2つの種類に分類でき、それぞれが異なった意味、内容を持つ事が推定される。

すなわち、ヘラ記号Aのように、全体に共通し、工人集団を越えて存在する記号と、各工人集団固有の記号の2種が存在し、前者は埴輪製作全体を統率するもの、あるいは押られる首長そのものを象徴し、後者は各工人集団のシンボルとして施されているように思われるのである。

従って、ヘラ記号と工人集団の関係を示すこの図は、そのまま工人集団統率の系統図のように見える。すなわちヘラ記号Aが象徴する人物、あるいは集団が、埴輪製作に於ける共通理解的な事項、例えば、埴輪の大まかな大きさ、口径、底径、器高のバランス、突帯の数などを指示する監督的な立場で、それぞれのヘラ記号が象徴する工人集団は、与えられた規制の範囲で独自の埴輪製作を行っていくと推定される。工人集団には、少人数で独立性の強い集団も

あるが、工人集団Aと工人集団Bのように比較的人数が多く、互いに技術的な共通性を持つ集団もある。

それでは、No66、No78、No145のように工人集団から全く隔絶したような埴輪はどうして存在するのだろうか。認識できなかったグループが存在する可能性が高いのであるが、工人集団だけでは手が足りなくなり、付近の土師器製作者等を臨時で徴集したということも考えられ、興味深い。

3-2 出土位置との関係

図4は、出土した埴輪の位置とその工人集団を示したものである。

波志江今宮4号墳は、墳丘が大きく削平されていたため、埴輪は全て周堀に落ち込んだものであり、当然の事ながら元位置を保っているとは言えない。しかし、ここではおおよそその位置関係で考えてみたい。

埴輪は、墳丘より西側に多く落下している。従って、古墳の削平は東から西に向かって行われたと考えられる。

数少ない西側の周堀に落下している埴輪は、工人集団Aを中心に、一部工人集団Fと工人集団Bを含む。東側の埴輪は大きく北端部、北西部、南西部、くびれ部に集中地点が見られる。

北端部は工人集団Aを中心に、工人集団B、D、E、Fが含まれている。北西部には工人集団A、B、C、D、Eが見られ、ややCの比率が高いようである。南西部は工人集団Aを中心に、工人集団D、Fが含まれている。くびれ部は、工人集団Aを中心に工人集団B、D、Fが見られる。

こうして見る限りでは、古墳上の埴輪の配置には一定の基準がみられず、各工人集団の埴輪は一箇所に集中する事なく分散されているようである。

このことから、埴輪の生産体制と埴輪の古墳への設置は、別の集団によって行われていたことがわかる。

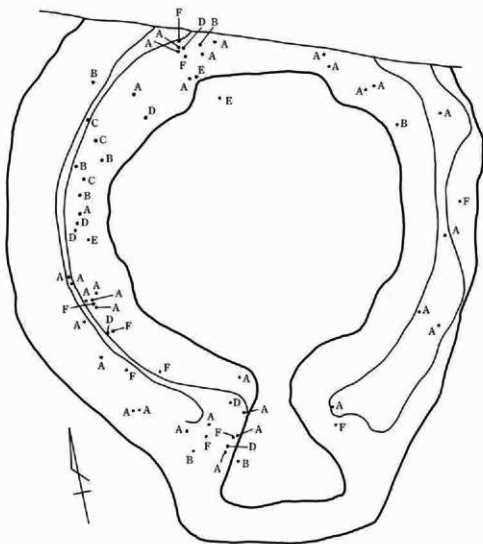


図120 円筒埴輪出土位置図

4. ま と め

波志江今宮4号墳出土の円筒埴輪を検討した結果、以下の事が判明した。

- ① 円筒埴輪を製作したのはA～Fの6つの工人集団であり、それぞれが数人から十数人の構成人数からなる。
- ② 工人集団は、ある程度共通した技法を持つものと、全く独立した技法を持つものに分けられる。共通した技法を持つ集団は、共通したヘラ記号を用いている可能性がある。
- ③ ヘラ記号は、埴輪生産に携わった全ての工人集団に関係するものと、各々の工人集団を表

すものの2種類が存在するようである。

- ④ 工人集団は埴輪の製作のみに関わり、埴輪の設置は、他の集団によって行われたようである。

参考文献

- 吉田恵二 「埴輪生産の復元」 『考古学研究』 19-3 1973
 川西空幸 「円筒埴輪総論」 『考古学雑誌』第64巻 第2号 1978
 橋本博文 「埴輪研究の動静を巡って」 『歴史公論』 63-2 1981
 黒田晃 「円筒埴輪から見た今井神社古墳の築造年代」
 『研究紀要9』 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 1992
 『埴輪の安運』 第6回三栗シンポジウム資料 1985
 『下輪牛伏遺跡』 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
 『白藤古墳群』 柏川村教育委員会 1989
 『神保下塚遺跡』 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
 『矢田野エジリ古墳』 石川県小松市教育委員会 1992

3. 波志江地域の群集墳について

1969年度に伊勢崎市教育委員会により発掘調査された4基の宮貝戸古墳群のうちの2号墳について若干の考察を加え、波志江沼西古墳群(波志江今宮遺跡・宮貝戸古墳群の総称)の成立前史を見通したい。

紹介する2号墳は、古墳の周堀の一部分を確認したのみで墳形は円墳、規模は18mと考えられる。この古墳の周堀からはパン箱で10箱ほどの埴輪片が出土している。出土した埴輪が本地域では最古級と考えられ注目されたが、報告書には遺物図の記載が無かったために今回、伊勢崎市教育委員会の御高配を得て波志江今宮遺跡の報告書に周辺の遺跡として報告し、波志江地域の群集墳の重要性を強調したい。

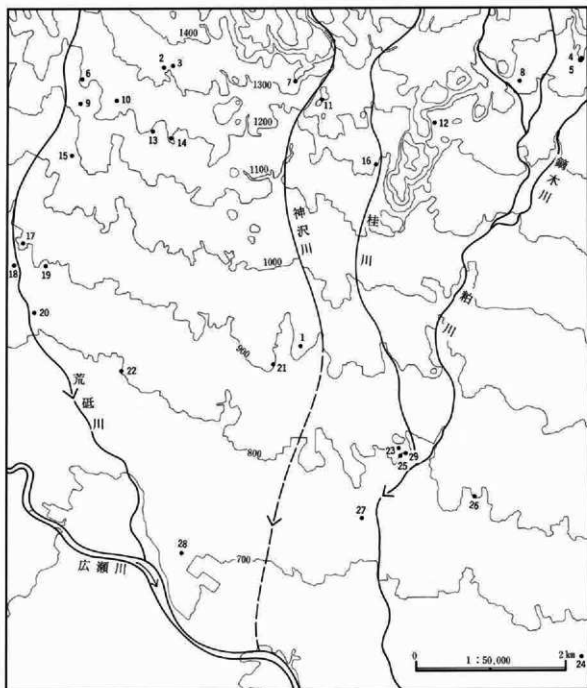
本古墳出土の円筒埴輪には普通円筒埴輪と朝顔形埴輪がある。普通円筒埴輪の器高は35cm～62cmに復元され大・中・小に分類できる。朝顔形埴輪は85cmに復元される。凸帯は突出度は低いものの台形でしっかりしている。透孔は円形と半円形が確認され各個体にばらつきはあるが、1段に对て穿孔することでも共通している。外面調整は1次タテハケだけのものと2次調整にB種(止繞)ヨコハケの2種類に分類できる。そのほか大形・中形の埴輪には外面に黒斑の残るもの、赤色の彩色が施されるもの、また口縁部に1つの小さな穿孔が見られるものや、笄状具で山形の円弧に平行線で充填する記号も見られる。

以上の特徴を持つ埴輪を出土する古墳を検討してみよう。2次調整にB種ヨコハケ・黒斑・赤色塗彩・半円形透孔を持つ埴輪を5世紀と考え、形態的に古相なもの、ヨコハケの槽粗から前半と後半に分類してみた。前半期は御富士山古墳・赤廻茶臼山古墳、後半期は丸塚山古墳・今井神社古墳が挙げられる。宮貝戸2号墳は、5世紀の後半期に比定される。

そこでこの古墳の縦糸となる年代と横糸となる古墳を赤城南麓の東西7.5Km、南北9Kmの判図(第121図)に位置づけ歴史的な解釈を加えたい。現在この地域で確認されている4世紀の墳墓は15遺跡であ

石塚久則

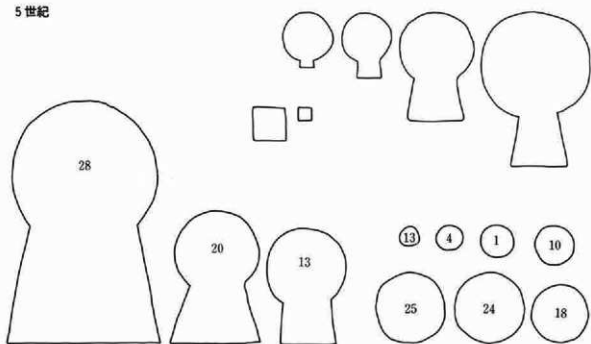
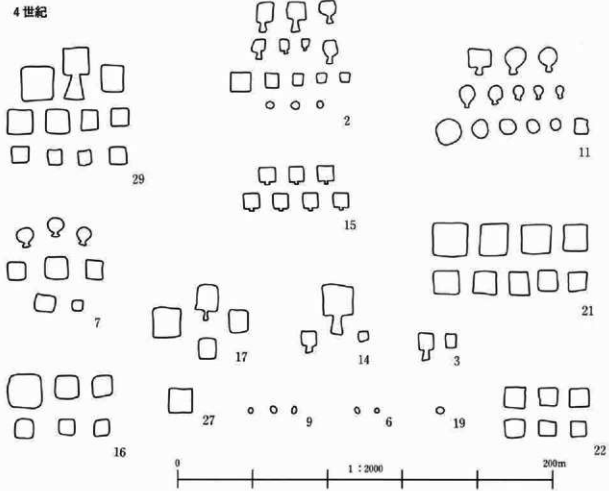
り、事前に周知されることもなく大規模な発掘調査時に群集墳として検出されている。そして5世紀の墳墓は14遺跡であるが、それらのほとんどは墳丘が遺存し周知され、周辺調査例は少なく群集墳の可能性については不明である。4、5世紀の分布状況は河川縁辺に集中する傾向は認められるものの両世紀を区分する目立った分布の変化は無い。そこで、各遺跡の墳墓の規模と墳形の組成を考えるために略図を作成した。(第122図)この図からは4世紀と5世紀では墳丘の規模の大小が明確に区分されることが判る。4世紀は方形・円形・帆立貝形・前方後方形と同一墳墓群内で多様な墳形を示すものの規模の比較ではどの墳形が優位な位置を占めるのか、判然としない。5世紀では前方後円形の御富士山古墳の系列、帆立貝形の丸塚山古墳の系列、円形の兼手塚古墳の系列、方形の新山遺跡の系列がそれぞれ大・中・小の規模で出現し前方後円形の墳形が圧倒的な優位にある。さらに前方後円形の前部は帆立貝形の造り出しを含めて前面を南方にむけることでも共通しており、地域を越えた広範な墓制の確立が窺える。広域な墓制の共通性を埴輪からも検討してみたい。(第123図)県内最大規模の太田天神山古墳と波志江地域に出現した最古の古墳、宮貝戸第2号墳との関係である。5世紀の前期と後期の年代的な差を認めつつも2次調整にB種ヨコハケ・黒斑・赤色塗彩・半円形透孔を持ち形態的にも類似点する埴輪は墳丘形態や規模、地域を越えて広範に結ばれていると考えよう。5世紀前半、畿内の大王朝から毛野の豪族に派遣された埴輪製作専門集団「土師部」は古墳時代を体現すべく明確に再編された地域首長に大王墓に樹立した埴輪と同様な埴輪の樹立を許可することによって畿内王権の確立をめざしたのである。毛野の豪族の系列の末端に位置する宮貝戸第2号墳はまさに佐位・勢多地域に埴輪を供給する土師氏(波志江)の本貫地であったと考えられる。



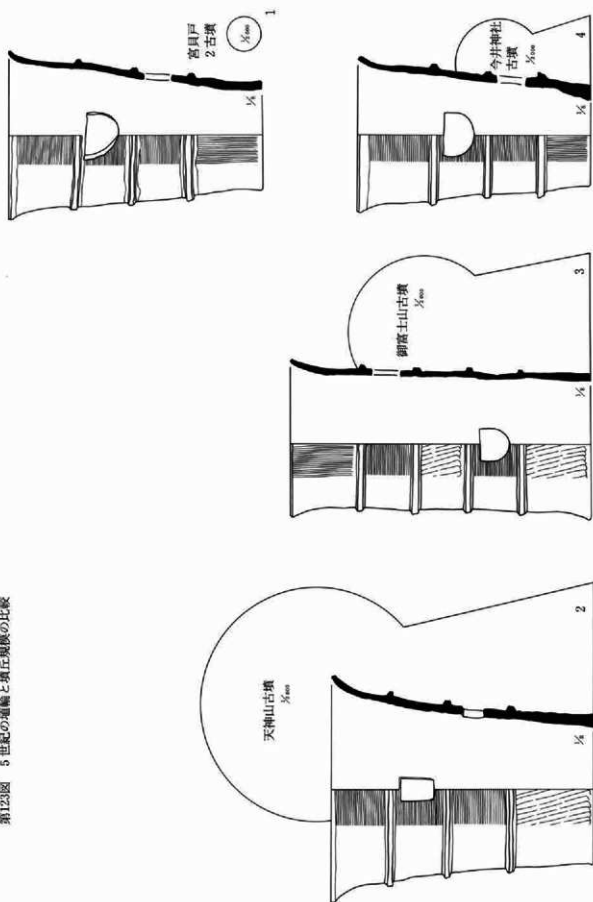
- | | | | |
|------------|------------|-------------|-------------|
| 1 宮貝戸遺跡 | 9 丸山遺跡 | 16 荒砥上川久保遺跡 | 23 地藏山古墳 |
| 2 荒砥東原遺跡 | 10 新山遺跡 | 17 荒砥北原遺跡 | 24 遠野古墳 |
| 3 荒砥中山遺跡 | 11 上綱引遺跡 | 18 おとうか古墳 | 25 殿手塚古墳 |
| 4 赤塚村299号墳 | 12 赤塚茶臼山遺跡 | 19 荒砥北三木堂遺跡 | 26 丸塚山古墳 |
| 5 磯十二所古墳 | 13 川籠笹戸遺跡 | 20 今井神社古墳 | 27 専蔵寺裏山遺跡 |
| 6 北原遺跡 | 14 堤東遺跡 | 21 荒砥二之堂遺跡 | 28 御富士山古墳 |
| 7 北山遺跡 | 15 荒砥諏訪遺跡 | 22 荒砥島原遺跡 | 29 伊勢崎東流通団地 |
| 8 堂谷塚古墳 | | | |

- | | | |
|-----------|------|------------|
| 1 宮貝戸第2号墳 | 18m | 伊勢崎市北志江町 |
| 2 古田天神山古墳 | 210m | 太田市大字内ヶ島新島 |
| 3 御富士山古墳 | 125m | 伊勢崎市安藤町779 |
| 4 今井神社古墳 | 71m | 前橋市今井町字白山東 |

第121図 赤城山南麓の4～5世紀の墳墓



第122図 4世紀と5世紀の墳墓の比較



第123図 5世紀の埴輪と墳丘規模の比較

第6章 分析・鑑定

1. 波志江今宮遺跡4号墳出土の人歯・骨

波志江今宮遺跡4号墳出土の人歯・骨

群馬県伊勢崎市波志江町に所在する波志江今宮遺跡4号墳から6本の人歯とその歯と同一人物のものと思われる骨片が出土した。歯は右下顎の臼歯で、右下顎骨の舌側半を伴っていた。

①第一小臼歯は、咬合面のほぼ全面に象牙質が露出し、歯冠形態の詳細は不明である。齧蝕は受けていない。

②第二小臼歯も、咬合面のほぼ全面に象牙質が露出する。遠心歯頸部にごく軽度の齧蝕がある。

③第一大臼歯は、保存状況が悪く、残存しているのは頬側半のみで、咬耗は歯頸部を越え歯根に至り、エナメル質を全く欠く、残存部位で見る限り齧蝕はない。

④第二大臼歯は、遠心歯頸部にごくわずか(歯冠高:2mm)エナメルが残るだけで、咬合面のほぼ全面に象牙質が露出し、歯冠形態の詳細は不明である。近心歯頸部には4.3×2.9mmの楕円形の齧蝕があるが歯髄までは達してなく、C₂の段階である。

⑤第三大臼歯は、近心頬側咬頭、近心舌側咬頭に象牙質が露出し、両咬頭の象牙質は連続して帯状をなす。頬側歯頸部には歯髄までは達しないC₂段階の齧蝕があり、その径は7.3×2.7mmである。

⑥その他、保存長15.4mmの歯根片犬歯?、保存長153.0mmの大腿骨片など四肢骨の小骨片が多数存在する。

以上の咬耗の程度は、本固体が老年期に達していることを示している。ただし、咬耗が過度に進んでいることで、歯の計測値は本来のものより小さくなっていて、その大きさを性別を推定するのは困難である。小金井(1934)によれば、古墳時代人の齧蝕は1人平均0.9本と非常に少ない。群馬県内出土の古墳時代人の場合も同様であり、齧蝕はきわめて稀で、

群馬県立大間々高等学校教諭 宮崎重雄

本遺跡以外では1例(未公表)を知るのみである。今宮4号墳の歯は咬耗が著しく進み、群馬県内で見ると、このような過度の咬耗を示す古墳出土の歯は稀である。

文献

藤田恒太郎(1949)歯の計測基準について、人類学雑誌、67(3)、47-59。

右下顎臼歯計測値(単位:mm)

	近心径	頬舌径	歯冠高	全長
第一小臼歯	6.7	8.9	4.7	16.7
第二小臼歯	6.7	8.4	5.6	17.5
第一大臼歯				13.8
第二大臼歯	9.5	9.6	0.0	13.7
第三大臼歯	10.3	10.0	5.3	15.0

計測法は藤田(1949)を用いた。

2. 出土埴輪の胎土分析

X線回折試験及び電子顕微鏡観察

1 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は第2表胎土性状表に示すとおりである。X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\text{m/m}$ の試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1-2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JD X-8020 X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40Kv, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02°, 計数時間: 0.5E S C。

1-3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によって行った。観察には日本電子製T-20を用い、倍率は35、350、750、1500、5000の5段階で行い、写真を撮影した。35~350倍は胎土の組織、750~5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

2 実験結果の取扱い

実験結果は第2表胎土性状表に示すとおりである。第2表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現れる各鉱物に特有のピークの高さ(強度)をm/m単位で測定したものである。電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト(Mullite)、クリス

(株)第四紀地質研究所 井上 巖

トバライト(Cristobalite)等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

1) Mo-Mi-Hb三角ダイヤグラム

第124図に示すように三角ダイヤグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。Mo, Mi, Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいい、別に検討した。三角ダイヤグラムはモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク高を、パーセント(%)で表示する。モンモリロナイトは $\text{Mo}/\text{Mo}+\text{Mi}+\text{Hb} \times 100$ でパーセントとして求め、同様にMi, Hbも計算し、三角ダイヤグラムに記載する。三角ダイヤグラム内の1~4はMo, Mi, Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。位置分類についての基本原則は第124図に示すとおりである。

2) Mo-Ch, Mi-Hb菱形ダイヤグラム

第125図に示すように菱形ダイヤグラムを1~9に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。モンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)の内、a) 3成分以上含まれない、b) Mont, chの2成分が含まれない、c) Mi, Hbの2成分が含まれない、の3例がある。菱形ダイヤグラムはMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch, Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの高さを各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、 $\text{Mo}/\text{Mo}+\text{Ch} \times 100$ と計算し、Mi, Hb, Chも各々同様に計算し、記載する。菱形ダイヤグラム内にある1~7はMo, Mi, Hb, Chの4成分を含み、各辺はMo, Mi, Hb, Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。位置分類についての基本原則は第125図に示すとおりである。

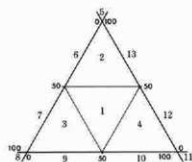
2. 出土埴輪の胎土分析

2-2 焼成ランク

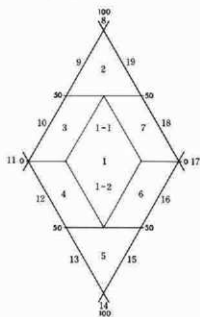
焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。ムライト(Mullite)は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバライト(Cristobalite)はムライトより低い温度、ガラスはクリストバライトより更に低い温度で生成する。これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI～Vの5段階に区分した。

- a) 焼成ランクI：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発砲している。
- b) 焼成ランクII：ムライトとクリストバライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。
- c) 焼成ランクIII：ガラスのなかにクリストバライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。
- d) 焼成ランクIV：ガラスのみが生成し、原土（素地土）の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。
- e) 焼成ランクV：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のI～Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。



第124図 埴輪胎土三角ダイヤグラム



第125図 埴輪胎土菱形ダイヤグラム

3 分析結果

3-1 タイプ分類

土器は第2表胎土性状表に示すように、第126図三角ダイヤグラム、第127図菱形ダイヤグラムの位置分類、焼成ランクに基づいてA～Gの7タイプに分類された。最も多いタイプはAタイプで、固体数は8個。次いでCタイプの4個、DとEタイプの3個とFタイプの2個、BとGタイプの1個という構成である。電子顕微鏡によるガラスの分析では波志江-1、19の2個が粗粒のガラスで構成される焼成ランクI～IIと高いが他は中粒のガラスが生成した焼成ランクIIIが主体となる。

Aタイプ：波志江-1、4、5、8、11、14、19、22 Hb
1成分を含み、Mont, Mica, Chの3成分に欠ける。
固体数は8個と最も多い。円筒埴輪と馬型埴輪が集

第6章 分析・鑑定

中する。

Bタイプ：波志江-9

Mica, Hb, Chの3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。固体数は1個。盾型形象埴輪である。

Cタイプ：波志江-3、6、13、20

Mica, Hb 2成分を含み、Mont, Chの2成分に欠ける。固体数は4個である。人物形象埴輪と円筒埴輪などで構成される。

Dタイプ：波志江-7、10、16

Mica, Hb, Chの3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。固体数は3個で、盾型形象埴輪、円筒埴輪、形象埴輪で構成される。組成的にBタイプと同じであるが検出強度が異なるために、位置分類が異なる。Bタイプも盾型形象埴輪である。

Eタイプ：波志江-15、18、21

Mica, Hbの2成分を含み、Mont, Chの2成分に欠ける。固体数は3個で、駒形神社の円筒埴輪と形象埴輪で構成される。組成的にはCタイプと同じであるが検出強度が異なるために、位置分類が異なる。

Fタイプ：波志江-2

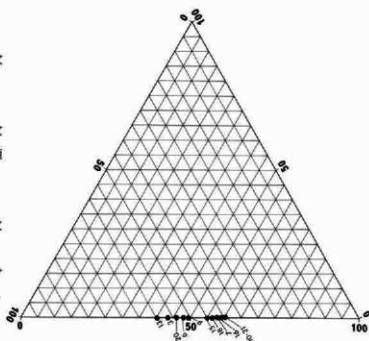
Mont, Hbの2成分を含み、Mica, Chの2成分に欠ける。固体数は1個。

Gタイプ：波志江-12、17

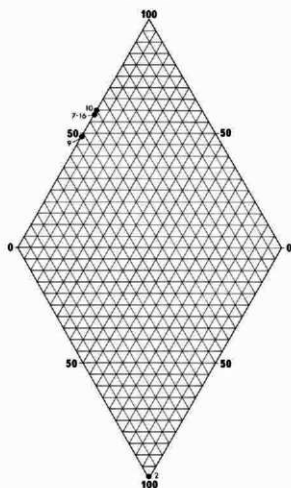
Mont, Mica, Hb, Chの4成分に欠ける。主に、 $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot 1\text{H}_2\text{O}$ (アルミナゲル) で構成される。固体数は2個で、駒形神社の円筒埴輪で構成される。以上の結果から明らかな様に、EとGタイプは駒形神社の埴輪だけで検出されるタイプであり、A、C、Dの3タイプは波志江遺跡の埴輪と駒形神社の埴輪が共存し、関連性が伺われる。Aタイプは円筒埴輪と馬型形象埴輪で構成され特長的である。CとEタイプは組成的に類似するもので、これらには円筒埴輪が多く含まれる。

3-2 石英(Qt)-斜長石(P1)の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな係わりがある。土器を制作する過程で、粘土にある量の砂を混合し



第126図 埴輪胎土三角ダイアグラム



第127図 埴輪胎土菱形ダイアグラム

2. 出土遺物の胎土分析

第2表 胎土性状表

試料 No.	タイプ 分類	焼成 ラック	組成分類			粘土鉱物および造岩鉱物											備考			
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch-Mi-Hb	Hb	Mont	Mica	Hb	Os(Fe)	Os(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mellite	K-feld	Ilalite		Kaol	Pyrite	Au
徳志江-1	A	I~II	5	20				65		1054	521	166								中~粗粒 朝陽郡円筒埴輪 6 C
徳志江-2	F	III	12	14	172		81		1627	697										中粒 円筒埴輪 6 C
徳志江-3	C	III	6	20		103	137		2703	646	139									中粒 人形形象埴輪 6 C
徳志江-4	A	III	5	20			109		2107	943	251									中粒 円筒埴輪 6 C
徳志江-5	A	II	5	20			66		2096	693	355									中~粗粒 馬形形象埴輪 6 C
徳志江-6	C	III	6	20		72	78		1577	447	153									中粒 円筒埴輪 6 C
徳志江-7	D	III	7	9		123	89	172	2406	1255	158									中粒 扇形形象埴輪 6 C
徳志江-8	A	II~III	5	20			81		2429	430	227									中~粗粒 馬形形象埴輪 6 C
徳志江-9	B	III	6	10		162	165	230	2653	1682	95									中粒 扇形形象埴輪 6 C
徳志江-10	D	III	7	9		135	90	189	54	2568	469	199								中粒 朝陽郡円筒埴輪 5 C L
徳志江-11	A	II	5	20			56		2463	390	221									中~粗粒 円筒埴輪 5 C L
徳志江-12	G	II	14	20					2270	839	163	54								中~粗粒 円筒埴輪 5 C L (彫形)
徳志江-13	C	III	6	20		109	149		1337	940	237									中粒 形象埴輪 5 C L (彫形)
徳志江-14	A	III	5	20			88		1396	1450	207									中粒 形象埴輪 5 C L (彫形)
徳志江-15	E	III	7	20		103	77		1405	441	166									中粒 形象埴輪 5 C L (彫形)
徳志江-16	D	III	7	9		107	76	142	1266	500	161									中粒 形象埴輪 5 C L (彫形)
徳志江-17	G	III	14	20					1247	458	215									中粒 円筒埴輪 5 C L (彫形)
徳志江-18	E	II~III	7	20		52	73		1235	1150	145									中~粗粒 円筒埴輪 5 C L (彫形)
徳志江-19	A	I~II	5	20			73		2265	970	231	56								粗粒 円筒埴輪 5 C L (彫形)
徳志江-20	C	III	6	20		98	114		1354	1534	292									中粒 円筒埴輪 5 C L (彫形)
徳志江-21	E	III	7	20		115	79		1269	849										中粒 円筒埴輪 5 C L (彫形)
徳志江-22	A	II	5	20			59		1895	309	182									中~粗粒 円筒埴輪 5 C L (彫形)

て素地土を作るということは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地における砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。この固有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは各々の集団の有する固有の技術の一端と考えられる。第128図Q-t-P1相関図に示すように、埴輪はI~Vの5タイプに分類された。とくに石英の強度が2000以下の領域には駒形神社の埴輪類が、2000以上の領域には波志江今宮遺跡の埴輪類が分布し、明瞭に分れている。

Iグループ：波志江-14、20

14は形象埴輪、20は円筒埴輪で、ともに駒形神社である。斜長石の強度が高いのが特長である。

IIグループ：波志江-1、13、18、21

1は朝顔型円筒埴輪、13は形象埴輪、18と21は円筒埴輪。とくに駒形神社の埴輪類が集中する。

IIIグループ：波志江-2、6、15、16、17

2、6、17は円筒埴輪、15と16は形象埴輪である。15、16、17は駒形神社の埴輪で、波志江今宮遺跡の埴輪類と共存する。

IVグループ：波志江-3、4、5、8、10、11、12、19

このグループには波志江今宮遺跡の埴輪類が集中する。とくにAタイプの胎土で造られた円筒埴輪と馬型埴輪が集中することで特長付けられる。

Vグループ：波志江-7、9

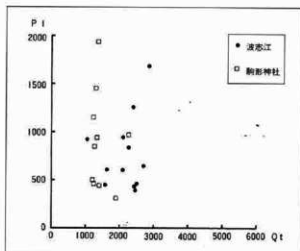
7と9はともに盾型形象埴輪で、このグループは盾型形象埴輪で特長付けられる。

*その他：波志江-22

どのグループにも属さないものであるが、組成的にはAタイプであり、IIIグループに近いものではなからうか。

以上の結果から明らかな様に、駒形神社の埴輪類と波志江今宮遺跡の埴輪類は石英の強度が2000の位置で明瞭に分れるのが特長である。波志江-1、2、

6は2000以下の駒形神社の領域にあって、駒形神社の埴輪類と共存し、関連性が窺われる。また駒形神社の埴輪類のなかには波志江今宮遺跡の領域にはいつているものがあり、両遺跡の間には関連性が窺われる。



第128図 Q-t-P1相関図

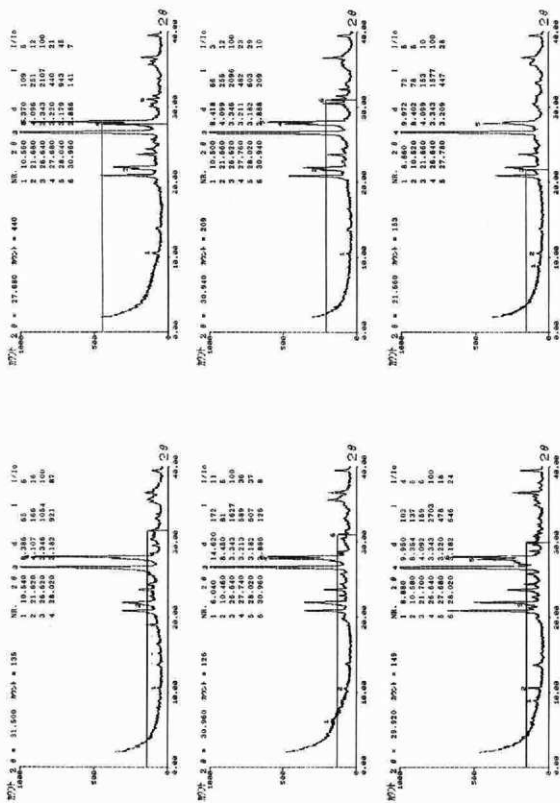
4 まとめ

a) 埴輪の胎土はA~Gの7タイプに分類された。

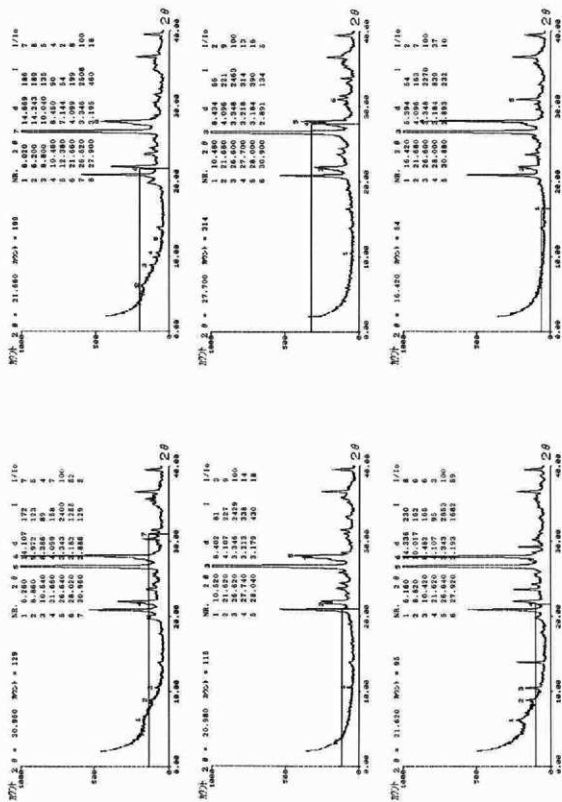
Aタイプは8個と最も多く、とくに波志江今宮遺跡の円筒埴輪と馬型埴輪はこの胎土であり、波志江今宮遺跡を代表する胎土と判断された。EとGタイプは駒形神社の埴輪類だけで検出された。他のタイプは共存し、はっきりしない。

b) 電子顕微鏡によるガラスの分析では波志江-1、19の2個が焼成ランクI~IIと高く、他は中粒のガラスが生じた焼成ランクIIIである。

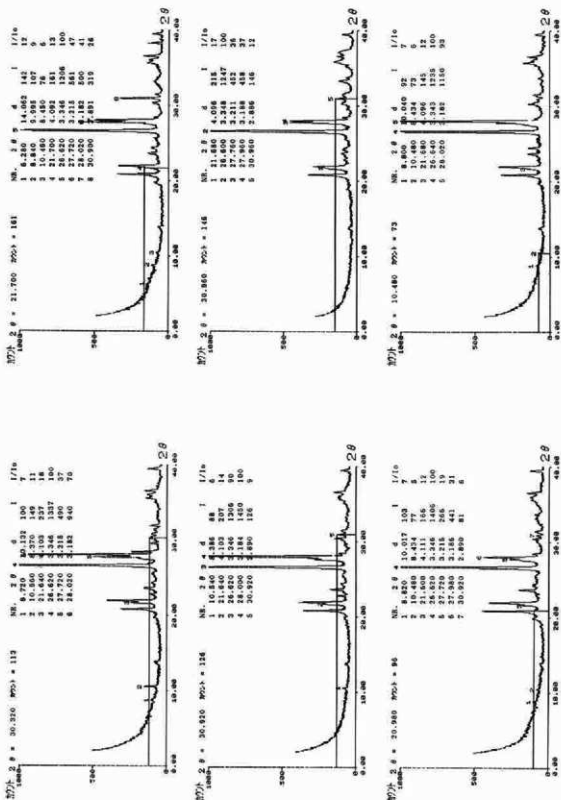
c) 石英と斜長石の相関では、石英の強度が2000の位置で、駒形神社の埴輪類と波志江今宮遺跡の埴輪類が明瞭に分れる。2000以下の領域は駒形神社の埴輪類、2000以上の領域は波志江今宮遺跡の埴輪類が分布する。駒形神社の領域に波志江今宮遺跡の埴輪類が共存し、波志江今宮遺跡の領域に駒形神社の埴輪類が共存することから判断して、両遺跡の間には関連性が窺われる。

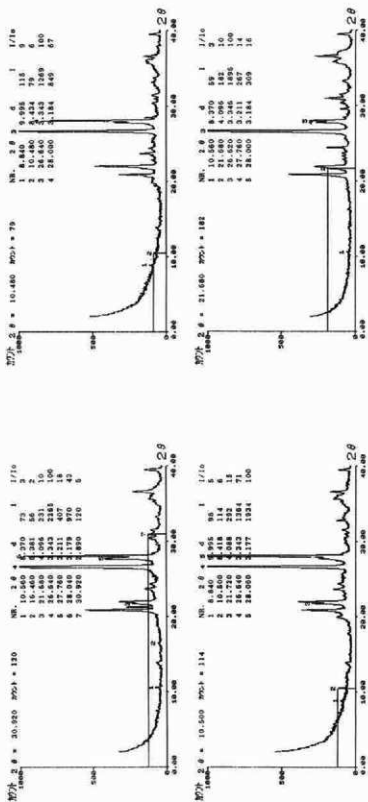


第129図 焼物胎土分析グラフ(1)



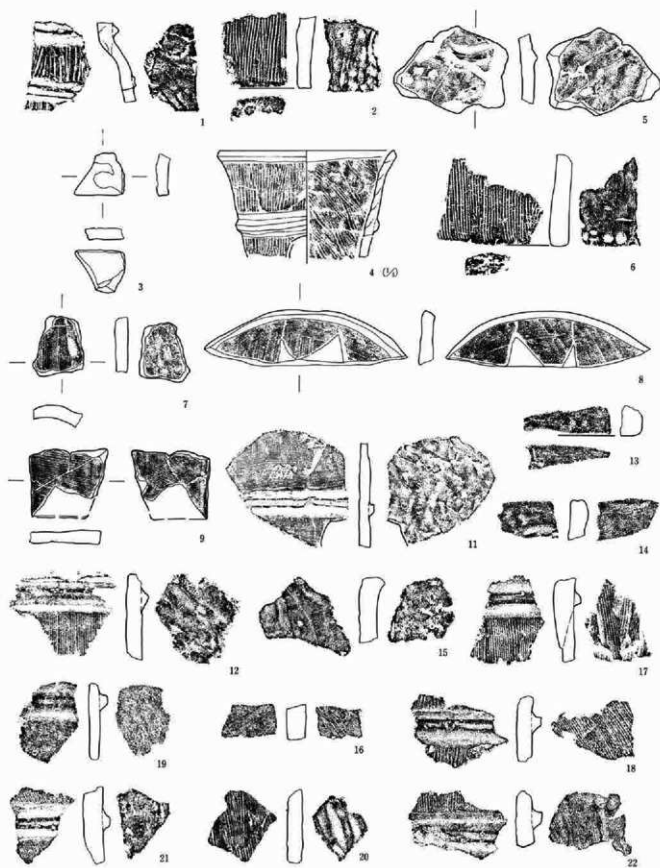
第130図 増粘剤土分析グラフ(2)





第132図 尾輪胎土分析グラフ(4)

2. 出土埴輪の胎土分析



第133図 胎土分析試料埴輪実測図

遺物觀察表

1号墳

検出番号 図版番号	種類	出土位置 遺存状態	量	目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
1 第10図 P.L24	土師器 杯	1/5	① 11.6 ② 11.0 ③ 4.5	① 11.6 ② 11.0 ③ 4.5	①微砂粒 ②酸化焰 ③褐色	口唇部の平坦部に2条のごく細い凹線が走る。口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。	
2 第10図 P.L24	土師器 杯	定形	① 11.8 ② 11.8 ③ 4.8	① 11.8 ② 11.8 ③ 4.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③褐色	口唇部の平坦部に1条のごく細い凹線が走る。口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。	
3 第10図 P.L24	土師器 杯	1/5	① 12.2 ② 12.2 ③ 4.0	① 12.2 ② 12.2 ③ 4.0	①微砂粒 ②酸化焰 ③褐色	口唇部の平坦部に2条のごく細い凹線が走る。口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。	
4 第10図 P.L24	土師器 蓋	口縁部～胴部 中位片	① 14.8 ② ③	① 14.8 ② ③	①細砂粒 ②酸化焰 ③褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部は横方向へラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

1号墳形象埴輪

検出番号 図版番号	種類	出土位置 遺存率	計測値 (cm)	胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備考
5 第11図 P.L24	馬	尻部小片	胴厚 1.8	胎土 焼成 色調	微砂粒 酸化焰 褐色	10 外面はハケ目後尻尻を助付、尻尾の交差部分に馬鈴が貼付されていたが剥離。内面はナデ。	

1号墳円筒埴輪

検出番号 図版番号	出土位置 遺存率	計測値 (cm)	凸帯			胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備考	
			形状	段幅	形状 大きさ					
6 第11図 PL24	口縁部片	① 33.1 ② ③	角	7.7		① 33.1 ② ③	15	外面は口縁部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は斜めハケ目。		
7 第11図 PL24	第3凸帯 ～第2段	① ② ③	①三 ②角	4.3	円	6.3 5.6	① 6.3 ② 5.6 ③	15	外面は第3段と凸帯が横ナデ、第2段ハケ目。内面は第3段上が横ナデ、第2段は縦ナデ。	
8 第11図 PL24	第1段～ 第3段	① ② ③	角 三	16.8 12.1	円	6.9 5.6	① 6.9 ② 5.6 ③	11	外面は凸帯が横ナデ、第3段は斜めハケ目、第1・2段は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
9 第11図 PL24	1/5	① 20.9 ② 11.0 ③ 36.0	三	10.2 14.5 11.3	円	5.9 6.3	① 5.9 ② 6.3 ③	11	外面は口縁部と凸帯が横ナデ。他は縦ハケ目。内面は上半が斜めハケ目、下半は縦ナデ。	
10 第11図 PL24	1/5	① 22.2 ② 10.8 ③ 34.0	角	9.4 13.1 11.5	円	6.3 5.7	① 6.3 ② 5.7 ③	不 鮮 明	外面は口縁部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は斜めハケ目後縦ナデ。	
11 第11図 PL25	口縁部～ 第2段片	① 23.4 ② ③	M ₁	9.3	円	6.3 4.8	① 6.3 ② 4.8 ③	14	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は第3段は斜めハケ目、第2段は縦ナデ。	
12 第11図 PL25	口縁部～ 第2段片	① 23.2 ② ③	M ₁	9.6	円	6.5	① 6.5 ② ③	10	内面に輪状痕が残る。外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ナデ。内面は口縁部が横ハケ目、他は縦ナデ。	内面第3段にヘラ跡
13 第11図 PL25	周縁 口縁部～ 第2段片	① 24.1 ② ③	三	8.0	円		① 24.1 ② ③	11	外面は口縁部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目。口縁部下は縦ナデ。	
14 第11図 PL25	第2・3 段片	① 25.1 ② ③	M ₁	8.0			① 25.1 ② ③	不 鮮 明	外面は口縁部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ナデ。口縁部下は縦ナデ。	
15 第11図 PL25	第2・3 段片	① 24.6 ② ③	角	8.3	円		① 24.6 ② ③	不 鮮 明	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ナデ。口縁部下は縦ナデ。	

遺物観察表

標記番号 図版番号	出土位置 保存	計測値 (cm)	凸 形状	帯 段幅	透 形状	孔 大きさ	胎土・構成 色調	ハケ	成形・装形の特徴	備 考
16 第12図 PL.25	第3段片	① 21.8 ② ③	三	9.5			細砂粒 酸化焰 にふい黄色	14	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ナデ、口縁部下は斜めハケ目。	
17 第12図 PL.25	第2・3 段片	① ② ③	三		円、		細砂粒 酸化焰 棕色	14	内面に輪横筋が残る。外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は斜めハケ目。	
18 第12図	第2・3 段片	① ② ③	M ₁		円		細砂粒 酸化焰 棕色	12	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
19 第12図 PL.25	周縁(西) 第1段～ 第2段片	① ② ③	三				細砂粒 酸化焰 棕色	11 5	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目、内面は上半が斜めハケ目、下半は斜めナデ。	
20 第12図 PL.25	周縁(西) 底部～第 2凸帯片	① ② ③	三	11.3	円	6.7 6.2	細砂粒 酸化焰 棕色	15	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は上半が斜めハケ目、下半は縦ナデ。	
21 第12図 PL.25	底部～第 2段片	① ② ③	M ₁	10.3	円		細砂粒 酸化焰 明黄褐色	11 5	内面に輪横筋が残る。外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ハケ目後縦ナデ。	
22 第12図 PL.25	底部～第 2段片	① ② ③	M ₁	11.0			細砂粒 酸化焰 にふい黄棕色	11 5	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は斜めハケ目。	
23 第12図 PL.25	底部～第 2段片	① ② ③	M ₁	11.1		13.4	細砂粒 酸化焰 にふい黄棕色	14	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は斜めハケ目。	
24 第12図 PL.26	第1段～ 第2段片	① ② ③	三	11.6		12.3	粗砂粒 酸化焰 棕色	不 詳	外面は凸帯が横ナデ、第1・2段は縦ハケ目。内面は斜めハケ目後縦ナデ。	
25 第12図 PL.24	底部～第 2段片	① ② ③	角	10.0		10.8	細砂粒 酸化焰 棕色	11 5	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
26 第12図 PL.24	第1段	① ② ③	角	12.2		17.6	細砂粒 酸化焰 明赤褐色	9 5	外面は凸帯が横ナデ、第1段は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
27 第12図 PL.24	第1段片	① ② ③	角	10.4			細砂粒 酸化焰 にふい黄棕色	14	外面は縦ハケ目。内面はナデ。	
28 第13図 PL.25	口縁部片	① ② ③	角				細砂粒 酸化焰 棕色	10 5	外面は凸帯の上下が横ナデ、口縁部は縦ハケ目。内面は横ハケ目。	
29 第13図 PL.26	頸部片	① ②M	角		円		細砂粒 酸化焰 にふい棕色	?	外面は凸帯が横ナデ、他は粗いハケ目。内面はナデ。	
30 第13図 PL.26	頸部片	① ② ③	三 角		円、		細砂粒 酸化焰 にふい棕色	10 5 12	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
31 第13図	周縁 口縁部		角				微砂粒 酸化焰 にふい棕色	13	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、口縁部は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
32 第13図	周縁(北) 第3段片		?				微砂粒 酸化焰 棕色	18	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、3段目は縦ハケ目、内面は縦ハケ目、斜めハケ目。	
33 第13図	周縁 第3段片		三		円、		微砂粒 酸化焰 棕色	8 5 10	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、3段目が縦ハケ目。内面は斜め・横ハケ目。	
34 第13図	周縁 第3段片						細砂粒 酸化焰 棕色	6 5 12	外面は口唇部が横ナデ、3段目が縦ハケ目。内面は斜めハケ目。	
35 第13図	周縁 第3段片						微砂粒 酸化焰 棕色	8 5 12	外面は口唇部が横ナデ、3段目縦ハケ目。内面は横ハケ目。	

遺物観察表

標記番号 図版番号	出土位置 或 存 率	計測値 (cm)	凸 形状	帯 段幅	通 形状	孔 大小	胎土・焼成 色調	ハ ケ	成形・整形の特徴	備 考
36 第13図	周堀(西) 第3段片						微砂粒 酸化焰 褐色	13	外面は口唇部が横ナデ、3段目縦 ハケ目。内面は横ハケ目。	
37 第13図	周堀 第2段～ 第3段片		M ₁		円?		微砂粒 酸化焰 褐色	12	外面は凸帯が横ナデ、2段目と3 段目は縦ハケ目。内面は縦ハケ目。	
38 第13図	第2段～ 第3段片		三		円		微砂粒 酸化焰 褐色	16	外面は凸帯が横ナデ、2段目が縦 ハケ目。内面は斜めハケ目。	
39 第13図	周堀(北) 第2段～ 第3段片		三		円 ₁	8.2 × ?	微砂粒 酸化焰 褐色	17	外面は凸帯が横ナデ、2段目と3 段目。内面は縦ハケ目。	
40 第13図	第2段～ 第3段片		三		円 ₁		微砂粒 酸化焰 褐色	9 5 11	外面は凸帯が横ナデ、2段目と3 段目が縦ハケ目。内面は横ハケ目。	
41 第13図	第2段～ 第3段片		三		円?		微砂粒 酸化焰 褐色	12 5 16	外面は凸帯が横ナデ、3段目が縦 ハケ目。内面は斜めハケ目。	
42 第13図	第2段～ 第3段片		三		円 ₁	5.0 × ?	微砂粒 酸化焰 褐色	9 5 12	外面は凸帯が横ナデ、2段目と3 段目が縦ハケ目。内面は斜めハケ 目。	
43 第14図	第1段片						細砂粒 酸化焰 および黄褐色	10	外面は縦ハケ目。内面は上半が縦 ナデ、下半が横ナデ。	
44 第14図	周堀 小片						細砂粒 酸化焰 および褐色	?	外面は凸帯付近は横ナデ、他は縦 ハケ目。内面はナデ。	内面に「×」のへらが き
45 第14図	第1段片						細砂粒 酸化焰 褐色	?	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
46 第14図	第1段片		三				細砂粒 酸化焰 明黄褐色	8 5 10	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
47 第14図	第1段片						微砂粒 酸化焰 明黄褐色	13 5 15	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ、 一部に横ハケ目が残る。	
48 第14図	第1段片						微砂粒 酸化焰 明黄褐色	11 5 12	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
49 第14図	第1段片						細砂粒 酸化焰 黄褐色	12 5 15	外面は縦ハケ目。内面は斜めナデ。	
50 第14図	第1段片						微砂粒 酸化焰 褐色	9 5 12	外面は縦ハケ目。内面は斜めナデ。	
51 第14図	第1段片						微砂粒 酸化焰 明黄褐色	9 5 14	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	

1号墳石器・石製品

標記番号 図版番号	種 類	出 土 位 置 存 率	大 き さ (単位cm)	石 重 量 (単位g)	特 徴
14図-52 PL26	石製品 管玉	完形	長2.3×幅0.7×厚0.6 孔径0.25~0.1	1.68	
14図-53 PL26	石製品 管玉	完形	長2.5×幅0.7×厚0.6 孔径0.23~0.1	1.83	
14図-54 PL26	石製品 ガラス玉	完形	長0.45×幅0.3× 厚0.45、孔径0.1	ガラス質 0.07	
14図-55 PL26	石器 碇石	ほぼ完形	長9.0×幅4.5×厚3.2	碇石 92.0	側面の各面に磨痕あり

遺物観察表

2号墳形象埴輪

標図番号 図版番号	種類	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備考
1 第16図 PL-26	人物	胸上位片	幅 4.3	胎土 焼成 色調 微砂粒 酸化焰 褐色	—	胴部への差し込み部分の両面に粘土板を巻き付けている。外面はナデ。	
2 第16図 PL-26	不明	小片	幅 淵厚 6.6	胎土 焼成 色調 微砂粒 酸化焰 褐色		内外面ともヘラナデであるが、一部にハケ目が残る。	

2号墳円筒埴輪

標図番号 図版番号	出土位置 残存率	計測値 (cm)	凸 形状	帯 段幅	通 孔 形状 大小	胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備考
3 第16図 PL-26	口縁部片 ① ② ③	24.0	M ₁	11.4		微砂粒 酸化焰 褐色	15	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は上半が横ハケ目、下半は縦ナデ。	
4 第16図 PL-26	周帯 第2・3 段片 ① ② ③	18.0	M ₁	5.8		微砂粒 酸化焰 褐色	13	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は第3段が横ハケ目、第2段は縦ナデ。	
5 第16図 PL-26	第1・2 段片 ① ② ③	11.2	角	13.0		微砂粒 酸化焰 褐色	11	内面に輪郭底が残る。外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデで部分的にハケ目が残る。	
6 第16図 PL-26	周帯 第1段片 ① ② ③	11.6				微砂粒 酸化焰 褐色	16	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
7 第16図 PL-26	周帯 第1段片 ① ② ③	11.6				微砂粒 酸化焰 明赤褐色	7	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
8 第17図	周帯 第3段片					微砂粒 酸化焰 褐色	12 17	外面は口唇部が横ナデ、3段目は縦ハケ目。内面は横ハケ目とその下位が縦ハケ目。	
9 第17図	第3段片					微砂粒 酸化焰 にぶい褐色	8	外面は口唇部が横ナデ、3段目は縦ハケ目。内面は横ハケ目とその下位が縦ナデ。	
10 第17図	第3段片					微砂粒 酸化焰 にぶい黄褐色	12 16	外面は口唇部が横ナデ、3段目は斜めハケ目。内面は横ハケ目、斜めハケ目後縦ナデ。	
11 第17図	第3段片		M ₁	0.4		微砂粒 酸化焰 褐色	?	外面は縦ハケ目後横ナデ。内面は斜めナデ。	
12 第17図	第1段～ 第2段片		角 ₁	0.4		微砂粒 酸化焰 褐色	10 12	外面は凸帯が横ナデ、1段目は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
13 第17図	周帯 第2段～ 第3段片		三	0.4	円 ₁	微砂粒 酸化焰 にぶい黄褐色	?	外面は凸帯が横ナデ、3段目が縦ハケ目。内面は斜めハケ目。	
14 第17図	周帯 第1段～ 第2段片		M ₁	0.6		微砂粒 酸化焰 褐色	?	外面は凸帯が横ナデ、1段目・2段目は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
15 第17図	第2段～ 第3段片		三	0.3		微砂粒 酸化焰 褐色	9 10	外面は凸帯が横ナデ、2段目・3段目がハケ目。内面は縦ナデ。	
16 第17図	第1段～ 第2段片		M ₁	0.5		微砂粒 酸化焰 褐色	7 10	外面は凸帯が横ナデ、1段目・2段目は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
17 第17図	第2段～ 第3段片		角 ₁	0.5		微砂粒 酸化焰 褐色	8 10	外面は凸帯横ナデ、2段目は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
18 第17図	第1段片					微砂粒 酸化焰 褐色	9 15	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	

遺物観察表

探検番号 図取番号	出土位置 残存率	計測値 (cm)	凸帯 形状 反幅		透孔 形状 大小		胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備考
20 第17回	第1段片						細砂粒 酸化焰 橙色	10	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
19 第17回	第1段片						粗砂粒 酸化焰 明赤褐色	8	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	

3号墳土器

探検番号 図取番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
1 第20回 P.L.26	土師器 壺	周堀(北側) 底部片	① ② 7.7 ③	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	外面は割部・底部ともヘラ削り。内面はヘラ磨り。	

3号墳形象埴輪

探検番号 図取番号	種類	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備考
2 第20回 P.L.26	人物	腕部破片	幅 上4.0×3.3 下2.9×2.6	胎土 焼成 色調 微砂粒 酸化焰 橙色		ヘラナデ	
3 第20回 P.L.26	人物	肩部小片	器厚 1.7	胎土 焼成 色調 微砂粒 酸化焰 橙色		外面はハケ目が残る。内面はナデ。一部に指痕が残る。	
4 第20回 P.L.26	人物	裝飾品か 黄胎品か	残高 3.2 幅 2.7 厚 2.5	胎土 焼成 色調 微砂粒 酸化焰 赤褐色		人物埴輪の裝飾品か?。球状部はナデ、下部はヘラ削り。	
5 第20回 P.L.26	馬	鬣の一部	残高 6.5 幅 2.9 厚 2.7	胎土 焼成 色調 微砂粒 酸化焰 橙色		外面最上部の平坦面は整形不明、他は縦ナデ。	
6 第20回	馬	頭部破片	器厚 1.5 鬣部厚 2.0	胎土 焼成 色調 微砂粒 酸化焰 橙色	12 5	外面はハケ目後面側の凸帯を貼付、鬣部もハケ目。内面はナデ整形。一部にハケ目が残る。	
7 第20回	馬	頭部破片	器厚 2.0 鬣部厚 2.4	胎土 焼成 色調 微砂粒 酸化焰 橙色	8 5	外面はハケ目後面側の凸帯を貼付、鬣部もハケ目。内面はナデ整形。	
8 第20回	馬	首部破片	器厚 1.7	胎土 焼成 色調 微砂粒 酸化焰 明赤褐色	8 5	外面はハケ目後手綱を貼付、手綱の上下はナデ。内面はハケ目。	
9 第20回	馬	頭部破片	器厚 1.7 鬣部厚 2.7	胎土 焼成 色調 微砂粒 酸化焰 橙色		外面の整形は不明。内面はナデ整形。	
10 第20回	馬	腕部破片	脚径 11.0 器厚 2.0	胎土 焼成 色調 微砂粒 酸化焰 橙色		外面は縦方向ヘラナデ。内面は縦ナデ。	
11 第20回 P.L.26	厩	ヒレ部片	器厚 1.7	胎土 焼成 色調 微砂粒 酸化焰 橙色		表面はヘラナデ後周辺部に列点文、内面は凹線による区画、区画内の一部に赤色塗彩。裏面は縦ヘラナデ。	
12 第20回	厩	ヒレ部片	器厚 1.6	胎土 焼成 色調 微砂粒 酸化焰 橙色	8 5	表面はハケ目後断面三角形の凸帯を貼付。裏面はハケ目。	
13 第20回	厩	円筒部片	器厚 1.5	胎土 焼成 色調 微砂粒 酸化焰 橙色	8 5	表面は横方向ハケ目。内面は縦方向ハケ目。	
14 第20回	厩	ヒレ部片	器厚 1.1	胎土 焼成 色調 微砂粒 酸化焰 橙色	8 5	表面は斜め方向ハケ目後断面三角形の凸帯を貼付。内面も斜め方向ハケ目。	

遺物観察表

3号墳円筒埴輪

標記番号 図版番号	出土位置 残存率	計測値 (cm)	凸 形状	帯 段幅	透 形状	孔 大33	胎土・焼成 色調	ハ ケ	成形・整形の特徴	備 考
15 第20回 P L 27	主体部 1/2	① 20.3 ② 12.2 ③ 32.5	角	13.0 10.3 9.2	円、		細砂粒 酸化焙 褐色	10 5	外面は口縁部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ナデ、口縁部下は縦ナデ。	
16 第20回 P L 26	第1段～ 第2段片	① ② ③	角		槽円		細砂粒 酸化焙 褐色	5 5	外面は凸帯が横ナデ、第1・2段は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
17 第20回 P L 27	底部～第 2段片	① ② 10.1 ③	角		円?		細砂粒 酸化焙 明赤褐色	9 5	外面は凸帯が横ナデ、第1・2段は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
18 第20回 P L 27	第1段～ 第2段片	① ② ③	M ₁	13.4			細砂粒 酸化焙 明赤褐色	9 5	外面は凸帯が横ナデ、第1・2段は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
19 第21回 P L 27	第1段片	① ② 14.1 ③	角				粗砂粒 酸化焙 褐色	9 5	内面に輪横溝が残る。外面は凸帯が横ナデ、第1段は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
20 第21回 P L 27	第1段片	① ② 10.5 ③	三				細砂粒 酸化焙 褐色	9 5	外面は凸帯が横ナデ、第1段は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
21 第21回 P L 27	第1段片	① ② 10.6 ③	角				細砂粒 酸化焙 明赤褐色	10 5	外面は凸帯が横ナデ、第1段は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
22 第21回 P L 27	第1段片	① ② 11.0 ③					粗砂粒 酸化焙 褐色	10	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
23 第21回 P L 26	第1段片	① ② 11.6 ③					粗砂粒 酸化焙 褐色		内外面とも縦ナデ。	
24 第21回 P L 27	第1段片	① ② 11.6 ③					粗砂粒 酸化焙 褐色	9	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
25 第21回 P L 26	第1段片	① ② 12.5 ③					細砂粒 酸化焙 褐色	?	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
26 第21回	第3段片	① ② ③					細砂粒 酸化焙 明赤褐色	7 5 9	外面は口唇部と凸帯の上部が横ナデ、3段目は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
27 第21回	第3段片	① ② ③					細砂粒 酸化焙 にぶい褐色	?	外面は横ナデか。内面は横ナデ一部に横ハケ目が残る。	外面にヘラ記号
28 第21回	第2段片	① ② ③					細砂粒 酸化焙 にぶい褐色	不 鮮 明	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
29 第21回	第1段～ 第2段片	① ② ③	角				細砂粒 酸化焙 褐色	8 5 11	外面は凸帯が横ナデ、1段目・2段目が縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
30 第21回	第1段～ 第2段片	① ② ③	角				細砂粒 酸化焙 褐色	11 5 12	外面は縦ハケ目後凸帯とその上下を横ナデ。内面は縦ナデ。	
31 第21回	第2段片	① ② ③	角、				細砂粒 酸化焙 褐色		外面は凸帯が横ナデ、2段目は縦ナデか。内面は縦ナデ。	
32 第21回	第1段～ 第2段片	① ② ③	三、				粗砂粒 酸化焙 褐色	8	外面は凸帯が横ナデ、1段目・2段目が縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
33 第21回	第2段片	① ② ③	角				細砂粒 酸化焙 褐色	?	外面は凸帯が横ナデ。内面は縦ナデ。	

遺物観察表

検出番号 図版番号	出土位置 残存率	計測値 (cm)	凸 帯		透 孔		胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備 考
			形状	段幅	形状	大きさ				
34 第21図	第2段片	① ② ③	角	0.5			粗砂粒 酸化珪酸質 明赤褐色	9	外面は凸帯が横ナズ、2段目が縦ハケ目。内面は縦ナズ。	
35 第22図	第3段片	① ② ③	角	0.8			細砂粒 酸化珪酸質 にぶい褐色	7	外面は凸帯が横ナズ、3段目は縦ハケ目。内面は縦ナズ。	外面に「×」のヘラ記号
36 第22図	底部片	① ② ③					細砂粒 酸化珪 にぶい褐色	7 5	外面は縦ハケ目。内面は縦ナズ。	
37 第22図	高冠(北) 1段目～ 2段目片	① ② ③	M	0.9			粗砂粒 酸化珪 褐色		外面は凸帯横ナズ、他の整形は不明。内面は縦ナズ。	

4号墳土器

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備 考
1 第26図 PL27	須恵系 長頸瓶	肩溝 胴部片	① ② ③	①細砂粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色	ロクロ整形、外面割部はカキ目。	
2 第26図 PL28	須恵系 瓶	主体部・肩 溝 胴部上位片	① ② ③	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、外面割部はカキ目。胴部最大径23.6cm。	
3 第26図 PL27	須恵系 広口壺	口縁部～胴 部上位片	① 25.4 ② ③	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	口唇部に1条の沈線が走る。口縁部は中位の2条の沈線で上下に区別され波状文が残されている。内面割部は同心円のあて具痕が残る。	
4 第26図 PL27	須恵系 広口壺	口縁部片	① 23.6 ② ③	①細砂粒 ②還元焰 ③灰褐色	口唇部に1条の沈線が走る。口縁部には波状文(8条)が走る。	
5 第26図 PL28	須恵系 広口壺	胴部上位片	① ② ③	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	外面は格子目状の印。内面は同心円のあて具痕が残る。	

4号墳形象埴輪

検出番号 図版番号	種類	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備 考
6 第27図 PL28	人物 農夫	肩～円筒 部上位	残高 42.0 頸径 21.0 円筒径17.0 器厚 2.0	胎土 焼成 色調 褐色	細砂粒 酸化珪 褐色	内面に輪横痕が残る。腕部は差し込み。外面は肩部が横ナズ、胴部と裾部は縦ナズ。腕部は縦ヘラナズ、手部はヘラ削り、円筒部は縦ナズ。凸等の上下は横ナズ。胸部に赤色塗彩。内面は縦ナズ。	
7 第28図 PL29	人物 女性	胴部上位	頸径 19.0 円筒径13.0 器厚 1.3	胎土 焼成 色調 褐色	細砂粒 酸化珪 褐色	内面に輪横痕が残る。腕部は差し込み。外面は胴部上位が縦ナズ後一部横ナズ、裾部は横ナズ。内面は縦ナズ。	
8 第28図 PL28	人物 男性	胴部	頭部高 7.0 幅 9.0 器厚 1.5	胎土 焼成 色調 褐色	細砂粒 酸化珪 褐色	内面に輪横痕が残る。頭部は縦ナズ、鬘は縦ヘラナズで胸部と腕部に接続。顔面に赤色塗彩が見られる。内面は縦ナズ。	
9 第28図 PL28	人物 女性	顔面片	器厚 1.2	胎土 焼成 色調 褐色	粗砂粒 酸化珪 褐色	内面に輪横痕が残る。頭部最上部孔を島田鬘を貼付。外面は横ナズ。内面は縦ナズ。	
10 第28図	人物	顔面片	器厚 1.0	胎土 焼成 色調 褐色	細砂粒 酸化珪 褐色	顔面の口下から顎にかけて、内外面ともナズ。	
11 第28図	人物 女性	顔面片	器厚 1.2	胎土 焼成 色調 褐色	細砂粒 酸化珪 褐色	顔部島田鬘の一部。内外面とのナズ。	
12 第28図 PL129	人物	腕部	幅 2.8 厚 3.0	胎土 焼成 色調 褐色	微砂粒 酸化珪 褐色	ヘラ削り後ヘラナズ。	

遺物観察表

標記番号 図版番号	種類	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備考
13 第28図	人物	胸部片	幅 3.2 厚 2.8	胎土 焼成 色調 胎土・焼成 色調 胎土・焼成 色調 胎土・焼成 色調	粗砂粒 酸化焰 色調 胎土・焼成 色調 胎土・焼成 色調 胎土・焼成 色調	ナゲ整形。	
14 第28図	人物	手部片	幅 3.2 厚 2.0	胎土 焼成 色調	粗砂粒 酸化焰 色調 胎土・焼成 色調	ヘラナゲ。	
15 第28図	人物	手部片	幅 3.2 厚 2.5	胎土 焼成 色調	粗砂粒 酸化焰 色調 胎土・焼成 色調	ヘラナゲ。	
16 第28図	人物	手部片	幅 2.8 厚 2.2	胎土 焼成 色調	粗砂粒 酸化焰 色調 胎土・焼成 色調	ヘラナゲ。	
17 第28図	人物	髷片	幅 2.0 厚 2.2	胎土 焼成 色調	粗砂粒 酸化焰 色調 胎土・焼成 色調	縦ヘラナゲ。	
18 第28図	人物	肩部片		胎土 焼成 色調	粗砂粒 酸化焰 色調 胎土・焼成 色調	十字のヘラ掘き、ヘラナゲ。	
19 第29図 PL28	人物	破片	器厚 2.2	胎土 焼成 色調	粗砂粒 酸化焰 色調 胎土・焼成 色調	腰部の革袋か？外面はヘラナゲ。内面はナゲ。	
20 第29図 PL28	人物	破片	器厚 2.1	胎土 焼成 色調	粗砂粒 酸化焰 色調 胎土・焼成 色調	腰部の革袋か？外面はヘラナゲ。内面はナゲ。	
21 第29図	人物	破片	器厚 0.7	胎土 焼成 色調	粗砂粒 酸化焰 色調 胎土・焼成 色調	内外面ともナゲ。	
22 第29図	人物	破片	器厚 0.5	胎土 焼成 色調	粗砂粒 酸化焰 色調 胎土・焼成 色調	内外面ともナゲ。	
23 第29図	人物	裾部片	裾径 22.4 円筒径17.0	胎土 焼成 色調	粗砂粒 酸化焰 色調 胎土・焼成 色調	9 内面に接合痕が残る。外面は縦ハケ目。	
24 第29図	人物	裾部片	裾径 20.4 円筒径14.2	胎土 焼成 色調	粗砂粒 酸化焰 色調 胎土・焼成 色調	内面に輪模痕が残る。外面は縦ナゲで裾部 端部は横ナゲ。	
25 第29図	人物	裾部片	裾径 14.8 円筒径13.2 穿孔径 2.0	胎土 焼成 色調	粗砂粒 酸化焰 色調 胎土・焼成 色調	外面は縦ナゲで裾部端部が横ナゲ。内面は 縦ナゲ。	
26 第29図	人物		円筒径13.4	胎土 焼成 色調	粗砂粒 酸化焰 色調 胎土・焼成 色調	外面は縦ナゲ、凸帯とその上下は横ナゲ。 内面は縦ナゲ。	
27 第30図 PL29	馬	頭部～頸 部片	頭部幅16.5 頸部幅16.0 器厚 1.5	胎土 焼成 色調	粗砂粒 酸化焰 色調 胎土・焼成 色調	内面に接合痕が残る。外面はナゲ整形、面 髻と手綱は貼付。内面はナゲ。	
28 第30図 PL30	馬	頭部～頸 部片	頭部幅15.5 器厚 1.5	胎土 焼成 色調	粗砂粒 酸化焰 色調 胎土・焼成 色調	内面に接合痕が残る。外面はナゲ整形、面 髻と手綱は貼付。内面はナゲ。	
29 第29図 PL29	馬	耳	器厚 0.8	胎土 焼成 色調	粗砂粒 酸化焰 色調 胎土・焼成 色調	外面は縦ナゲ。	
30 第29図	馬	頸部片	器厚 1.6	胎土 焼成 色調	粗砂粒 酸化焰 色調 胎土・焼成 色調	内外面ともナゲ、手綱は貼付。	
31 第29図 PL29	馬	頭部片	器厚 1.4	胎土 焼成 色調	粗砂粒 酸化焰 色調 胎土・焼成 色調	不 鮮 明	外面はハケ目後頭髻の凸帯を貼付。内面は 縦ナゲ。
32 第29図	馬	頭部片	器厚 2.0～2.5	胎土 焼成 色調	粗砂粒 酸化焰 色調 胎土・焼成 色調	目から耳にかけて。外面はヘラ削り。内面 はヘラナゲ。	

遺物観察表

標記番号 図版番号	種類	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備考
33 第29図 PL.29	馬	瓦部片	器厚 1.4 鈴長 2.6 幅 2.2	胎土 焼成 色調	細砂粒 酸化焰 褐色	外面はヘラナデ、瓦型・高鈴は貼付。内面はナデ。	
34 第29図 PL.29	馬	高鈴	長さ 2.5 幅 2.7 厚 2.7	胎土 焼成 色調	細砂粒 酸化焰 褐色	ナデ整形、口部はヘラ切り。	
35 第29図 PL.30	馬	脚部片	径 10.4 厚 1.5	胎土 焼成 色調	細砂粒 酸化焰 色調 にぶい褐色	外面は縦ヘラ削り、縦ヘラナデ。内面は縦ヘラナデ。	
36 第29図 PL.29	馬	脚端部片	径 12.8 厚 2.0	胎土 焼成 色調	細砂粒 酸化焰 褐色	外面は縦ヘラ削り、ヘラナデ。内面は縦ヘラナデ。	
37 第29図 PL.29	馬	脚端部片	径 9.2 厚 1.7	胎土 焼成 色調	細砂粒 酸化焰 褐色	外面は縦ヘラ削り、ヘラナデ。内面は縦ヘラナデ。	
38 第31図 PL.30	家	屋根の一部	長さ 7.4 幅 2.3 高 2.3	胎土 焼成 色調	細砂粒 酸化焰 褐色	椽木の一部。ナデ整形、中程の屈曲部は指による積み。	
39 第31図 PL.30	家	屋根の一部	長さ 7.4 幅 2.9 高 3.0	胎土 焼成 色調	細砂粒 酸化焰 褐色	椽木の破片。ナデ整形、中程の屈曲部は指による積み。	
40 第31図 PL.30	家	屋根の一部	長さ 5.0 幅 2.5 高 1.8	胎土 焼成 色調	細砂粒 酸化焰 褐色	椽木の一部。ナデ整形、中程の屈曲部は指による積み。	
41 第31図 PL.30	家	小片	器厚 1.1	胎土 焼成 色調	細砂粒 酸化焰 褐色	壁の角部分か。内外面ともナデ、凸帯は貼付。	
42 第31図 PL.30	家	小片	器厚 2.3	胎土 焼成 色調	粗砂粒 酸化焰軟質 黄褐色	壁下部片。外面は縦ハケ目。内面は横ハケ目、横ナデ。	
43 第31図 PL.30	家	小片	器厚 1.2	胎土 焼成 色調	細砂粒 酸化焰 明赤褐色	壁下部片。外面は粗いハケ目後縦ナデ。内面も粗いハケ目後縦ナデ。	
44 第31図 PL.30	盾	小片	器厚 1.6	胎土 焼成 色調	細砂粒 酸化焰 褐色	盾ヒレ部片。表面ともナデ整形。	
45 第31図 PL.30	盾	小片	器厚 2.0~ 2.5	胎土 焼成 色調	粗砂粒 酸化焰 褐色	盾ヒレ部片。表面はハケ目後沈線による区画。裏面はハケ目。	
46 第31図 PL.30	盾	小片	器厚 2.1	胎土 焼成 色調	細砂粒 酸化焰 明褐色	盾ヒレ部片。表面は斜めハケ目。裏面は横ハケ目後横ナデ。	
47 第31図	盾	小片	器厚 1.4~ 2.7	胎土 焼成 色調	粗砂粒 酸化焰 褐色	盾ヒレ部片。表面はハケ目後沈線による区画。裏面はハケ目。	
48 第31図	盾	小片	器厚 1.4	胎土 焼成 色調	細砂粒 酸化焰 褐色	盾ヒレ部片。表面は縦ハケ目後沈線による区画。裏面は横ハケ目。	
49 第31図 PL.30	勒	矢部片	器厚 1.4~ 1.9	胎土 焼成 色調	細砂粒 酸化焰 明赤褐色	表面は縦ハケ目後矢を貼付、整形。裏面は縦ナデ。	不 鮮 明

4号墳円筒埴輪

標記番号 図版番号	出土位置 残存率	計測値 (cm)	凸 形状	帯 段幅	透 孔 形状 大小	胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備考
50 第32図 P.L.30	造出部 口縁部~ 頸部	① 33.2 ② ③	角	9.0 5.8		細砂粒 酸化焰 褐色	10	外面口縁部上半が縦ハケ目、下半以下は縦ナデ。内面は口縁部が斜めハケ目。	

遺物観察表

標記番号 図版番号	出土位置 残存率	計測値 (cm)	凸 帯		通 孔		胎土・施色 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備 考
			形状	段幅	形状	大きさ				
51 第32図 P.L.31	造出部 口縁部～ 頸部片	① 28.5 ② ③	角	7.0 7.7			細砂粒 酸化焰 褐色	8	外面口縁部は縦ハケ目、頸部は縦ナデ、内面は口縁部が斜めハケ目、頸部は縦ナデ。	
52 第32図 P.L.31	造出部 口縁部片	① 31.2 ② ③	角	8.6			細砂粒 酸化焰 褐色	9	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目、その下位は斜めハケ目。	
53 第32図 P.L.31		① 32.8 ② ③	角	10.1			細砂粒 酸化焰 褐色	10 ～ 14	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は斜めハケ目。	
54 第32図 P.L.31	造出部 口縁部片	① 30.2 ② ③	角	8.0			細砂粒 酸化焰 褐色	8 y	外面口縁部は縦ハケ目、凸帯は横ナデ。内面は斜めハケ目。	
55 第32図 P.L.31	周壁(東) 口縁部	① 30.2 ② ③	角	8.2			細砂粒 酸化焰 褐色	8 y	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は斜めハケ目。	
56 第33図 P.L.31	周壁(南) 頸部～第 3段片	① ② ③	M		円 円		粗砂粒 酸化焰 明赤褐色		外面は凸帯が横ナデ、他は斜めナデ。内面は縦ナデ。	
57 第32図 P.L.31	頸部片	① ② ③	角		円		細砂粒 酸化焰 褐色	8	外面頸部は縦ハケ目、凸帯は横ナデ。内面は斜めナデ。	
58 第32図	周壁(西) 頸部下段	① ② ③	斜線		円	6.0	細砂粒 酸化焰 褐色	一	残存部分は内外面とも縦ナデ。	
59 第33図 P.L.32	第1段の 一部欠	① 28.0 ② 15.9 ③ 44.1	角	13.0 8.9 10.0 12.2	円 円	7.0 6.4 6.2 6.2	微砂粒 酸化焰 褐色	15	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ナデ、第1段から第2段中位は斜めハケ目、その下位は縦ナデ。	第4段に「×」のへう 抜き
60 第33図 P.L.32	周壁(北) y	① 26.5 ② 11.3 ③ 40.7	M ₁	8.0 13.2 8.3 11.2	円 円	7.6 7.7 3.9 4.0	細砂粒 酸化焰 褐色	?	外面は凸帯が横ナデ、他は粗い縦ハケ目。内面は上半が縦ハケ目、下半	
61 第33図 P.L.33	周壁(西) y	① 22.2 ② 14.2 ③ 41.3	三	11.2 9.8 8.2 12.1	円 円	5.6 4.9 5.3 4.4	粗砂粒 酸化焰 褐色	11	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は第4段が斜めハケ目、それ以下は縦ナデ。	
62 第32図 P.L.31	周壁(南)	① ② ③	M ₁	15.3			細砂粒 酸化焰 褐色	13	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は斜めハケ目。	
63 第34図 P.L.31	造出部 y	① 25.3 ② 11.9 ③ 35.9	角	12.6 10.5 12.7	円、 楕円	6.8 5.6	微砂粒 酸化焰 褐色	10	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は上半が斜めハケ目、下半は縦ナデ。	第3段に「∩」のへう 抜き
64 第34図 P.L.33	周壁(南) y	① 24.4 ② 14.2 ③ 38.4	M ₁	10.8 13.2 9.5	楕円 楕円	6.6 6.6	細砂粒 酸化焰 褐色	10	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目、上半が斜めハケ目、下半は縦ナデ。	
65 第34図 P.L.33	第3段の 一部欠	① 23.7 ② 15.5 ③ 39.1	角	14.5 13.8 15.9	円、 楕円	6.3 6.3	細砂粒 酸化焰 褐色	10	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目、その下位が底部まで斜めハケ目。	
66 第34図 P.L.33	第3段の 欠欠	① 23.4 ② 15.6 ③ 41.7	M ₁	12.5 12.3 16.9	円	6.9 6.0	細砂粒 酸化焰 褐色	12	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は斜めハケ目後継な縦ナデ。	
67 第34図 P.L.33	造出部 一部欠	① 22.4 ② 11.6 ③ 37.3	角	10.5 11.9 14.9	円	7.2 6.8	粗砂粒 酸化焰 褐色	9	外面は凸帯がハケ目、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目、上半は斜めハケ目、下半は縦ナデ。	
68 第34図 P.L.34	周壁(北) ほぼ完形	① 20.4 ② 12.5 ③ 36.1	角	11.6 11.3 13.2	円	7.2 6.1	細砂粒 酸化焰 褐色	6	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目、上半が斜めハケ目、下半が縦ナデ。	第3段に「∩」のへう 抜き
69 第35図 P.L.34	周壁(北) ほぼ完形	① 19.4 ② 12.2 ③ 32.9	M ₁	10.5 10.6 11.8	円	6.5 5.3	粗砂粒 酸化焰 褐色	不 鮮 明	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目。他は縦ナデ。	第3段に「∩」のへう 抜き

遺物観察表

採取番号 図版番号	出土位置 現存率	計測値 (cm)	凸 形状	帯 段幅	透 形状	孔 穴径	胎土・焼成 色面	ハ ケ	成形・整形の特徴	備 考
70 第35図 P.L.34	周壁(西) 口縁部の一 部欠	① 21.7 ② 19.5 ③ 35.0	角	10.9 10.7 13.4	円	6.3 6.3	粗砂粒 酸化焰 褐色	11 5	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目、上半は斜めハケ目、下半は縦ナデ。	第3段に「Ⅴ」のヘラ 抜き
71 第35図 P.L.34	周壁(南) ㄱ	① 21.0 ② 11.0 ③ 34.0	角	10.8 10.4 12.8	円	6.5 5.3	細砂粒 酸化焰 褐色	8	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は上半が斜めハケ目、下半は縦ナデ。	第3段に「Ⅴ」のヘラ 抜き
72 第35図 P.L.34	周壁(北) ほぼ完形	① 21.2 ② 11.5 ③ 35.2	M ₁	9.4 11.3 14.5	円	6.9 6.3	粗砂粒 酸化焰 褐色	8	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目、第1・2段は斜めハケ目、第1段は縦ナデ。	第3段に「Ⅴ」のヘラ 抜き
73 第35図 P.L.34	造出部 ㄱ	① 22.0 ② 11.5 ③ 31.9	角	10.1 8.7 13.1	円	5.8 5.7	粗砂粒 酸化焰 褐色	10	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は第3段が斜めハケ目、第1・2段は縦ナデ。	第3段に「Ⅴ」のヘラ 抜き
74 第35図 P.L.34	周壁(南) ㄱ	① 20.6 ② 11.3 ③ 34.7	角	10.6 10.4 13.7	円	7.5 6.4	微砂粒 酸化焰 褐色		外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ナデか。内面は口縁部が横ナデ、他は縦ナデ。	
75 第36図 P.L.34	周壁(北) 完形	① 19.6 ② 13.0 ③ 30.8	角	11.2 8.9 10.7	円	6.6 6.7	粗砂粒 酸化焰 褐色	15	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ナデ。その下位はハケ目後縦ナデ。	第3段に「Ⅴ」のヘラ 抜き
76 第36図 P.L.35	周壁(南) 完形	① 27.2 ② 13.1 ③ 31.1	M ₁	11.8 8.5 10.8	円	6.1 5.9	粗砂粒 酸化焰 褐色		外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ナデ。内面は口縁部が横ナデ、その下位は縦ナデ。	
77 第36図 P.L.34	造出部 ㄱ	① 21.7 ② 11.8 ③ 32.8	角	11.4 10.0 11.4	円		細砂粒 酸化焰 明黄褐色	12	内面に輪痕が残る。外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目、他は縦ナデ。	
78 第36図 P.L.35	周壁(西) ㄱ	① 22.0 ② 11.5 ③ 35.1	三	11.1 12.0 12.0	円	6.8 6.6	細砂粒 酸化焰 褐色	12	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は第3段が斜めハケ目、第1・2段は縦ナデ。	第3段に「Ⅴ」のヘラ 抜き
79 第36図 P.L.35	周壁(北) 第3段の 一部欠	① 22.0 ② 11.7 ③ 36.6	角	11.9 9.9 14.9	円	6.3 5.5	細砂粒 酸化焰 褐色	6	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目、上半は斜めハケ目、下半は縦ナデ。	第3段に「Ⅴ」のヘラ 抜き
80 第36図 P.L.35	周壁(北) ほぼ完形	① 18.4 ② 12.0 ③ 37.1	M ₁	11.1 12.3 13.7	円	8.3 8.0	微砂粒 酸化焰 褐色	17 20	外面は第3段の上半と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ナデ、その下位は縦ハケ目後縦ナデ。	
81 第37図 P.L.35	周壁(北) 第3段の 一部欠	① 20.0 ② 10.5 ③ 33.0	三	8.9 9.7 14.4	円	6.8 7.2	細砂粒 酸化焰 褐色	10	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は上半が斜めハケ目、下半は縦ナデ。	第3段に「Ⅴ」のヘラ 抜き
82 第37図 P.L.35	周壁(南) ㄱ	① 21.0 ② 10.7 ③ 33.6	角	10.6 10.5 12.5	円	5.2 5.8	粗砂粒 酸化焰 褐色	8	内面に輪痕が残る。外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目。上半は斜めハケ目。	第3段に「Ⅴ」のヘラ 抜き
83 第37図 P.L.35	周壁(北) ㄱ	① 19.5 ② 12.4 ③ 35.7	角	9.8 11.8 14.1	円	6.5 6.4	細砂粒 酸化焰 褐色	6 5 9	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目、口縁部下は縦ナデ。	
84 第37図 P.L.35	ほぼ完形	① 20.8 ② 12.8 ③ 34.2	三	9.6 9.4 15.2	円	5.0 5.7	微砂粒 酸化焰軟質 褐色	7 5 13	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は第3段が斜めハケ目、第1・2段は縦ナデ。	
85 第37図 P.L.35	周壁(西) ㄱ	① 20.8 ② 10.2 ③ 35.4	角	11.0 10.8 13.6	円	6.0 5.6	細砂粒 酸化焰 褐色	12	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目、上半は斜めハケ目、下半は縦ナデ。	第3段に「Ⅴ」のヘラ 抜き
86 第37図 P.L.36	周壁(南) ㄱ	① 20.2 ② 12.0 ③ 11.5	三	11.8 10.0 11.5	円	6.7 5.6	細砂粒 酸化焰 褐色	7 5 11	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は上半が斜めハケ目、下半は縦ナデ。	第3段に「Ⅴ」のヘラ 抜き
87 第38図 P.L.36	周壁(西) ㄱ	① 21.0 ② 11.0 ③ 34.6	角	10.5 11.3 12.8	円	6.5 5.8	細砂粒 酸化焰 褐色	9	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目、上半が縦ハケ目、下半は縦ナデ。	第3段に「Ⅴ」のヘラ 抜き

遺物観察表

標記番号 図版番号	出土位置 残存率	計測値 (cm)	凸 帯		透 孔		胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備 考
			形状	段幅	形状	大きさ				
88 第38図 P.L.36	周軀(北) 1/3	① 24.0 ② 10.0 ③ 35.0	角	10.8 10.0 14.2	円	6.8 6.0	6.8 酸化焰 褐色	13	外面は凸帯が横ナデ。他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目、上半は斜めハケ目後縦ナデ、下半は縦ナデ。	第3段に「ㄨ」のヘラ描き
89 第38図 P.L.36	1/3	① 19.4 ② 11.5 ③ 33.5	角	9.6 10.4 13.5	円	6.1 6.4	6.1 酸化焰 褐色	10	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ナデ、他は縦ナデ。	
90 第38図 P.L.36	1/3	① 16.8 ② 11.5 ③ 31.5	角	9.2 9.5 11.8	円	7.7 6.0	7.7 酸化焰 褐色	9	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は横ハケ目後下半に縦ナデ。	
91 第38図 P.L.36	造出部 1/3	① 21.6 ② 12.8 ③ 36.0	M ₁	10.9 10.3 14.8	円	6.5 6.2	6.5 酸化焰 明赤褐色	12	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ナデ、他は縦ハケ目後縦ナデ。	第3段にヘラ描き
92 第38図 P.L.36	周軀(北) 1/3	① 21.5 ②	三	11.1 10.6	円	6.3 6.0	6.3 酸化焰 褐色	7	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目、上半は斜めハケ目、下半は縦ナデ。	
93 第39図 P.L.36	造出部 第3段～ 第1段片	① 22.1 ② ③	角	10.5 9.8	円	6.3 4.9	6.3 酸化焰 褐色	13	内面に輪模様が残る。外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ナデか。内面は縦ナデ。	第3段に「ㄨ」のヘラ描き
94 第39図 P.L.36	周軀(西) 第3段～ 第1段片	① 17.8 ② ③	M ₂	11.4 9.8	円	5.4 5.3	5.4 酸化焰 褐色	14	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ナデ、上半が斜めハケ目、下半が縦ナデ。	
95 第39図 P.L.37	墳丘(北) 第3段～ 第1段片	① 23.3 ② ③	M ₁	11.8 11.5	円	6.8 5.9	6.8 酸化焰 褐色	9	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は斜めハケ目。	内面第3段にヘラ描き
96 第39図 P.L.37	周軀(南) 第3段～ 第1凸帯	① 21.0 ② ③	M ₁	11.3	円	6.6 6.3	6.6 酸化焰 褐色	7	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は第3段が斜めハケ目、第2段が縦ナデ。	第3段に「ㄨ」のヘラ描き
97 第39図 P.L.37	周軀(北) 第3段～ 第1段片	① 21.3 ② ③	角	11.3 10.9	円	7.1 6.0	7.1 酸化焰 褐色	18	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ナデ、他は縦ハケ目。	第3段に「ㄨ」のヘラ描き
98 第39図 P.L.37	周軀(西) 第1凸帯 ～口縁部	① 19.6 ② ③	三	11.5 9.6	楕円	6.3 7.1	6.3 酸化焰 明褐色	8	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ナデ、上半は斜めハケ目、下半は縦ナデ。	第3段に「ㄨ」のヘラ描き
99 第39図 P.L.37	周軀(北) 第1凸帯 ～口縁部	① 20.2 ② ③	三	7.3 10.3	円	7.3 6.7	7.3 酸化焰 明赤褐色	10	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目、上半が斜めハケ目、下半が縦ナデ。	
100 第39図 P.L.37	周軀(北) 第1凸帯 ～口縁部	① 22.1 ② ③	三	11.7 11.5	円	(5.8) 5.6	(5.8) 酸化焰 褐色		外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ナデ。内面は縦ナデ。	第3段に「ㄨ」のヘラ描き
101 第39図 P.L.37	周軀(北) 第凸帯～ 口縁部	① 28.4 ② ③	角	11.3 10.6	円	5.7 6.5	5.7 酸化焰 褐色	13	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は第3段が斜めハケ目、第2段目が縦ナデ。	
102 第40図 P.L.37	周軀(東) 第1段片 ～口縁部	① 20.8 ② ③	角	9.8 10.0	円	6.2 5.9	6.2 酸化焰 褐色	6	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は上半が斜めハケ目、下半は縦ナデ。	
103 第40図 P.L.37	第1段～ 口縁部	① 18.3 ② ③	三	8.5 7.6	円	5.7 5.6	5.7 酸化焰 褐色	12	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は第3段が斜めハケ目、第2段は縦ナデ。	
104 第40図 P.L.38	周軀(西) 第3段～ 第1凸帯	① 23.7 ② ③	M ₁	10.2 8.3	円	5.9 5.5	5.9 酸化焰 褐色	10	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ナデ、他は斜めハケ目後縦ナデ。	
105 第40図 P.L.38	周軀(西) 第1段～ 第2段	① 21.6 ② ③	角	9.6 10.4	円	5.9 6.0	5.9 酸化焰 褐色	8	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は斜めハケ目。	
106 第40図 P.L.38	周軀(東) 第3段～ 第2段片	① 20.5 ② ③	角	10.7 9.8	円	6.0 6.5	6.0 酸化焰 褐色		内面に輪模様が残る。外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ナデか。内面は縦ナデ。	第3段に「ㄨ」のヘラ描き

遺物観察表

編年番号 図版番号	出土位置 残存率	計測値 (cm)	凸 形状	帯 段幅	透 形状	孔 大きさ	胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備 考
107 第40図 P.L.38	周堀(西) 第3段～ 第2段片	① 21.2 ② ③	角	10.7	円	6.5 5.2	細砂粒 酸化焰 褐色		外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ナデ。内面は口縁部が横ナデ、他は斜めナデ。	
108 第40図 P.L.38	周堀(南) 第2段～ 口縁部片	① 23.4 ② ③	角	10.9	円		細砂粒 酸化焰 褐色	10 5 13	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目、口縁部下は斜めハケ目。	
109 第40図	周堀(西) 口縁部～ 第2段片	① 23.3 ② ③	M ₁	9.8			細砂粒 酸化焰 褐色		外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は第3段が斜めハケ目、第2段は縦ナデ。	第3段に「X」のヘラ 抜き
110 第40図	周堀(北) 第3段～ 第2段片	① 25.4 ② ③	角	11.7	円		細砂粒 酸化焰 褐色	7	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目、他は斜めハケ目後縦ナデ。	第3段に「M」のヘラ 抜き
111 第40図	造出部 第2段～ 口縁部片	① 21.5 ② ③	角	10.5	円		細砂粒 酸化焰 褐色	10	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目、その下位は斜めハケ目後縦ナデ。	
112 第40図 P.L.38	周堀(東) 第2段～ 口縁部	① 21.2 ② ③	M ₁	10.3	円	6.8	粗砂粒 酸化焰 褐色	14	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ナデ。内面は口縁部が横ハケ目、上半は斜めハケ目。	第3段に「M」のヘラ 抜き
113 第40図	第2段～ 口縁部	①(19.8) ② ③	角	12.6	円		細砂粒 酸化焰 褐色	12	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は第3段上半がハケ目、下位は縦ナデ。	第3段にヘラ抜き
114 第41図	第3段	① 20.2 ② ③	三	10.0	円		細砂粒 酸化焰 褐色	9	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目、その下位が斜めハケ目。	
115 第41図 P.L.38	周堀(北) 第2段～ 第2段片	① 21.4 ② ③	M ₁	10.7	円		微砂粒 酸化焰 明赤褐色	9	内面に輪痕痕が残る。外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ナデ、他は縦ナデ。	
116 第41図 P.L.38	周堀(東) 第2・3 段片	① 23.8 ② ③	角	10.9	円		細砂粒 酸化焰 褐色	7 5	内面に輪痕痕が残る。外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横、他は斜めハケ目。	
117 第41図 P.L.32	周堀(東) 第3段～ 第2段片	① 20.8 ② ③	三	10.5	円		粗砂粒 酸化焰 褐色	8	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目、他は斜めハケ目。	
118 第41図	造出部 第1段～ 第2段片	① 20.4 ② ③	三	9.7	円		細砂粒 酸化焰 褐色		外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ナデ。内面は縦ナデ。	
119 第41図 P.L.32	周堀(南) 第1段片	① 21.0 ② ③	角	10.5	円		細砂粒 酸化焰 褐色		外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ナデ。内面は縦ナデ。	第3段に「M」のヘラ 抜き
120 第41図	周堀(北) 第2段～ 口縁部片	① 24.3 ② ③	角	9.9	円		細砂粒 酸化焰 褐色	8	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目、その下位は斜めハケ目。	
121 第41図 P.L.32	周堀(西) 第2・3 段片	① 23.8 ② ③	三	9.7	円		粗砂粒 酸化焰 にぶい褐色		内面に輪痕痕が残る。外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ナデ。内面は横ナデ、他は縦ナデ。	
122 第41図	第3段片	① 20.6 ② ③	角	11.0	円		粗砂粒 酸化焰軟質段 褐色	6 5	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、第3は縦ハケ目。内面は斜めハケ目。	
123 第41図 P.L.38	周堀(北) 第2・3 段	① 26.6 ② ③	M	10.4			粗砂粒 酸化焰 褐色		外面は口縁部と凸帯が横ナデ、他は縦ナデ。内面は口縁部が横ナデ、他は縦ナデ。	
124 第41図 P.L.38	第1段～ 第2段片	① 22.6 ② ③	M ₁	11.4	円		細砂粒 酸化焰 褐色	9	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は斜めハケ目。	
125 第41図	周堀(東) 第3段片	① 22.4 ② ③	角	9.8	円		細砂粒 酸化焰 褐色	10	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目、その下位は縦ハケ目後縦ナデ。	第3段に「M」のヘラ 抜き

遺物観察表

採掘番号 図版番号	出土位置 残存率	計測値 (cm)	凸 形状	帯 段幅	透孔 形状 大きさ	胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備考
126 第41図	周縁(南) 第3段片	① 24.8 ② ③	角	11.1		細砂粒 酸化焰 褐色	8	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は斜めはけめ後縦ナデ。	
127 第41図	周縁(西) 第3段～ 第2段片	① 18.8 ② ③	M	6.0		粗砂粒 酸化焰 褐色	12	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目、他は斜めハケ目後縦ナデ。	
128 第41図	第2段～ 口縁部	① 21.5 ② ③	角	10.0	円	粗砂粒 酸化焰 褐色	10	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は斜めハケ目後縦ナデ。	
129 第41図	造出部 第3段片	① 19.6 ② ③				細砂粒 酸化焰 褐色	8	外面は口唇部が横ナデ、第3段は縦ハケ目。内面は斜めハケ目。	
130 第41図	口縁部～ 第1凸帯	① 25.6 ② ③	M	10.0		粗砂粒 酸化焰 褐色	8	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、第3段は縦ハケ目。内面は斜めハケ目。	
131 第41図	第3段片	① ② ③	角			粗砂粒 酸化焰 褐色	8 5	外面は凸帯が横ナデ、第3段は縦ハケ目。内面は斜めハケ目。	第3段に「ハ」のヘラ抜き
132 第41図 P.L.38	第1段～ 第3段片	① ② ③	M ₁	9.3	円?	粗砂粒 酸化焰 明赤褐色	11 5	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は斜めハケ目後縦ナデ。	
133 第42図	周縁(南) 第1段～ 第2凸帯	① ② ③	角	10.4		細砂粒 酸化焰 にぶい赤褐色	15	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
134 第42図	墳丘(北) 第1段～ 第3段片	① ② ③	M ₁ M ₁	11.5	円	7.0 × 6.8	11	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
135 第42図 P.L.33	第1段～ 第3段片	① ② ③	M ₁ M ₁	5.2	円	× 5.8	10	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	4段横成か
136 第42図 P.L.33	周縁(東) 第2段～ 第3段片	① ② ③	M ₁	円		粗砂粒 酸化焰軟質 褐色	8	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
137 第42図 P.L.33	第2・3 段片	① ② ③	M ₁	円?	7.6	細砂粒 酸化焰 褐色	12	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は斜めハケ目。	
138 第42図	周縁(西) 第3段～ 第2段片	① ② ③	角	円。		粗砂粒 酸化焰 褐色	8	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
139 第42図	周縁(北) 第1凸帯 上下片	① ② ③	角	円		粗砂粒 酸化焰 褐色	7	外面は凸帯が横ナデ、第1・2段は縦ハケ目であるが、単位のため単位不明。内面は縦ナデ。	
140 第42図	周縁(南) 第2段片	① ② ③	M ₁	円	5.9	細砂粒 酸化焰 褐色	?	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目であるが、単位不明。内面は上部が縦ハケ目、下部が縦ナデ。	
141 第42図	造出部 第2・3 段片	① ② ③	角	円		粗砂粒 酸化焰 褐色	8	外面は凸帯が横ハケ目、他は縦ハケ目。内面は斜めハケ目。	
142 第42図	第2凸帯 上下片	① ② ③	M ₁	円。		細砂粒 酸化焰 褐色		外面は凸帯が横ナデ、凸帯の上下は縦ナデ。内面は縦ナデ。	
143 第42図	第2段片	① ② ③	角	12.1		細砂粒 酸化焰 褐色	7	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面はハケ目後縦ナデ。	
144 第43図 P.L.39	周縁(西) 1/2	① 11.9 ② ③	角	11.6 14.0	楕円	6.3 6.8	7 5	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は上半が斜めハケ目、下半は縦ナデ。	第3段にヘラ抜き
145 第43図 P.L.39	1/2	① ② 14.4 ③	角	12.2 11.5	円	6.2 6.7	10 5 13	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目であるが第1段はハケ目後上面に粘土を貼付し横ヘラ削り。内面は縦ナデ。	

遺物観察表

検出番号 図版番号	出土位置 保存率	計測値 (cm)	凸 形状	帯 段幅	透 孔 形状 大小	胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備 考
146 第43図 P.L.39	造出部 ① ② ③	12.4	角	11.2 13.2	円, 7.3 7.0	細砂粒 酸化焰 褐色	10 5	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は上半が斜めハケ目、下半は縦ナデ。	
147 第43図 P.L.39	造出部 ① ② ③	12.5	M ₁	11.0 13.2	円, 7.0 5.5	粗砂粒 酸化焰 褐色	10	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は上半が斜めハケ目、下半は縦ナデ。	
148 第43図 P.L.39	周縁(南) 第1段～ 第2段片	① ② ③	M ₁	13.5 14.1	円	細砂粒 酸化焰 褐色	14 5	外面は凸帯が横ナデ、第1・2段は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
149 第43図 P.L.41	周縁(西) 底部～第 2段	① ② ③	角	12.1 13.8	円	粗砂粒 酸化焰 褐色	?	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目であるが、薄減のため単位不明。内面は縦ナデ。	
150 第44図 P.L.39	墳丘(北)	① ② ③	三	12.0 14.4	円?	細砂粒 酸化焰 褐色	5 5	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
151 第43図 P.L.39	周縁(南) 底部～第 2凸帯	① ② ③	三 M ₁	10.5 12.7	円 6.2 5.9	細砂粒 酸化焰 褐色	9	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は透孔より上位が斜めハケ目、下位は縦ナデ。	
152 第44図 P.L.39	周縁(西) 底部～第 2段中位	① ② ③	M ₁	11.5 10.7 12.6	円?	細砂粒 酸化焰 褐色	10 5	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
153 第44図 P.L.40	造出部 第1段～ 第2段片	① ② ③	M ₁	12.0 14.2	円	細砂粒 酸化焰 褐色	7 5	外面は凸帯が横ナデ、第1・2段は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
154 第44図 P.L.40	周縁(西) 第1段～ 第2段片	① ② ③	角	11.8 13.4	円?	粗砂粒 酸化焰 褐色	7 5	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
155 第44図 P.L.39	第1段～ 第2段片	① ② ③	角	12.6 15.0	円	粗砂粒 酸化焰 にぶい赤褐色	14	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ハケ目後継な縦ナデ。	
156 第44図 P.L.39	第1段～ 第2段片	① ② ③	三	11.0 13.3	円?	細砂粒 酸化焰 褐色	9	外面は凸帯が横ナデ、第1・2段は縦ハケ目。内面は透孔付近まではハケ目、下位は縦ナデ。	
157 第44図 P.L.40	造出部 第1段～ 第2段片	① ② ③	M ₁	12.9 14.0	円?	細砂粒 酸化焰 褐色	11	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
158 第45図 P.L.40	周縁(南) 第1段～ 第2段片	① ② ③	角	12.5	円?	粗砂粒 酸化焰 褐色	9	外面は凸帯が横ナデ、第1・2段は縦ハケ目。内面は第2段が斜めハケ目、第1段は縦ナデ。	
159 第45図 P.L.40	周縁(北) 第1段 第2段片	① ② ③	M ₁	12.0 13.6	円	細砂粒 酸化焰 褐色	10	外面は凸帯が横ナデ、第1・2段は縦ハケ目。内面は縦ナデであるが、斜めハケ目痕が残る。	
160 第45図 P.L.40	周縁(西) 第1段～ 第2段片	① ② ③	M ₁	11.5	円?	細砂粒 酸化焰 褐色	11	内面に輪痕痕が残る。外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
161 第45図 P.L.40	周縁(北) 第1段～ 第2段片	① ② ③	角	11.9	円	粗砂粒 酸化焰 褐色	6	内面に輪痕痕が残る。外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
162 第45図 P.L.40	周縁(南) 第1段～ 第2段片	① ② ③	角	11.3 13.1	円?	粗砂粒 酸化焰 褐色	6	内面に輪痕痕が残る。外面は凸帯が横ナデ、第1・2段は縦ナデか。内面は縦ナデ。	
163 第45図 P.L.40	周縁(南) 第1段～ 第2段片	① ② ③	角	11.6 14.1	円	粗砂粒 酸化焰 褐色	6	外面は凸帯が横ナデ、第1・2段は縦ハケ目。内面は縦ハケ目後継ナデ。	
164 第45図 P.L.40	造出部 第1段～ 第2段片	① ② ③	M ₁	12.5 15.0	円	粗砂粒 酸化焰 褐色	7 5	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
165 第45図 P.L.38	周縁(東) 底部～第 2段	① ② ③	M ₁	14.0 11.0	円?	粗砂粒 酸化焰 褐色	7 5	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	

遺物観察表

検出番号 図版番号	出土位置 残存率	計測値 (cm)	凸 形状	帯 段幅	透 孔 形状 大小	胎土・焼成 色調	ハ ケ	成形・整形の特徴	備 考
166 第45図 P.L.40	周縁(西) 第1・2 段片	① ② 12.2 ③	M ₁		円	粗砂粒 酸化焰 褐色		外面は凸帯が横ナデ、他は縦ナデ、 内面は縦ナデ。	
167 第45図 P.L.41	第1段～ 第2段片	① ② 12.0 ③	三		円?	粗砂粒 酸化焰 褐色	5 5	内面に輪横痕が残る。外面は凸帯 が横ナデ、他は縦ハケ目。内面第 2段は斜めハケ目。第1段は縦ナ デ。	
168 第46図	周縁(南) 第1段	① ② 11.0 ③	角		円?	粗砂粒 酸化焰 褐色	6 5	外面は凸帯が横ナデ、第1段は縦 ハケ目。内面は縦ナデ。	
169 第46図 P.L.37	造出部 底部～第 2段片	① ② 12.0 ③	角		円	粗砂粒 酸化焰 褐色	?	外面は凸帯が横ナデ、第1・2段 は縦ハケ目であるが厚減のため単 位不明。内面は縦ナデ。	
170 第45図 P.L.41	周縁(北) 第2段～ 底部	① ② 14.0 ③	M ₁		円?	粗砂粒 酸化焰 褐色	?	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ 目。内面は斜めハケ目後縦ナデ。	
171 第45図 P.L.37	造出部 第1段～ 第1凸帯	① ② 13.6 ③	角		円?	細砂粒 酸化焰 褐色	8 5	外面は凸帯が横ナデ、第1段は縦 ハケ目。内面は縦ナデ。	
172 第46図	周縁(西) 第2段～ 底部	① ② 15.3 ③	M ₁			粗砂粒 酸化焰 褐色	10	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ 目。内面は斜めハケ目。	
173 第46図 P.L.41	周縁(南) 第1段～ 第2段片	① ② 12.0 ③	角			粗砂粒 酸化焰 褐色		内面に輪横痕が残る。外面は凸帯 が横ナデ、第1・2段は縦ナデか、 内面は縦ナデ。	
174 第46図	周縁(南) 底部～第 1凸帯	① ② 11.4 ③	角			細砂粒 酸化焰 褐色	?	外面は凸帯が横ナデ、第1段は縦 ハケ目、内面は縦ナデ。	
175 第46図	周縁(南) 第1段～ 第2段片	① ② 11.9 ③	角			粗砂粒 酸化焰 褐色	不明	外面は凸帯が横ナデ、第1段は縦 ハケ目。内面は縦ナデ。	
176 第46図	造出部 第1段～ 第2段片	① ② 11.7 ③	角			粗砂粒 酸化焰 褐色		外面は凸帯が横ナデ、第1・2段 は縦ナデ。内面も縦ナデ。	
177 第46図	造出部 第1・2 段片	① ② 12.2 ③	M ₁			粗砂粒 酸化焰 褐色	10	内面に輪横痕が残る。外面は凸帯 が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は 縦ハケ目。	
178 第46図	墳丘(南)	① ② 14.2 ③	角			細砂粒 酸化焰 褐色		外面は凸帯が横ナデ、第1・2段 は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
179 第46図	周縁(西) 第1段～ 第2段片	① ② 16.0 ③	角			粗砂粒 酸化焰 褐色	8 5 9	外面は凸帯が横ナデ、第1・2段 が縦ハケ目。内面は斜めハケ目。	
180 第46図	第1段～ 第2段片	① ② 11.2 ③	三			細砂粒 酸化焰 褐色	7	内面に輪横痕が残る。外面は凸帯 が横ナデ、第1・2段は縦ハケ目。 内面は縦ナデ。	
181 第44図	周縁(南) 第1段	① ② 12.2 ③	角			粗砂粒 酸化焰 褐色	6	外面は凸帯が横ナデ、第1段は縦 ハケ目。内面は縦ナデ。	
182 第44図	造出部 第1段片	① ② 10.6 ③				細砂粒 酸化焰 褐色	12	外面は第1段が縦ハケ目。内面は 縦ナデ。	
183 第44図	周縁(南) 第1段片	① ② 12.0 ③				粗砂粒 酸化焰 褐色		外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
184 第44図	第1段片	① ② 12.4 ③				細砂粒 酸化焰 褐色	12	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
185 第46図	周縁(南) 第1段片	① ② 12.2 ③				粗砂粒 酸化焰 褐色	10	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	

遺物観察表

編年番号 図録番号	出土位置 残存率	計測値 (cm)	凸 帯		連 孔	胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備 考
			形状	段幅					
186 第47図	周壁(北) 第1段片	① ② 12.0 ③				細砂粒 酸化焰 明赤褐色	7	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ、 上部付近は横ハケ目が残る。	
187 第47図	第1段片	① ② 14.2 ③				微砂粒 酸化焰 明赤褐色	14	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ、 一部に縦ハケ目。上部に横ハケ目 が残る。	
188 第47図	第1段片	① ② 12.6 ③				粗砂粒 酸化焰 棕色	8	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
189 第47図	周壁(北) 第1段片	① ② 14.3 ③				細砂粒 酸化焰 浅黄色	7	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ、 一部縦ハケ目が残る。	
190 第47図	周壁(西) 第1段片	① ② 14.3 ③				粗砂粒 酸化焰 明赤褐色	12	外面は縦ハケ目。内面は斜めハケ 目。	
191 第47図	造出部 第1段片	① ② 11.6 ③				粗砂粒 酸化焰 棕色	8	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
192 第47図	周壁(西) 第1段片	① ② 12.0 ③				細砂粒 酸化焰 棕色	12	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
193 第47図	周壁(北) 第1段片	① ② 12.0 ③				微砂粒 酸化焰 棕色	15	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
194 第47図	周壁(西) 第1段片	① ② 12.0 ③				細砂粒 酸化焰 明赤褐色	7	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
195 第47図	第1段片	① ② 13.0 ③				細砂粒 酸化焰 浅黄色	12	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
196 第47図	周壁(南) 第1段片	① ② 11.7 ③				粗砂粒 酸化焰 棕色	6	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
197 第47図	周壁(北) 第1段片	① ② 16.0 ③				細砂粒 酸化焰 棕色	7	外面は縦ハケ目が施されているが 摩滅のため単位等は不明。内面は 縦ナデ。	
198 第46図	周壁(西) 第1段片	① ② 14.4 ③				細砂粒 酸化焰 棕色	9	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
199 第47図	周壁(南) 第1段片	① ② 11.0 ③				粗砂粒 酸化焰 棕色	7	外面は縦ハケ目。摩滅のため単位 などは不明。内面は縦ナデ。	
200 第47図	周壁(南) 第1段～ 第3段片	2凸帯径 19.4	台 台	0.7 0.5	円? 不明	細砂粒 酸化焰 棕色	7	外面は縦ハケ目、凸帯及びその上 下は横ナデ。内面は縦ナデ、一部 縦ハケ目が残る。	
201 第47図	第1段片	① ② 15.0 ③				粗砂粒 酸化焰 浅黄棕色	13	外面は縦ハケ目。内面は縦ハケ目 後ナデ。	
202 第46図	第1段片	① ② 14.0 ③				細砂粒 酸化焰 棕色	7	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
203 第47図	第1段片	① ② 11.4 ③				微砂粒 酸化焰 棕色	7	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
204 第48図 P.L.37	造出部 口縁部片		㊦角			細砂粒 酸化焰 棕色	8 5 9	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他 は縦ハケ目。内面は上半が斜めハ ケ目、下半が横ナデ。	
205 第48図	第2段～ 第3段片		㊦M			粗砂粒 酸化焰 棕色	8	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、2 段目・3段目は縦ハケ目。内面は 口唇部が横ハケ目、他は縦ハケ目。	

遺物観察表

標記番号 図版番号	出土位置 残存率	計測値 (cm)	凸 帯		透 孔		胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備 考
			形状	段幅	形状	大きさ				
206 第48図	第2段～ 第3段片		三		円		細砂粒 酸化焰 褐色	8	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ハケ目が残る。	
207 第48図	周縁(西) 第2段～ 第3段片		三		円 ₁		細砂粒 酸化焰 褐色	8	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は3段目上半が横ハケ目、それ以下は縦ナデ。	
208 第48図	周縁(南) 第3段片						細砂粒 酸化焰 にぶい赤褐色	22	外面は口唇部と凸帯の上位は横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ、縦ハケ目が残る。	外面にヘラ記号
209 第48図	第2段～ 第3段片		角				細砂粒 酸化焰	9 5	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は斜めハケ目後継な縦ナデ。	外面に「M」のヘラ記号
210 第48図	第2段～ 第3段片		M ₁		円 ₁		細砂粒 酸化焰 褐色	?	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ、一部縦ハケ目が残る。	
211 第48図	造出部 第2段～ 第3段片		角		円 ₁		細砂粒 酸化焰 明赤褐色	?	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
212 第48図	周縁(西) 第2段～ 第3段片		M ₁		円 ₁		粗砂粒 酸化焰 褐色	?	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ハケ目。	
213 第48図	周縁(西) 第1段～ 第2段片		角		円?		粗砂粒 酸化焰 褐色	12	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ、一部縦ハケ目が残る。	
214 第48図	第2段～ 第3段片		角		円	6.0 × 不明	粗砂粒 酸化焰 にぶい褐色	10 5 12	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ、一部に縦ハケ目が残る。	外面に「M」のヘラ記号
215 第48図	第2段～ 第3段片		三		円		細砂粒 酸化焰 褐色	?	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ、一部に縦ハケ目が残る。	
216 第48図	周縁(南) 第2段～ 第3段片		M ₁		⑤円 ₁ ⑥円 ₁		細砂粒 酸化焰 褐色	11 5 16	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	4段構成
217 第49図	墳丘(西) 第1段～ 第2段片		三		円?		細砂粒 酸化焰 褐色	10	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
218 第49図	墳丘 部位不明		角				粗砂粒 酸化焰軟質 褐色	10	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ハケ目。	径は相当大きくなるか
219 第48図	第1凸帯 ～第3段		角三	8.5	円		粗砂粒 酸化焰 にぶい褐色	?	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	

5号墳土器

標記番号 図版番号	種 類	出 土 位 置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備 考
1 第55図 P.L.41	土師器 杯	墳丘 1/3	① 12.6 ② 14.0 ③ 3.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③灰色	口唇部の平坦面に1条の凹線が走る。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
2 第55図 P.L.41	土師器 杯	主体部 1/3	① 14.0 ② 15.2 ③	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
3 第55図 P.L.41	須恵器 埴瓶	主体部他 口縁部	① 9.2 ② ③	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、口唇部に沈線が1条走る。	
4 第55図 P.L.41	須恵器 埴瓶	胴部片	① ② ③	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、外面はカキ目。	

遺物観察表

検出番号 図版番号	種類	出土位置 残存状態	量	目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
5 第558回 P.L.41	須臾器 横板	主体部 胴部片	① ② ③		①細砂粒(含白色粒) ②還元焰 ③灰色	外面はカキ目。内面はあて具痕が残る。	
6 第558回 P.L.41	須臾器 煲	主体部 ノ	① 23.4 胴径 37.5 ③ 38.0		①細砂粒 ②還元焰 ③褐色	口縁部は中程の凸帯で区分され、上下に波状文(8~10)が施されている。胴部は平行印後上位はカキ目。内面胴部は同心円状のあて具痕が残る。	

5号墳形象埴輪

検出番号 図版番号	種類	出土位置 残存状態	計 割 値 (cm)	胎土・焼成 色調	ハ ケ	成形・整形の特徴	備 考
7 第558回 P.L.41	人物	両眉(南) 顔面片	器厚 0.9~ 2.3	胎土 焼成 酸化焰 色調 褐色		外面はナデ整形、鼻・耳筋りは貼付、目・口・鼻孔はヘラ切り。内面はナデ。	
8 第558回 P.L.41	人物	両眉(南) 腕片	幅 2.6 厚 2.4	胎土 焼成 酸化焰 色調 褐色		左腕片か。縦ナデ。	
9 第558回 P.L.41	人物	主体部 衣の一部	器厚 1.1	胎土 焼成 酸化焰 色調 褐色		内面に輪積痕が残る。外面は縦ハケ目後沈線を描し、ボタン状の円形の装飾具を貼付。	
10 第558回 P.L.41	人物	両眉(南) 小片	幅 1.7 厚 0.8	胎土 焼成 酸化焰 色調 褐色		装飾具の一部か。裏面に貼付痕が残る。	
11 第568回 P.L.42	人物	主体部 小片		胎土 焼成 酸化焰 色調 褐色		耳の一部片か。ナデ整形。	
12 第568回	盾	主体部 器材部中 位片	幅 (29.6)	胎土 焼成 酸化焰 色調 明褐色	8 5	表面は縦方向のハケ目、周辺部はナデ。裏面は斜め方向のハケ目。内面は縦方向のナデ。	
13 第568回	盾	主体部 器材部片	器厚	胎土 焼成 酸化焰 色調 褐色		表裏面とも横方向ハケ目。円筒部とヒレ部の接合部は縦方向のナデ。内面は縦方向のナデ。	
14 第568回	盾	南側両端 器材部片		胎土 焼成 酸化焰 色調 褐色	12	表面は横方向ハケ目後縦方向ハケ目。裏面は横方向ハケ目。内面は縦方向のナデ。	
15 第568回 P.L.42	盾	主体部 器材部片		胎土 焼成 酸化焰 色調 明褐色		表裏面とも縦方向のナデ部分。内面は縦方向のナデ。	
16 第568回	盾	主体部 器材部片		胎土 焼成 酸化焰 色調 褐色		表面は縦方向ハケ目、周辺部はナデ後沈線を描文。裏面は横方向ハケ目。	
17 第568回 P.L.41	盾	主体部 器材部円 蓋部片		胎土 焼成 酸化焰 色調 褐色		表面は縦方向ハケ目後沈線を描文。内面は縦方向のナデ。	
18 第568回 P.L.42	馬	主体部 鞍から割 部片	器厚 1.6	胎土 焼成 酸化焰 色調 褐色	11 5	外面はハケ目後2条の沈線を描し、凸帯を貼付。内面はハケ目後部分的にナデ。	
19 第568回 P.L.42	馬	両眉(南) 尻部片	器厚 1.7	胎土 焼成 酸化焰 色調 褐色	12 5	杏葉の一部。外面はハケ目後凸帯、鈴を貼付。内面はヘラナデ。	
20 第57回 P.L.42	馬	両眉(南) 頭部片	器厚 1.7	胎土 焼成 酸化焰 色調 褐色	9 5	頭部面頸辻金具部分。外面はハケ目後面繋の凸帯を貼付し、凸帯部分にもハケ目、ボタン状金具を貼付。内面はナデ。	
21 第568回 P.L.42	馬	両眉(南) 頸部片	器厚 1.7	胎土 焼成 酸化焰 色調 褐色	10 5	頸部手綱付近片。外面はハケ目後手綱の凸帯を貼付。内面はヘラナデ。	
22 第57回 P.L.42	馬	両眉(南) 鞍片	器厚 1.5	胎土 焼成 酸化焰 色調 褐色	8 5	鞍の前輪か後輪の一部。両面とも横ハケ目及び縦ハケ目後両辺部をナデ。	

遺物観察表

検出番号 図版番号	種類	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備考
23 第57図	馬	周壁(南) 破片	器厚 1.5	胎土 焼成 色調 細砂粒 酸化焰 褐色	8 5	鞍の前輪か後輪の一部。両面とも横ハケ目及び縦ハケ目後周辺部をナデ。	
24 第57図 P L 42	馬	主体部 破片	器厚 1.5	胎土 焼成 色調 細砂粒 酸化焰 褐色	11 5	鞍の前輪か後輪の一部。両面とも横ハケ目及び縦ハケ目後周辺部をナデ。	
25 第57図 P L 41	馬	周壁(東) 鈎	高 4.4 幅 4.5 厚 5.0	胎土 焼成 色調 微砂粒 酸化焰 褐色		外面はヘラナデ、孔はヘラ切り。内面はナデ。	
26 第57図	家	主体部 小片	器厚 1.2~ 1.9	胎土 焼成 色調 粗砂粒 酸化焰 明赤褐色	9 5	両側に透孔。下位に張り付け肌。外面は縦ハケ目。内面は縦ハケ目後縦ナデ。	
27 第58図 P L 42	駒	主体部 1/4	厚 7.2 器厚 2.3	胎土 焼成 色調 細砂粒 酸化焰 褐色	10 5	外面欠立部分は縦ハケ目後鋸歯文、ヒレ部は横・斜めハケ目後沈線による区画。裏面は横ハケ目。内面は縦ナデ。	
28 第57図 P L 42	駒	主体部 破片		胎土 焼成 色調 微砂粒 酸化焰 褐色	8 5	ヒレ部は2枚の板状粘土を張り合わせてある。表面とも横方向のハケ目。	
29 第57図	駒	主体部 破片		胎土 焼成 色調 細砂粒 酸化焰 褐色		粘土板を張り合わせてある。表面とも横方向のハケ目。	
30 第57図	駒	主体部 破片		胎土 焼成 色調 粗砂粒 酸化焰 褐色		表面は横方向ハケ目、裏面は縦方向ハケ目。	

5号埴田筒埴輪

検出番号 図版番号	出土位置 残存率	計測値 (cm)	凸 形状	帯 段幅	透 孔 形状 大径	胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備考
31 第59図	周壁(南) 口縁部片	① 28.4 ② ③				細砂粒 酸化焰 褐色	11	外面は口唇部が横ナデ。口縁部は縦ハケ目。内面は横ハケ目。	朝顔型
32 第59図	周壁(南) 口縁部下 破片	① ② ③	台形	0.6		細砂粒 酸化焰 にぶい褐色	?	外面は縦ハケ目、凸帯・上下は横ナデ。内面は横ナデ。	朝顔型
33 第59図 P L 43	墳丘(南) 口縁部~ 第1段片	① 22.2 ② ③	角	6.2 12.4	円 6.2 5.6	細砂粒 酸化焰 褐色	10 5	外面は口縁部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部横ナデ、口縁部下は縦ハケ目後縦ナデ。	
34 第59図 P L 43	主体部 口縁部~ 第2段片	① 20.6 ② ③	三	6.0		細砂粒 酸化焰 褐色	8 5	外面は口唇部と凸帯が横ナデ。第2段は縦、第3段は斜めハケ目。内面第3段は横ハケ目。第2段は縦ナデ。	
35 第59図 P L 43	周壁(南) 第1段~ 第2段片	① ② ③	三		円	細砂粒 酸化焰 明赤褐色	11 5	外面は凸帯が横ナデ。第1・2段は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
36 第59図 P L 43	周壁(南) 第2段~ 第3段片	① ② ③	M		①円 ②円	細砂粒 酸化焰 褐色	8 5	外面は凸帯が横ナデ。第2・3段は縦ハケ目。内面は斜めハケ目後縦ナデ。	
37 第59図	周壁(南) 第1段~ 第2段片	① ② ③	M ₁		円	粗砂粒 酸化焰 褐色	12 5	外面は凸帯が横ハケ目。第2段は縦ハケ目。内面は縦ハケ目。	
38 第59図	周壁(南) 第2段~ 第3段片	① ② ③	三		円	粗砂粒 酸化焰 褐色	11 5	外面は凸帯が横ナデ。第2段は縦ハケ目。内面は横ハケ目。	
39 第59図 P L 43	周壁(南) 第1段~ 第2段片	① ② ③	M ₁		円	粗砂粒 酸化焰 明赤褐色	12 5	外面は凸帯が横ハケ目。第2段は縦ハケ目。内面は第2段が縦ハケ目。第1段は縦ナデ。	
40 第59図 P L 43	周壁(南) 底部~第 3段片	① ② ③ 11.6	角	13.9 9.5	円	粗砂粒 酸化焰 明赤褐色	8 5	内面に輪縁直が残る。外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は上半が横ハケ目、下半は縦ナデ。	

遺物観察表

標記番号 図版番号	出土位置 残存率	計測値 (cm)	凸 形状	帯 段組	透 孔 形状	孔 直径	胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備 考
41 第59図 P L 43	周堀(東) 底部～第 2段片	① ② 12.8 ③	角		円	3.0 3.5	細砂粒 酸化焰 褐色	12 5	内面に輪痕が残る。外面は凸帯が横ナデ、第1・2段は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
42 第59図 P L 43	周堀(東) 底部～第 2段片	① ② 11.0 ③	角				粗砂粒 酸化焰 褐色	不 詳	外面は凸帯が横ナデ、第1・2段は縦ハケ目。内面は第2段が縦ハケ目、第1段は縦ナデ。	
43 第59図 P L 43	墳丘(南) 底部～第 2段片	① ② 13.0 ③	角		円		粗砂粒 酸化焰 褐色	9 5	内面に輪痕が残る。外面は凸帯が横ナデ、第1・2段は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
44 第59図 P L 43	墳丘(南) 底部～第 2段片	① ② 10.8 ③	M ₁		円		粗砂粒 酸化焰 褐色	11 5	外面は凸帯が横ナデ、第1・2段は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
45 第59図 P L 43	墳丘(南) 第1段片	① ② 10.0 ③					粗砂粒 酸化焰 褐色	12	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
46 第60図 P L 43	周堀(南) 第1段片	① ② 14.0 ③					粗砂粒 酸化焰 にぶい褐色	13	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
47 第60図 P L 43	主体部 第1段片	① ② 12.6 ③					微砂粒 酸化焰 褐色	13	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
48 第60図 P L 43	墳丘(南) 第1段片	① ② 11.8 ③					粗砂粒 酸化焰 褐色	12	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
49 第60図	第1段片	① ② 15.0 ③					微砂粒 酸化焰 褐色	11	外面は縦ハケ目。内面は縦ハケ目後部分的な縦ナデ。	
50 第60図	主体部 断部片	① ② ③					粗砂粒 酸化焰 褐色	12	外面は縦ハケ目。内面はナデ。	
51 第60図	周堀(南) 断部片	① ② ③	角				微砂粒 酸化焰 にぶい褐色	?	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面はナデ。	
52 第60図 P L 43	周堀(西) 第2段～ 第3段片	① ② ③	角		円		粗砂粒 酸化焰 褐色	?	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は斜めハケ目後縦ナデ。	
53 第60図 P L 43	周堀(南) 第2段～ 第3段片	① ② ③	角				微砂粒、小礫 酸化焰 褐色	20	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口唇部が斜めハケ目、その下位が斜めハケ目。	
54 第60図	主体部 第2段～ 第3段片	① ② ③	M				粗砂粒 酸化焰 褐色	14	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口唇部が横ナデ、その下位は斜めハケ目後縦ナデ。	
55 第60図	周堀(南) 第3段片	① ② ③					粗砂粒 酸化焰 褐色	10	外面は口唇部が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口唇部が横ナデ、他は縦ナデ。	
56 第60図	主体部 第2段～ 第3段片	① ② ③	角				微砂粒 酸化焰 褐色	?	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
57 第60図	周堀(東) 第3段片	① ② ③					粗砂粒 酸化焰 褐色	13	外面は口唇部が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口唇部が横ナデ、その下位が縦ナデ。	
58 第61図	周堀(西) 第1段片	① ② ③					粗砂粒、小礫 酸化焰 褐色	9 5 11	外面は縦ハケ目。内面は縦ハケ目後部分的な縦ナデ。	
59 第60図	主体部 第2段～ 第3段片	① ② ③	M				微砂粒 酸化焰 褐色	13	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。外面にへう記号内面は縦ナデ。	
60 第60図	主体部 第2段片	① ② ③	三		円		粗砂粒 酸化焰 褐色	10	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は斜めハケ目後部分的に縦ハケ目。	

遺物観察表

検出番号 図版番号	出土位置 残存率	計測値 (cm)	凸 器		透 孔		胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備 考
			形状	段幅	形状	大きさ				
61 第61図	周縁(南) 第2段～ 第3段片	① ② ③	三				細砂粒 酸化焰 褐色	10 5 13	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
62 第61図	周縁(南) 第2段～ 第3段片	① ② ③	M				細砂粒 酸化焰 明赤褐色	?	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
63 第61図	主体部 第1段～ 第2段片	① ② ③	三				細砂粒 酸化焰 褐色	9	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
64 第61図	主体部 第1段片	① ② ③					細砂粒 酸化焰 褐色	10 5 12	外面は縦ハケ目。内面は斜めナデ。	
65 第61図	主体部 第2段～ 第3段片	① ② ③	M				微砂粒 酸化焰 明赤褐色	8	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ハケ目後縦ハケ目。	
66 第61図	周縁(南) 第1段片	① ② ③					細砂粒 酸化焰 褐色	11	外面は縦ハケ目。内面は縦ハケ目。	
67 第61図	主体部 第1段片	① ② ③					細砂粒 酸化焰 明赤褐色	7 5 9	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
68 第61図	主体部 第1段片	① ② ③					細砂粒 酸化焰 褐色	8 5 10	外面は縦ハケ目。内面は斜めナデ。	
69 第61図	周縁(南) 第1段片	① ② ③					細砂粒 酸化焰 褐色	9	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
70 第61図	周縁(南) 第1段片	① ② ③					細砂粒 酸化焰 褐色	7	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
71 第61図	主体部 第1段片	① ② ③					細砂粒 酸化焰 褐色	7 5 9	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	

5号墳鉄器

検出番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量	目	製作技法等の特徴	備 考
第61図74 P.L.43	鉄器 刀	主体部 刀身片	全長(22.3)幅(16.4)棟幅(0.7)		刀身の中程部分	

6号墳形象埴輪

検出番号 図版番号	種 類	出土位置 残存率	計 測 値 (cm)	胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備 考	
1 第63図 P.L.44	人物	墳丘(南) 顔面の一 部	鼻高 2.3 鼻幅 1.5 器厚 1.0	胎土 焼成 色調 褐色	細砂粒 酸化焰 褐色	外面は縦ナデ、鼻は貼付、目はへら切り。内面は横ナデ。		
2 第63図	家	周縁(東) 壁片	器厚 1.6	胎土 焼成 色調 褐色	細砂粒 酸化焰 褐色	11 5	壁の角の一部。外面は横ハケ目。内面は縦ナデ。	
3 第63図 P.L.44	大刀	小片	残高 2.0 径5.0×3.8	胎土 焼成 色調 褐色	細砂粒 酸化焰 褐色		大刀の柄の玉縄の一部。外面はナデ。	
4 第63図 P.L.44	盾	墳丘(南) 形象部片	器厚 1.4	胎土 焼成 色調 褐色	粗砂粒 酸化焰 褐色	13	表面は円筒部は縦ハケ目、ヒレ部は表面が荒れており不明、整形後沈線を描す。裏面は円筒部が縦ハケ目、ヒレ部が横ハケ目。内面は縦ナデ。	

6号墳円筒埴輪

探出番号 図説番号	出土位置 残存率	計測値 (cm)	凸 形状	帯 段幅	窪 形状	孔 大きさ	胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備 考
5 第63図 P.L.44	墳丘(南) 第2段～ 第3段片	① 18.6 ② ③	三	6.0	円		①粗砂粒 ②酸化焰 ③褐色	8	外面は口縁部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
6 第63図 P.L.44	墳丘(北) 第1段片	① 12.2 ② ③	三	15.9			①粗砂粒 ②酸化焰 ③褐色	8	外面は凸帯が横ナデ、第1・2段は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	第1段に「×」のヘラ磨き
7 第63図 P.L.44	周軀(西) 第1段片	① 13.5 ② ③					①粗砂粒 ②酸化焰 ③褐色	10	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	

7号墳土器

探出番号 図説番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備 考
1 第70図 P.L.44	土師器 杯	周軀(南) 完形	① 11.0 ② ③ 4.3	①粗砂粒 ②酸化焰 ③褐色	口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。内面にヘラナデ痕が残る。	
2 第70図	土師器 杯	1/4	① 13.0 ② 11.0 ③	①微砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	口縁部は横ナデで中程に凹線が1条走る。底部はヘラ削り。	
3 第70図	土師器 杯	口縁部片	① 13.0 ② ③	①微砂粒 ②酸化焰 ③褐色	口縁部は横ナデ。口縁部中程に凹線が1条走る。	
4 第70図 P.L.44	土師器 杯	1/4	① 12.8 ② 11.4 ③	①微砂粒 ②酸化焰 ③褐色	口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。	
5 第70図	土師器 杯	周軀(南) 1/4	① 10.6 ② 横径 11.0 ③ (3.0)	①微砂粒 ②酸化焰 ③灰青褐色	口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。稜下に無調整部分が残る。	
6 第70図 P.L.44	土師器 椀	墳丘(北) 底部の一部 欠	① 11.4 ② 横径 12.9 ③ 7.9	①粗砂粒 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	口縁部は横ナデで中程に凹線が2条走る。底部はヘラ削り。内面底部に放射状のヘラ磨き。	
7 第70図 P.L.44	須恵器 高杯	口縁部、脚部 の一部欠	① 13.0 ② 脚径 14.6 ③ 14.6	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転左回り。杯身底部は回転ヘラ削り。脚部は2カ所に2段の透かしをもつ。	
8 第70図 P.L.44	須恵器 盃	墳丘(南) 1/4	① ② 脚径 9.6 ③	①粗砂粒(含白色粒) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。口縁部は中程に2条の凹線が高く、上部に2段、下部に1段の波状文(9)。胴部は中位に凹線で区分された中に列点文。底部はヘラ削り。	
9 第70図 P.L.45	須恵器 埴瓶	1/4	① ② 脚径 13.8 ③ 脚幅(8.0)	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転左回り。胴部はカキ目。	
10 第71図 P.L.45	須恵器 埴瓶	口縁部、胴部 一部欠	① ② 脚径 18.2 ③ 脚幅 13.2	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転左回り。胴部はカキ目。	
11 第71図 P.L.44	須恵器 横瓶	石室内 胴部片	法量不明	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明	
12 第71図 P.L.45	須恵器 広口壺	墳丘(南) 1/4	① ② 脚径 21.2 ③	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、輪轆痕が残る。口縁部は波状文(6)、胴部はカキ目。	
13 第71図 P.L.44	須恵器 壺	墳丘(西) 胴部片	法量不明	①粗砂粒 ②還元焰 ③褐色	外面は平行叩き痕、内面は同心円あて具痕が残る。	
14 第71図 P.L.44	土師器 小型甕	墳丘(南) 口縁部～胴部片	① 8.5 ② ③	①粗砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	口縁部は2条の凹線が走る。整形は横ナデ後縦方向の埴なヘラ磨き。胴部は横ヘラ削り。内面胴部はヘラナデ、一部に指頭痕が残る。	

遺物観察表

検出番号 図版番号	種類	出土位置 保存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
15 第71図 P.L.45	土師器 壺	墳丘(北) 片	① 12.8 脚径 21.2	①微砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	口唇部内側に凹線が1条走る。口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り後ヘラ磨き。内面胴部はヘラナデ。	

7号墳形象埴輪

検出番号 図版番号	種類	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備考
16 第72図 P.L.46	人物	墳丘(南) 腕片	幅 3.7 厚 3.7	胎土 微砂粒 焼成 酸化焰 色調 にぶい褐色	7 5	腕の一部。外面は縦・斜めハケ目、内面はナデ。	
17 第72図	人物	頭部片	器厚 1.0	胎土 微砂粒 焼成 酸化焰 色調 明褐色		女性の烏田髷の一部。表面ともナデ整形。	
18 第72図 P.L.46	人物	石室内 裾部分	裾径 23.4 円筒径17.0 器厚 1.1	胎土 微砂粒 焼成 酸化焰 色調 にぶい褐色	11 5	外面は裾部分が横ナデ、円筒部分は縦ハケ目。内面は縦ハケ目後横ナデ。	
19 第72図 P.L.46	馬	墳丘(南) 尻部片	器厚 1.3	胎土 微砂粒 焼成 酸化焰 色調 褐色	10 5	外面はハケ目後尻蓋の凸帯を貼付しハケ目、鈴は貼付で周辺はナデ。内面はハケ目後ナデ。	
20 第72図 P.L.46	馬	周縁 頭部片	器厚 1.4	胎土 微砂粒 焼成 酸化焰 色調 褐色		外面はナデ、面髷は貼付。内面はナデ。	
21 第72図	馬	墳丘(南) 鞍片	器厚 1.2	胎土 微砂粒 焼成 酸化焰 色調 褐色	10 5	鞍の一部。外面は縦ハケ目、鞍を貼付。内面はナデ。	
22 第72図 P.L.46	馬	足下部片	脚径 12.4 器厚 1.3	胎土 微砂粒 焼成 酸化焰 色調 褐色	10 5	外面は縦ハケ目、踵はV字形にヘラ切り。内面は縦ハケ目後一部横ナデ。	
23 第72図 P.L.46	馬	墳丘(南) 尻部の一 部	高 2.5 幅 3.5 厚 3.0	胎土 微砂粒 焼成 酸化焰 色調 褐色		鈴の刺刺したものを、粘土塊にて製作。外面はナデ整形、孔はヘラ切り。	
24 第72図 P.L.46	馬	墳丘(南) 尻部の一 部	高 3.1 幅 3.0 厚 3.2	胎土 微砂粒 焼成 酸化焰 色調 褐色		鈴の刺刺したものを、粘土塊にて製作。外面はナデ整形、孔はヘラ切り。	
25 第72図 P.L.46	家	一部	長 6.2 幅 3.0 厚 2.0	胎土 微砂粒 焼成 酸化焰 色調 褐色		家の屋根上の彫木。表面はナデ、中程を指で焼いている。	
26 第73図 P.L.46	帽子	墳丘(南) 円筒部下	脚径 22.5 円筒径13.8 器厚 1.2	胎土 微砂粒 焼成 酸化焰 色調 にぶい褐色	10 14	外面は縦ハケ目後凸帯を貼付、凸帯は横ナデ、踵は横ナデで彫面文を施す。内面は縦ナデ。	
27 第73図 P.L.46	帽子	墳丘(北) 円筒部下	脚径 21.3 円筒径12.0 器厚 1.0	胎土 微砂粒 焼成 酸化焰 色調 にぶい褐色	8 5	内面に輪痕が残る。外面は縦ハケ目後凸帯を貼付、凸帯は横ナデ、踵には彫面文を施す。内面は縦ナデ。	
28 第74図 P.L.47	大刀	墳丘(北) 柄~円筒 上位	円筒径12.0 器厚 1.0	胎土 微砂粒 焼成 酸化焰 色調 褐色	12 5	外面は縦ハケ目後凸帯・玉鏝等を貼付。凸帯・玉鏝等はナデ。内面は縦ナデ。	
29 第75図 P.L.49	大刀	墳丘(北) 円筒部	円筒径13.9 器厚 1.7 透径 2.6	胎土 微砂粒 焼成 酸化焰 色調 褐色		外面は縦ナデ後帯紐・凸帯を貼付。帯紐・凸帯はナデ。内面は縦ナデ。	
30 第75図 P.L.46	大刀	石室前庭 柄の一部 片	幅 5.4 器厚 1.1	胎土 微砂粒 焼成 酸化焰 色調 褐色		大刀頭部。表面はナデ、玉部分は貼付。裏面は縦ハケ目。	
31 第75図	大刀	柄の一部	器厚 1.3	胎土 微砂粒 焼成 酸化焰 色調 褐色	11 5	大刀柄部分基部片。玉は刺刺。表面はナデ。裏面は縦ハケ目。側面はナデ。	
32 第75図	大刀	柄の一部 片	幅 4.8 器厚 0.6	胎土 微砂粒 焼成 酸化焰 色調 褐色		大刀柄部分基部片。玉は刺刺。裏面はハケ目。側面はナデ。	

遺物観察表

探検番号 図版番号	種類	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備考
33 第75図 P.L.47	盾	小片	器厚 1.0	胎土 焼成 色調 明赤褐色	微砂粒 酸化焰 褐色	不 鮮 明 ヒレ上位片。表面はハケ目後ナダ整形し、 沈線を施す。裏面はハケ目後ナダ。	
34 第75図 P.L.47	盾	石室前庭 小片	器厚 1.0	胎土 焼成 色調 褐色	微砂粒 酸化焰 褐色	不 鮮 明 ヒレ上位片。裏面に接合痕が残る。表面は ハケ目後ナダ整形し、沈線を施す。裏面は ナダ。	
35 第75図 P.L.47	盾	小片	器厚 1.3	胎土 焼成 色調 褐色	微砂粒 酸化焰 褐色	13 ヒレ部分。表面は縦ハケ目後刻削文を施し、 外側を赤色塗彩。裏面は横ハケ目。	
36 第75図	盾	墳丘(北) 小片	器厚 1.5	胎土 焼成 色調 にぶい赤褐色	微砂粒 酸化焰 褐色	10 ヒレ部分。表面は斜めハケ目後刻削文を施す。 裏面は縦ハケ目。	
37 第75図	盾	小片	器厚 1.5	胎土 焼成 色調 明赤褐色	微砂粒 酸化焰 褐色	10 ヒレ部分。表面は横ハケ目後刻削文を施す。 裏面は横ハケ目。	
38 第75図	盾	墳丘(北) 小片	器厚 1.5	胎土 焼成 色調 褐色	微砂粒 酸化焰 褐色	不 鮮 明 ヒレ部分。表面は斜めハケ目後刻削文を施す。 裏面は縦ハケ目。	
39 第75図	盾	小片	器厚 2.0	胎土 焼成 色調 にぶい赤褐色	微砂粒 酸化焰 褐色	不 鮮 明 ヒレ部分下位片。表面は縦ハケ目。裏面は 縦ナダ。	
40 第75図	盾	小片	器厚 1.3	胎土 焼成 色調 明赤褐色	微砂粒 酸化焰 褐色	14 ヒレ部片。表面は斜めハケ目後刻削文を施す。 裏面は横ハケ目。	
41 第77図 P.L.47	初	墳丘(南) 矢部	幅 12.9 器厚 2.0	胎土 焼成 色調 褐色	微砂粒 酸化焰 褐色	不 鮮 明 矢先部分。表面は縦ハケ目後矢を貼付し、 矢の部分をへらにて調整。裏面はへらナダ。	
42 第76図 P.L.47	柄	一部欠	全長 91.5 底径 15.0 器厚 1.3	胎土 焼成 色調 褐色	微砂粒 酸化焰 褐色	18 形象部板状部分は差し込み、鈴は貼付。形 象部はハケ目後一部ナダで沈線を施す。円 筒部外面は縦ハケ目、内面は縦ナダ。	
43 第76図 P.L.48	柄	墳丘(北) 形象部片	器厚 1.0	胎土 焼成 色調 褐色	微砂粒 酸化焰 褐色	不 鮮 明 板状部分の取り付け部分。内面に輪痕が 残る。板状部分は差し込みにて接合。裏面 ハケ目後ナダ。	
44 第77図 P.L.47	不明	墳丘(北) 部分片	残高 4.8 径 5.7	胎土 焼成 色調 褐色	微砂粒 酸化焰 褐色	10 裝飾品の一部か。外面は縦ハケ目後6本の 沈線を施す。内面はナダ。	
45 第77図 P.L.46	不明	墳丘(西) 部分片	残高 7.9 幅 6.1 厚 3.5	胎土 焼成 色調 褐色	微砂粒 酸化焰 褐色	9 外面は先端部がナダ、他は縦ハケ目後一部 縦ナダ。	

7号墳円筒埴輪

探検番号 図版番号	出土位置 残存率	計測値 (cm)	凸 形状	帯 段幅	透孔 形状 大径	胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備考
46 第77図 P.L.49	石室前庭 口縁部～ 第1凸帯片	① 21.4 ② ③	角	8.3 9.7 9.2	円 円 一	微砂粒 酸化焰 明赤褐色	13	外面は口縁部と凸帯が横ナダ、第 4段は斜めハケ目後縦ハケ目。他 は縦ハケ目。内面は上半が斜めハ ケ目、下半は縦ナダ。	
47 第77図 P.L.49	墳丘(南) 1/4	① 21.1 ② 13.4 ③ 37.1	M	7.8 13.9 15.4	円	5.0 4.9 褐色	8 12	外面は口縁部と凸帯が横ナダ、他 は縦ハケ目。内面は口縁部横ナダ、 他は縦ハケ目後縦ナダ。	
48 第77図 P.L.49	墳丘(南) 第3段の 大部分欠	① 21.5 ② 13.7 ③ 34.5	M ₁	7.3 11.7 15.5	円	5.0 4.7 明赤褐色	12	外面は口縁部と凸帯が横ナダ、他 は縦ハケ目。内面は口縁部が斜め ハケ目、口縁部下位は縦ナダ。	
49 第77図 P.L.50	墳丘(北) 第3段を 1/4欠	① 17.9 ② 12.5 ③ 34.2	M ₁	7.9 13.4 12.9	円	5.3 5.2 褐色	9 5	外面は口縁部と凸帯が横ナダ、他 は縦ハケ目。内面は口縁部が横ナ ダ、口縁部下位は縦ハケ目。	第3段にへら指し。

遺物観察表

標記番号 図版番号	出土位置 残存率	計測値 (cm)	凸 帯		透 孔		新土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備 考
			形状	幅	形状	径				
50 第78回 P.L.50	墳丘(南) 5/6	① 21.5 ② 12.4 ③ 33.4	M ₁	7.8 9.9 15.6	円	5.5 4.9	細砂粒 酸化焰 明赤褐色	12	外面は口縁部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は上半が斜めハケ目、下半は縦ナデ。	
51 第78回 P.L.50	墳丘(西) ほぼ完形	① 19.4 ② 10.5 ③ 33.3	M	7.3 12.8 13.2	円	4.7 5.0	細砂粒 酸化焰 褐色	9	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ナデ、縦ハケ目。	
52 第78回 P.L.50	墳丘 口縁部～ 第1段片	① 21.1 ② ③	角	11.8 11.4	円	7.0 6.2	粗砂粒 酸化焰 明赤褐色	10 5	内面に輪轡痕が残る。外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は上半が斜めハケ目、下半は縦ナデ。	第3段に「W」のヘア書き
53 第78回	周壁(北 西) 第3段片	① 21.0 ② ③					細砂粒 酸化焰 褐色	10	外面は口唇部が横ナデ、3段目は縦ハケ目。内面は縦ハケ目。	
54 第78回	第3段片	① 21.0 ② ③					微砂粒 酸化焰 褐色	14	外面は口唇部が横ナデ、3段目は縦ハケ目。内面は縦ハケ目。	
55 第78回 P.L.50	墳丘(北) 口縁部～ 第1凸帯	① 21.5 ② ③	角	9.5 10.6	半円	4.8 4.2	細砂粒 酸化焰 明赤褐色	14	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は上半が縦ハケ目、下半は縦ナデか。	
56 第78回 P.L.49	墳丘(南) 口縁部～ 第2段片	① 18.6 ② ③	三	8.3	円		微砂粒 酸化焰硬質 明赤褐色	11	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は第3段が横、第2段が縦ハケ目後縦ナデ。	
57 第78回 P.L.50	墳丘(南) 口縁部～ 第2段片	① 20.4 ② ③	M	6.9	円	5.4 5.0	細砂粒 酸化焰 明赤褐色	12	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ハケ目。	
58 第78回 P.L.50	墳丘(南) 口縁部～ 第2段片	① 21.9 ② ③	M	6.3	円		細砂粒 酸化焰 明赤褐色	12	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口唇部が横ハケ目、口縁部下位は斜めハケ目。	
59 第78回 P.L.50	墳丘(南) 口縁部～ 第2段片	① 20.3 ② ③	M ₁	9.5			微砂粒 酸化焰硬質 明赤褐色	11	外面は口唇部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口唇部が横ナデ、口縁部下は横ハケ目。	
60 第78回 P.L.49	第1段～ 第2段片	① ② ③	M ₁		円?		微砂粒 酸化焰硬質 明赤褐色	8 5	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ハケ目後縦ナデ。	
61 第78回 P.L.49	石室前庭 第3段～ 第1凸帯	① ② ③	M ₁	10.3			微砂粒 酸化焰硬質 明赤褐色	9 5	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は第2・3段が縦ハケ目、第1段は縦ナデ。	
62 第79回 P.L.50	墳丘(北) 第3段を 大部分欠	① ② ③	M	11.5 17.2	円	4.7 5.1	粗砂粒 酸化焰 赤褐色	13	内面に輪轡痕が残る。外周口縁部と凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は口縁部が横ハケ目。他は縦ハケ目。	
63 第79回 P.L.50	墳丘(西) 底部～第 3段片	① ② ③	M ₁	13.9 13.0	横円	6.1 5.6	微砂粒 酸化焰 赤褐色	12 ・ 13	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ハケ目。	
64 第79回 P.L.49	墳丘(北) 底部～第 2段片	① ② ③	三	12.4	円		微砂粒 酸化焰 明赤褐色	13	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ハケ目後縦ナデ。	
65 第79回 P.L.49	墳丘(北) 底部～第 2段片	① ② ③	角	12.2 13.8	円?		微砂粒 酸化焰 赤褐色	14	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目後部分的に斜めハケ目。内面は縦ハケ目後縦ナデ。	
66 第79回 P.L.49	墳丘(北) 底部～第 2段片	① ② ③	M	12.0	円?		微砂粒 酸化焰 明赤褐色	9	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ目。内面は縦ハケ目後縦ナデ。内面ハケは外面より細く1単位が12～。	
67 第79回 P.L.49	墳丘(南) 第1段片	① ② ③		12.5			細砂粒 酸化焰 赤褐色	9	外面は縦ハケ目。内面は縦ハケ目後部分的な縦ナデ。	
68 第79回	墳丘(西) 第1段～ 第2段片	① ② ③	三	14.2			細砂粒 酸化焰 褐色	2	外面は縦ハケ目、凸帯は横ナデ。内面は縦ナデ。	

遺物観察表

探出番号 図版番号	出土位置 残存率	計測値 (cm)	凸 形状	帯 段幅	透孔 形状 大きさ	胎土・焼成 色調	ハケ	成形・整形の特徴	備考
69 第79図	横丘(北) 第3段片	① ② 15.0 ③				細砂粒 酸化焰 橙色	10	外面はハケ目。内面は縦ナデ。	
70 第79図	第1段片	① ② 17.1 ③				細砂粒 酸化焰 橙色	13	外面は縦ハケ目。内面は縦ナデ。	
71 第79図	海堀(南) 第1段片	① ② 18.0 ③				細砂粒 酸化焰 明黄褐色	14	外面は縦ハケ目、凸部下は横ナデ。 内面は縦ナデ、一部に指頭痕。	
72 第79図	第2段～ 第3段片	① ② ③	M ₁		円	細砂粒 酸化焰 橙色	13	外面は凸帯が横ナデ、他は縦ハケ 目。内面は第3段が斜めハケ目、 第2段は縦ナデ。	第3段にヘラ描き

7号墳鉄器

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	量 目	製作技法等の特徴
第80図-73 P.L.51	鉄器 大刀	石室内 完形	①全長99.9②刃部長84.9 ③茎長15.0④鋒幅0.8 ⑤茎榫幅0.55⑥茎元幅(2.2) ⑦ハバキ幅1.4 ⑧ハバキ厚2.6	全長約1mを有する大刀で不均等両側葉中継茎 の形式である。錆びもひどくなく残存状況は良い。 刃部、茎部ともに木質の遺存なく錆及び、木炭肥 部の状況は全く不明。茎部の側面に一部木質の付 着痕がある。目釘穴が茎先端近くにある。
第80図-74 P.L.51	鉄器 大刀	石室内 刃先欠損	①78.2②66.6③11.6④0.7 ⑤0.6⑥1.8⑦⑧-	全長約80cmの大刀で不均等両側葉中継茎の形式で ある。無茎銜を有する。目釘孔は2孔あり、茎元 と茎先に各々1つづつある。
第80図-75 P.L.51	鉄器 鉾	石室内 完形	長径6.5短径5.3厚0.5	無茎の鉾。錆がやや多く、一部剥落する。装着さ れる刀は不明。
第80図-76 P.L.51	鉄器 小大刀	石室内 先端欠損	①(35.0)②(27.4)③7.6④0.8 ⑤0.4⑥2.3⑦1.4⑧0.1	両角鋼を呈し、釧を有する。茎には目釘残る。
第80図-77 P.L.51	鉄器 大形刀子	石室内 刃先・茎欠	①(21.3)②(16.9)③(4.4)④0.4 ⑤0.5⑥1.5	大形の刀子であるが、使い込み激しく研ぎべりし ている。茎は市広。
第80図-78 P.L.52	鉄器 大形刀子	中央部片	①(14.4)②(14.4)③④0.4	刀身が狭く、大形の刀子と考えられる。
第80図-79 P.L.51	鉄器 大形刀子	石室内 茎部片	①(8.2)②(0.8)③(7.4)④⑤- ⑥0.4⑦(1.9)	大形の刀子の茎で木質が残存し、目釘も残る。
第80図-80 P.L.52	鉄器 刀子	石室内 茎端部欠損	①(18.3)②13.0③(0.5)④0.6 ⑤0.4⑥1.6	茎部には編織巻きを施した後、木質を被せている。 一部磨削の痕跡残り、鹿角装刀子の可能性大。
第81図-81 P.L.51	鉄器 小型刀子	石室内 完形	①11.9②7.7③4.2④0.4 ⑤0.3⑥0.85	鹿角装刀子。鹿角が茎上部に明顯に残る。鹿角の 内側には木質残り、目釘も残る。
第81図-82 P.L.52	鉄器 小型刀子	石室内 茎端部欠損	①(10.4)②8.8③(1.6)④0.3 ⑤0.2⑥0.9	小形の刀子で刀先が先端につれ、かなり細くなる。
第81図-83 P.L.53	鉄器 刀子	石室内 一部片	①(0.4)②(3.5)③(0.8)④0.6 ⑤0.3⑥1.4	刃部・茎部一部残存。茎部に木質部が残る。
第81図-84 P.L.51	鉄器 刀子	石室内 一部片	①(4.8)②(0.8)③4.0④(0.4) ⑤0.3⑥1.4	刃部・茎部一部残存。
第81図-85 P.L.51	鉄器 刀子	石室内 茎部片	①(4.7)②③④(4.7)④⑤- ⑥0.5⑦-	茎部に木質部が残る。目釘が残る。
第81図-86 P.L.51	鉄器 刀子	石室内 茎部片	①(3.7)②③④(3.7)④⑤- ⑥0.4⑦-	茎部に木質部が残る。目釘が残る。
第81図-87 P.L.52	鉄器 刀子	石室内 茎部片	①(5.3)②③④(5.3)④⑤- ⑥0.4⑦-	目釘穴がある。
第81図-88 P.L.52	鉄器 刀子	石室内 茎部片	①(6.0)②③④(6.0)④⑤- ⑥0.15⑦-	目釘が残る。
第81図-89 P.L.51	鉄器 刀子	石室内 茎部片	①(2.4)②(0.3)③(2.1)④⑤- ⑥0.4⑦(1.0)	関節が残る。
第81図-90 P.L.51	鉄器 刀子	石室内 茎部片	①(3.2)②(0.3)③(2.9)④⑤- ⑥0.5⑦(1.0)	鹿角装刀子の茎
第81図-91 P.L.51	鉄器 刀装具	石室内 破片	全長(2.8)幅(1.5)厚0.2	刀装具。

遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器形	出土位置 遺存状態	量 目	製作技法等の特徴
第81図-92 P.L.52	鉄器 鏃	石室内 一部欠損	①全長(12.0)②刃部長(1.6) ③刃部幅0.9④頸部長7.4 ⑤頸部幅0.6⑥茎長(0.3)	長頸長三角形鏃。刃部は片丸造。轉狀間を有し、茎には木質が遺存する。
第81図-93 P.L.52	鉄器 鏃	石室内 刃部～頸部	①(10.1)②2.9③1.0④(7.4) ⑤0.6⑥-	長頸長三角形鏃。刃部は片丸造。轉狀間の一部残る。鏃身間は角内開である。
第81図-94 P.L.52	鉄器 鏃	石室内 刃部～頸部	①(8.4)②3.0③1.0④(5.4) ⑤0.7⑥-	長頸長三角形鏃。刃部は片丸造。鏃身間は角内開。付着している長頸頸部は別個体である。
第81図-95 P.L.52	鉄器 鏃	石室内 刃部～頸部	①(6.7)②(2.7)③0.9④(4.0) ⑤0.5⑥-	長頸長三角形鏃。刃部は片丸造。鏃身間は角内開。基部は、分離する。木質遺存。
第81図-96 P.L.52	鉄器 鏃	石室内 刃部～頸部	①(5.5)②0.1③0.9④(2.4) ⑤0.5⑥-	長頸長三角形鏃。刃部は片丸造。鏃身間は角内開。鏃が多め。
第81図-97 P.L.52	鉄器 鏃	主体部破片 刃部～頸部	①(6.4)②(1.5)③0.75④(4.9) ⑤0.5⑥-	長頸長三角形鏃。刃部から頸部にかけての移行がなだらかで無間を呈するもの片丸造。
第81図-98 P.L.52	鉄器 鏃	主体部 刃部～頸部	①(3.5)②1.2③1.0④(2.3) ⑤0.6⑥-	長頸長三角形鏃。刃部は、三角形に近いもので無間を有する。片丸造。
第81図-99 P.L.52	鉄器 鏃	主体部破片 刃部～頸部	①(3.7)②2.4③0.9④(1.3) ⑤0.5⑥-	長頸長三角形鏃。無間を有し、刃部はやや長めである。片丸造。
第81図-100 P.L.52	鉄器 鏃	主体部 刃部～頸部	①(3.4)②0.1③1.1④(0.3) ⑤-	長頸長三角形鏃。刃部は片丸造。鏃身間は角内開を呈する。
第81図-101 P.L.52	鉄器 鏃	石室内 刃部	①(2.5)②(2.5)③1.0④- ⑤-	長頸長三角形鏃。刃部は片丸造。鏃身間は欠損し不明である。
第81図-102 P.L.52	鉄器 鏃	石室内 刃部～頸部	①(2.9)②(0.6)③0.6④(2.3) ⑤0.3⑥-	間は角内開を呈し、轉狀を呈さない。
第81図-103 P.L.52	鉄器 鏃	石室内 刃部～頸部	①(5.1)②(3.0)③0.7④(2.1) ⑤0.9⑥-	長頸片刃鏃。刃部やや長めで、鏃身間は角内開を呈するもの。
第81図-104 P.L.52	鉄器 鏃	主体部 刃部～頸部	①(4.6)②(3.0)③0.7④(2.1) ⑤(0.5)⑥-	長頸片刃鏃。刃部及び頸部の破損が多く、鏃身間の状況は不明だが無間の可能性高い。
第81図-105 P.L.52	鉄器 鏃	石室内 刃部～頸部	①(3.6)②2.3③0.8④(0.4) ⑤0.5⑥-	長頸片刃鏃。刃部やや長めで、鏃身間は角内開を呈するもの。
第82図-106 P.L.52	鉄器 鏃	石室内 頸部	①(7.4)②-	長頸鏃。頸部が2本別個体のもの。轉狀間を有するものが一体ある。
第82図-107 P.L.52	鉄器 鏃	石室内 頸部～基部	①(16.2)②-	長頸鏃。頸部と基部のほとんどの部位残るもの。轉狀間を有し、茎には木質が遺存する。
第82図-108 P.L.52	鉄器 鏃	石室内	①(7.3)②-	長頸鏃。轉狀間を有するもの。基部には木質が遺存する。
第82図-109 P.L.52	鉄器 鏃	石室内	①(5.1)②-	轉狀間を有するもの。基部には木質が遺存する。
第82図-110 P.L.52	鉄器 鏃	石室内 頸部～基部	①(6.5)②-	長頸鏃。轉狀間を有すると思われるが、確認できない。基部は木質部が遺存する。
第82図-111 P.L.52	鉄器 鏃	主体部 頸部～基部	①(6.0)②-	長頸鏃。轉狀間を有するが、基部には木質部がほとんど認められない。
第82図-112 P.L.52	鉄器 鏃	石室内 頸部～基部	①(5.0)②0.6③(3.1)④(5.0) ⑤(0.5)⑥(3.9)	長頸鏃。轉狀間を有すると思われるが、確認できない。
第82図-113 P.L.52	鉄器 鏃	石室内 頸部～基部	①(5.3)②-	長頸鏃。轉狀間を有すると思われるが、確認できない。
第82図-114 P.L.52	鉄器 鏃	石室内 頸部～基部	①(6.4)②-	長頸鏃。轉狀間を有すると思われるが、確認できない。基部には木質部が遺存する。
第82図-115 P.L.52	鉄器 鏃	石室内 頸部～基部	①(3.4)②-	長頸鏃。轉狀間を有する。基部には木質部が遺存する。
第82図-116 P.L.52	鉄器 鏃	石室内 頸部～基部	①(3.6)②-	長頸鏃。轉狀間を有する。基部には木質部が遺存する。
第82図-117 P.L.52	鉄器 鏃	主体部 頸部～基部	①(2.6)②-	長頸鏃。轉狀間を有する。基部には木質部が遺存する。
第82図-118 P.L.52	鉄器 鏃	石室内 頸部	①(6.0)②-	長頸鏃。轉狀間を有する。
第82図-119 P.L.52	鉄器 鏃	石室内 頸部	①(6.4)②-	長頸鏃。
第82図-120 P.L.52	鉄器 鏃	石室内 頸部	①(6.2)②-	長頸鏃。
第82図-121 P.L.52	鉄器 鏃	石室内 頸部	①(3.5)②-	長頸鏃。

遺物観察表

調査番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	量	目	製作技法等の特徴
第82図-122 P L 52	鉄器 鏃	石室内 頸部	①(2.5)②③-④(2.5) ⑤0.5⑥-		長頸鏃。
第82図-123 P L 52	鉄器 鏃	石室内 頸部	①(2.1)②③-④(2.1) ⑤0.55⑥-		長頸鏃。
第82図-124 P L 52	鉄器 鏃	石室内 頸部	①(2.9)②③-④(2.9) ⑤(0.7)⑥-		
第82図-125 P L 52	鉄器 鏃	石室内 基部	①(3.8)②③-④⑤-⑥(3.8)		長頸鏃。
第82図-126 P L 52	鉄器 鏃	石室内 基部	①(4.0)②③-④⑤-⑥(4.0)		長頸鏃。
第82図-127 P L 52	鉄器 鏃	石室内 基部?	①(3.5)②③-④⑤-⑥(3.5)		長頸鏃。
第82図-128 P L 52	鉄器 鏃	石室内 基部	①(3.4)②③-④⑤-⑥(3.4)		長頸鏃。
第82図-129	鉄器 鏃	石室内 基部	①(2.5)②③-④⑤-⑥(2.5)		
第82図-130 P L 51	鉄器 鏃	石室内 基部	①(2.6)②③-④⑤-⑥(2.6)		
第82図-131 P L 53	鉄器 鏃	石室内 基部	①(2.4)②③-④⑤-⑥(2.4)		
第82図-132 P L 53	鉄器 鏃	石室内 基部	①(1.2)②③-④⑤-⑥(1.2)		
第82図-133	鉄器 鏃	石室内 基部か	①(2.4)②③-④⑤-⑥(2.4)		
第82図-134 P L 52	鉄器 釘	石室内 頸部側片	①全長(3.6)②幅0.3③厚0.25		木質が残る。
第82図-135 P L 52	鉄器 釘	石室内 頸部側片	①(2.8)②0.3③0.2		木質が一部残る。
第82図-136 P L 52	鉄器 釘	石室内 中央部片	①(2.0)②0.4③0.35		
第82図-137	鉄器 釘	石室内 中央部片	①(3.1)②0.5③0.6		
第82図-138 P L 53	鉄器	石室内 基部片	①(3.5)②0.9③0.6		先端部欠損
第82図-139 P L 53	鉄器 小札片?	石室内 一握片	①(3.3)②(1.5)③0.2		根部にφ2mmの小孔。
第82図-140 P L 53	鉄器 ノミ状工具	石室内 柄部欠損	①(7.6)②0.6③0.4		柄部に木質部が残る。
第83図-141 P L 53	鉄器 馬具	石室内			鍍具造り、立間系障状鍍板付書一本刷引手で引手の柄を強く握るものである。具造り立間を持つものと思われる。衝は溝有の二連衝で、引手と衝が障状鍍板と一緒に連結する共通法である。
第83図-142 P L 53	鉄器 馬具	石室内			兵庫鎮の付いた先端に鍍具のつくもの。おそらく図82で142と143で対をなす。
第83図-143 P L 53	鉄器 馬具	石室内			鉄装兵庫鎮、先端に鍍具のつくもの。おそらく図82の組で142と対をなす。
第84図-144 P L 53	鉄製品 裝飾金具	石室内	①(2.0)②1.1③1.0		鍍板せと考えられる。
第84図-145 P L 53	鉄製品 裝飾金具	石室内	①(1.9)②0.8③0.88		鍍板せ。刺刺が激しい。
第84図-146 P L 52	鉄製品 棒状物	石室内	①(2.1)②0.5③0.5		
第84図-147 P L 52	鉄器 馬具	石室内	①(2.0)②0.9③		鍍板せ。
第84図-148 P L 52	鉄器 馬具	石室内	①(5.3)②1.0③0.9		轡の引手金具
第84図-149 P L 53	鉄器 馬具	石室内	①(3.7)②2.2③0.7		引手嚢状部
第84図-150	鉄器 鉞	石室内	①(3.1)②0.5③0.4		弓の裝飾鉞

遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 品名	出土位置 遺存状態	量	目	製作技法等の特徴
第84図-151	銅製品 金銅板	石室内 小片	①(2.7)②(1.9)③0.1		
第84図-152 P.L.53	鉄製品 飾り止金具	石室内	①2.8②2.8③		裝飾止金具。表面は全面に銀箔を貼る。裏面には一部有機質が残るが、材質は不明。
第84図-153 P.L.53	鉄製品 飾り止金具	石室内	①2.5②2.6③		裝飾止金具。表面は全面に銀箔を貼る。裏面には一部有機質が残るが、材質は不明。
第84図-154 P.L.53	鉄製品 飾り止金具	石室内	①2.5②2.9③		裝飾止金具表面は全面に銀箔を貼る。裏面には一部有機質が残るが、材質は不明。
第84図-155 P.L.53	鉄製品 飾り止金具	石室内	①2.6②2.6③		裝飾止金具。表面は全面に銀箔を貼る。裏面には一部有機質が残るが、材質は不明。
第84図-156 P.L.53	鉄製品 飾り止金具	石室内	①6.8②3.3③		裝飾止金具。表面は全面に銀箔を貼る。裏面には一部有機質が残るが、材質は不明。
第84図-157 P.L.52	鉄製品 飾り止金具	石室内	①3.1②2.2③		裝飾止金具。表面は全面に銀箔を貼る。裏面には一部有機質が残るが、材質は不明。
第84図-158 P.L.53	鉄製品 飾り止金具	石室内	①3.1②2.1③		裝飾止金具。表面は全面に銀箔を貼る。裏面には一部有機質が残るが、材質は不明。
第84図-159 P.L.53	鉄製品 飾り止金具	石室内	①2.2②2.1③		裝飾止金具。表面は全面に銀箔を貼る。裏面には一部有機質が残るが、材質は不明。
第84図-160 P.L.52	鉄製品 飾り止金具	石室内 一部片	①(1.8)②0.8③		銀被せ
第84図-161 P.L.53	鉄製品 飾り止金具	石室内 一部片	①(2.0)②1.2③		銀被せ
第84図-162 P.L.53	鉄製品 飾り止金具	石室内 一部片	①(2.0)②1.1③		銀被せ
第84図-163 P.L.53	鉄製品 飾り止金具	一部片	①(2.0)②0.9③		銀被せ
第84図-164 P.L.53	鉄製品 飾り止金具	石室内	①(2.0)②1.1③1.0		銀被せと考えられる。
第84図-165 P.L.53	鉄製品 飾り止金具	石室内	①(1.9)②0.8③0.85		銀被せ。割傷が深い。
第84図-166 P.L.54	銅製品 耳環	石室内 完形	①外径1.9②内径1.1③厚0.4		小型で細めの耳環。
第84図-167 P.L.54	銅製品 耳環	石室内 完形	①2.6②1.7③0.5		小型で細めの耳環。
第84図-168 P.L.54	銅製品 耳環	石室内 完形	①2.4②1.6③0.4		太めの耳環。銀被せ。
第84図-169 P.L.54	銅製品 耳環	石室内 完形	①2.3②1.3③0.6		銀被せ。
第84図-170 P.L.54	銅製品 耳環	石室内 完形	①2.5②1.7③0.5		細めの耳環。
第84図-171 P.L.54	銅製品 耳環	石室内 完形	①2.5②1.7③0.5		細めの耳環。
第84図-172 P.L.54	銅製品 耳環	石室内 完形	①2.2②1.6③0.45		細めの耳環。

7号墳玉

検出番号	図版番号	種類	出土位置	石 材	色 調	①全長②幅③厚④孔径(cm)⑤重量(g)
第85図-173	P.L.54	勾 玉	石室内	玉ずい	灰白色	①3.70 ②1.35 ③1.05 ④0.7-0.25 ⑤9.93
第85図-174	P.L.54	勾 玉	石室内	玉ずい	褐灰色	①3.60 ②1.20 ③0.90 ④0.4×0.3-0.2 ⑤8.10
第85図-175	P.L.54	勾 玉	石室内	玉ずい	褐灰色	①3.40 ②1.10 ③1.10 ④0.35-0.2 ⑤7.91
第85図-176	P.L.54	勾 玉	石室内	玉ずい	褐色	①3.15 ②1.15 ③0.95 ④0.35-0.2 ⑤6.48
第85図-177	P.L.54	勾 玉	石室内	玉ずい	灰白色	①2.80 ②1.20 ③0.90 ④0.3-0.2 ⑤7.02
第85図-178	P.L.54	勾 玉	石室内	玉ずい	灰白色	①2.95 ②1.05 ③0.90 ④0.4×0.35-0.2 ⑤5.48
第85図-179	P.L.54	勾 玉	石室内	玉ずい	灰白色	①2.90 ②0.90 ③0.85 ④0.25-0.15 ⑤4.66
第85図-180	P.L.54	勾 玉	石室内	玉ずい	灰白色	①2.90 ②0.85 ③0.80 ④0.3-0.2 ⑤4.40
第85図-181	P.L.54	管 玉	石室内	緑色珪質岩	暗緑色	①2.35 ②0.80 ③0.75 ④0.3-0.15 ⑤2.45
第85図-182	P.L.54	管 玉	石室内	珪質頁岩	暗緑灰色	①2.30 ②0.75 ③0.70 ④0.3-0.15 ⑤2.27
第85図-183	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①1.00 ②1.00 ③0.50 ④0.3 ⑤0.74
第85図-184	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.90 ②1.00 ③0.70 ④0.15 ⑤0.91

遺物観察表

探洞番号	図版番号	種類	出土位置	石 材	色 調	①全長②幅③厚④孔径(cm)⑤重量(g)					
第858号-185	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.80	②0.90	③0.70	④0.2	⑤0.77	
第858号-186	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.90	②0.90	③0.90	④0.2	⑤1.04	
第858号-187	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①1.00	②1.00	③0.80	④0.2	⑤1.03	
第858号-188	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.85	②1.00	③0.70	④0.25	⑤0.84	
第858号-189	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.80	②0.95	③0.80	④0.15	⑤0.96	
第858号-190	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.90	②0.95	③0.80	④0.2	⑤1.06	
第858号-191	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.90	②0.90	③0.80	④0.2	⑤0.89	
第858号-192	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①1.00	②1.05	③0.75	④0.3	⑤0.81	
第858号-193	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.95	②1.20	③0.75	④0.25	⑤1.03	
第858号-194	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.90	②0.95	③0.80	④0.2	⑤0.92	
第858号-195	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.85	②0.90	③0.80	④0.2	⑤0.92	
第858号-196	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.90	②1.20	③0.80	④0.15	⑤1.22	
第858号-197	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.85	②1.20	③0.80	④0.15	⑤0.89	
第858号-198	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.85	②0.97	③0.70	④0.15	⑤0.89	
第858号-199	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.80	②1.00	③0.60	④0.23	⑤0.63	
第858号-200	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.90	②1.00	③0.50	④0.25	⑤0.78	
第858号-201	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.90	②0.95	③0.60	④0.3	⑤0.80	
第858号-202	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.85	②0.95	③0.80	④0.22	⑤1.16	
第858号-203	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.85	②0.95	③0.70	④0.15	⑤0.91	
第858号-204	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.90	②1.00	③0.70	④0.2	⑤0.99	
第858号-205	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.45	②0.50	③0.30	④0.23	⑤0.11	
第858号-206	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.50	②0.50	③0.25	④0.15	⑤0.10	
第858号-207	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.55	②0.55	③0.30	④0.15	⑤0.10	
第858号-208	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.55	②0.55	③0.35	④0.1	⑤0.10	
第858号-209	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.52	②0.55	③0.30	④0.1	⑤0.12	
第858号-210	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.50	②0.50	③0.30	④0.12	⑤0.11	
第858号-211	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.52	②0.50	③0.25	④0.15	⑤0.10	
第858号-212	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.50	②0.50	③0.30	④0.20	⑤0.10	
第858号-213	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.50	②0.50	③0.35	④0.12	⑤0.11	
第858号-214	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.40	②0.55	③0.35	④0.12	⑤0.11	
第858号-215	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.45	②0.45	③0.40	④0.15	⑤0.12	
第858号-216	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.45	②0.43	③0.40	④0.15	⑤0.12	
第858号-217	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.50	②0.45	③0.30	④0.12	⑤0.10	
第858号-218	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.42	②0.42	③0.35	④0.12	⑤0.12	
第858号-219	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.45	②0.45	③0.30	④0.12	⑤0.10	
第858号-220	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.45	②0.45	③0.30	④0.12	⑤0.11	
第858号-221	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.42	②0.45	③0.35	④0.10	⑤0.11	
第858号-222	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.42	②0.45	③0.35	④0.10	⑤0.12	
第858号-223	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.45	②0.45	③0.40	④0.10	⑤0.13	
第858号-224	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.50	②0.50	③0.30	④0.12	⑤0.11	
第858号-225	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.50	②0.50	③0.30	④0.12	⑤0.11	
第858号-226	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.50	②0.50	③0.30	④0.12	⑤0.11	
第858号-227	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.42	②0.45	③0.35	④0.12	⑤0.12	
第858号-228	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.42	②0.45	③0.35	④0.12	⑤0.12	
第858号-229	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.42	②0.45	③0.35	④0.15	⑤0.09	
第858号-230	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.45	②0.50	③0.30	④0.10	⑤0.12	
第858号-231	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.50	②0.50	③0.35	④0.10	⑤0.12	
第858号-232	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.45	②0.45	③0.30	④0.10	⑤0.10	
第858号-233	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.45	②0.45	③0.30	④0.10	⑤0.10	
第858号-234	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.45	②0.45	③0.35	④0.12	⑤0.12	
第858号-235	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.45	②0.45	③0.35	④0.10	⑤0.12	
第858号-236	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.48	②0.45	③0.35	④0.12	⑤0.14	
第858号-237	P.L.54	ガラス玉	石室内	ガラス質	濃紺色	①0.55	②0.55	③0.60	④0.15	⑤0.16	

8号墳土器

探洞番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	量 目	①粘土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備 考
1 第91図 P.L.55	土師器 凡	石室内	① 12.8	①微砂粒 ②焼成稍軟質 ③褐色	口縁部は横ナデ、底部はへら削り。	

遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
2 第91図 P.L.55	須恵器 埴輪	1/4	① 6.2 割径 12.7 割幅 11.0	①細砂粒 ②還元焰 ③暗灰色	ロクロ整形、回転方向不明。胴部はホキ目。口縁部へ胴部にかけて自然輪付着。	
3 第91図 P.L.55	須恵器 長頸瓶	石室内 1/4	①8.0②20.5 割径 15.8 割幅 15.0	①微砂粒(含黒色粒) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。胴部裏面は回転ヘラ削り、側面に平行印成が一部残る。口縁部から胴部中位に緑灰色の自然輪が付着。	
4 第91図	須恵器 埴輪	石室内 胴部片	① ② ③	①細砂粒 ②還元焰 ③暗灰色	ロクロ整形、回転方向不明。外面は自然輪付着。	
5 第91図	須恵器 埴輪	周堀 胴部	① 割径 46.0	①粗砂粒 ②還元焰 ③にぶい褐色	外面胴部は平行印、内面は同心円状あて具痕が残る。	
6 第91図 P.L.55	土師器 小型埴輪	口縁部へ胴部片	① 8.4 ② ③	①微砂粒 ②還元焰軟質 ③褐色	口縁部は横ナデ、胴部は横ヘラ削り。	

8号埴輪器

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	量 目	製作技法等の特徴	備考
第92図-7 P.L.56	鉄器 小刀	石室内 完形	①全長32.1②刃部幅23.1③茎長9.0 ④軸幅0.6⑤茎軸幅0.4⑥茎元幅2.0 ⑦ハバキ幅1.2⑧ハバキ厚0.2	刃部完存、柄部に木質が残る。目釘穴が残る。	
第92図-8 P.L.56	鉄器 小刀 刃先	石室内	①全長(4.4) ②刃部幅(4.4) ③- ④軸幅0.4 ⑤- ⑥-	切先のごく一部が残存。	
第92図-9 P.L.56	銅製品 銅鏡	石室内 完形	①外径7.7 ②内径5.6 ③厚30.5	断面差形のもので菱形の縁線のうち、上・下面、外側面に0.2~0.6cm、平均0.25cmごとに刻みを入れている。現状は、一部錆が生じ表面も剥落して歪んでいるが本来は正円形を呈したものであろう。	

1号住居跡

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
1 第93図 P.L.56	土師器 杯	口縁部の一 部を欠	① 13.0 ② ③ 3.1	①微砂粒(雲母) ②還元焰 ③にぶい褐色	口縁部は上半が横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
2 第93図 P.L.56	土師器 杯	1/4	① 13.2 ② ③ 3.3	①微砂粒 ②還元焰 ③褐色	口縁部は上半が横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
4 第93図 P.L.56	土師器 杯	1/4	① 13.4 ② ③ 2.7	①微砂粒 ②還元焰 ③褐色	口縁部は上半が横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
3 第93図 P.L.56	土師器 杯	1/4	① 13.9 ② ③ 3.7	①微砂粒 ②還元焰 ③明赤褐色	口縁部は上半が横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
5 第93図 P.L.56	須恵器 杯蓋	1/4	① 14.8 ② 4.6 ③ 3.4	①微砂粒(含黒色粒) ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転右回り。蓋は貼付。天井部の中央部分は回転ヘラ削り。	
6 第93図 P.L.56	土師器 埴輪	床面 完形	① 12.8 ② 5.1 ③ 14.0	①微砂粒 ②還元焰 ③褐色	口縁部は横ナデ。胴部は横方向ヘラ削り。底部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
7 第93図 P.L.56	土師器 埴輪	口縁部へ胴部上位片	① 23.4 ② ③	①微砂粒 ②還元焰 ③褐色	口縁部は横ナデ。胴部上位は横方向ヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

遺物観察表

検出番号 図版番号	器種 種類	出土位置 遺存状況	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
8 第938	土師器 罌	胴部下位～ 底部片	① ② ③ 7.6	①微砂粒 ②酸化剤 ③褐色	胴部下位は縦方向へ削り。底部もへう削り。	

5号土坑

番号	出土位置	器形/部位	胎土/色調	特 徴	
1 第968 P.L.57	5号土坑	深鉢/口縁～体 部下半及び底部	細砂粒/褐色	緩やかな波状口縁。口縁部は短く頸部は屈曲する。体部上半は外反し中に屈曲部を持つ。口縁部には横位平行沈線が走り体部も平行沈線による多段構成。屈曲上の頸状の体部文様帯には「X」字状文が配される。底部直上に横位平行沈線。地文はL.R.。体部下半は斜位施文により糸が縦位に走る。	諸磯b式後半

遺構外出土遺物（縄文土器）P.L-58-59

番号	出土位置	器形/部位	胎土/色調	特 徴	
104図1	D-29表土	深鉢/口縁部	片岩多/鈍褐色	口唇部肥厚し外反。口縁部側で下位より濃赤文Rを施文	夏島式
104図2	B-32土層	深鉢/口縁部	細砂粒/鈍褐色	口唇部肥厚し外反。口縁部側で下位より濃赤文Rを施文	夏島式
104図3	田区表層	深鉢/口縁部	細砂粒/浅黄色	口唇部肥厚し僅外反。口縁部側で下位より濃赤文Rを施文	夏島式
104図4	田区	深鉢/体部	粗砂粒/灰黄褐色	外反する体部。横位L.R.に平行沈線と斜位・入組状渦巻文	諸磯b式
104図5	C-9トレンチ	深鉢/口縁部	粗砂粒/鈍褐色	外反する口縁部。地文横位L.R.に平行沈線を多段に横位	諸磯b式
104図6	E-26土層	深鉢/口縁部	細砂粒/鈍褐色	波状口縁部。頸部は屈曲。横位平行沈線が走り、欠損するが波頂下にボタン状付文が付される。	諸磯b式
104図7	I区	深鉢/口縁部	粗砂粒/鈍褐色	波状口縁部。頸部は屈曲。屈曲に沿い平行沈線が施され波頂下のモチーフを配す。以下多段の平行沈線。地文L.R.	諸磯b式
104図8	I区	深鉢/口縁部	粗砂粒/褐色	波状口縁部。平行沈線で直し。波頂下に入組状渦巻文配す	諸磯b式
104図9	I区	深鉢/頸部	粗砂粒/鈍褐色	屈曲する頸部。口縁部文様帯は横位波状文。以下平行沈線	諸磯b式
104図10	I区	深鉢/体部	粗砂粒/明褐色	横位平行沈線による多段化と横位矢羽状構成	諸磯b式
104図11	F-25	深鉢/体部	粗砂粒/褐色	地文は横位L.R.。平行沈線の横位・弧状施文。横位対弧文	諸磯b式
104図12	7墳東側	深鉢/体部	粗砂粒/鈍褐色	地文は横位L.R.。平行沈線による矩形区内面に弧状文	諸磯b式
104図13	I区	深鉢/底部	粗砂粒/鈍赤褐色	外反する底部。地文横位L.R.に横位併行沈線。	諸磯b式
104図14	I区	深鉢/底部	粗砂粒/鈍褐色	突出し外反する底部。横位平行沈線が直上まで施文される	諸磯b式
104図15	I区	深鉢/底部	粗砂粒/鈍褐色	僅かに突出する底部。直上まで横位平行沈線が施文される	諸磯b式
104図16	I区	深鉢/底部	粗砂粒/鈍褐色	小径。横位平行沈線が直上に施文される	諸磯b式
104図17	I区	深鉢/体部	粗砂粒/鈍褐色	地文は横位L.R.。密接な平行沈線多段構成と入組状渦巻文	諸磯b式後半
104図18	I区	深鉢/体部	粗砂粒/鈍褐色	17と同一個体	諸磯b式後半
104図19	I区	深鉢/口縁部	粗砂粒/鈍褐色	口唇部は突出。密接な平行沈線による横位波状文を施す	諸磯b式後半
104図20	A-9トレンチ	深鉢/口縁部	粗砂粒/鈍褐色	口縁部内屈する。密接な横位平行沈線による縦位弧状文を施す	諸磯b式後半
104図21	I区	深鉢/体部	粗砂粒/鈍褐色	彎曲する体部。密接な横位平行沈線と斜位対弧文を施す	諸磯b式後半
104図22	I区	深鉢/体部下半	粗砂粒/褐色	下半に横位平行沈線が走り、上位は縦位対弧状モチーフ	諸磯b式後半
104図23	I区	深鉢/底部	粗砂粒/明褐色	鋭く突出する底部。縦位平行沈線が直上される。対弧状文か	諸磯b式後半
104図24	I区	深鉢/体部	粗砂粒/褐色	多岐竹管による横位平行沈線と同工による連続刺突文	興津式
104図25	I区	深鉢/体部	粗砂粒/褐色	多岐竹管による横位平行沈線と同工による連続刺突文の多段構成。20・21、同一個体	
104図26	I区	深鉢/口縁部	粗砂粒/鈍黄褐色	口縁部に斜位の筋目を施し、縦ろな刺突文を横位施文する	興津式
104図27	I区	深鉢/口縁部	粗砂粒/鈍黄褐色	緩やかな波状口縁部。横位L.R.が施される。	諸磯式
104図28	I区	浅鉢/口縁部	粗砂粒/鈍黄褐色	有孔浅鉢。口縁下に径4mm程度の小孔が縦位に連続する	諸磯式
104図29	I区	深鉢/口縁部	粗砂粒/鈍黄褐色	角筒状の口唇部。頸部を持つL.R.縄文が横位施文される	前期終末
104図30	I区	深鉢/体部	粗砂粒/鈍黄褐色	結束部1種L.R.縄文の横位施文。	前期終末
105図31	I区	深鉢/口縁部	粗砂粒/鈍黄褐色	縷帯による口縁部半槽門状区画。地文横位L.R.縄文	加曾利EⅢ式
105図32	I区	深鉢/口縁部	粗砂粒/鈍黄褐色	縷帯による口縁部半槽門状区画。地文横位L.R.縄文	加曾利EⅢ式
105図33	I区	深鉢/体部	粗砂粒/鈍黄褐色	2条の縷帯が懸垂し磨削部と縦位L.R.先束施文部が交互	加曾利EⅢ式
105図34	B-41	深鉢/体部	粗砂粒/浅黄褐色	L.R.縄文縦位施文。磨削部無し。	加曾利EⅢ式
105図35	I区	深鉢/体部上半	粗砂粒/鈍黄褐色	沈線で口縁部を囲す。縷帯が懸垂し縦位L.R.が充填される	加曾利EⅢ式
105図36	B-20トレンチ	深鉢/体部	粗砂粒/褐色	細縷帯を弧状に貼付する。縷帯rを充填施文する	加曾利EⅢ式
105図37	I区	深鉢/体部	粗砂粒/鈍黄褐色	細縷帯が懸垂する。縦位L.R.を充填し施文は縷帯線上に及ぶ	加曾利EⅢ式
105図38	B-20トレンチ	深鉢/口縁部	粗砂粒/明黄褐色	口縁部無文。口縁下浅い沈線が走り、以下L.R.縄文を施す	加曾利EⅢ式
105図39	B-20トレンチ	深鉢/体部	粗砂粒/鈍黄褐色	細縷帯が懸垂する。縦位L.R.縄文の充填施文。	加曾利EⅣ式
105図40	A-20トレンチ	深鉢/体部下半	粗砂粒/鈍黄褐色	細縷帯が懸垂する。縦位L.R.縄文の充填施文。	加曾利EⅣ式
105図41	A-22トレンチ	深鉢/体部下半	粗砂粒/鈍黄褐色	細縷帯が弧状に懸垂する。縦位L.R.縄文の充填施文	加曾利EⅣ式

遺物観察表

番号	出土位置	器形/部位	胎土/色調	特 徴	備 考
105842	1区	深鉢/体部下半	粗砂粒/鈍黄褐色	浅い細沈線が懸垂し磨消部を持たない。地文は縦位LR	加曾利EIV式
105843	1区	深鉢/底部	粗砂粒/明黄褐色	直立気味に立つ。無文。磨面薄。	加曾利E式
105844	1区	深鉢/口縁部	粗砂粒/鈍黄褐色	横位沈線より細沈線懸垂し区画化する。区画内は縦位LR	称名寺1式
105845	1区	深鉢/体部	粗砂粒/鈍黄褐色	細沈線で画された磨消部と施文部。縦位LRの充塞施文	称名寺1式
105846	D-11トレンチ	深鉢/体部上半	粗砂粒/鈍黄褐色	横位沈線より懸垂する薄施文。施文部内は列点状刻文	称名寺2式
105847	37-11	深鉢/体部下半	粗砂粒/鈍黄褐色	刻みを付す隆帯がU字状に懸垂し、細沈線も施される	称名寺1式
105848	5号墳遺土	深鉢/突起	粗砂粒/鈍黄褐色	外面割落。内面突起に沿う沈線と円形刻文が施される	称名寺1式
105849	8号墳北溝	深鉢/体部上半	粗砂粒/暗褐色	横位平行沈線内を刻文が沿い、最先状モチーフを配す	称名寺2式
105850	1区	深鉢/体部中位	粗砂粒/黄褐色	浅い細沈線が数条垂下する。外面割付き。	堀之内1式
105851	1区	深鉢/体部上半	粗砂粒/鈍黄褐色	2条の横位沈線が平行し、以下横位LRが施される	堀之内2式新
105852	1区	深鉢/体部上半	粗砂粒/褐色	2条の横位沈線が平行し、以下横位LRが施される	堀之内2式新
105854	住居層土	深鉢/体部	粗砂粒/灰黄褐色	横位沈線が通り、以下斜位細沈線の横位矢羽構成	加曾利B2式
105853	住居層土	注口/口縁部	粗砂粒/黒褐色	口唇部に2条の沈線が沿い、弧を帯く沈線も看取される	堀之内2式
105855	B-11	深鉢/体部	粗砂粒/鈍黄褐色	斜位沈線による横位矢羽構成	加曾利B2式
105856	1区	深鉢/体部	粗砂粒/鈍黄褐色	斜位沈線の雑な施文。横位矢羽状構成か	加曾利B2式
105857	C-7トレンチ	深鉢/体部	粗砂粒/鈍黄褐色	沈線間を磨消し、施文部にLR風文を施す	加曾利B2式

遺構外出土石器・石製品

編号番号	図版番号	器 種	出土位置	残存率	石 材	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)
第1068図-1	P L60	打製石斧	B-7トレンチ	1/5	黒色頁岩	(12.0)×(7.8)×3.0	(142.0)
第1068図-2	P L60	打製石斧	C-12トレンチ	完形	黒色頁岩	(10.7)×6.6×3.2	(38.0)
第1068図-3	P L60	打製石斧	1区	1/5	灰色安山岩	(8.95)×7.9×2.5	(194.0)
第1068図-4	P L60	打製石斧	V区	完形	黒色頁岩	9.7×8.8×3.1	172.0
第1068図-5	P L60	打製石斧	Ⅲ区	1/5	黒色頁岩	(5.2)×4.0×1.4	(38.0)
第1068図-6	P L60	打製石斧	C-9トレンチ	完形	灰色安山岩	25.9×13.0×3.8	1047.0
第1078図-7	P L60	打製石斧	1区	完形	黒色頁岩	(6.8)×4.2×2.9	(54.0)
第1078図-8	P L60	打製石斧	1区	完形	灰色安山岩	(7.5)×4.8×2.2	(71.0)
第1078図-9	P L60	石核	Ⅳ区	完形	チャート	(2.1)×1.8×0.6	(1.53)
第1078図-10	P L60	石核	Ⅲ区	完形	黒色頁岩	3.1×1.5×0.7	2.06
第1078図-11	P L60	石刃	Ⅲ区	完形	黒曜石	(2.1)×1.7×0.5	(1.46)
第1078図-12	P L60	削器	1区	完形	黒色頁岩	6.1×3.8×2.6	47.0
第1078図-13	P L61	削器	Ⅲ区	完形	細粒安山岩	7.1×9.5×1.1	84.0
第1078図-14	P L61	削器	C-38グリッド	完形	黒色頁岩	5.3×9.0×1.3	57.0
第1078図-15	P L61	削器	1区	完形	黒色頁岩	5.9×6.3×2.0	63.0
第1078図-16	P L61	削器	1区	完形	細粒安山岩	4.95×5.3×1.2	35.0
第1078図-17	P L61	削器	Ⅲ区	完形	黒色頁岩	4.8×9.1×1.7	51.0
第1088図-18	P L61	加工痕のある剥片	Ⅲ区	完形	黒色頁岩	(5.5)×6.2×1.6	(13.0)
第1088図-19	P L61	加工痕のある剥片	1区	完形	黒色頁岩	3.9×(8.0)×1.4	(29.0)
第1088図-20	P L61	削器	Ⅲ区	完形	黒色頁岩	5.8×8.4×1.2	52.0
第1088図-21	P L61	加工痕のある剥片	Ⅲ区	完形	黒色頁岩	4.9×7.2×3.3	66.0
第1088図-22	P L61	加工痕のある剥片	Ⅳ区	完形	黒色頁岩	6.7×(8.7)×2.0	(92.0)
第1088図-23	P L61	加工痕のある剥片	1区	完形	黒色頁岩	4.6×(3.1)×0.9	(10.0)
第1088図-24	P L61	加工痕のある剥片	B-4グリッド	完形	黒色頁岩	(10.8)×5.0×2.0	(67.0)
第1088図-25	P L61	加工痕のある剥片	1区	完形	黒色頁岩	7.3×5.75×1.9	78.0
第1088図-26	P L61	加工痕のある剥片	1区	完形	黒色頁岩	7.5×(9.8)×3.2	(192.0)
第1088図-27	P L61	加工痕のある剥片	B-4トレンチ	完形	黒色頁岩	(8.0)×(6.15)×2.5	(86.0)
第1088図-28	P L61	加工痕のある剥片	Ⅲ区	完形	黒色頁岩	(8.06)×3.9×1.1	(34.0)
第1098図-29	P L62	加工痕のある剥片	Ⅱ区	完形	黒色頁岩	10.0×10.2×2.5	298.0
第1098図-30	P L60	使用痕のある剥片	Ⅲ区	完形	黒色頁岩	6.1×(5.1)×1.1	(43.0)
第1098図-31	P L61	使用痕のある剥片	E-22トレンチ	完形	黒色頁岩	5.1×(4.3)×1.35	(32.0)
第1098図-32	P L61	使用痕のある剥片	1区	完形	黒色頁岩	(6.5)×4.8×1.3	(38.0)
第1098図-33	P L61	使用痕のある剥片	Ⅲ区	完形	黒色頁岩	(6.8)×(4.1)×0.8	(21.0)
第1098図-34	P L61	使用痕のある剥片	Ⅲ区	完形	黒色頁岩	8.2×(6.7)×1.5	(74.0)
第1098図-35	P L61	使用痕のある剥片	Ⅲ区	完形	黒色頁岩	7.5×5.9×1.3	41.0
第1098図-36	P L62	使用痕のある剥片	Ⅲ区	完形	黒色頁岩	6.8×5.3×1.3	35.0
第1098図-37	P L62	石核	C-7トレンチ	完形	黒色頁岩	7.8×7.8×3.2	162.0
第1098図-38	P L62	石核	1区	完形	黒色頁岩	6.9×6.15×3.4	153.0
第1098図-39	P L62	剥片	D-9トレンチ	完形	黒色頁岩	2.2×(2.3)×0.65	(2.0)
第1098図-40	P L62	石核	C-12トレンチ	完形	灰色安山岩	6.9×9.1×4.6	301.6
第1108図-41	P L62	剥片	B-7トレンチ	完形	黒色頁岩	3.8×4.1×0.8	13.0

遺物観察表

標記番号	図版番号	器 種	出土位置	残存率	石 材	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)
第110図-42		銅片	Ⅲ区		黒色頁岩	3.2×(3.1)×0.8	(5.0)
第110図-43		銅片	Ⅰ区		黒色頁岩	(3.1)×2.0×0.6	(2.0)
第110図-44		銅片	Ⅰ区		黒色頁岩	2.8×(2.6)×0.45	(2.0)
第110図-45	P L.62	銅片	Ⅰ区	完形	黒色頁岩	3.8×5.2×0.6	11.0
第110図-46		銅片	Ⅲ区	完形	黒色頁岩	2.8×1.3×0.2	0.63
第110図-47		銅片	Ⅳ区		黒色頁岩	(4.8)×(1.8)×0.7	(5.0)
第110図-48	P L.62	銅片	Ⅲ区		黒色頁岩	(4.7)×(4.7)×1.35	(16.0)
第110図-49	P L.62	銅片	Ⅰ区		黒色頁岩	7.8×(8.2)×1.7	(76.0)
第110図-50		銅片	Ⅰ区		黒色頁岩	3.1×(3.1)×1.2	(6.0)
第110図-51		銅片	Ⅲ区		黒色頁岩	3.5×(2.2)×0.5	(3.0)
第110図-52	P L.62	銅片	Ⅰ区	完形	ホルンフェルス	6.4×8.5×1.9	105.0
第110図-53		銅片	Ⅰ区	完形	黒色頁岩	5.2×3.1×0.8	6.0
第110図-54		銅片	Ⅰ区	完形	頁岩	2.4×3.8×0.55	3.0
第110図-55		銅片	Ⅲ区		黒色頁岩	3.1×(2.8)×0.9	(5.0)
第110図-56		銅片	Ⅰ区		黒色頁岩	(3.9)×3.9×1.05	(3.0)
第110図-57		銅片	Ⅰ区		黒色頁岩	(4.3)×(3.4)×1.1	(13.0)
第110図-58		銅片	Ⅰ区		黒色頁岩	2.2×(3.6)×0.5	(4.0)
第110図-59	P L.62	銅片	Ⅰ区		黒色頁岩	(6.1)×5.3×1.8	(64.0)
第110図-60	P L.62	銅片	Ⅰ区		黒色頁岩	(3.7)×(3.2)×0.4	(8.0)
第110図-61		銅片	Ⅰ区		黒色頁岩	3.0×(2.9)×0.8	(8.0)
第110図-62	P L.62	銅片	Ⅰ区	完形	黒色頁岩	6.2×4.8×1.7	30.0
第110図-63	P L.62	銅片	B-41グリッド	完形	黒色頁岩	6.7×4.9×1.9	44.0
第111図-64	P L.62	銅片	Ⅰ区	完形	黒色頁岩	6.2×6.4×1.45	55.0
第111図-65	P L.62	銅片	Ⅲ区		黒色頁岩	6.0×3.4×1.0	19.0
第111図-66		銅片	Ⅲ区		黒色頁岩	5.1×(2.3)×1.0	(14.0)
第111図-67	P L.62	銅片	Ⅲ区	完形	黒色頁岩	6.5×4.3×1.5	30.0
第111図-68	P L.62	銅片	B-7トレンチ		黒色頁岩	7.1×(4.8)×0.8	(33.0)
第111図-69	P L.62	銅片	Ⅲ区	完形	黒色頁岩	5.8×9.8×2.9	95.0
第111図-70	P L.62	磨石	D-11トレンチ	完形	粗粒安山岩	10.0×8.7×5.4	640.0
第111図-71	P L.62	磨石	D-15トレンチ	完形	磁鉄石	9.8×4.6×3.4	180.0
第111図-72		磨石	D-22トレンチ	1/2	磁鉄石	(7.0)×6.8×1.3	(69.0)
第111図-73	P L.62	凹石		完形	粗粒安山岩	8.25×7.3×4.8	285.0
第111図-74	P L.62	板碑	A-36トレンチ	破片	緑色片岩		
第111図-75	P L.62	磨石	F-25グリッド	完形	輝緑岩	10.7×6.0×6.4	

遺構外出土土師器

標記番号 図版番号	器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備 考
1	土師器 杯	4号古墳	① 11.8 ② 8.1 ③ 3.3	①細砂粒(含赤色粒) ②酸化焼 ③橙色	口縁部は上半が横ナデ、下半が無調整。底部はヘラ削り。	底部に「王」の墨書
2	土師器 高杯	C-6 杯身底部～ 脚部上位片	① ② ③	①微砂粒 ②酸化焼 ③明赤褐色	杯身部分はヘラ削り。脚部は縦方向へラ削り。	
3	土師器 壺	3/4	① 21.4 ② 7.6 ③ 31.2	①細砂粒 ②酸化焼 ③橙色	外面は口縁部が横ナデ、胴部上位は横方向へラ削り。中位～低位が縦方向へラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

発掘調査報告書抄録

フリガナ	ハシエイマミヤイセキ
書名	波志江今宮遺跡
副書名	一般国道17号（上武道路）改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘報告
シリーズ番号	第181集
編集者	神谷佳明
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2
発行年	西暦 1995年2月28日

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
波志江今宮	伊勢崎市波志江町今宮	102041		36 21 30	139 11 20	19800501 } 19810228 19850701 } 19850831	15,200	道路建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
波志江今宮	墳墓	古墳時代	古墳	8	形象埴輪 人形、馬形、家形 器材(太刀、盾、柄、帽子) 金属器 太刀、刀子、鉄鏃、馬具、新 飾り止金具、耳環、釧 勾玉、管玉、ガラス玉 円筒埴輪、須恵器、土師器	飾り止金具 銀被せ
				1	土師器	
				1		
	居住 生産	奈良時代 平安時代 近代	竪穴住居 水田 炭窯	1 1 1		As-B 層下

版 圖



1946年当時の遺跡地（米軍航空撮影）
波志江沼の西側に古墳群の存在が確認できる



I～IV区 調査区全景（垂直）



I～IV区 調査区全景（斜め）



Ⅲ区 調査区全景 (垂直)



V区 全 景



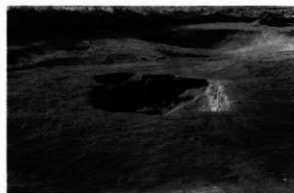
発掘調査前の風景



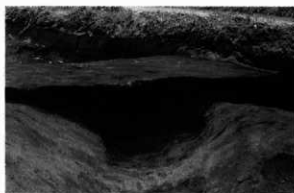
発掘調査前の風景



1 号 墳



1号墳主体部



1号墳周堀(東)土層断面



1号墳周堀(西)堀輪出土状態



1号墳周堀(西)堀輪出土状態



2 号 墳



3 号 墳



3号墳主体部



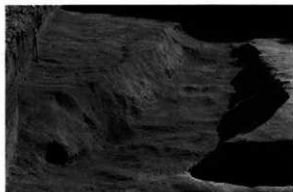
3号墳主体部



3号墳主体部土層断面



3号墳主体部掘り方



3号墳周堀(西)



3号墳周堀土層断面



3号墳周堀土層断面



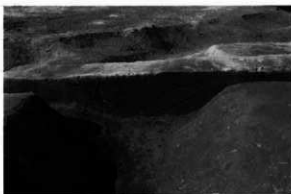
3号墳円筒埴輪出土状態(試掘坑)



4号墳



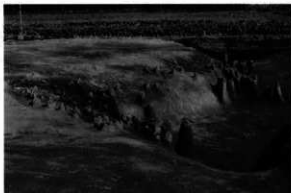
4号墳主体部土層断面



4号墳造出部土層断面



4号墳周圍(西)



4号墳周圍(東)



4号墳遺物出土状態



4号墳遺物出土状態



4号墳遺物出土状態



4号墳遺物出土状態



4号墳南西隅出土遺物



4号墳C-36試掘坑内輪出土状態



4号墳遺物出土状態(人物埴輪)



4号墳遺物出土状態(土師器杯)



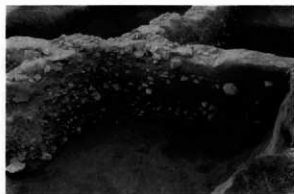
5 号 墳



5号墳主体部



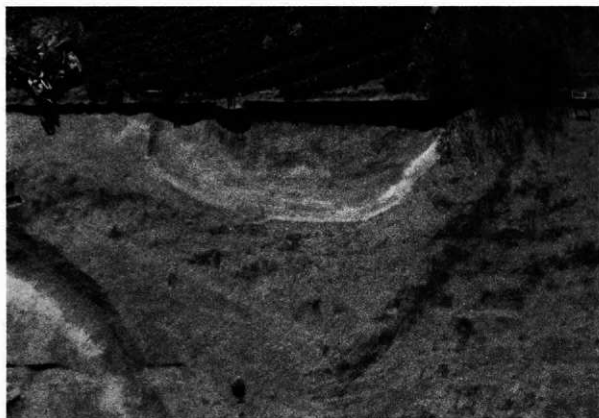
5号墳主体部



5号墳主体部土層断面



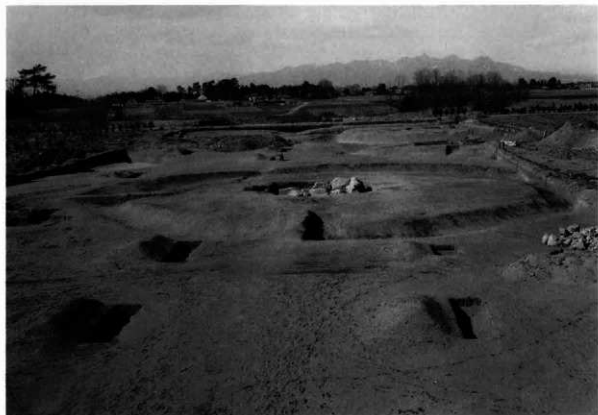
5号墳周廻(南)土層断面



6 号 墳



6 号 墳



7号墳



7号墳石室



7号墳石室後道部



7号墳石室裏込め状態



7号墳石室内太刀出土状態



7号墳石室内馬具出土状態



7号墳帽子形埴輪出土状態



7号墳太刀形埴輪出土状態



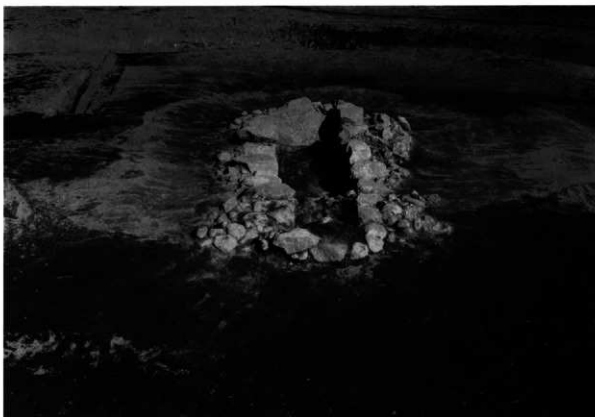
7号墳丘(北)埴輪列



7号墳土師器杯出土状態



8 号 墳



8 号 墳 石 室



8号墳究掘調査前



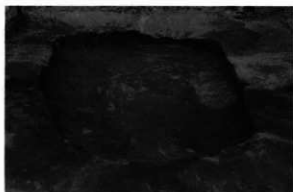
8号墳石室



8号墳石室



8号墳石室



8号墳石室掘り方



8号墳石室裏込め土層断面



8号墳石室遺物出土状態



8号墳周部(西)土層断面



1号住居跡



1号住居跡カマド



1号住居跡遺物出土状態



1号住居跡ピット



1号土坑



2号土坑



3号土坑



3号土坑土層断面



4号土坑



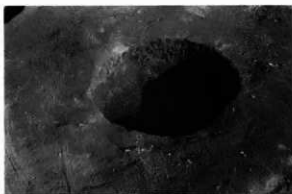
4号土坑土層断面



5号土坑



5号土坑土層断面



6号土坑



7号土坑



8・9号土坑



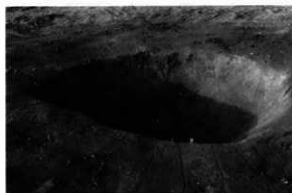
10号土坑



11号土坑



11号土坑土层断面



12号土坑



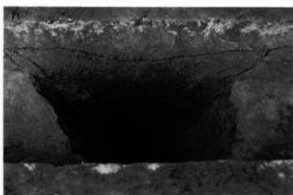
13号土坑土层断面



14・15号土坑



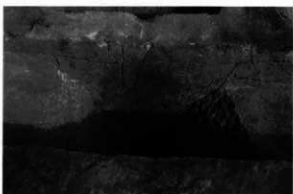
14号土坑



14号土坑土層断面



15号土坑



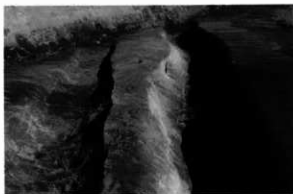
15号土坑土層断面



1号溝



1号溝



1号溝



1号溝



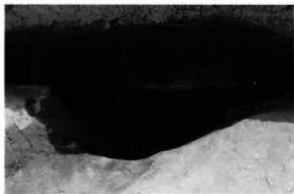
1号溝



V 区 溝



2 号 溝



2号溝土層断面



4 号 溝



5 号 溝



炭 窯 跡



炭窯跡燃焼室



炭窯跡煙道



炭窯跡掘り方



炭窯跡掘り方



水田跡全景



水田跡



水田跡下試掘

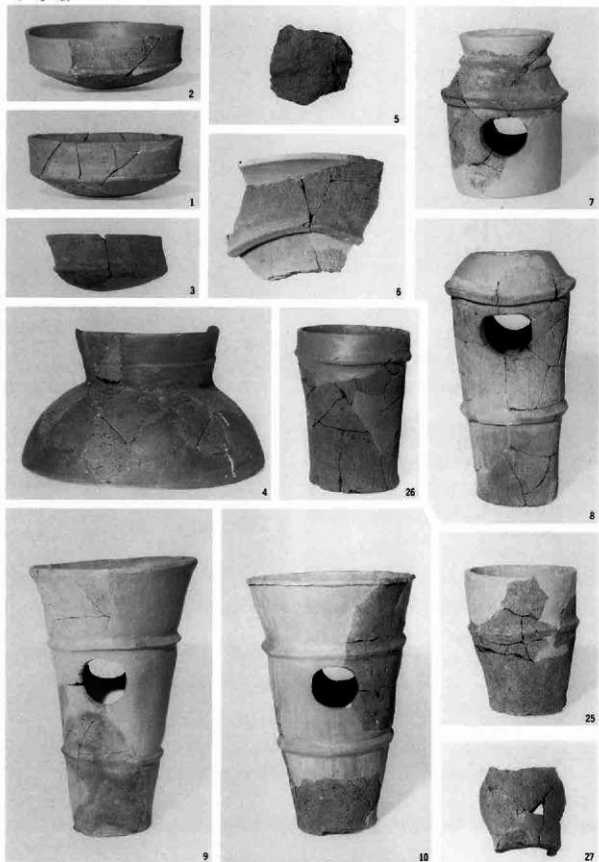


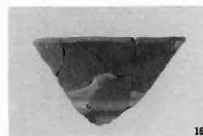
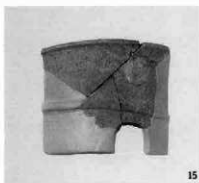
畠跡土層断面(1)

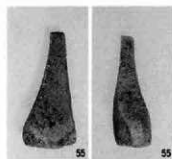


畠跡土層断面(2)

1 号 埴



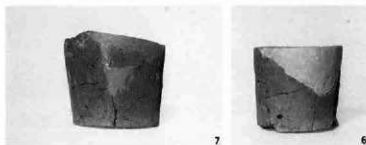




3号墳



2号墳





4号墳





2



8



8



5



9



9



19



20



6

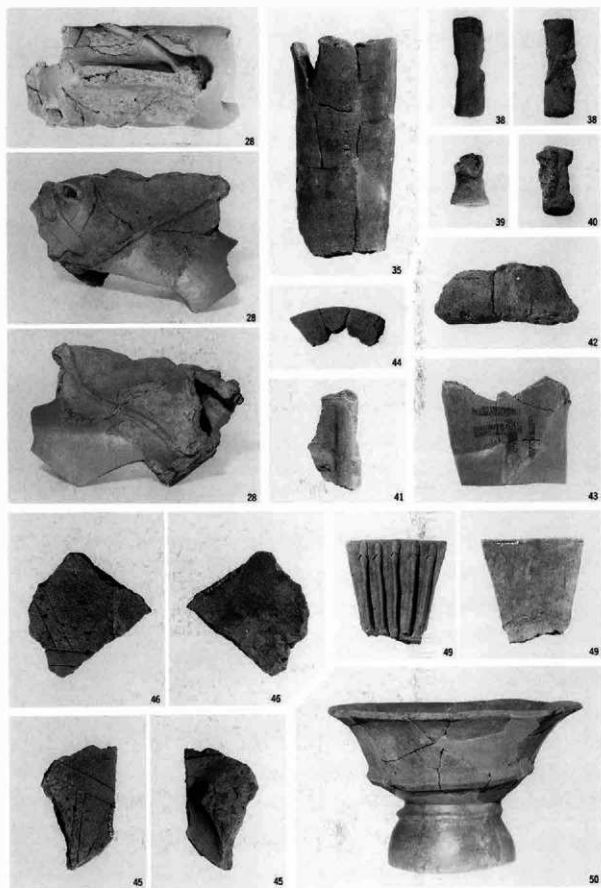


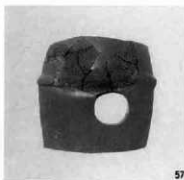
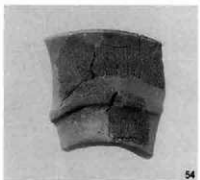
6



6









59



59



60



60



117



119



121









86



87



88



91



89



90



92

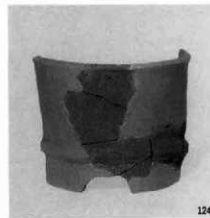
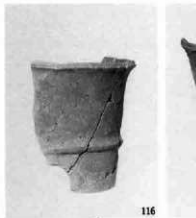


94



93



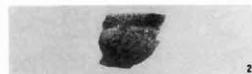


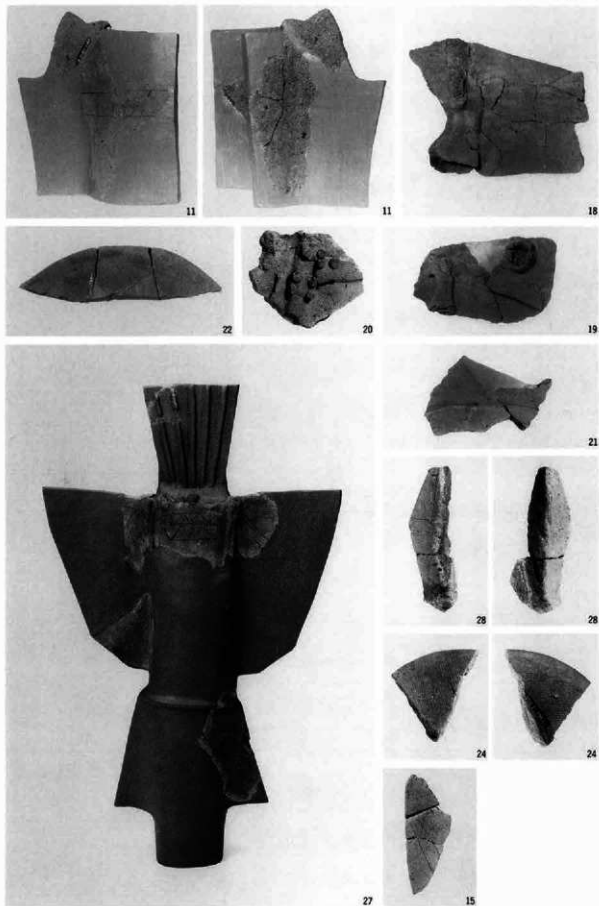


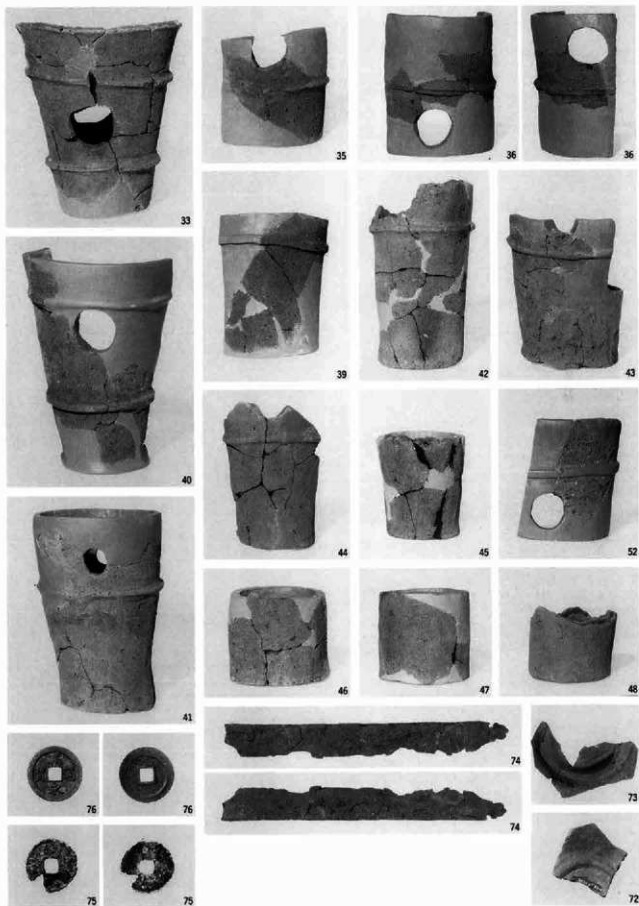




5号墳

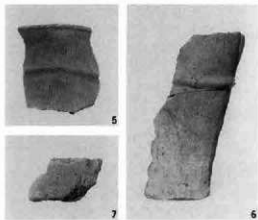
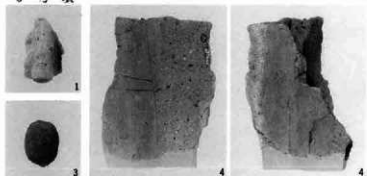






PL44

6号墳

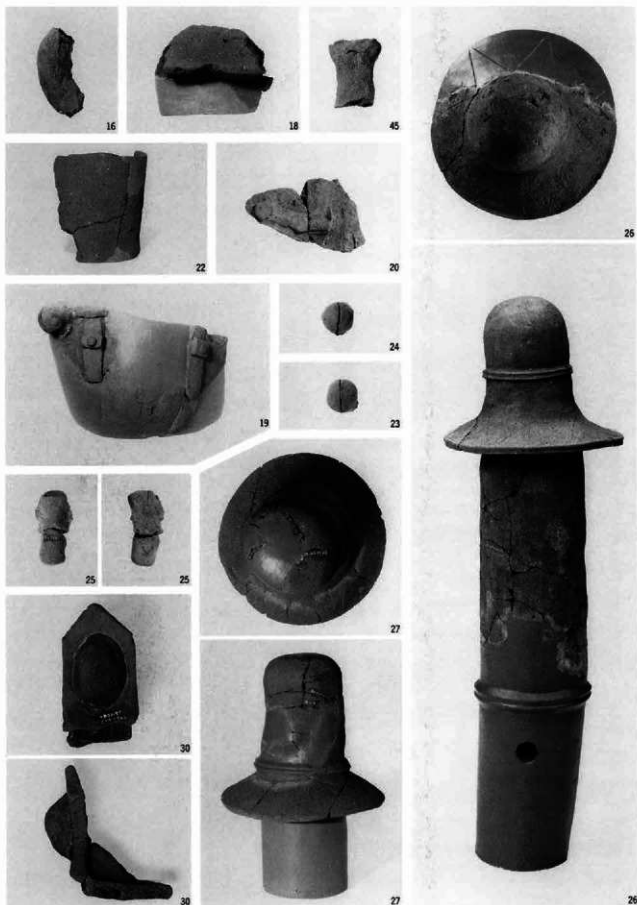


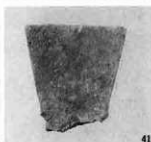
波志江今宮遺跡

7号墳











43



43



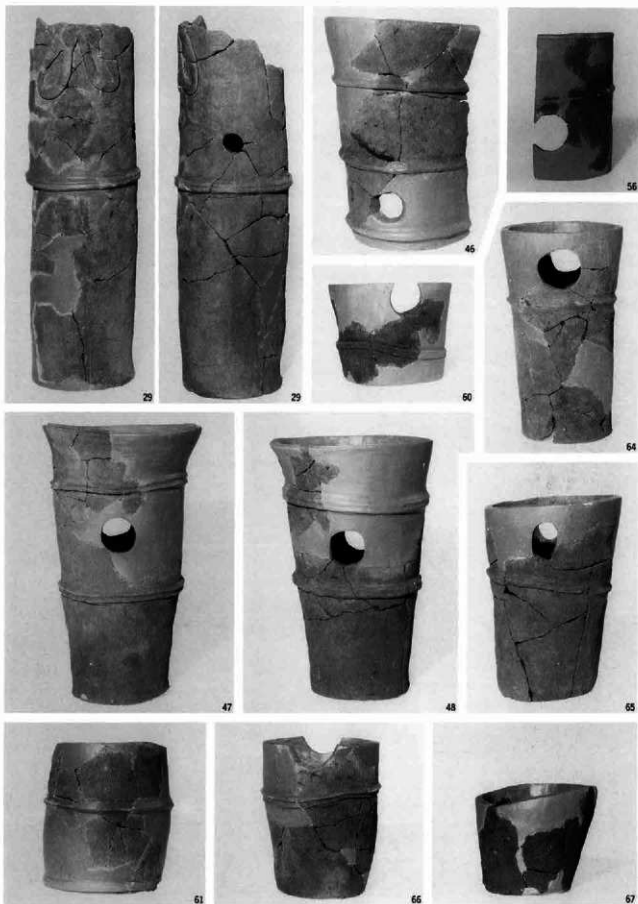
43



43



43





51



50



52



49



62



63



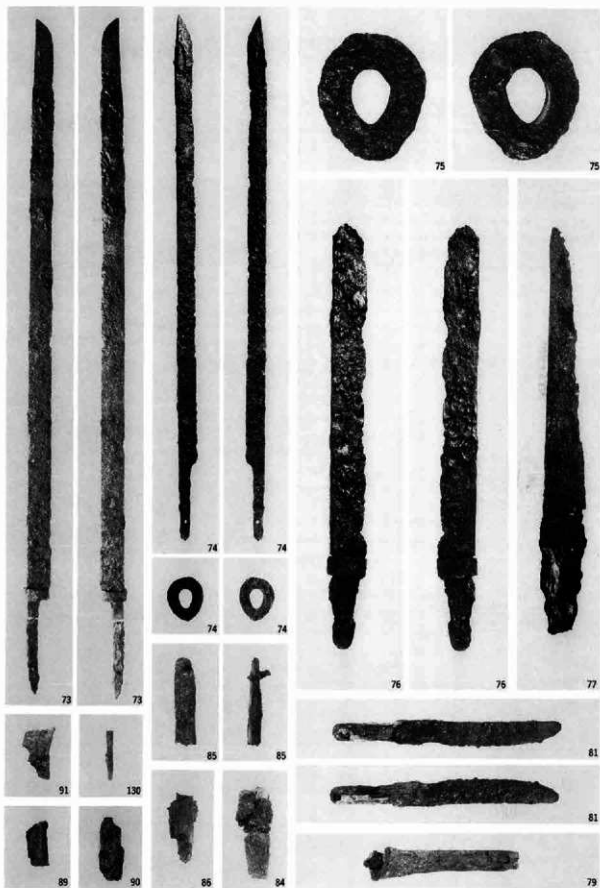
55

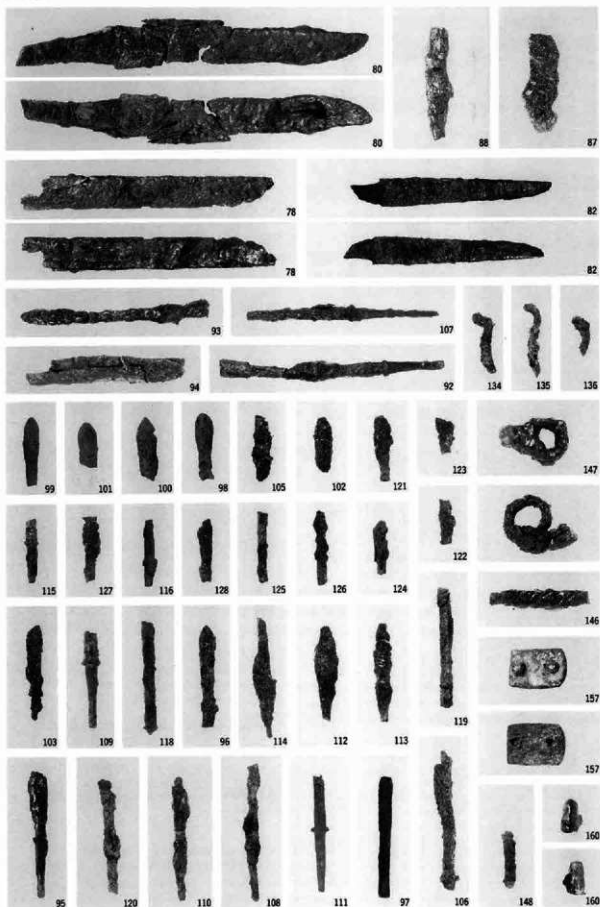


57



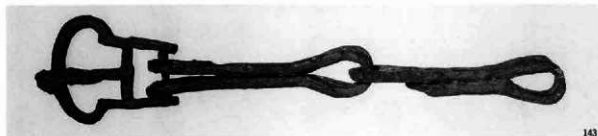
58



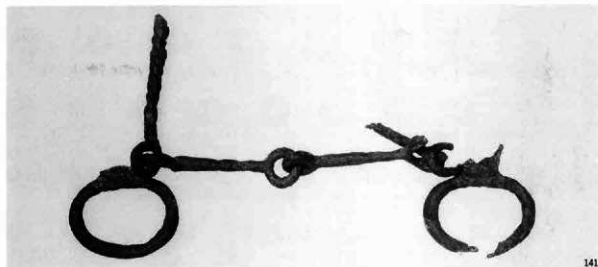




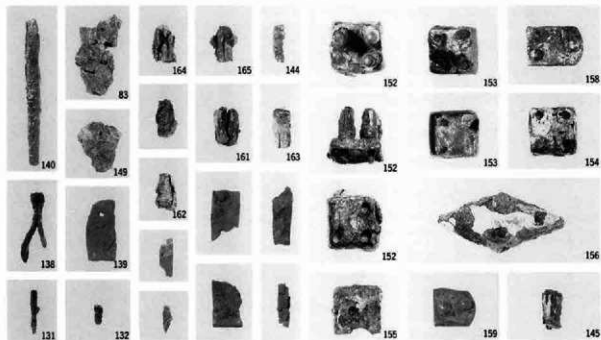
142

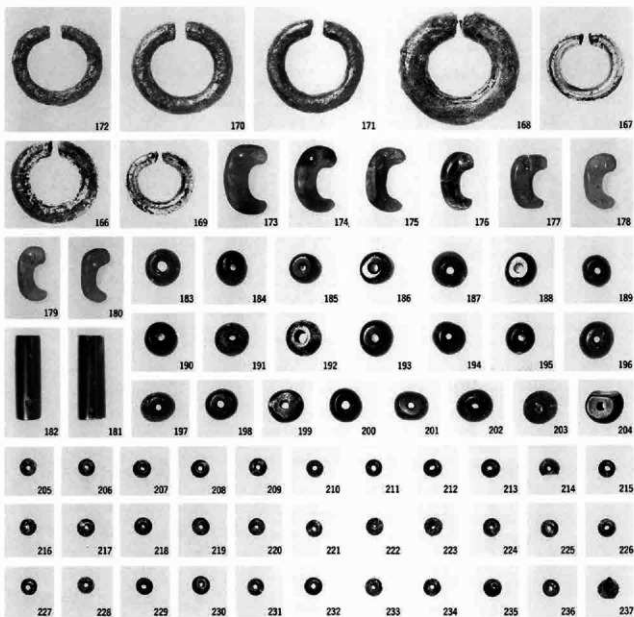


143

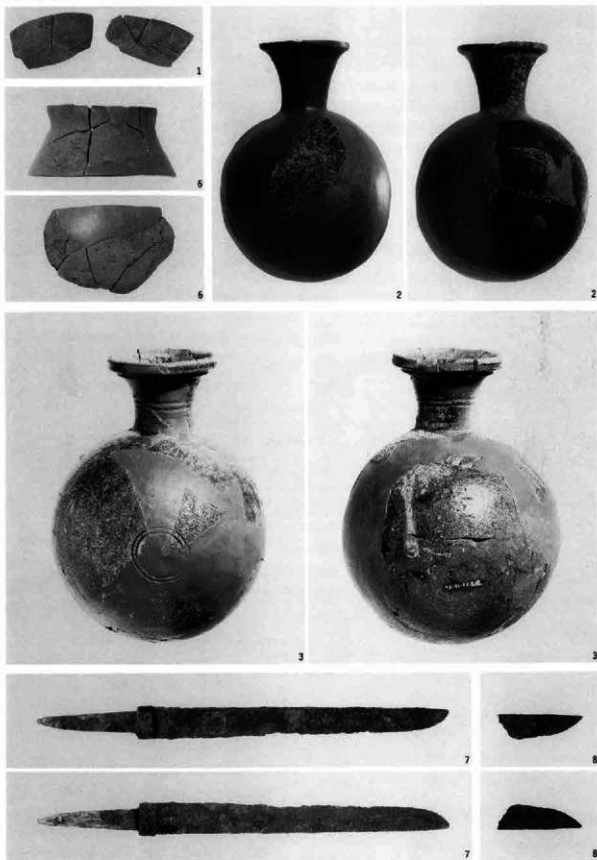


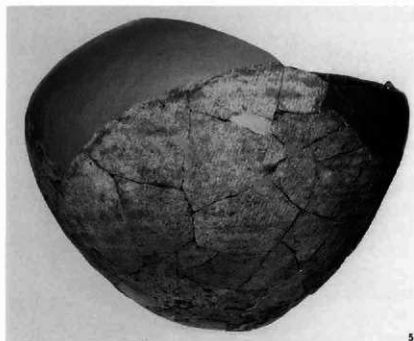
141



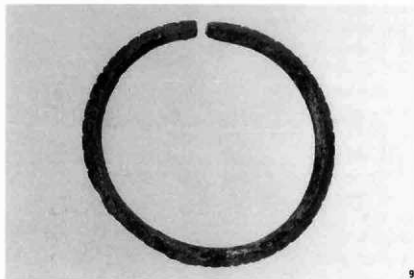


8号墳

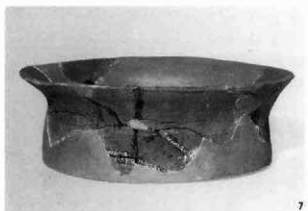




5



9



7

1号住居跡



1



2



3



4



5



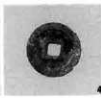
6

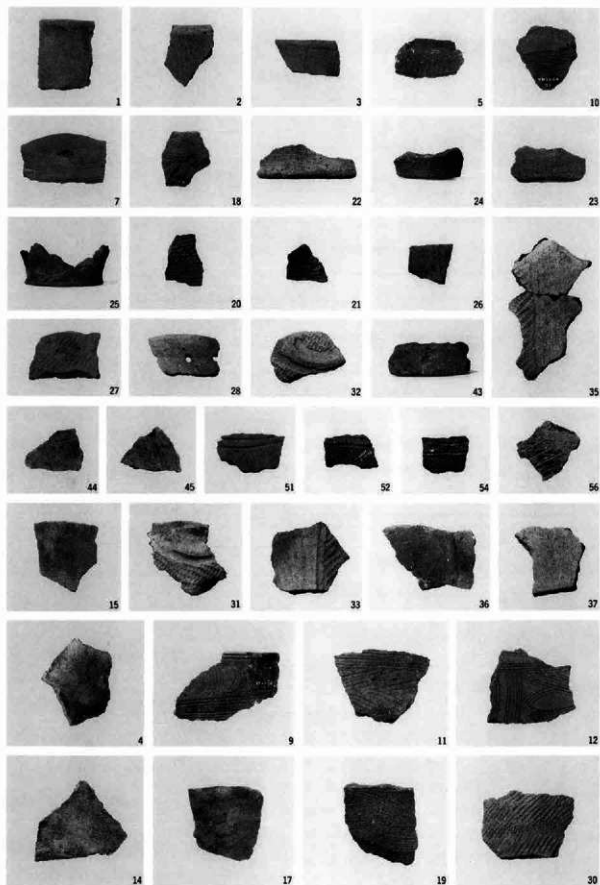


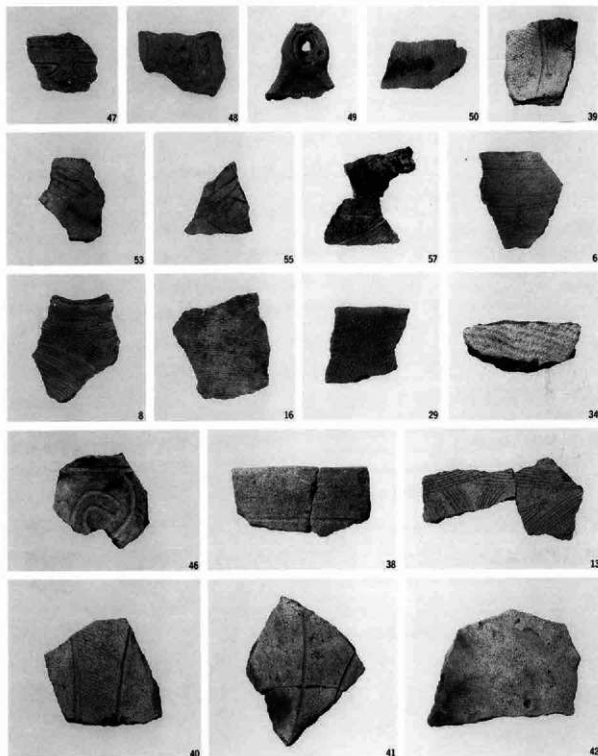
5号土坑 1

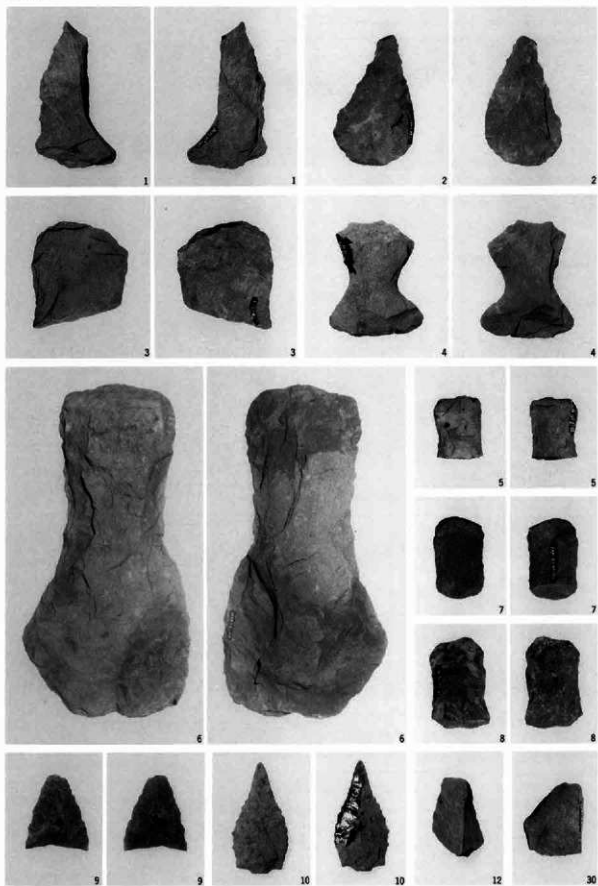


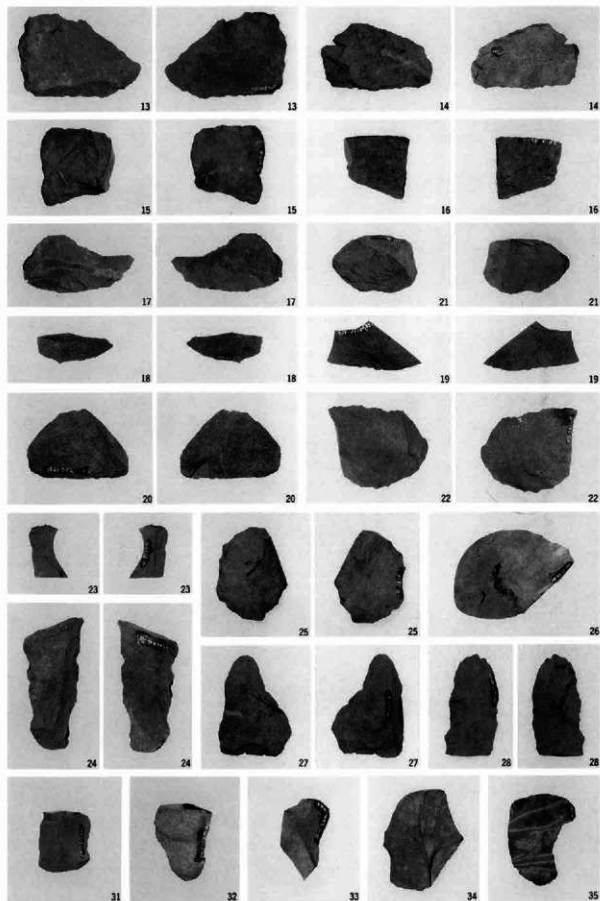
遺構外

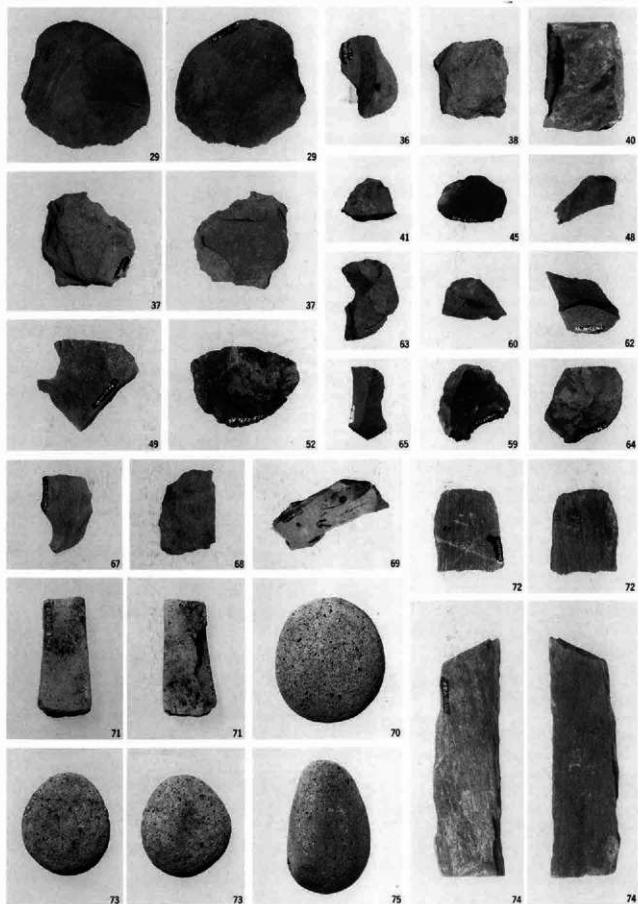


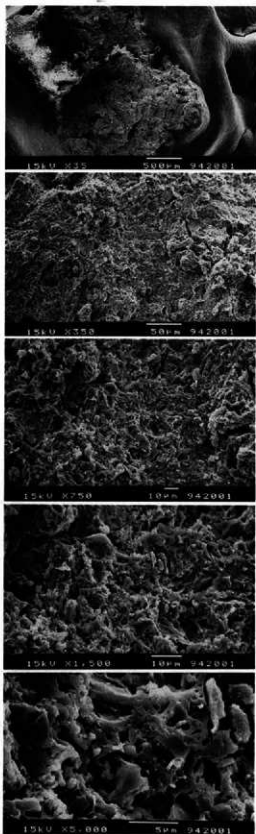




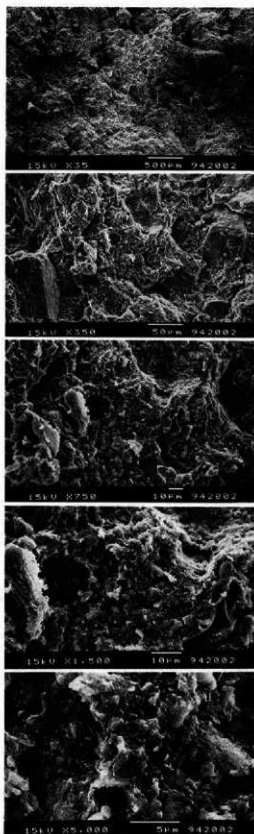






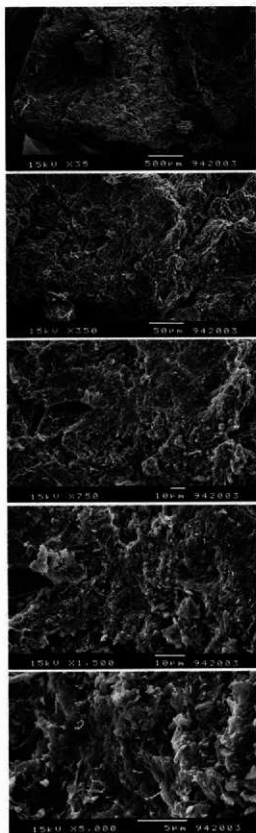


試料1

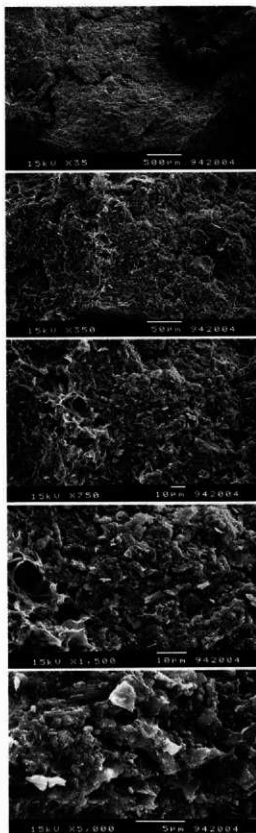


試料2

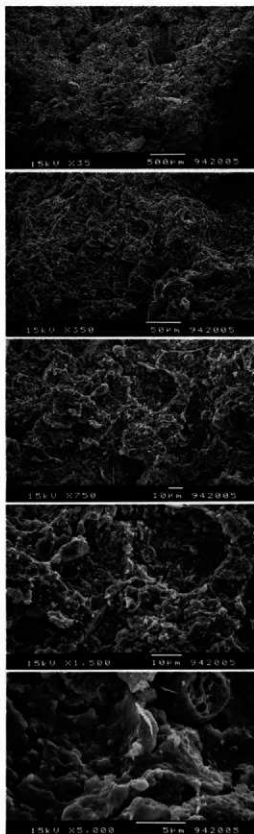
PL 64



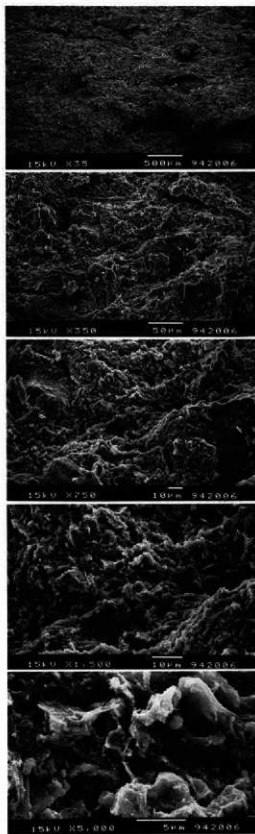
試料3



試料4

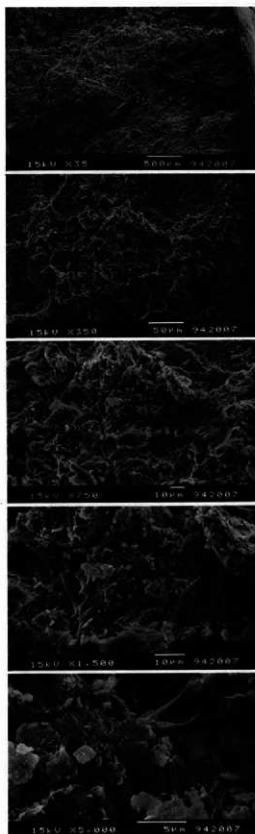


試料 5

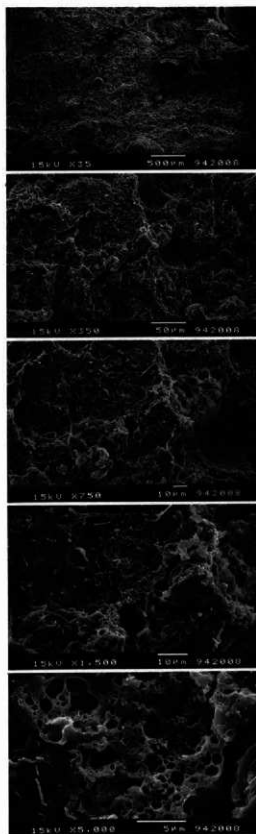


試料 6

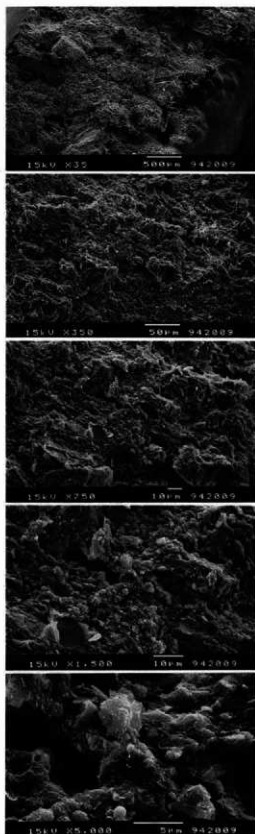
PL 66



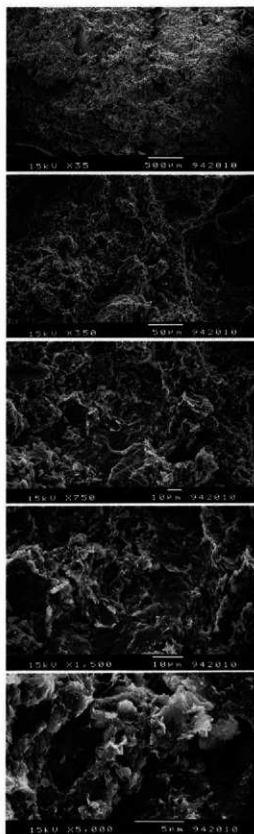
試料 7



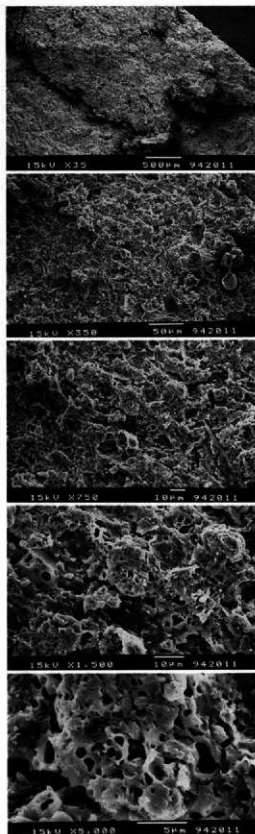
試料 8



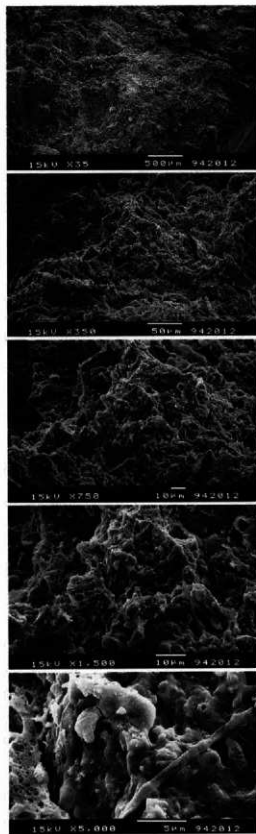
試料9



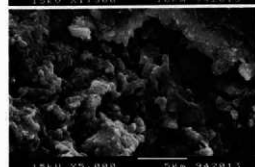
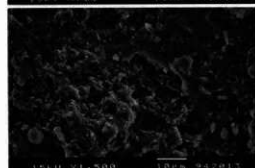
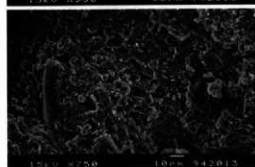
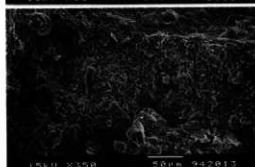
試料10



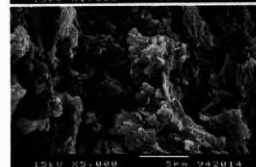
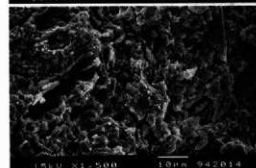
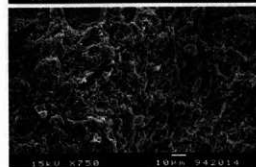
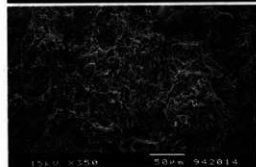
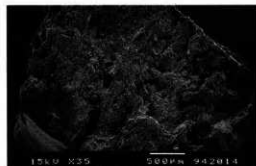
試料11



試料12

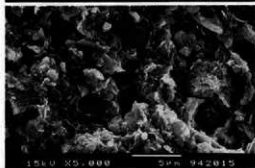
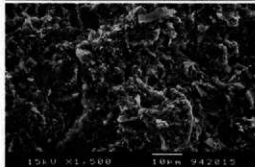
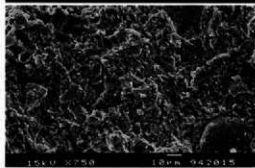
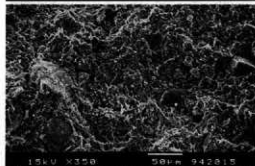
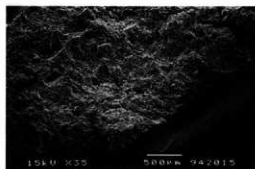


試料13

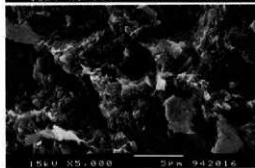
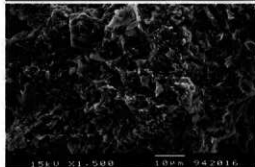
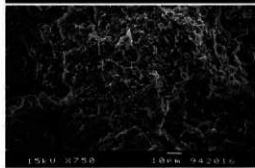
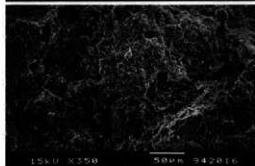
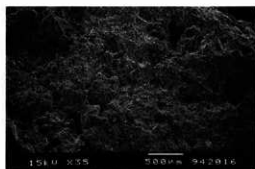


試料14

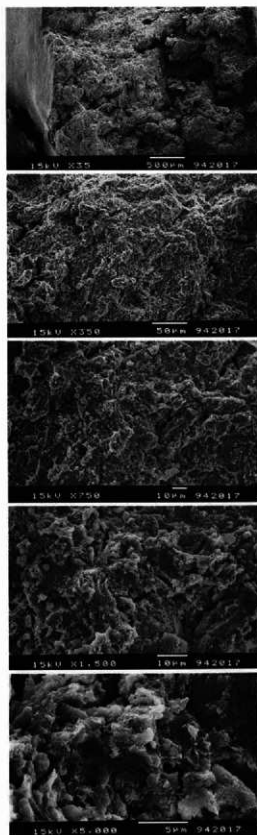
PL 70



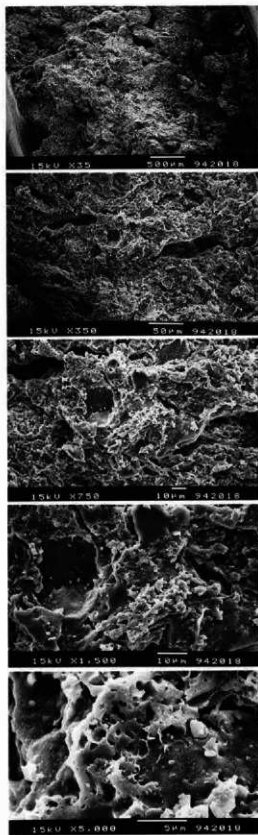
試料15



試料16

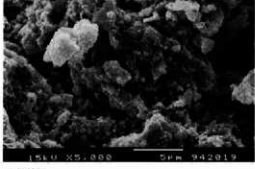
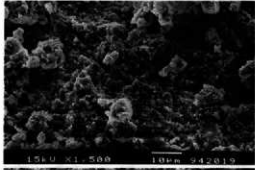
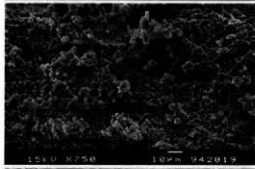
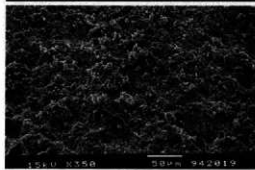
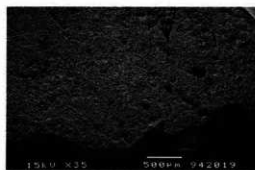


試料17

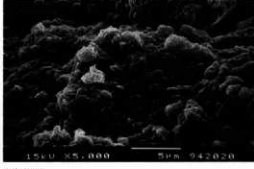
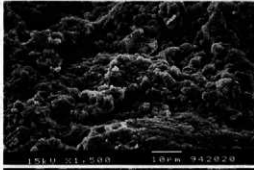
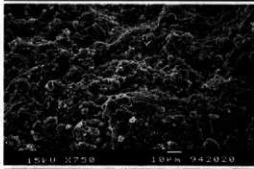
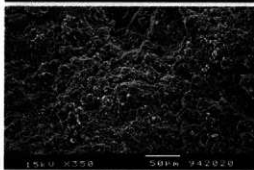
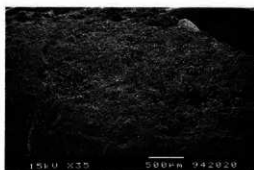


試料18

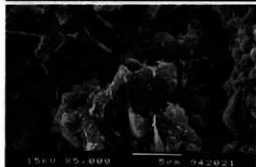
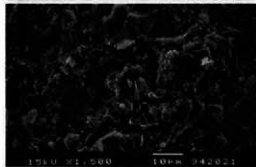
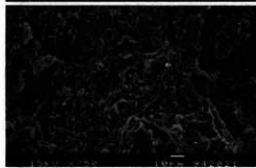
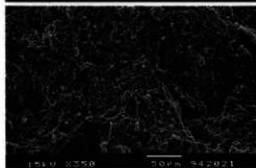
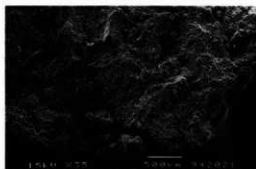
PL 72



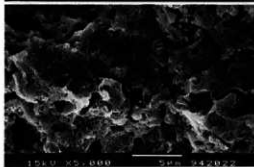
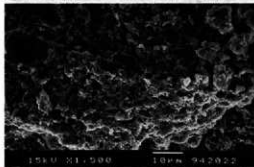
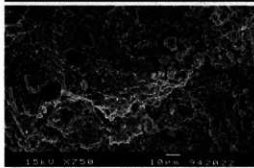
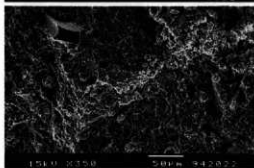
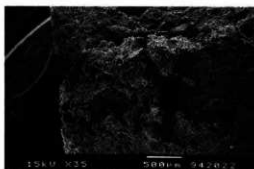
試料19



試料20



試料21



試料22

群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告第161号

波志江今宮遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成7年2月20日印刷

平成7年2月28日発行

編集・発行／(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北碓村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511 (代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社

波志江今宮遺跡全体図

